福岡広域都市計画道路 3･3･1-78 号堅粕線整備事業及び福岡広域都市計画道路 3･4･1･159 号
原田箱崎線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (2)

箱　崎　68

－第 102 次・第 113 次・第 118 次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1485集

２０２３

福岡市教育委員会

福岡広域都市計画道路 3･3･1-78 号堅粕線整備事業及び福岡広域都市計画道路 3･4･1･159 号
原田箱崎線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (2)

箱崎 68

－第 102 次・第 113 次・第 118 次調査報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 1485集

２０２３

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘を介して大陸･半島と一衣帯水の関係にあります。本市域では古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれてきたこともあり、旧石器時代から中世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、九州大学箱崎キャンパス跡地における都市計画道路整備事業に伴う箱崎遺跡第 102 次・第 113 次・第 118 次発掘調査について報告するものです。この度の調査では中世の集落跡を検出しました。これらの調査は従来発掘調査例が少なく、長らく不明であった九州大学箱崎キャンパス内における中世の箱崎遺跡の様相を明らかにするという重要な成果をもたらしました。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の一資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、関係者の皆様には発掘調査から本書の作成に至るまで深いご理解と多くのご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和 5 年 3 月 23 日

福岡市教育委員会
教育長　石橋　正信

例　言

１．本書は、福岡市教育委員会が福岡広域都市計画道路 3･3･1-78 号堅粕線整備事業及び福岡広域都市計画道路 3･4･1-159 号原田箱崎線整備事業に伴い、福岡市東区箱崎 6 丁目 10-1 番地において実施した箱崎遺跡第 102 次・第 113 次・第 118 次発掘調査の報告書である。
２．第 102 次調査の遺構・遺物の実測、写真撮影、報告執筆は主に藏冨士寛が行なった。
３．第 113 次調査の遺構・遺物の実測、写真撮影、報告執筆は主に今井隆博・阿部泰之が行なった。
４．第 118 次調査の遺構・遺物の実測、写真撮影、報告執筆は主に吉武学が行なった。
５．本書で用いた方位は特に断りなき限り世界測地系に基づく。
６．遺構の呼称は、掘立柱建物を SB・溝を SD・井戸を SE・土壙を SK・鍛冶炉を SL・柱穴およびピットを SP・木棺墓を SR・性格不明の遺構を SX と略称する。
７．本書にかかわる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
８．本書の編集は本田浩二郎が行なった。
９．本書で報告する発掘調査の細目は以下の通りである。

箱崎遺跡第102次調査

遺跡調査番号	1940	遺 跡 略 号	HKZ-102	分布地図番号	34　箱崎
所　在　地	福岡市東区箱崎6丁目10-1				
開 発 面 積	25,000㎡	調 査 面 積	2,712.76㎡	事前審査番号	30-1-61
調 査 期 間	令和元（2019）年8月19日～令和2（2020）年2月28日				

箱崎遺跡第113次調査

遺跡調査番号	2023	遺 跡 略 号	HKZ-113	分布地図番号	34　箱崎
所　在　地	福岡市東区箱崎6丁目10-1				
開 発 面 積	25,000㎡	調 査 面 積	6,220㎡	事前審査番号	30-1-61
調 査 期 間	令和2（2020）年7月16日～令和3（2021）年2月28日				

箱崎遺跡第118次調査

遺跡調査番号	2110	遺 跡 略 号	HKZ-118	分布地図番号	34　箱崎
所　在　地	福岡市東区箱崎6丁目10-1				
開 発 面 積	25,000㎡	調 査 面 積	2,040.22㎡	事前審査番号	30-1-61
調 査 期 間	令和3（2021）年4月12日～令和3（2021）年6月30日				

本　文　目　次

はじめに……1
調査に至る経緯
調査組織

第１章　位置と環境……3
第１節　地理的環境
第２節　歴史的環境

第２章　第 102 次調査の記録……13
第１節　調査概要
第２節　遺構と遺物

第３章　第 113 次調査の記録……55
第１節　調査概要
第２節　１区の調査
第３節　２区の調査
第４節　・・・

第４章　第 118 次調査の記録……125
第１節　調査概要
第２節　遺構と遺物

第５章　小結

挿　図　目　次

【第１章 位置と環境】
Fig.1　箱崎遺跡周辺遺跡分布図（S=1/16,000）
Fig.2　箱崎遺跡調査区位置図（S=1/10,000）
Fig.3　箱崎遺跡周辺昭和初期地形図（S=1/10,000）
Fig.4　都市計画道路関連調査区位置図（S=1/5,000）
Fig.5　箱崎キャンパス内調査区位置図（S=1/4,000）
Fig.6　箱崎キャンパス内確認調査位置図（S=1/4,000）

【第２章 第 102 次調査】
Fig.7　箱崎遺跡第 102 次調査位置図（S=1/2,000）
Fig.8　第 102 次調査１・３・５区（S=1/600）
Fig.9　１区遺構配置（S=1/200）
Fig.10　１区 SK（1）（S=1/40）
Fig.11　１区 SK（2）（S=1/40）
Fig.12　１区 SK1002・1005・1025（S=1/40）
Fig.13　１区 SB（S=1/40）
Fig.14　１区出土遺物（1）（S=1/4，1/3）
Fig.15　１区出土遺物（2）（S=1/3）
Fig.16　１区出土遺物（3）（S=1/3）
Fig.17　３区遺構配置（S=1/200）
Fig.18　３区 SE3001・3003（S=1/40）
Fig.19　３区 SE3002（S=1/60）
Fig.20　３区出土遺物（1）（S=1/3）
Fig.21　３区 SK 及び出土遺物（S=1/40，1/3）
Fig.22　３区柵列及び出土遺物（S=1/40，1/3）
Fig.23　３区 ST（S=1/40，1/3，1/2）

Fig.24　3 区出土遺物（2）（S=1/3）
Fig.25　5 区遺構配置（S=1/200）
Fig.26　5 区 SK（S=1/40）
Fig.27　5 区 ST（S=1/40，1/3，1/2）
Fig.28　5 区出土遺物（S=1/3）
Fig.29　第 102 次調査遺構配置（S=1/600）

【第 3 章 第 113 次調査】
Fig.30　箱崎遺跡第 113 次調査位置図（S=1/2,000）
Fig.31　113 次 1 区全体図（S=1/400）
Fig.32　SE01 実測図（S=1/60）
Fig.33　SE01 出土遺物実測図（S=1/3）
Fig.34　その他の遺物実測図（S=1/3）
Fig.35　113 次 2a 区全体図（S=1/100）
Fig.36　SK201、202 遺構実測図（S=1/40）
Fig.37　2a 区出土遺物実測図（S=1/3）
Fig.38　113 次 2b 区全体図（S=1/100）
Fig.39　113 次 2b 区南壁土層図（S=1/60）
Fig.40　SD208 遺構実測図（S=1/60）
Fig.41　SD208 出土遺物実測図（S=1/3）
Fig.42　2b 区 SK207・209・210 遺構実測図（S=1/20・1/60）
Fig.43　SK207 出土遺物実測図（S=1/3）
Fig.44　SK209 出土遺物実測図（S=1/3）
Fig.45　SK209 出土遺物実測図（S=1/1・1/2）
Fig.46　SK207 出土遺物実測図（S=1/3）
Fig.47　SX205 遺構実測図（S=1/40）
Fig.48　SX205 石積み遺構実測図（S=1/40）
Fig.49　SX205 出土板碑実測図（S=1/8）
Fig.50　SX205 出土板碑実測図 2　（S=1/8）
Fig.51　SX205 出土板碑実測図 3　（S=1/8）
Fig.52　SX205 出土板碑実測図 4　（S=1/8）
Fig.53　SX205 出土板碑実測図 5　（S=1/8）
Fig.54　SX205 出土板碑実測図 6　（S=1/8）
Fig.55　SX205 西岸出土遺物実測図　（S=1/3）
Fig.56　SX205 北岸出土遺物実測図　（S=1/3）
Fig.57　SX205 出土遺物実測図　（S=1/3）
Fig.58　SX226 遺構実測図　（S=1/20）
Fig.59　その他の出土遺物実測図　（S=1/3）
Fig.60　2 区出土鉄器実測図　（S=1/1）
Fig.61　113 次 3 区全体実測図　（S=1/300）
Fig.62　SK311・SP301・SX306 出土遺物実測図　（S=1/3）
Fig.63　3 区撹乱出土銅鏡実測図　（S=1/1）
Fig.64　3a 区出土遺物実測図 1　（S=1/3）
Fig.65　3a 区出土遺物実測図 2　（S=1/3）
Fig.66　SX321 遺構実測図　（S=1/20）
Fig.67　SX321 出土遺物実測図　（S=1/3）
Fig.68　3b 区出土遺物実測図 1　（S=1/3）
Fig.69　3b 区出土遺物実測図 2　（S=1/3）
Fig.70　3b 区出土鉄器実測図　（S=1/1）
Fig.71　113 次 4 区全体実測図　（S=1/300）
Fig.72　4 区東側土層実測図　（S=1/80）
Fig.73　4 区出土遺物実測図　（S=1/3）
Fig.74　113 次 5 区全体実測図　（S=1/200）
Fig.75　5 区東壁土層実測図　（S=1/80）
Fig.76　5 区 SP 出土遺物実測図　（S=1/3）
Fig.77　5 区出土遺物実測図　（S=1/3）
Fig.78　5 区遺構検出・撹乱出土遺物実測図　（S=1/3）
Fig.79　113 次 6 区全体実測図　（S=1/200）
Fig.80　6 区西壁土層実測図　（S=1/80）
Fig.81　6 区出土遺物実測図　（S=1/3）

【第 4 章 第 118 次調査】
Fig.82　箱崎遺跡第 118 次調査位置図（S=1/2,000）
Fig.83　箱崎遺跡第 118 次調査　7 ～ 10 区遺構配置図（S=1/600）
Fig.84　箱崎遺跡第 118 次調査　7 区土層柱状図（S=1/40）
Fig.85　箱崎遺跡第 118 次調査　SK7010 位置図（S=1/150）
Fig.86　SK7010 実測図（S=1/40）・出土遺物実測図（S=1/3）
Fig.87　9 区遺構配置図（S=1/150）
Fig.88　9 区土層柱状図（S=1/40）
Fig.89　SD9010 実測図（平面図は S=1/40、断面図は S=1/20）
Fig.90　SD9020・SK9038・SK9040 実測図（S=1/40）
Fig.91　SD9010・SK9038 出土遺物実測図（S=1/3）
Fig.92　9 区遺物包含層出土遺物土器（S=1/3）
Fig.93　9 区遺物包含層出土土製品・石製品（S=1/3）

【第 5 章 小結】
Fig.94　箱崎キャンパス内調査区　木棺墓・土壙墓位置図
（S=1/1,000）
Fig.95　箱崎キャンパス内工事立会時出土遺物実測図（S=1/3）
Fig.96　箱崎遺跡内砂丘遺構面復元想定図（S=1/4,000）
Fig.97　箱崎遺跡内砂丘遺構面復元想定図（S=1/4,000）
Fig.98　史跡範囲外　石積み遺構保存範囲位置図（S=1/1,000）

はじめに

調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、国立大学法人九州大学（以下、九大）施設部施設企画課から、同市東区箱崎6丁目10番1号（敷地面積457,385㎡）における土地売却に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成24年11月22日付で受理した（事前審査番号：24-2-809ほか）。

これを受けて経済観光文化局埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が広大なうえ、周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡・元寇防塁を含むことから、平成24年12月から大学構内での確認調査を開始した。確認調査は学内主要インフラ施設を避けるために、学内道路と校舎建物の隙間等の位置で行ったため、狭小な範囲確認にとどまる結果となっている。対象範囲内での遺構の有無の確認及び遺跡範囲の確認を行うための確認調査は185か所の地点で実施した。

確認調査の結果、箱崎キャンパス敷地の東側範囲（農学部から理学部・工学部の範囲）で、現地表面下80～130cmで基盤層である砂丘砂上で遺構を確認した。遺構が確認される範囲は、箱崎キャンパス内を斜めに縦断する埋蔵文化財包蔵地「元寇防塁」の推定線より東側となっており、当時の海岸線沿いに構築された元寇防塁を超えて、遺構が海岸側に展開することはなかったことがわかる。九州大学が設立された明治44（1911）年前後も大学敷地西側には防風のための松林が広がり、これに接して海岸線が存在しており、永らく箱崎キャンパス周辺の海岸線は変動していなかったことがわかる。なお、現在の海岸線は西側500mの地点にあり、埋立てとともに都市化が進んだことがわかる。

その後、箱崎キャンパス跡地内における土地利用計画が立案され、計画案のうち都市計画道路原田箱崎線および堅粕箱崎線については独立行政法人都市再生機構九州支社（以下、UR）が整備することとなった。確認調査で確認された遺構の保全等に関しては、九州大学・UR・埋蔵文化財課の3者で情報共有のうえ協議・調整を行った。その結果、都市計画道路原田箱崎線とそれに隣接する部分については、埋蔵文化財への影響が回避できないことから記録保存のための発掘調査を順次実施することで合意し、平成30年9月25日付で「九州大学箱崎キャンパス跡地における都市計画道路整備事業に係る埋蔵文化財の取扱いに関する基本協定書」（以下、協定書）が締結された。協定書に従い、発掘調査および調査後の資料整理・報告書作成に要する費用については、都市計画道路部分はURが、それ以外の部分については九大が負担することとなった。

協定書に基づき、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査および埋蔵文化財整理・報告書作成作業に関する業務委託契約（以下、委託契約）を年度ごとに締結し、大学建物解体が完了した範囲から発掘調査を着手し、翌年度以降に資料整理・報告書作成を順次実施した。

九州大学箱崎キャンパス跡地内での都市計画道路原田箱崎線整備事業に係る発掘調査は、平成30（2018）年11月1日より着手し、令和3（2021）年6月30日に終了した。調査は92次（平成30年度）・102次（令和元年度）・108次（令和2年度）・113次（令和2年度）・118次（令和3年度）と年度別に調査次数を付している。各調査地点内においても、既存建物基礎解体や作業用通路の切り替え作業に伴い、調査区を分割して作業を実施しており、それぞれの調査区に番号・記号を付して管理を行っている。

都市計画道路原田箱崎線とそれに隣接する部分に関する報告書として、福岡市埋蔵文化財調査報告書第1457集「箱崎64」を刊行しており、本書とともに活用いただきたい。

調査組織

調査委託：独立行政法人都市再生機構九州支社
　　国立大学法人九州大学
調査主体：福岡市教育委員会

調査総括：文化財活用部埋蔵文化財課長			大庭　康時（平成 30 年度）
			菅波　正人（令和元～ 4 年度）
		調査第 1 係長	吉武　学（平成 30 ～令和 2 年度）
			本田　浩二郎（令和 3・4 年度）
調査庶務：文化財活用課管理係		係長	藤　克己（平成 30 ～令和元年度）
			大森　秋子（令和 2 年度）
			石川　あゆ子（令和 3・4 年度）
		係員	松原　加奈枝（平成 30 ～令和 2 年度）
			内藤　愛（令和 3・4 年度）
事前審査：埋蔵文化財課		事前審査係長	本田　浩二郎（平成 30 ～令和 2 年度）
			田上　勇一郎（令和 3・4 年度）
	事前審査係	主任文化財主事	田上勇一郎（平成 30 ～令和 2 年度）
			森本　幹彦（令和 3・4 年度）
		文化財主事	吉田　大輔（平成 30 年 9 月まで）
			中尾　祐太（令和元年 9 月まで）
			松崎　友理（令和 2 年 8 月まで）
			神　啓崇（令和 2 年 9 月～令和 3 年度）
			比嘉えりか（令和 4 年度）
調査担当：埋蔵文化財課			
	調査第 1 係	文化財主事	吉武　学　（第 118 次調査）
	調査第 2 係	主任文化財主事	藏冨士　寛（第 102 次調査）
			阿部　泰之（第 113 次調査）
		文化財主事	今井　隆博（第 113 次調査）

※調査担当者の所属は調査当時のもの。

発掘調査・整理作業においては、九州大学統合移転推進課ならびに独立行政法人都市再生機構九州支社をはじめとする関係者の皆様から多大な協力を得た。記して感謝の意を表する。

第１章　位置と環境

第１節　地理的環境

現在の行政区分上の福岡市は、東は三郡山地、西と南を脊振山地に囲まれ、これらの山脈が博多湾を包み込むようにして玄界灘に面している。博多湾を囲む山地からは多くの河川が博多湾に注いでおり、それぞれが扇状地を形成し平野を構成しているが、これらの平野と博多湾が接する沿岸部には砂州と砂丘が発達している。箱崎砂層と呼ばれるこの砂州と砂丘は東区箱崎付近から室見川河口付近まで分布しており、多くの遺跡が確認されている。なお、砂丘の形成時期は考古学および地質学的調査成果から縄文時代後期以降と考えられている。

箱崎遺跡は、福岡市東区馬出から箱崎にかけて所在し、古墳時代から中世にかけて営まれた遺跡である。中世では遺跡範囲中央部南側に創建された筥崎宮を中心として遺構が展開し、博多遺跡群とともに対外交渉の拠点として重要な役割を担っていたことが知られている。遺跡は博多湾東岸に形成された千代松原から箱崎まで南北に伸びる砂丘地形の北端部に位置し、現地表面標高 3.5 ～ 4.5m を測る砂丘上に展開する。西側の海岸線には建治２（1276）年に石築地「元寇防塁」が構築され、以降昭和前半に海岸部が埋め立てられるまで永くその景観を保ち続けていた。砂丘南側には吉塚遺跡、堅粕遺跡、吉塚本町遺跡、吉塚祝町遺跡等が分布しており、各遺跡の境界は砂丘の後背湿地や鞍部によって画されると想定される（Fig.1　博多湾岸遺跡分布図参照）。既往の調査成果から、現在の箱崎遺跡の最大範囲は標高 2.0 ～ 3.5m を測る砂丘上に東西約 400m、南北約 2,000m の範囲内に、各時代の遺構群が分布することが知られている。

Fig.1　箱崎遺跡周辺遺跡分布図（S=1/16,000）

第２節　歴史的環境

箱崎遺跡の範囲内では、1983（昭和 58）年の地下鉄建設に伴う第１次調査以来、2022（令和 4）年 12 月時点で 128 次に及ぶ調査が行われており、縄文時代晩期から近世に至る各時期の遺構・遺物が確認されている。箱崎遺跡では現在の都市区画による狭小な面積の発掘調査が多く、大規模な発掘調査はこれまで実施されていなかった（Fig.2 参照）。

遺跡範囲東側で実施された区画整理事業や新設道路建設に先立つ発掘調査が遺跡各所で行われたことにより、遺跡全体

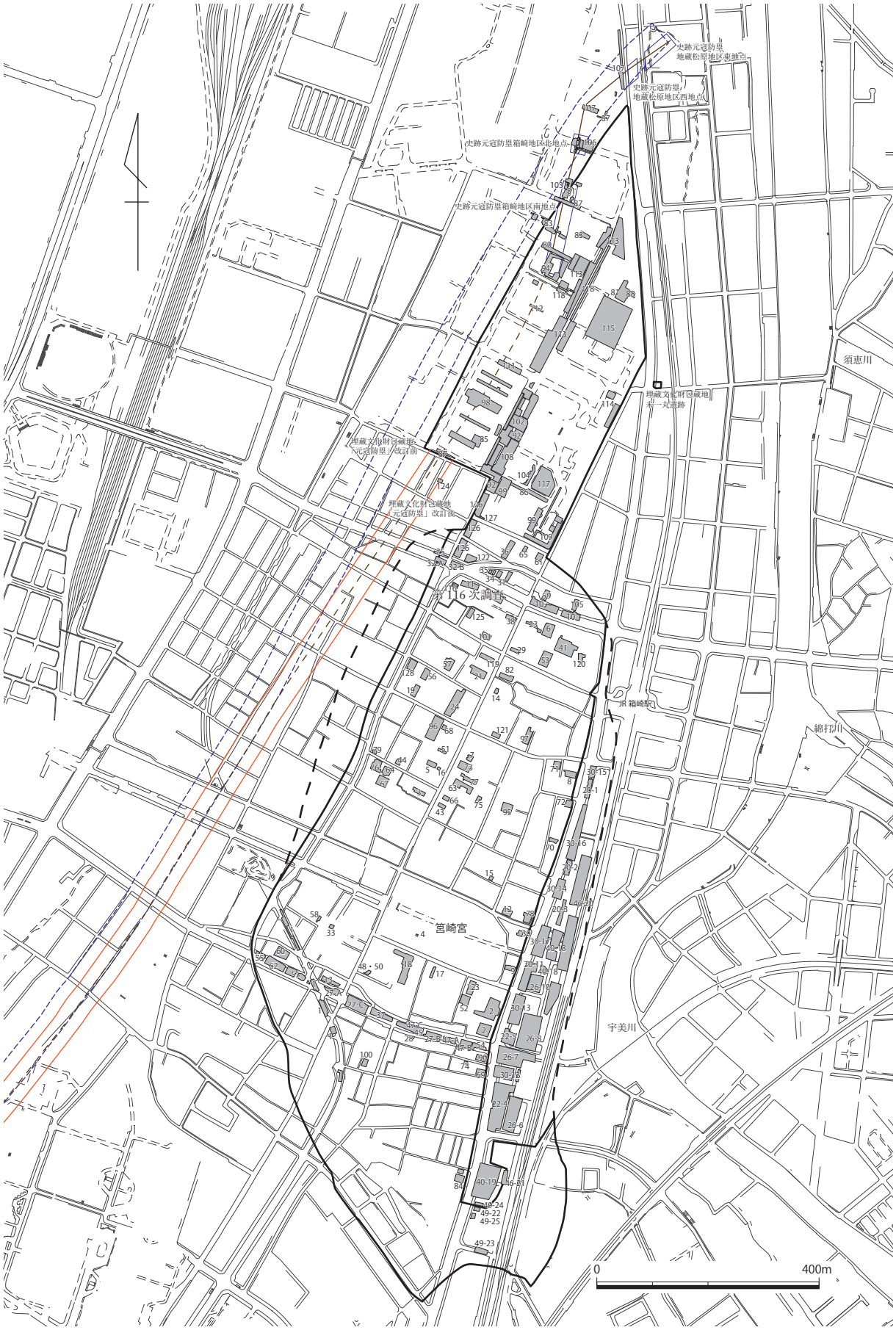


Fig. 2　箱崎遺跡調査区位置図 (S=1/10,000)

での各時期の様相が明らかになりつつある。

本節では遺構・遺物が安定的にみられる古墳時代と、平安時代以降中世の箱崎遺跡に焦点を当て、これまでの調査成果をもとに概観したい。

1. 古墳時代

古墳時代の遺構・遺物は、遺跡が乗る砂丘の東斜面、宇美川に面した範囲に集中している。箱崎遺跡では筥崎区画整理事業として、JR 鹿児島本線箱崎駅周辺において再開発が実施されており、それに伴う発掘調査で古墳時代の大規模な集落跡と墳墓群の存在が確認された。

集落跡は筥崎宮の北東側、砂丘の最高所付近で検出された。第 8 次調査・20 次調査 1 区・30 次調査 16 区で古墳時代前期の竪穴住居跡が検出され、前期初頭頃に集落が形成されたことがわかっている。この集落は前期を通じて存続するが、中期に入ると衰退し、6 世紀には廃絶することが発掘調査の結果から見て取れる。遺物は土師器のほか、第 8 次調査では滑石製石錘やイイダコ壺・陶質土器、第 30 次調査 16 区では 5 世紀後半頃の竪穴住居跡から滑石製臼玉・勾玉・剣型模造品が、第 40 次調査 18 区、第 52 次調査では小片ながら東海系 S 字状口縁甕が出土している。

集落跡からは滑石製石錘やイイダコ壺など漁労に関係する遺物が多く出土しており、漁撈に深くかかわった住民の生活を窺うことができる。石錘は博多湾西岸の遺跡から同型のものが出土しているほか、東海系土師器や陶質土器が出土していることから、博多湾沿岸のみならず海を介した遠方との交流も想定される。

一方、墓域は集落から浅い谷を挟んだ南西側の高所で検出されている。第 22 次調査 4 区、第 26 次調査 6 区では土器棺墓、第 40 次調査 19 区では方形周溝墓が検出された。これらの墳墓造営は集落が形成された古墳時代初頭に遡ると推測されている。第 40 次調査 19 区では方形周溝墓のほかに円墳 2 基、石室状遺構が検出されており、円墳のうち 1 号墳は集落が衰退を始める 5 世紀中頃、2 号墳は集落廃絶に近い 6 世紀後半に位置付けられている。2 号墳は石室の床面が遺存しており、直刀・鉄鎌・鉄鏃・刀子が出土した。

2. 平安時代前期

平安時代前期の遺構・遺物は、筥崎宮の南東、東西 100m、南北 300 mの範囲に集中する。遺構の多くは井戸や土壙であるが、特異なものとして第 71 次調査で検出された梵鐘鋳造遺構が注目される。箱崎遺跡ではこれまで官衙の特徴を示す掘立柱建物や方形の区画は報告されていないが、官衙関連施設あるいは官人の存在をうかがわせる以下のような遺物が出土している。

第 26 次調査では石帯巡方、第 47 次調査では権が出土した。越州窯系青磁は第 26 次調査で多く出土しているが、粗製品の部類に入る割合が高いことは注意を要する。

瓦は第 47 次調査で 10 世紀後半～ 11 世紀前半頃のものが大量に出土した。建物廃絶後、井筒の構築材に転用されたものと推測され、大宰府・鴻臚館出土瓦と同型式のものも含まれる。

筥崎宮が遷座したとされる平安時代前期の箱崎遺跡は､その出土遺物から官人の存在が想定される。大宰府・鴻臚館出土瓦と同型の瓦が出土することは、鴻臚館や博多遺跡群が担っていた対外交易を支える衛星的な役割を期待されていたことが推測される。

3. 式内社筥崎宮

箱崎遺跡が乗る砂丘の中央部、標高 3.5m ほどの高所に筥崎宮が位置する。中世箱崎遺跡の中心とな

Fig.3　箱崎遺跡周辺昭和初期地形図（S=1/10,000）

る区域であり、『筥崎宮縁起』によると延長元年（923）に大分宮（福岡県飯塚市）より遷座したとあるが、この時期は鴻臚館の最末期にあたる。遷座にあたっては大宰府官人の対外交易に関する思惑が背景にあったとされ、それに従うならば筥崎宮それ自体が対外交易の拠点としての性格を有していたことになる。平安期の筥崎宮は、延長5(937)年に成立した『延喜式』神名帳に「八幡大菩薩筥崎宮一座　名神大」との記述がみえる。このころには筥崎宮が成立しており、名神大社の社格が与えられていたことがわかる。

平安時代末頃の成立とされる『今昔物語集』二六には、筥崎宮神官と大宰府府官を兼任した秦貞重と宋商人の交渉が描かれる。秦貞重は日宋貿易に従事することで得た富によって、中央権門とも密接なつながりを持っていたと考えられる。筥崎宮は対外交易を管理していた大宰府と、その成立から密接な関係を有していたことが箱崎遺跡における平安前期の出土遺物からも窺える。

筥崎宮は治安4(1024)年に石清水八幡宮の傘下に入る。その前年には石清水八幡宮別当に宇佐弥勒寺講師元命が就任しており、平安時代後期になると脚台付きの土師器坏のような神饌用と考えられる特殊な土器や、畿内とあわせて豊前地域とのつながりを示す遺物がみられるようになる。筥崎宮は治承・寿永の内乱（1180～1189）後石清水八幡宮別宮となり、楠葉型瓦器といった畿内産土器がひきつづき多く出土している。

4. 平安時代後期

平安時代後期には、遺構・遺物が確認できる範囲はそれまでのほぼ倍の範囲に拡大し、砂丘の西斜面でもみられるようになる。

この時期に属する遺物の特徴は、特定の地域から搬入された土器が目立つ点である。第26次調査7区からは在地の土師器に交じって少数ながら豊前型土師器坏が、第26次調査8区では楠葉型瓦器椀をはじめとする畿内産土器が多く出土する。筥崎宮が石清水八幡宮の傘下に入った時の別当元命は宇佐弥勒寺講師を務めており、豊前型土師器坏は宇佐地域からの人の動きを示している可能性がある。また、楠葉型瓦器椀は主として畿内から下向する官人や水運関係者の携行品とされ、治安4(1024)年に筥崎宮が石清水八幡宮の傘下となった結果、他の遺跡と比し多く出土するものと考えられる。

平安時代後期の箱崎遺跡では、博多遺跡群同様中国陶磁器が多量に出土するようになる一方、残りの良い高麗青磁が出土する。また、祖型を高麗にもつ単弁八葉軒丸瓦と花菱半截文軒平瓦が遺跡の南東で径200mの範囲、現在の筥崎宮境内裏手の東南部から出土しており、筥崎宮の堂宇のいずれかに用いられたものと考えられ、当該期の朝鮮半島と経済的なつながりをもつ人物がその造営にかかわった可能性を示している。

5. 平安時代末から鎌倉時代

12世紀後半になると、遺構・遺物は砂丘のほぼ全域に分布するようになる。井戸や土壙等の大型遺構のほか、建物としてはまとめられない柱穴等も多数検出されている。復元できた建物の主軸線は砂丘地形を反映した現況の街区に沿っている。これまでの発掘調査において幹線道路遺構が検出されていないことから、筥崎宮を中心とする街区の成立が中世以前にさかのぼる可能性を示すものである。

遺物は中国陶磁器の出土量が増加し、陶磁器片を廃棄した井戸や土壙、陶磁器の完品を複数供献した木棺墓や土壙墓が多数検出されている。また、博多と異なる点として宗教用具とみられる遺物も目立ち、ミニチュア鍔付三足羽釜が第56次調査をはじめ複数の調査区から出土しているほか、神饌具と考えられる高台付の土師器小皿の出土も目立つ。

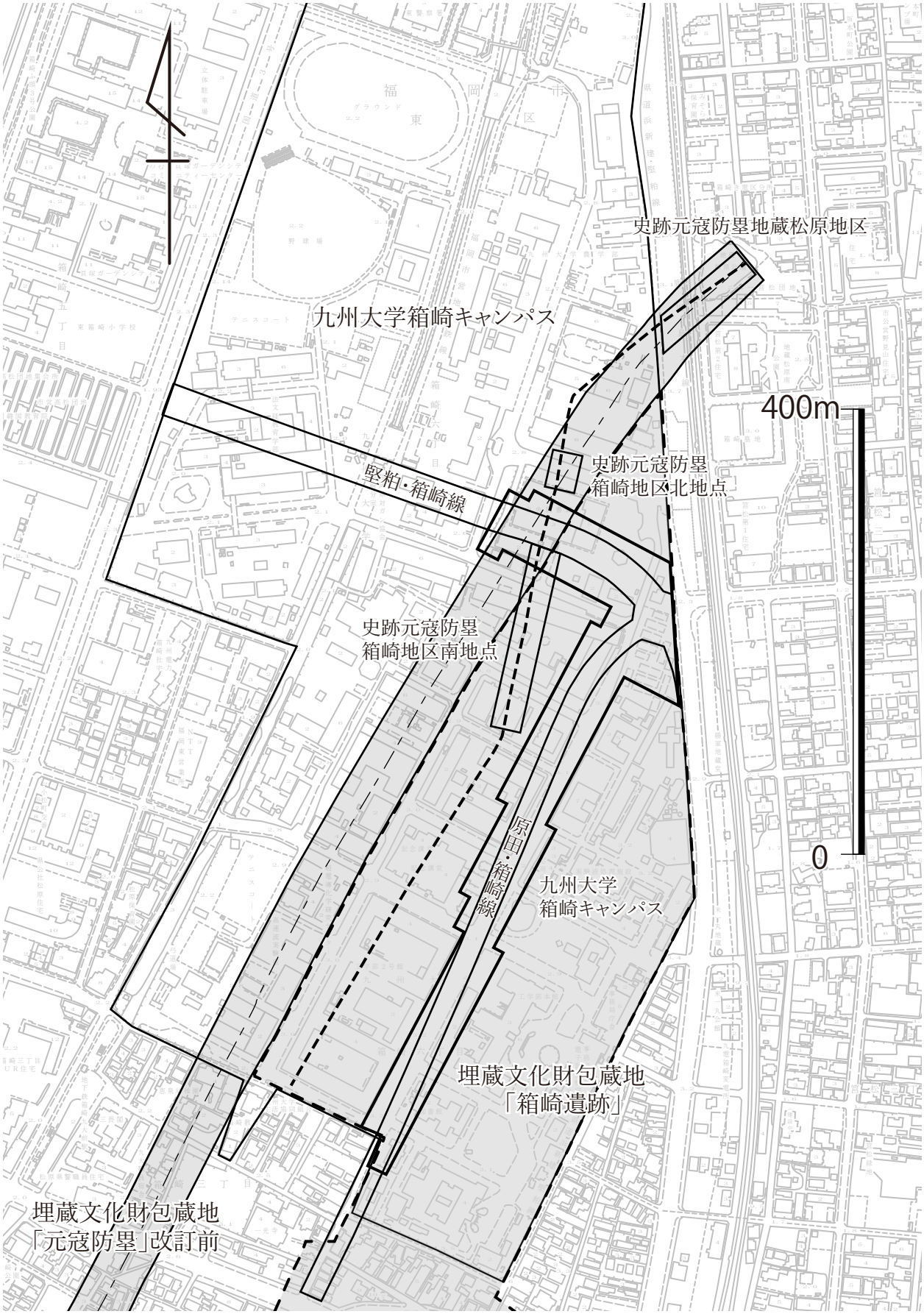


Fig.4　都市計画道路関連調査区位置図（S=1/5,000）

6. 鎌倉時代後期から南北朝時代

箱崎遺跡では、13 世紀後半に受けた 2 度にわたる蒙古襲来を物語る遺構として、元寇防塁の一部とみられる石塁遺構が九大箱崎キャンパス跡地で複数個所連続して検出された。これらの遺構は元寇防塁の一部として追加指定され、現地で保存されている。また、砂丘の北西側、東西 100m・南北 300m の範囲を中心として 13 世紀後半頃、文永の役に伴う兵火の痕跡の可能性がある焼土層の分布が確認されている。この時期の箱崎遺跡では、龍泉窯系青磁が高い頻度で出土する。第 26 次調査 7 区では鼎形、第 32 次調査では鬲形の小形青磁三足香炉が出土している。とくに第 32 次調査出土個体は焼成･発色ともに良好な製品で、鎌倉期の箱崎が、石清水八幡宮別宮であった筥崎宮の力を背景とし、同時期の博多に次ぐ対外交易の拠点に発展していたことが窺える。

7. 室町・戦国時代

15 世紀にはいると、それまで箱崎遺跡が乗る砂丘全体に広がりを見せていた遺構・遺物が、砂丘の南北端部に集中するようになるが、遺跡の中心部分での発掘調査例は少なく、分布については不明なところがある。文明 12（1480）年には飯尾宗祇が筥崎宮に参詣し､『筑紫道記』に兵火による焼失後、再建途中であった堂宇の様子が述べられている。

現在みられる筥崎宮本殿と拝殿は天文 15（1546）年に大内義隆によって、楼門は文禄 3（1594）年に小早川隆景によって建立され､いずれも国の重要文化財に指定されている。16 世紀代になると遺構･遺物とも減少するが、現在まで続く町場での発掘調査例が少なく箱崎遺跡の衰退を示すものと一概にいうことはできない。現存する町屋の地下に当該期の遺構が眠っている可能性は高く、調査の進展にしたがって現在の箱崎市街の成立年代を明らかにできると期待される。

第 3 節　箱崎キャンパス跡地内での確認・試掘調査

調査に至る経緯で記述したように、本事業に先立ち埋蔵文化財課は平成 24 年 12 月から大学構内での試掘・確認調査を開始した。確認調査時、箱崎キャンパスは利用が継続しており地下に埋設された電気・水道等のインフラ施設は稼働中であった。校舎建物間の学内道路には共同溝が埋設され、高圧電気配線・ガス・通信ケーブル等の主要インフラが格納され、掘削はできなかった。確認調査は学内道路と校舎建物の隙間等の狭小な範囲で、地下埋設物が埋設されていない箇所を九州大学施設部と確認したうえで実施している。九州大学箱崎キャンパスは明治 44（1911）年に整備され、100 年以上の歴史を有する。キャンパス移転までに各学部の建物施設は数回の建替えや新設が行われており、確認調査時もレンガ基礎等の過去の大学建物跡を複数箇所で確認した。レンガ建物基礎は現在の地表面（標高 3.5m 前後）から 150cm 以上の深さまで達しており、建設時にはそれ以上の深度で掘削されていたことが予想された。大学移転後には､建物解体工事に合わせて基礎構築物撤去の立会調査を実施した。その結果、既存建物範囲では遺構面を大きく上回る深度での基礎工事等が行われ、その範囲について遺構はほぼ残存していないことを確認した。確認・試掘調査は 185 か所で実施したが、箱崎キャンパス内を南北に縦断する包蔵地元寇防塁推定線より西側での遺構の検出はなかった（Fig.6 参照）。

確認・試掘調査によって遺構が確認された範囲について、都市計画道路範囲及び周辺範囲を福岡市が発掘調査を実施し、それ以外の範囲については九州大学埋蔵文化財調査室が担当した。調査の成果は、福岡市埋蔵文化財課調査報告書および九州大学埋蔵文化財調査室報告で、それぞれ報告・刊行されているため参照されたい。

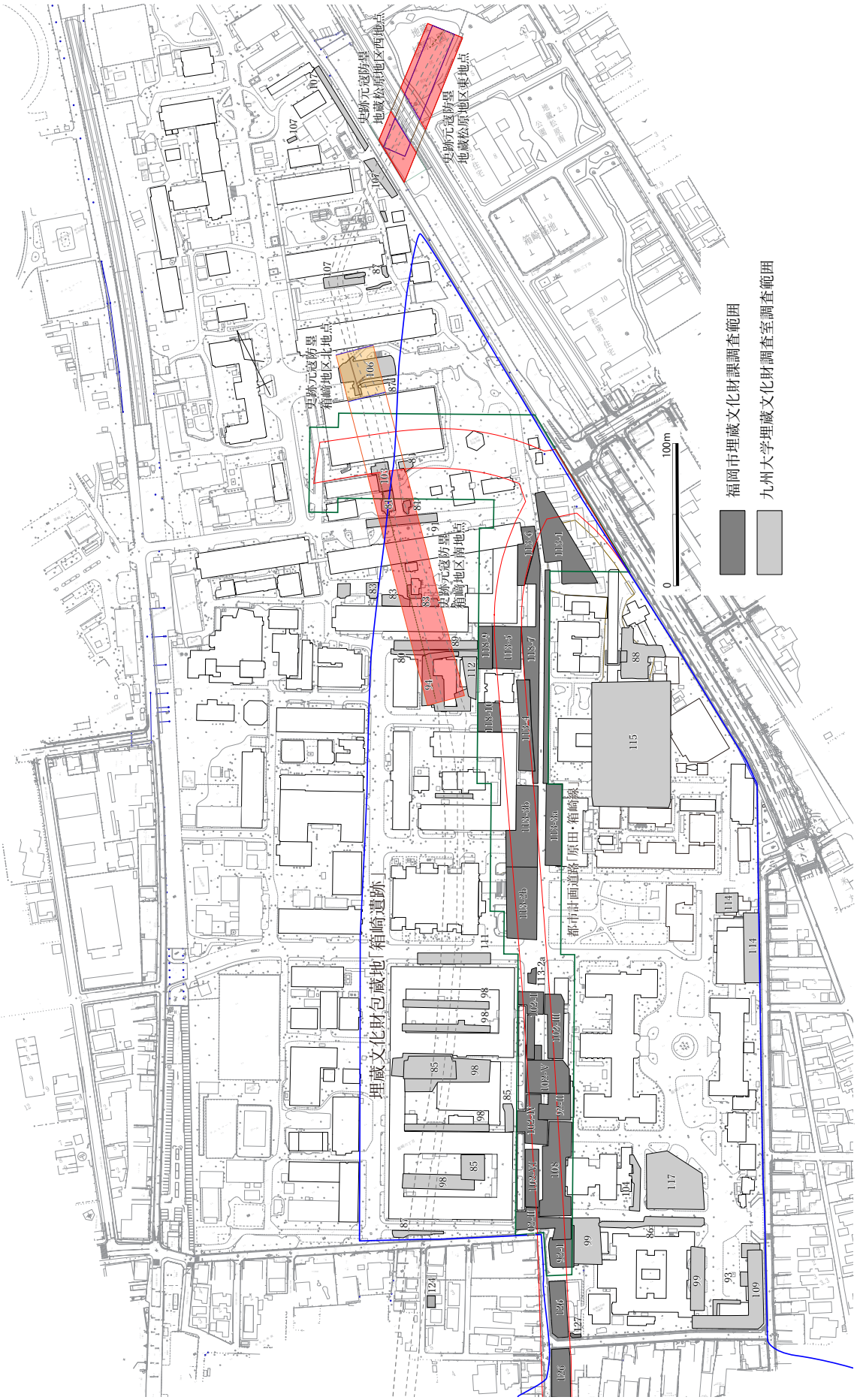


Fig. 5　箱崎キャンパス内調査区位置図（S=1/4,000）

第 4 節　箱崎遺跡範囲の変遷

現在、埋蔵文化財包蔵地「箱崎遺跡」として登録されている範囲は、海岸線に面した西側が元寇防塁、東側は宇美川によって画されている。箱崎遺跡範囲内で最初に行われた第 1 次調査では平安時代末期である 11 世紀から中世にかけ存続した集落遺跡を確認している。当時、遺跡名称は「箱崎・馬出遺跡群」と呼称され、遺跡範囲は確定していなかったが、数少ない調査事例からは筥崎宮を中心とした古代から中世にかけての遺跡の範囲と内容が予想されていた。その後、発掘調査の進展に合わせて遺構の分布範囲が示され、東西 400m、南北 1,400m の遺跡範囲が想定された。

市内での開発に伴う確認・試掘調査の実施例が増加したことを受け、平成 7（1996）年に改訂された福岡市文化財分布地図（東部Ⅰ）において、東西 400m、南北 950m の箱崎遺跡の範囲が改めて提示されたが、遺跡の北限は九州大学箱崎キャンパスまでは含めず、キャンパス敷地南端に設定されていた。これは箱崎キャンパス内の分布状況が把握されておらず、箱崎遺跡の遺構検出面である砂丘地形が大学敷地内までは延びないと想定されていたためである。箱崎地区での発掘調査件数の増加や箱崎キャンパス移転に先立つ確認・試掘調査の結果を受け、平成 22（2010）年および平成 25（2013）年に包蔵地範囲の改訂が実施された。遺跡範囲の北限は九州大学箱崎キャンパス農学部付近まで、南限は南側の吉塚本町遺跡に接する範囲（包蔵地面積　約 630,000 ㎡）まで拡大された。

なお、発掘調査が完了した大規模開発区域（筥崎土地区画整理事業範囲および九州大学箱崎キャンパス跡地の一部など）については、文化財保護法の届出が必要である埋蔵文化財包蔵地としての取扱指定を解除している。

1. 箱崎キャンパス内確認調査状況（南東から）

2. 旧大学建物レンガ基礎検出状況（北から）

3. 確認調査状況・工学部付近（東から）

4. 確認調査状況・工学部付近（南東から）

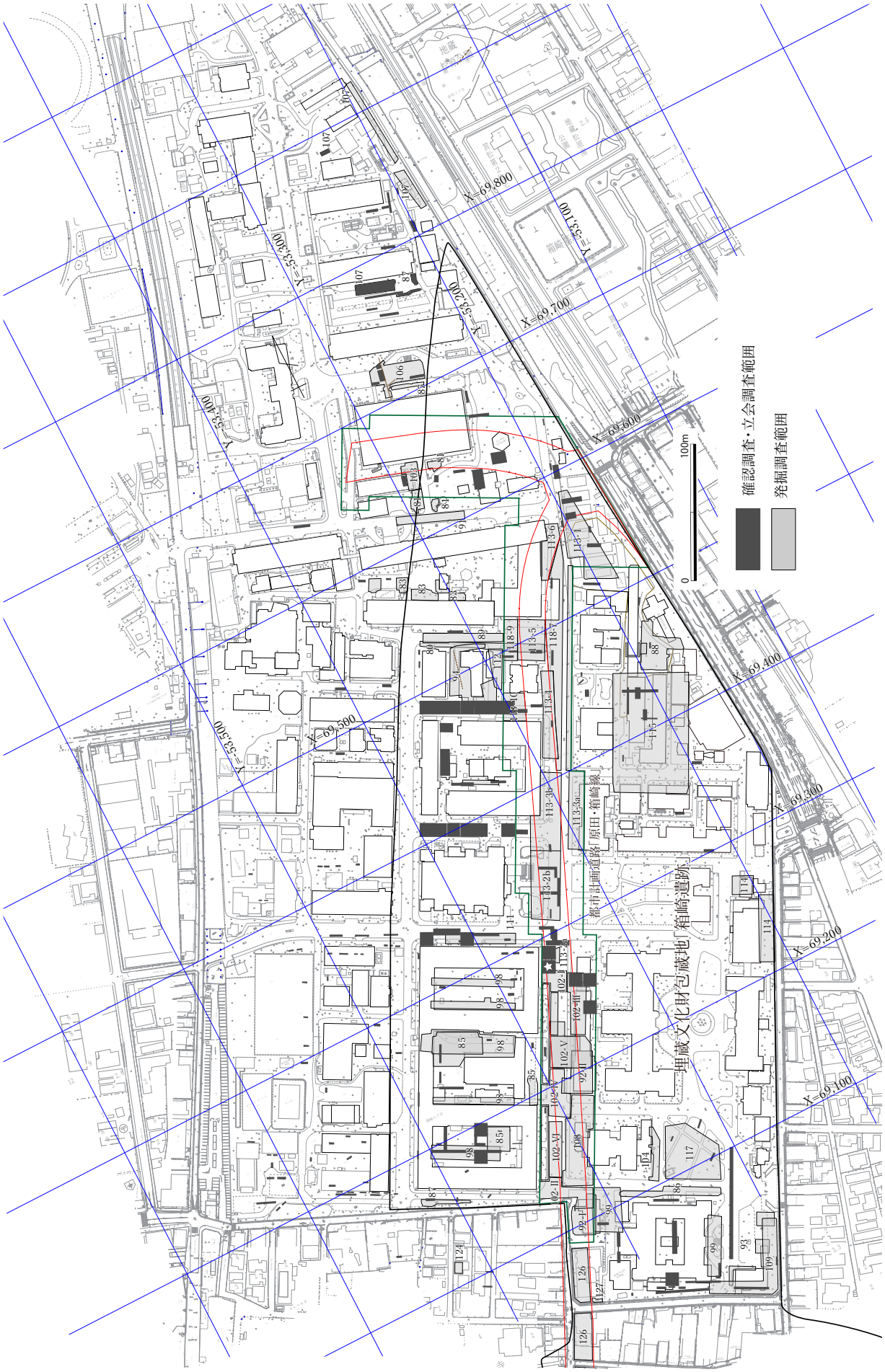


Fig. 6　箱崎キャンパス内確認調査位置図（S=1/4,000）

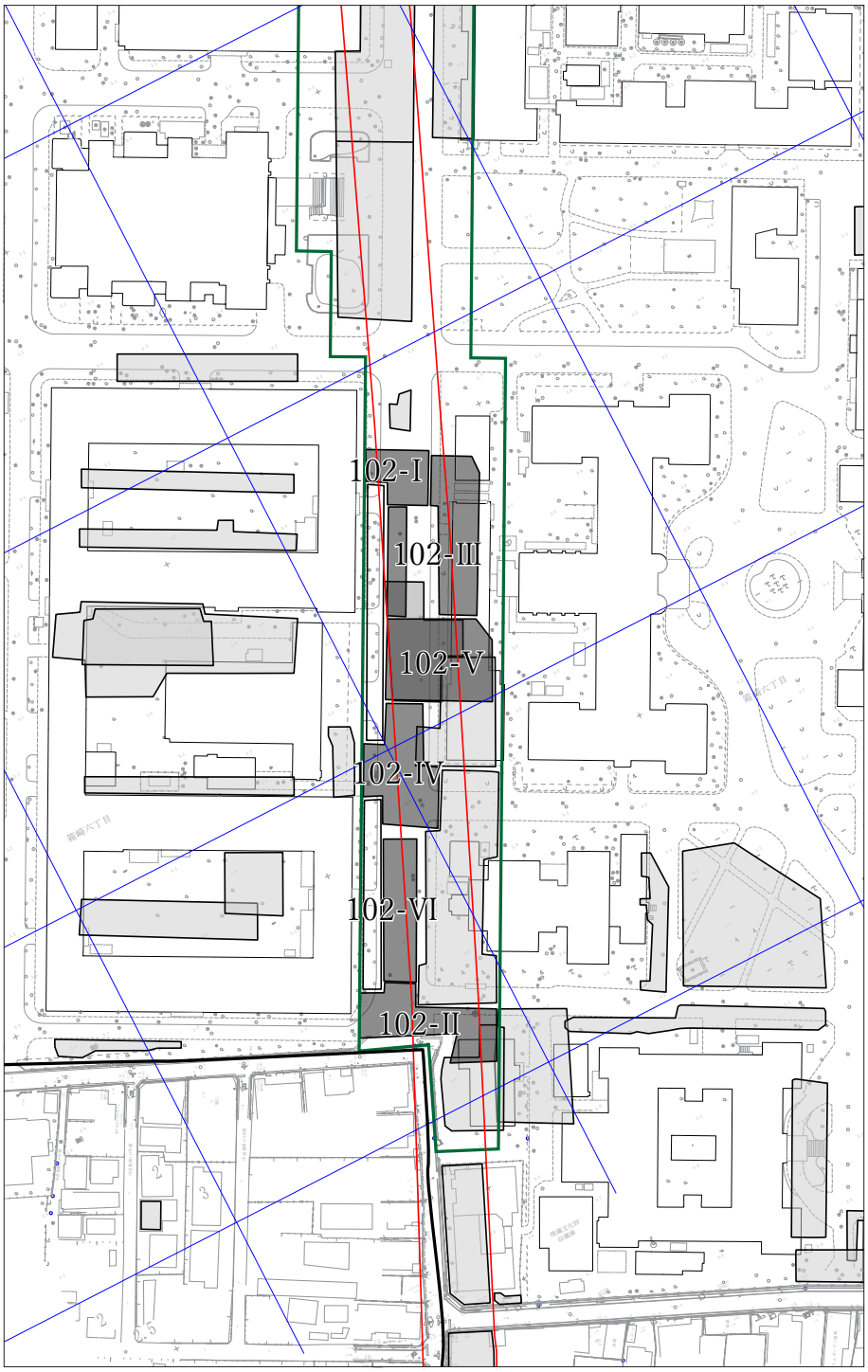


Fig. 7　箱崎遺跡第 102 次調査位置図 (S=1/2,000)

第２章　第 102 次調査の記録（2）

第１節　調査の概要

第 102 次調査地点は、旧九州大学箱崎キャンパス内の工学部本館及び心理学教室の西側に位置し、九州大学埋蔵文化財調査室が設定する箱崎キャンパス発掘調査グリッドでは、M・N-34 ～ 39 内に該当する。総調査面積は 3,411.3 ㎡で、調査期間は令和元年９月３日から令和２年２月 28 日である。

道路建設に伴う発掘調査であるため、調査区は狭長なものとなっており、また排土処理の都合もあって、調査は対象地を１～６の複数区に分けて実施した。そして調査着手順に番号を付したため、各区は不規則な配置となっている。また遺構番号は、調査区ごとに割り振っており、それぞれ４桁の番号を付し、４桁目を調査区番号としている。

今回は第 102 次調査６区の内、北東側に位置する１・３・６の各区（Fig.8）について報告を行ない、第 102 次調査全体の総括、及び前回の報告（「第３章」『箱崎 64』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1457 集）において未収であった、２・４・６区における一部遺構や出土遺物の写真図版についても掲載する。

第２節　１区の調査

1. 調査の概要

１区は第 102 次調査区の北端に位置し、調査面積は 652.7 ㎡である（Fig.9）。調査の東隣が３区、南隣が５区であり、調査区の一部は重複している（Fig.8）。

調査はまず重機による表土剥ぎから着手し、客土（バラス等）や造成土を除去した標高 2.3 m前後の黄褐色（2.5Y5/3）砂層上に調査面を設定し、発掘を開始した。この砂層はかつての砂丘面であり、大学造成時に砂丘上面は削平を受け、遺物包含層や往時の生活面はすでに失われている。よって１区の調査は１面のみ実施している。排土処理の都合上、調査では２度の土砂反転を行ない、また立木等の地表物を避けたため、調査区平面形はいびつなものとなっている。

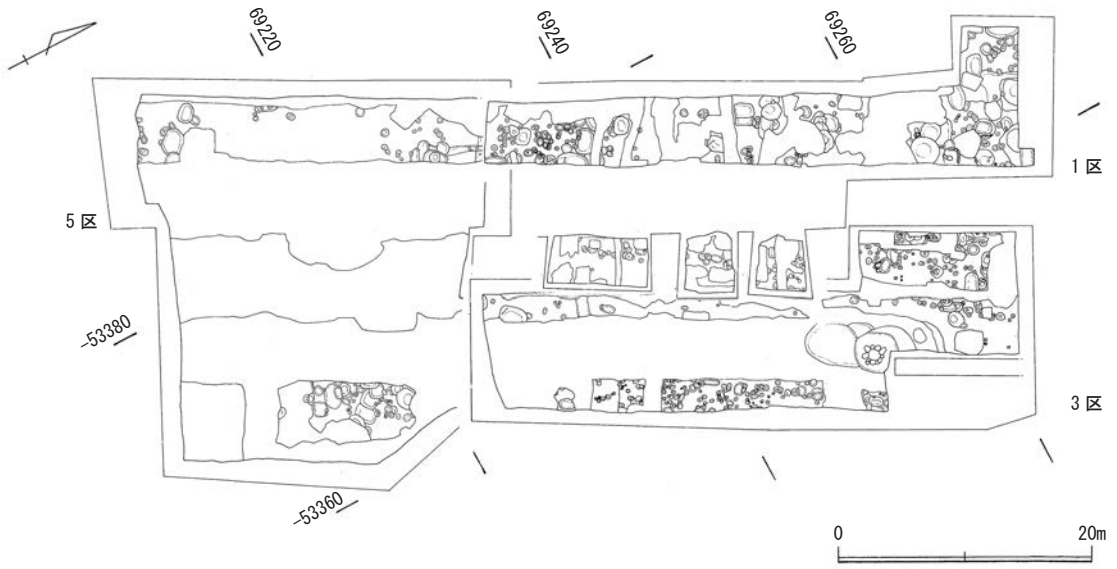


Fig.8　第 102 次調査　1・3・5 区 (S=1/600)

2. 遺構・遺物

1区の遺構には、土坑（SK)、溝（SD)、柵列、柱穴（SP）があり、出土した遺物量はコンテナ18箱である。調査区中央には、第102次調査地点すべてに影響を与えている、北東－南西方向にのびる幅5～6ｍの攪乱が縦断しており、その他にも遺構面には、調査区中心部を主とした大小さまざまな攪乱が及んでいる。

遺構は粗密がありながら、調査区全体に広がっているが、その中でも土坑は北寄り、柱穴は南寄りという、分布の偏りを指摘することができる。特に南西側における柱穴の集中は著しい。これら遺構分布の特徴は、往時における土地の利用状況の一端を示しているのだろう。

南西側の柱穴群は、有意な配列を見出すことができず、また出土遺物も土器小片が主で、その性格は不明である。一方、東～南東側にある柱穴群は短いながらも北東－南西方向に直線的な配列を見せており、調査では柵列と判断した。この北東方向の延長上には、後述する3区の柵列が存在し、両者は一連の、もしくは密接なつながりのあるものとして評価できるだろう。

以下では、(1）土坑（SK)、(2）溝（SB)、(3）柵列といった遺構の特徴と出土遺物について、それぞれ所見を述べる。

(1）土坑（SK)

1区の土坑には、大小様々なものが存在し、平面形においても、方･長方形を呈するもの（SK1001・1004・1018・1025・1039・1104・1130・1155など)、円・楕円形を呈するもの（SK1002・1003・1005・1008・1151など)、不定形なもの等があり、その性格や機能についても不明な点が多い。このような中で、SK1001やSK1004は、土坑の四壁が石壁となる、いわゆる「石組土坑」と判断でき、地下蔵等の機能が想定されている。

また、1区の土坑は、削平を受けているとはいえ、総じて浅く壁面の傾斜も緩やかで、急な掘り込みを有するものは、ほとんど存在しない。そしてSK1002のような、内部に多量の遺物を包含する例は数少ない。

以下では､1区で検出した土坑の内､形状等や出土遺物について特徴的な14基を選び､報告を行なう。

SK1001（Fig.10）

調査区北側に位置し、東側及び北側の一部を攪乱に切られている。南西側には、近接してSK1002が存在する。平面は、一辺1.3ｍ程の隅丸方形を呈し、掘削の深さは10～20㎝程と浅く、底面は平坦である。

土坑内北側では、土坑各辺に沿って平面「Ｌ」字状の石組みが確認できた。石組みは黄褐色砂層の直上に設置しており､高さ20㎝程の一段分のみが残存する。石組みの背面には､一部裏込め石が残る。石材は土坑内側へ面をそろえて配列されており、これは土坑内に施された石壁の一部であると考えて良い。したがって､SK1001は石組土坑であり､本来は土坑四壁に石壁が配されていたのだろう。なお、隅部の石壁材には石臼片を転用している。

また土坑内には塊石がいくつか散乱していたが、これら石材は破損した壁材だけではなく、隣接するSK1002内に存在する投棄石材と同種のものである可能性も考慮する必要があるだろう。

出土遺物

土坑内からは少量の遺物が出土したが、掘方内の出土等、土坑に伴うと判断できる遺物は確認できなかった。

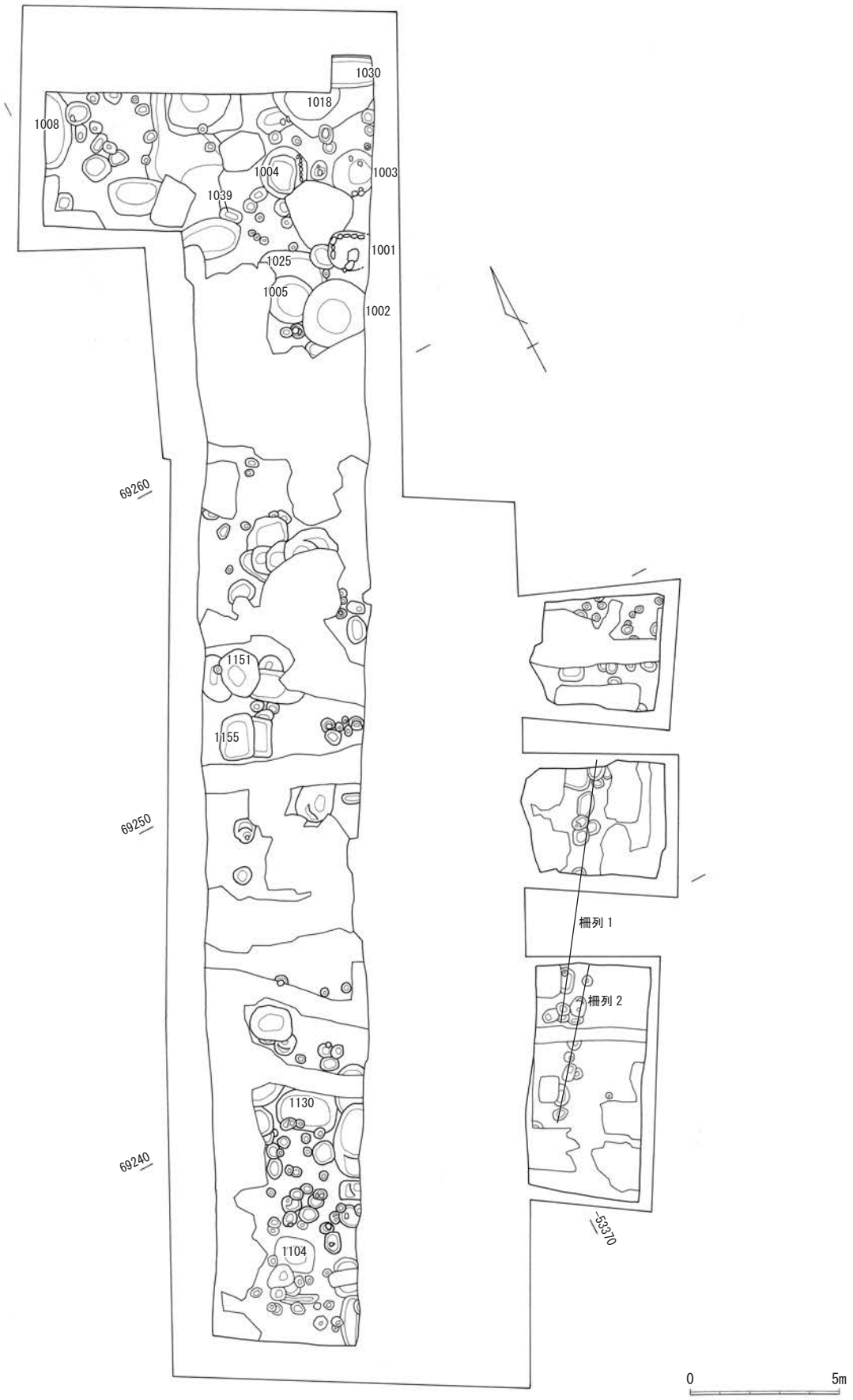


Fig.9　1 区遺構配置 (S=1/200)

SK1002（Fig.12）

調査区北側に位置し、東側と南側を攪乱に切られている。また、SK1005の東側を一部切り込んでおり、北側近くにはSK1001が存在する。平面は径2.2～2.4ｍの円形を呈し、壁面の立ち上がりは緩やかに湾曲しており、深さは20～40㎝を測る。底面は狭く、径1m程の平面円形を呈し、全体的に浅い窪部のような形状をなしている。

土坑内からは、大小の角礫や平石を中心とする土器や瓦が出土したが、遺物の大半は土坑底面より浮いた状態で出土しており、これら遺物、特に石類は、本来遺構に付属するものではなく、廃棄等の理由により、土坑内に流入したものだろう。礫は土坑内全体に拡散しているが、北西－南東方向、特に南東側からの流入量が多い。

以上の所見から、この土坑は、これら遺物を投棄するためのものであった可能性を考えておきたい。

出土遺物（Fig.14-1～9・14～16）

１は土師質の鍋で、内面には横方向のハケメ調整を施し、外面には煤が付着する。2・5はすり鉢。2は土師質、5は陶質で明赤褐色の器面を有する。3は瓦質の茶釜。4は瓦質の火鉢で、2条の突帯間にスタンプを施す。6・9は朝鮮陶磁。6は壺、9は椀で、9は内面見込みの5カ所、高台畳付の5カ所に砂目の跡が残る。7は碁笥底の白磁皿。8は土師皿である。14・15は丸瓦で、外面には縄目が残る。16は不明の石造物片で、平坦面には笠形の陰刻がある。図からみて左側の小口部は破面ではなく、丁寧に研磨されている。再利用によるものか。

SK1003（Fig.10）

調査区の北側に位置し、西側及び南西側の一部を攪乱に切られている。平面は径1.6ｍ程の円形を呈しており、壁面は急角度で立ち上がり、深さは50㎝程を図る。底面は狭く、平面形80㎝の円形を呈している。土坑内からは数石の礫が出土したが、いずれも土坑埋土の半ばから上面辺りに位置するもので、この土坑に本来伴うものではなく、土坑廃棄時に混入したものだろう。

出土遺物（Fig.14-17・Fig.15-5～7）

14-17は亀伏間瓦で、外面には一部縄目が残る。15-5は土師椀、15-6は土師皿で、いずれも底面は糸切り。15-7は朝鮮陶器の椀で、内器面の荒れが激しい。内面見込みと高台畳付に砂目の跡が残る。

SK1004（Fig.10）

調査区北側に位置し、南側の一部を攪乱に切られている。東側には、SK1018が存在する。平面は、径1.6～1.8ｍ程のいびつな円形を呈する。壁面はゆるやかに傾斜した後、深さ10～20㎝程で急角度となり、明確な掘方を示すようになる。上面の掘方と異なり、2段目の掘方は長さ1.3m、幅1mの長方形に近い平面形を呈している。深さは50～60㎝程を測り、底面は平坦である。

土坑内の西側では、長さ1m程続く石列が確認できた。高さは20㎝前後を測る。石列は角礫を主として縦位に、黄褐色砂層へ直接据えたもので、これら石材は、SK1001の石組みのように、石材同士がきちんと組み合ったものではない。しかし、石列は直線的に配列されており、一部石材は内側へきちんと面取りがされていることを考えると、これら石列も、SK1001例と同様の、土坑内に施された石壁の一部であり、SK1004は石組土坑であると判断する。

2段目掘方の南東辺は、石列の配置と対応しており、このことは、この掘り込みが他遺構の切込みによるものではなく、この土坑に伴う造作であることを示している。したがって、これら石列（石壁）は、土坑の四壁に、2段目の掘方に沿う形で巡らされていた可能性を考えておきたい。

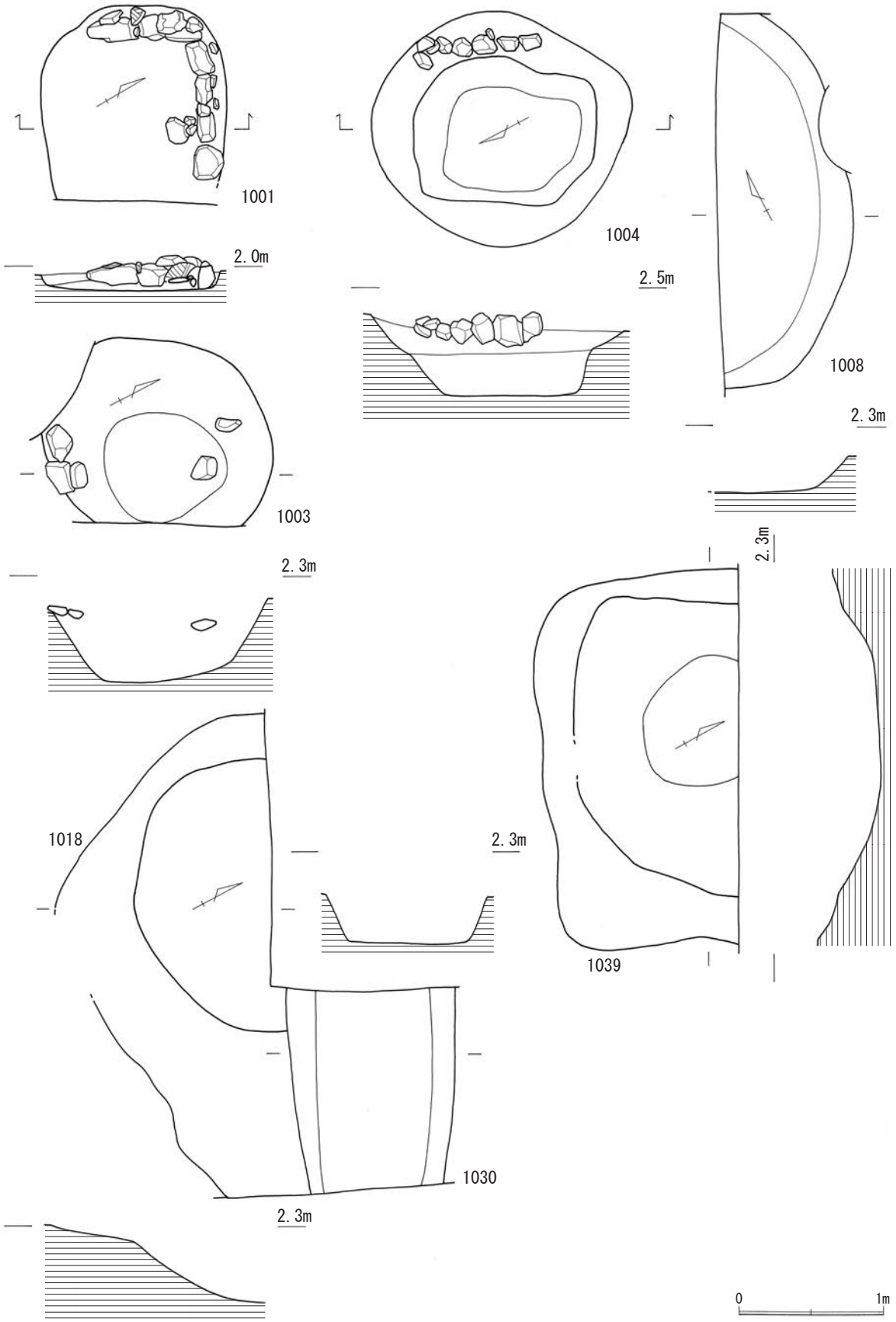


Fig.10　1区SK (1) (S=1/40)

出土遺物（Fig.15-1・2）

1は土師質の鍋で､外面には煤が付着する。内面には横方向のハケ目を施す。2は土師質のすり鉢で、内面は横方向の荒いハケ目を施した後、スリ目を施す。

SK1005（Fig.12）

調査区北側に位置し、西側を攪乱、東側をSK1002に切られる。また、SK1025の南側を切り込んでいる。平面は径1.6ｍの円形を呈し、壁面の立ち上がりは緩やかで、深さは20～30㎝を測る。底面はやや広く平坦で、径1.1mの平面円形を呈する。SK1003とよく似た浅い土坑である。

土坑内からは、角礫や土器等が出土しているが、いずれもSK1002側に近い、土坑内の浅い位置で確認している。また、角礫そのものやその出土状況は、SK1002のそれと類似しており、以上の所見は、これら遺物が流れ込みによるものであること、SK1002出土の遺物と強い関連があること、を示しているのだろう。

出土遺物（Fig.14-10～13）

10は須恵質の捏ね鉢である。口縁部付近で屈曲し、端部は上方へ延びている。11は土師皿で、底面は糸切りによる。12は土錘。13は瓦質のすり鉢である。スリ目の単位は5本で、内面を短いハケ目で整えた後、スリ目を施す。

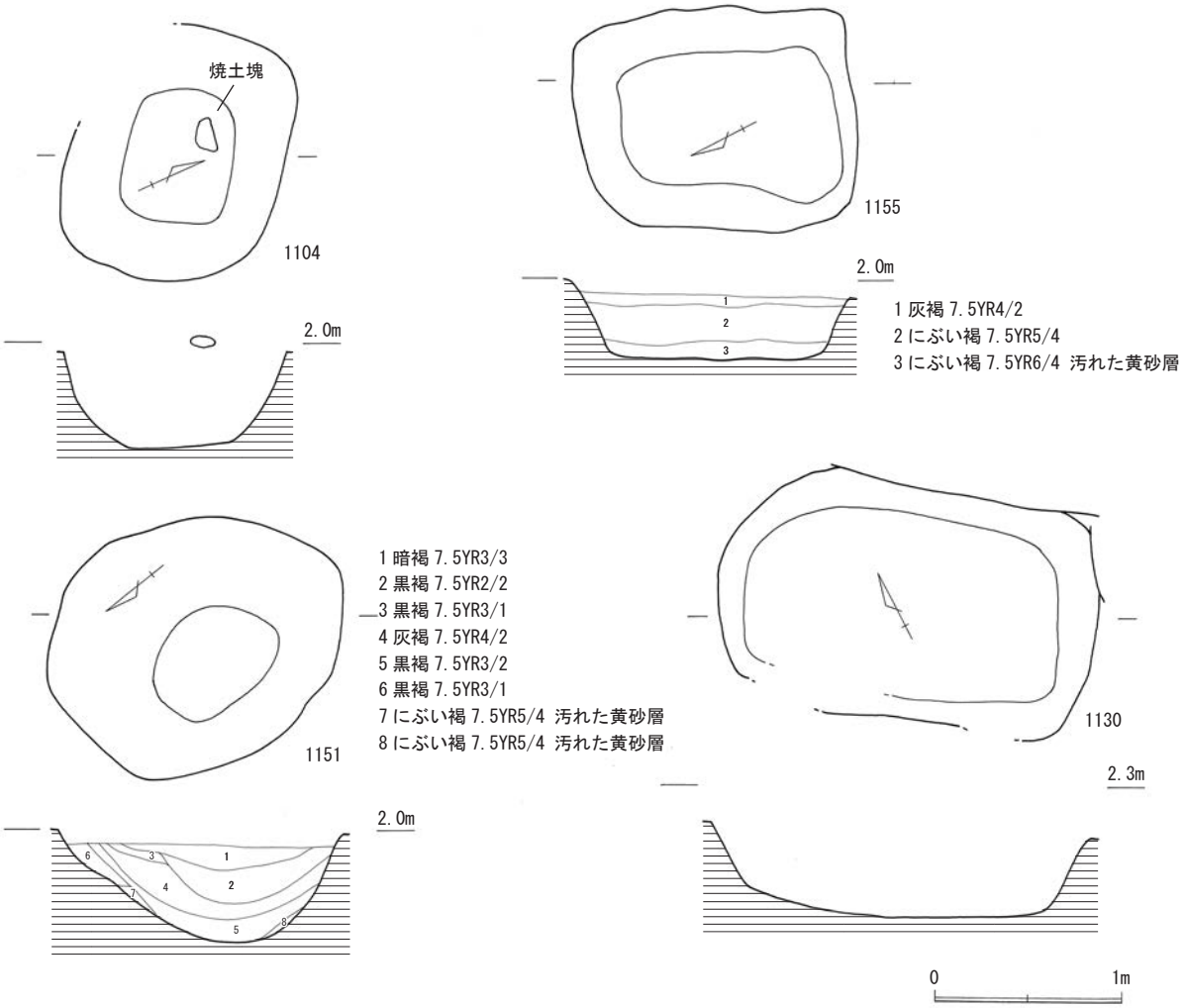


Fig.11　1区SK（2）（S=1/40）

SK1008（Fig.10）

調査区北端に位置し、半ば以上が調査区外に存在し、西側のみ確認できた。現状で長さ2.6mを測る大型の土坑であり、平面は楕円形もしくは円形を呈するものだろうか。立ち上がりは緩やかで、底面は平坦である。深さは20㎝程。遺物の出土は少ない。

出土遺物（Fig.15-4）

4は土師質の茶釜で、胴部上方に把手を付している。

SK1018（Fig.10）

調査区北東端に位置する。北側の半ば近くが調査区外に存在し、西側部分のみ確認できた。北側をSD1030に切られている。掘方は当初緩やかな斜面を呈するのみで、途中より深い掘り込みとなる。壁面はなだらかに下降しており、底面は判然としない。深さは60㎝程を測る。確認できた平面をみれば、掘り込みの各辺は直線的であり、平面長方形もしくは方形を呈する可能性もあるが、深堀部分の平面形と対応していない。深堀部の掘方平面形は、径1.9ｍ程のいびつな円形を呈しているが、一部直線的な部分もあり、本来は方形の掘方であった可能性も考えておきたい。

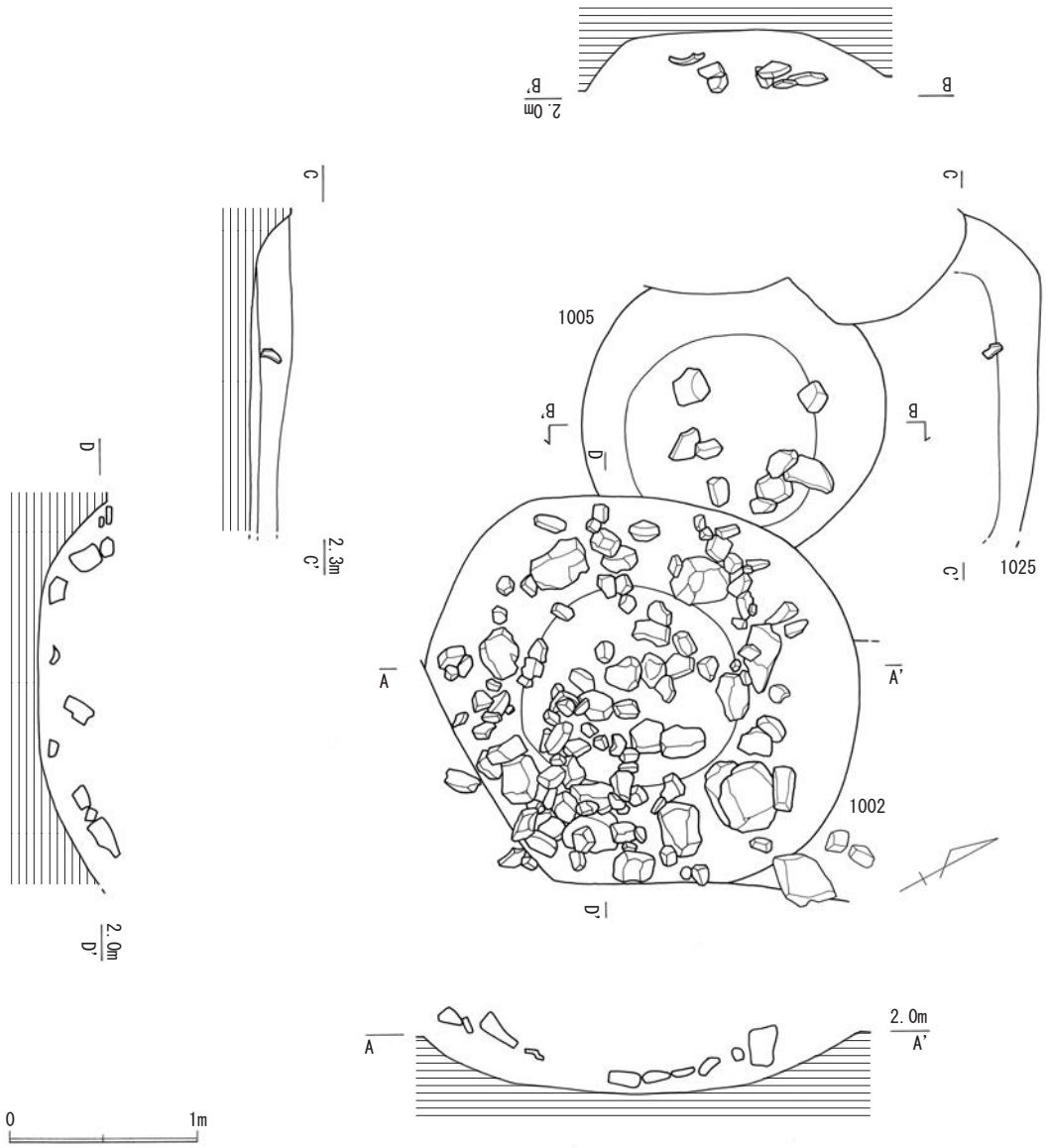


Fig.12　1区SK1002・1005・1025(S=1/40)

出土遺物（Fig.15-10・11）

遺構の大きさに比して、遺物の出土量は少ない。10は瓦器椀の口縁部片。11は土錘。

SK1025（Fig.12）

調査区北側に位置し、南側をSK1002・1005及び攪乱に切られている。遺存状況は悪い。平面は、長さ2.4m程の楕円形を呈しているが、北側の掘方はやや直線的であり、本来は平面長方形であった可能性もある。壁面の立ち上がりは緩やかで、深さは20㎝程を測り、底面は平坦である。調査当初は墓である可能性も考えたが、棺釘等の関連する遺物の出土も無い。埋土も汚れた黄褐色砂質土で、遺構の存在を認識可能で、他区で確認した墓埋土とは異なっている。

遺物の出土は少ないが、土坑内の底面近くから白磁椀1が出土した（Fig.15-3）。破片資料だが、完形近くまで復元できる。また、埋土からはもう一個体の同種の白磁椀片が出土しており、周辺遺構検出中に検出した資料とも接合できた（Fig.14-18）。

出土遺物（Fig.14-18、Fig.15-3）

14-18・15-3とも青白磁の椀である。底部は厚く、口縁部はわずかに外反する。内面には弱い櫛描文を施している。

SK1039（Fig.10）

調査区北端に位置する。北側の半ば近くが調査区外に存在し、西側部分のみ確認できた。確認できた平面をみれば、掘り込みの各辺は直線的であり、平面は一辺2.5m程の方形を呈するものか。掘方は当初緩やかな斜面を呈するのみであるが、途中より深い掘り込みとなる。底面は平坦で平面円形を呈し、深さは40㎝程を測る。

東側に隣接するSK1018によく似た土坑といえるが、SK1018とは異なり、深堀部の掘方も、各辺が直線的な平面「コ」字形を呈しており、上面掘方と対応している。遺物出土は比較的多い。

出土遺物（Fig.15-13～24）

13は土師質の捏ね鉢、14・15は土師質の鍋である。13は口縁部が肥厚し、端面は内側へ張り出している。14は口辺部が肥厚し、端部は丸く収めている。内面には横方向のハケ目を施している。15は口縁近くが、幅5.7cm程で帯状に肥厚する。体部下半は直線的に開いているが、肥厚部はわずかに内湾する。外面は、肥厚部で縦方向のハケ目、肥厚部下では荒いハケ目、内面は横方向のハケ目をそれぞれ施す。18～22は土師皿で、底面はいずれも糸切り。23は石錘、24は土錘である。

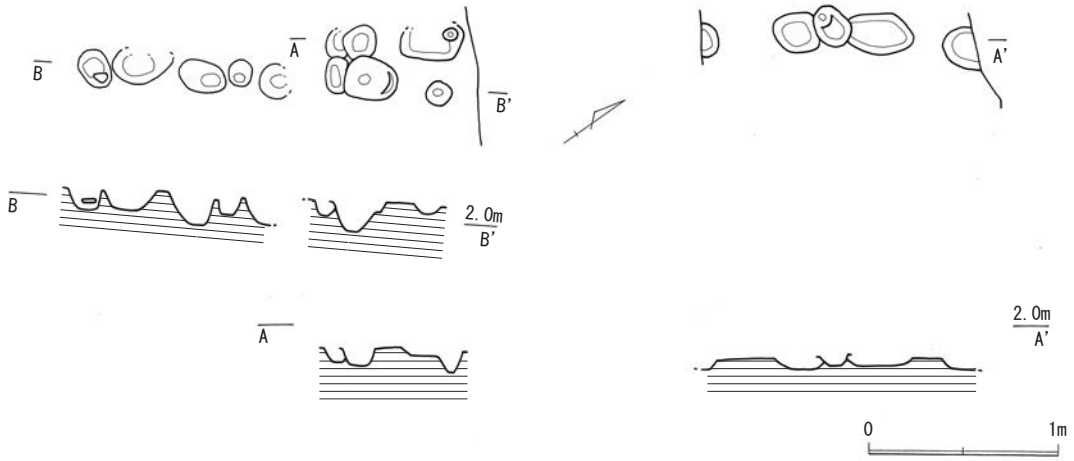


Fig.13　1区柵列（S=1/40）

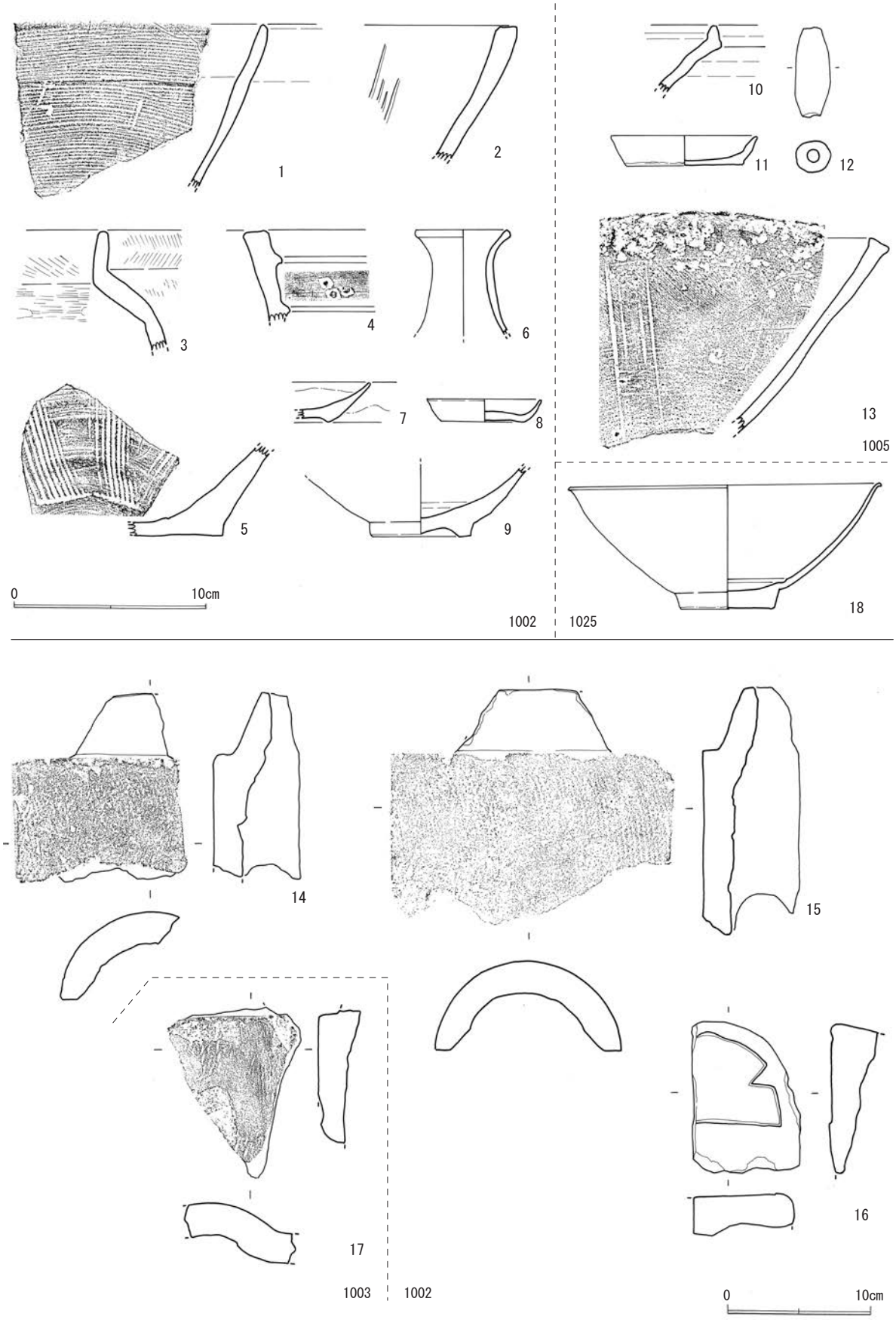


Fig.14　1区出土遺物（1）（S=1/3、1/4）

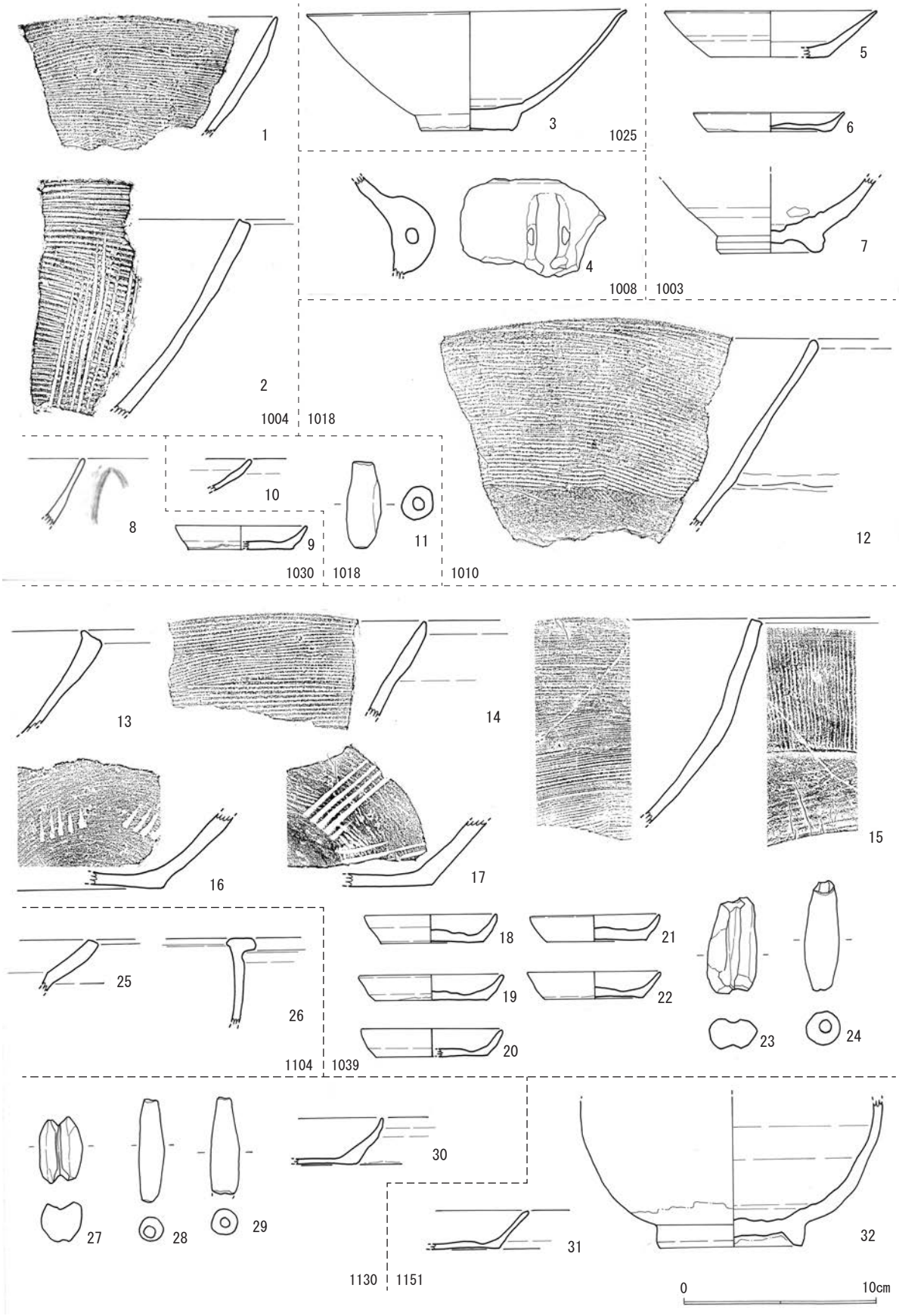


Fig.15　1区出土遺物（2）（S=1/3）

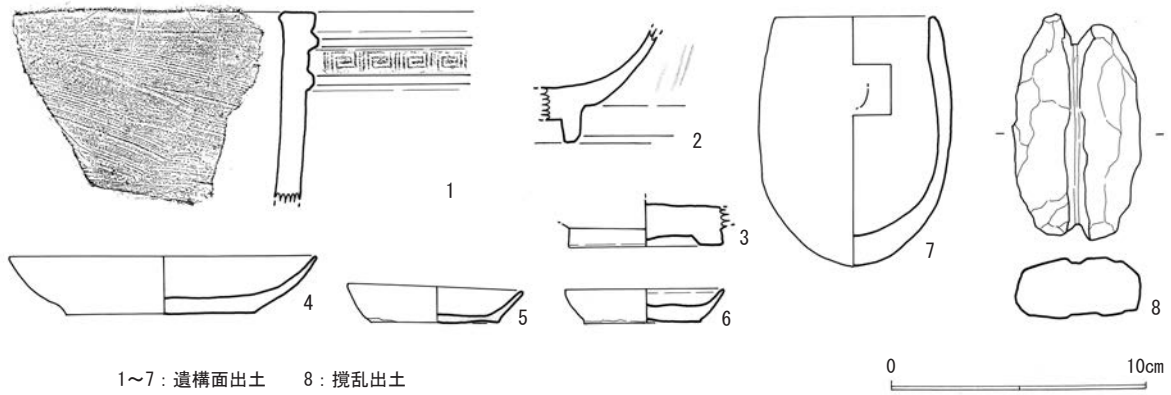


Fig.16　1区出土遺物（3）（S=1/3）

SK1104（Fig.11）

調査区の南側に位置し、西側を他遺構に切られている。平面は1.1×1.4ｍの隅丸略方形を呈し、深さは50㎝を測る。壁面は急角度で立ち上がり、底面は狭く平坦で，掘方と同じく平面は隅丸の方形を呈している。埋土は暗褐色砂質土（7.5YR3/4）で、黒褐色砂質土が薄く縞状に入る。なお、埋土上部には焼土塊が検出された。

出土遺物（Fig.15-25・26）

25・26とも土師質の鍋で、外面に多量の煤が付着している。25は口縁内面に横方向のハケ目調整、26は口縁部が横方向へ短く張り出すもので、上面には荒いハケ目調整を施している。

SK1130（Fig.11）

調査区の南寄りに位置し、北側を攪乱に切られている。平面は2.0×1.3ｍの隅丸長方形を呈しているが、各辺は直線的であり、本来は平面長方形の土坑であったのだろう。壁面は急角度で立ち上がり、深さは40㎝を測る。底面は平坦で，掘方と同じく平面は隅丸長方形を呈している。出土遺物は少ない。

出土遺物（Fig.15-27～30）

27は小型の石錘、28～30は土錘である。30は土師皿。

SK1151（Fig.11）

調査区中央付近に位置し、南西側にはSK1155が存在する。平面は1.4～1.6mのいびつな円形を呈し、深さは50㎝を測る。壁面の立ち上がりは西側が急で、東側は緩やかになっており、底面は狭く丸みを帯びている。

埋土は大きく、灰褐色砂質土（7.5YR4/2等）と炭化物を多く含む黒褐色砂質土（7.5YR3/1等）が互層をなしていると捉えることができる。埋土からは礫や陶磁器といった遺物が出土したが、ほとんどが1～3層中に含まれており、4・5層上面において、一度掘り返しが行なわれた可能性を考えておきたい。

出土遺物（Fig.15-31・32）

31は土師皿、32は朝鮮陶器の台付壺である。高台内には砂目が残る。

SK1155（Fig.11）

調査区中央付近に位置し、北側にはSK1151が存在する。平面は1.2×1.4mの略方形を呈し、深さは40㎝を測る。壁面の立ち上がりは急で、底面は平坦。埋土はにぶい褐色砂質土（7.5YR5/4）を主体とし、下層へ向かうにつれて漸移的に黒みを帯びてくる。

出土遺物　遺物の出土はわずかで、図示に耐えない陶器等の小片を含むのみである。

(2) 溝（SD）

1区の調査において、溝状遺構の検出は少なく、時期不明のものが大半である。今回は明確に遺構と判断できるSD1030のみを報告する。

SD1030（Fig.10）

調査区の北東端に位置し、SK1018の北東側を切り込んでいる。調査区内では、長さ1.4m程しか確認していないが、遺構の上端・下端ともほぼ平行し、直線的に伸びていることから、この遺構を溝と判断した。深さ30㎝を測り，壁面の立ち上がりも明確で、底面は平坦である。現状において溝の方向は、調査区の地割とほぼ等しい。つまり現在の地割に沿うものといえようか。

出土遺物（Fig.15-27～30）

27は石錘で、小型品である。28・29は土錘。30は土師皿。

(3) 柵列

調査区東～南東側にある柱穴群は北東－南西方向に直線的な配列を見せていること、この北東方向の延長上には後述する3区の柵列存在すること、以上の2点から、これら柱穴群を柵列と判断したことはすでに述べた。ただ、これら柱穴群は直線的に連なる部分は短く、一部で切り合いも見せており、すべてを一連の「柵列」と判断するには問題点も多い。

柵列1・2（Fig.13）

ここでは、これら柱穴群を2列の柵列とみなし、北西側を柵列1、南東側を柵列2とする。柵列1は3.5m、柵列2は2m程の長さがあり、図上の想定では、柵列1はN-31°-E方向、柵列2はN-39°-E方向に延びており、8°のずれが生じている。柱穴は、円形や楕円形、方形といった様々平面形を示し、一部の柱穴は切り合い関係にある。また柱穴間も不規則で、底面の高さも一定ではない。柵列1と柵列2の柱穴はわずかに切り合っており、それに注目すれば、柵列1は柵列2に後出するものといえるだろう。

出土遺物　図化に耐えない小片が、わずかに出土するのみである。

(4) その他の遺物（Fig.16）

2・8が撹乱、その他は遺構検出中の出土。1は瓦質の火鉢で、2条突帯の間にスタンプを施す。内面は横･斜め方向のハケ目調整。2はⅣ類、3はⅠ類の竜泉窯系青磁椀。4は土師椀、5･6は土師皿で、いずれも底部は糸切りによる。7は蛸壺、8は石錘である。

第3節　3区の調査

1．調査の概要

3区は第102次調査区の北側に位置し、調査面積は542.8㎡である（Fig.17）。調査の東側に1区、南側に5区が存在し、調査区の一部は重複している（Fig.8）。調査はまず重機による表土剥ぎから着手し、客土（バラス等）や造成土を除去した標高2.3m前後の黄褐色（2.5Y 5/3）砂層上に調査面を設定し、発掘を開始した。

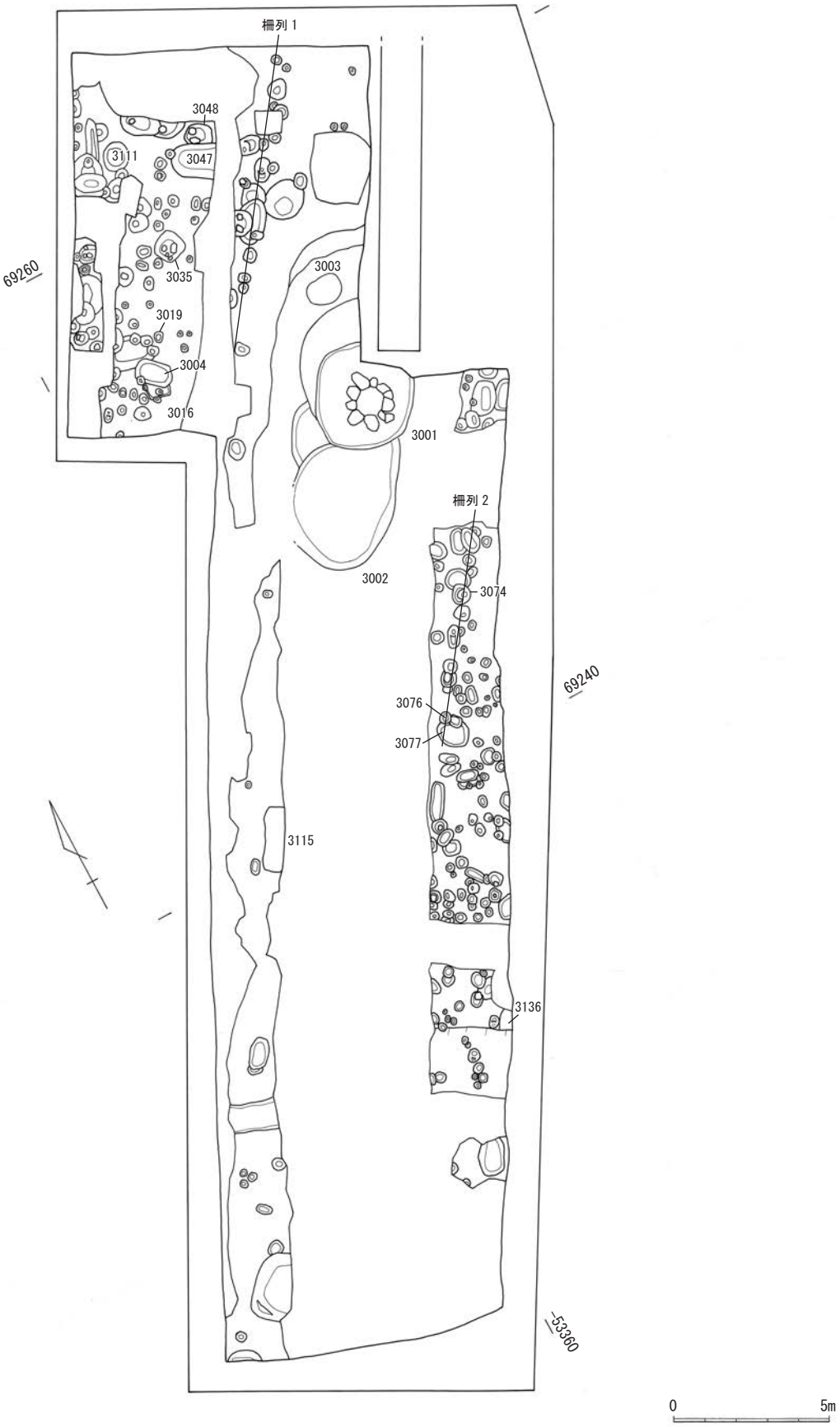


Fig. 17　3 区遺構配置 (S=1/200)

この砂層はかつての砂丘面であり、1区の場合と同じく、砂丘上面は削平を受け、遺物包含層や往時の生活面はすでに失われているため、2区においても調査は1面のみ実施している。この黄褐色砂層の下20～30㎝程の標高2.1～2.0mでは、明黄褐色粗砂層（2.5Y6/6）となる。なお、3区の調査においては後述するように、木棺墓が出土しており、その掘方は判然としないため、最後に砂丘面切り下げを行い、遺構の確認に努めた。

2. 遺構・遺物

3区の遺構には、井戸（SE）、土坑（SK）、柵列、木棺墓（ST）、柱穴（SP）があり、出土した遺物量はコンテナ23箱である。調査区中央には、第102次調査地点を横断する北東－南西方向にのびる幅5～6ｍの攪乱が伸びているが、その攪乱部の下の標高1.3～1.4m付近で、井戸群が残存していることが確認できた。その他にも大小さまざまな攪乱が、調査区全体に及んでおり、調査区南西側に遺構が希薄なのは、この攪乱による影響も指摘することができる。

1区との比較において､3区では､土坑が少なく柱穴群が多いことを違いとして挙げることができる。特に調査区西側では、多くの柱穴を確認することができた。攪乱により調査区が寸断され、柱穴に有意な配列を見出すことはできないが、Fig22に示す通り、列状をなす柱穴群が確認でき、調査区北側のものは､1区で確認したものの延長上にあることはすでに述べた。したがって，これら柱穴列も「柵列」とみなすことにする。

また，3区の調査において特筆すべきは、木棺墓の発見だろう。今区の調査では2基を確認したが、後述するように攪乱中から完形の陶磁器が出土しており、更なる墓が存在していたことは容易に推察できる。

以下では、(1) 井戸（SE)、(2) 土坑（SK)、(3) 柵列、(4) 木棺墓（ST）といった遺構の特徴と出土遺物について、それぞれ所見を述べる。

(1) 井戸（SE）

調査区北東側において、井戸は6基確認できた。小範囲に密集して存在しており、北東-南西方向に列をなしている。先にも述べたように、すべてを大規模な撹乱下において確認したので、遺構の遺存状況は悪い。井戸の種類はSE3001が井戸側石組、その他が桶組である。SE3001は井戸の本体、掘方共容易に確認できたのだが、その他の井戸は掘方の切り合いが判然とせず、特にSE3001南西側の4基の井戸は、一括して掘り下げており、井戸側を検出するまで基数を認識できなかったため、4基すべての遺構番号をSE3002とし、井戸ごとに、1～4の枝番号を付した。

井戸の掘方の切り合いをみていくと、SE3002-4はSE3001の裏込石下から検出できたこと、SE3003の掘方はSE3001掘方に削平されていること、などを考えれば、6基の井戸の内、時期的に最も後出するのは石組のSE3001であることは明らかであり、桶組→石組へという変遷が想定できる。

SE3002とした4基の井戸の構築順序は判然としないが、SE3002-4の西側で確認できた平面円弧を描く掘方、SE3002-1～3を囲む掘方がそれぞれの井戸掘削の際のものであると想定すれば、これらの切り合い関係をみれば、SE3002の中で最も古いものは、SE3002-4と考えることができるだろう。なお、SE3002とSE3003の先後関係は不明である。

SE3001（Fig.18）

石組による井戸側を持つ。井戸群の中心部に位置し、先に述べたように、これら井戸の中で最も新しい。標高1.3～1.4m付近での掘方の平面は、3.1×3.4mの隅丸方形で、井戸の北側は一部2段の

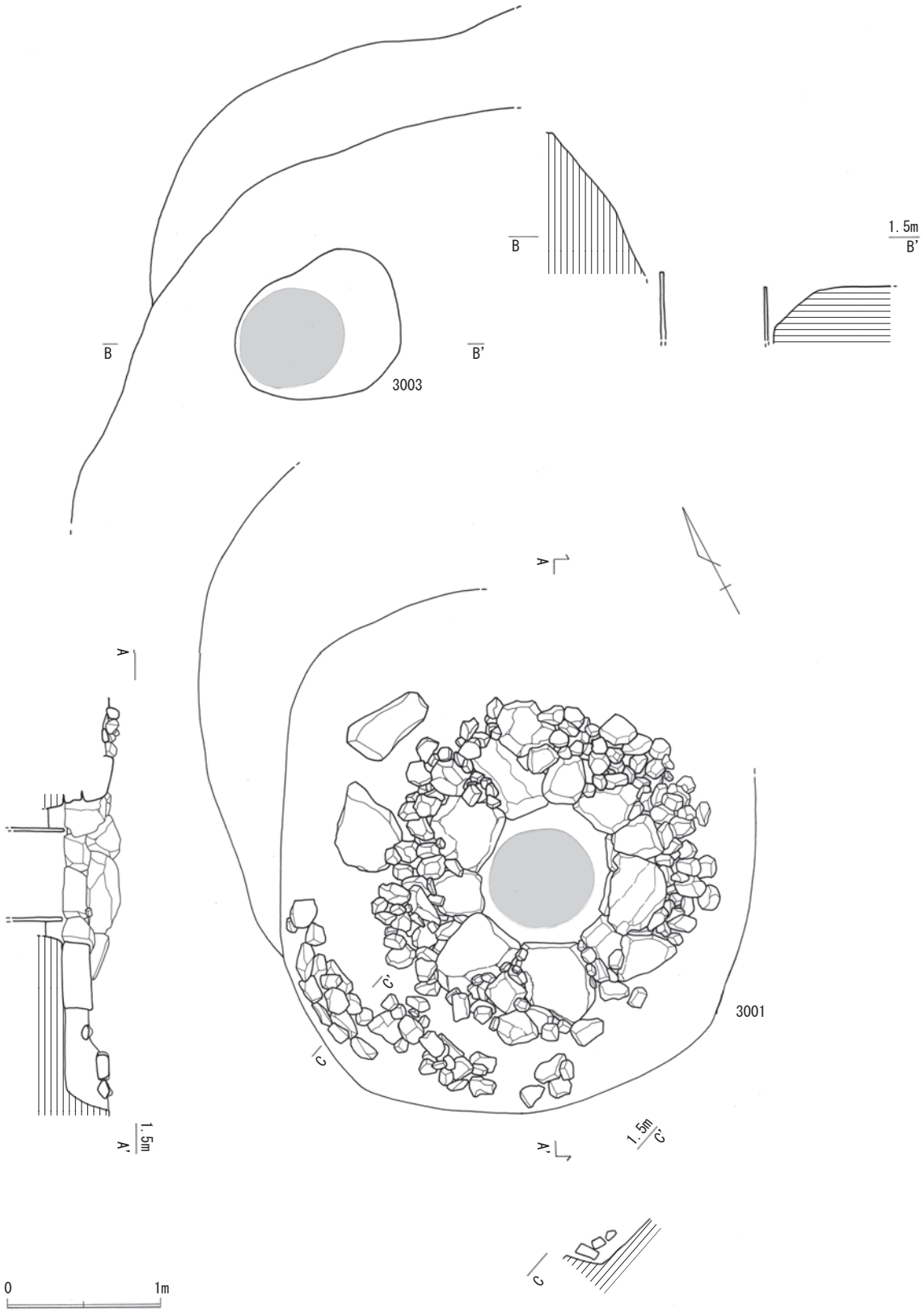


Fig.18　3区 SE3001・3003(S=1/40)

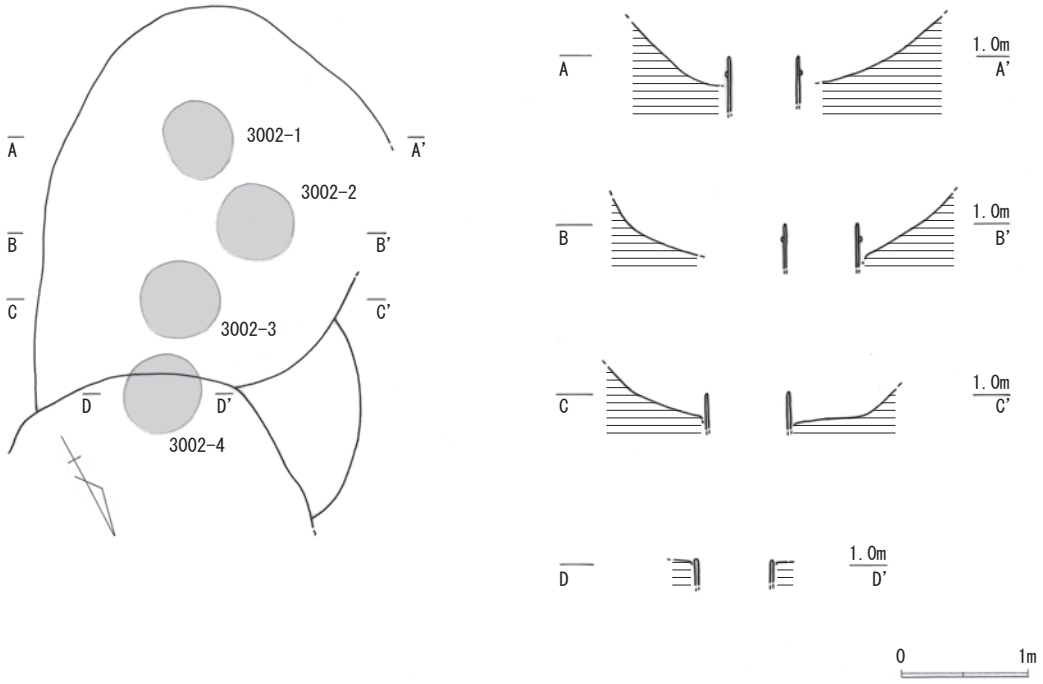


Fig.19　3 区 SE3002　(S=1/60)

掘方を呈している。

井戸側の石組は 2 ～ 3 段分、高さ 40cm 程が残存しており、内径は 90cm を測る。石組の内側、標高 1m では、黄褐色砂層となり、その中央には径 60 ～ 70cm 程の木桶が据えられている。木桶内の掘り下げを試みたが、10 ～ 20cm 程ですぐに湧水し始めたため、これ以上の掘削を断念した。

井戸側の石組には、扁平な大型石材を主として小口積みにしており、内側は平坦に仕上げている。石組裏には、幅 10 ～ 30cm 程に渡って栗石を詰める。井戸側の北西側に石材 2 があるが、これは撹乱により井戸側石材が移動したものだろう。

井戸の南西側には、①井戸掘方に沿って集積した栗石群と、②掘方と石組栗石との中間に集積した栗石群を確認できた。いずれも石組-栗石に沿って円弧を描いている。なぜ、南西側にのみ存在するのか、解釈に苦しむが、②は石組裏込石に比して、やや高い位置にあり、すでに失われた 4 段目以上の石組に関連する裏込石なのかもしれない。①の機能に関しては不明だが、平石であれば内側へ傾斜するような、井戸の掘方に立てかかるような配置をされていることは注目されて良いかもしれない。

出土遺物（Fig.20-1 ～ 4）

いずれも、井戸掘方より出土。１は土師質の鍋で、内面には横方向のハケ目調整を施す。２は瓦質の火鉢である。口縁下の外面には、スタンプによる花弁文を施す。3・4 は土錘。

SE3002（Fig.19）

SE3001 の南西側に続く 4 基の井戸の総称である。いずれも桶組の井戸である。この井戸群の周囲には、幅 2.5m、長さ 3.5m を測る、不整形の掘方が確認できる。

これは SE3002-1 ～ 3 という複数掘方の集合体であり、この掘方の南西、北西、北の張り出しが、SE3002-1、SE3002-2、SE3002-3 それぞれの掘方の存在を示しているのだろう。このように、SE3002-1 ～ 3 それぞれの掘方は確認できなかったため、遺構の切り合い関係は不明である。SE3002-4 西側には、SE3001 と SE3002-1 ～ 3 に切られた遺構が一部、円弧を描いているが、これが

SE3002-4 の掘方であろう。

SE3002-1

SE3002 の内、南西側に位置するもので、検出した桶組の井筒は径 80cm 程を測る。この掘方は SE3002 掘方南西側の張り出し部を参考にすれば、径 3m 程の円形を呈するものか。掘方断面は傾斜の緩やかなすり鉢形を呈しており、井筒近くでわずかな平坦面をなしている。湧水が激しく、井筒内の掘削は断念した。

SE3002-2

SE3002 の内、西側に位置するもので、検出した桶組の井筒は径 80cm 程を測る。この掘方は SE3002 掘方西側の張り出し部を参考にすれば、径 3 ～ 3.2m 程の円形を呈するものか。掘方断面は、西側で井筒近くにいたるまで緩やかな斜面となっており、東側では急な傾斜の後、井筒から 1m の地点で傾斜のなだらかな平坦面を造り出している。湧水の為、井筒内の掘削は断念した。

SE3002-3

SE3002 の内、SE3002-2 と 4 の間に挟まれた中央部に位置するもので、検出した桶組の井筒は径 80 ～ 90cm を測る。この掘方は SE3002 掘方北側の張り出し部を参考にすれば、径 2.6 ～ 3m 程の円形を呈するものか。掘方断面は、東側で井筒近くにいたるまで緩やかな斜面となっており、西側では緩やかな傾斜の後、井筒から 70cm の地点で傾斜のなだらかな平坦面を造り出している。湧水が激しく、井筒内の掘削は断念した。

SE3002-4

SE3002 の内、北東側に位置するもので、検出した桶組の井筒は径 80cm を測る。この掘方は東側の掘方残存部分を参考にすれば、径 4m 程の円形を呈するものか。掘方の形態は不明な点が多いが、東側残存部をみれば、掘方断面は、井筒近くにいたるまで緩やかな斜面をなしている。

SE3002 出土遺物（Fig.20-5 ～ 10）

いずれも掘方内の出土。1 は朝鮮陶器で、粉青沙器の椀。6 は土師皿。7 は瓦質の火鉢で、突帯下に巴文のスタンプを施す。8 はⅥ類の白磁で、内面に短い櫛目文を施す。9・10 は土錘。

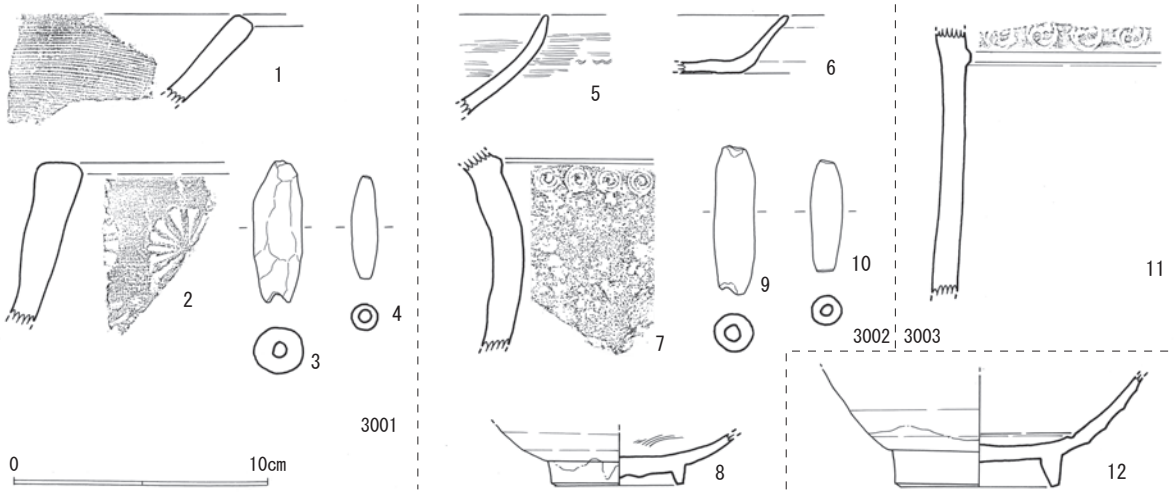


Fig.20　3 区出土遺物（1）（S=1/3）

SE3003（Fig.18）

SE3001の北側に存在する。SE3001の掘方掘削中に桶組の井筒を検出し、井戸の存在を確認した。井戸の北側に掘り込みを確認しており、これを参考にすれば、径3～4m程の円形を呈するものか。掘方断面は、現況において西側で急な斜面となり、東側ではなだらかな平坦面を造り出している。しかし、東側の斜面はSE3002-1の掘削により生じたものである可能性が高い。湧水の為、井筒内の掘削は断念した。

出土遺物（Fig.20-11・12）

11は掘方内より出土したものである。土師質の火鉢で、突帯下には巴文のスタンプを施す。12はSE3003の遺構検出中に出土したもので、V類の白磁椀である。

(2) 土坑（SK）

先にも述べたように、3区の土坑は、比較的数が少なく、特に調査区北側に集中して分布している。大小様々な形態のものが存在するが、特筆すべき機能を見出せるものは無く、遺物の出土も総じて少ない。以下では、3区で検出した土坑の内、6基を選び、報告を行なう。

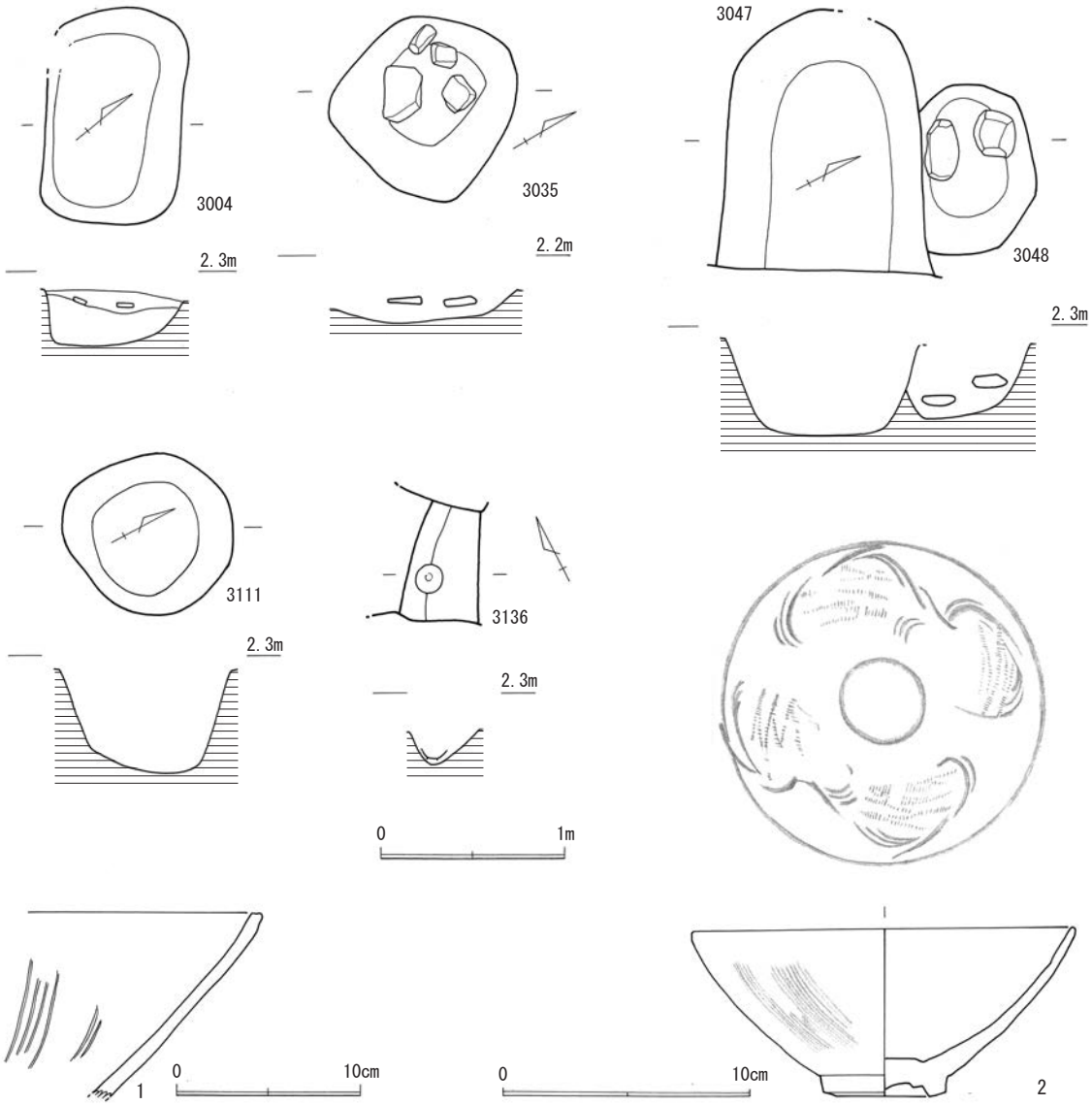


Fig.21　3区SK及び出土遺物（S=1/40、1/3）

SK3004（Fig.21）

調査区の北側に位置し、SR3116を切り込んでいる。平面は1.2×0.7ｍの隅丸長方形を呈し、深さは30㎝を測る。壁面は緩やかに立ち上がっているが、南西側壁面のみが急角度である。底面は平坦で，掘方と同じく平面は隅丸長方形を呈している。埋土には、炭化物や粘土塊を含み、特に１層には大量の焼土ブロックが混入している。

出土遺物

図化に耐えない小片のみが出土している。

SK3035（Fig.21）

調査区の北側に位置する。平面は一辺0.8ｍ程の隅丸方形、もしくはいびつな円形を呈し、深さは10㎝程度の、壁面の立ち上がりが緩やかな浅い土坑である。土坑内には平石２を検出しており、これらは柱の礎石もしくはその根石である可能性がある。

出土遺物

図化に耐えない小片のみが出土している。

SK3047（Fig.21）

調査区の北側に位置し、SK3048の一部を切り込んでいる。遺構の東側を撹乱により失っているが、本来は2ｍ前後×1.1ｍの平面隅丸長方形もしくは楕円形を呈していたのだろう。深さは30㎝を測る。壁面は急角度な立ち上がりを有し、底面は平坦である。

出土遺物

図化に耐えない小片のみが出土している。

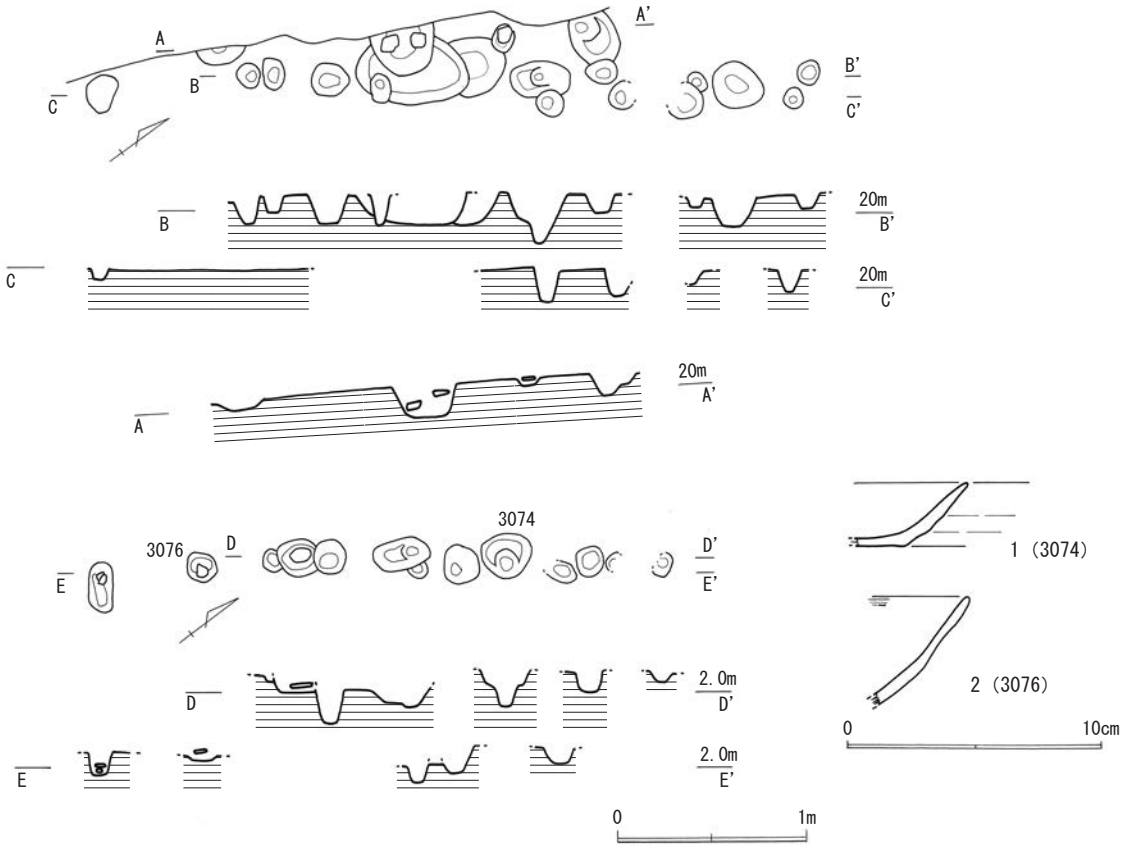


Fig.22　３区柵列及び出土遺物（S=1/40、1/3）

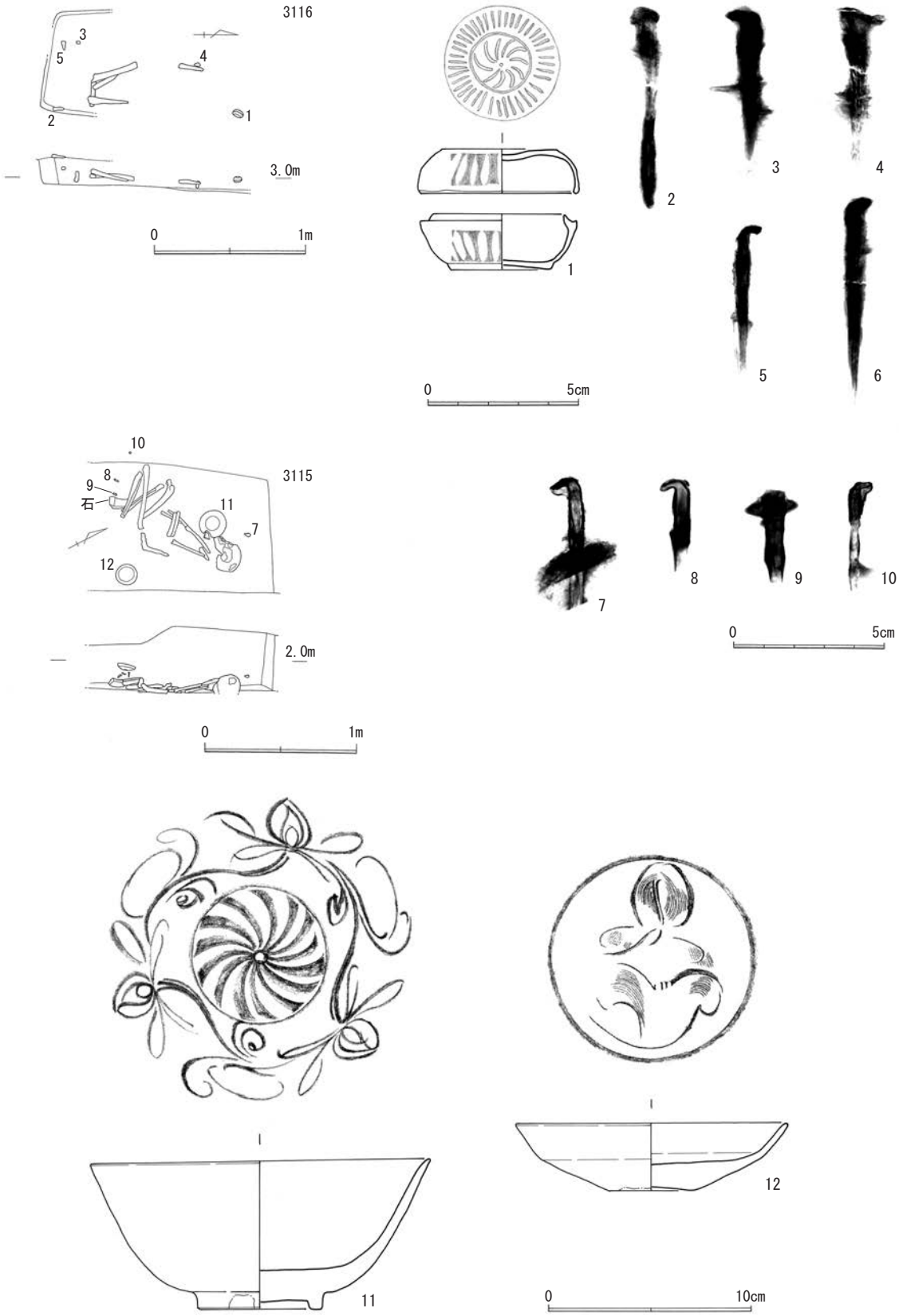


Fig.23　3 区 ST　(S=1/40、1/3、1/2)

SK3048（Fig.21）

調査区の北側に位置し、遺構南側の一部をSK3047に切り込まれている。平面は0.9×0.7ｍ程の円形を呈し、深さは30㎝を測る。壁面は急で、底面は平坦である。土坑内の底面近くでは、平石2を検出しており、これらは柱の礎石もしくはその根石である可能性がある。

出土遺物

図化に耐えない小片のみが出土している。

SK3111（Fig.21）

調査区の北側に位置する。平面は径0.9ｍの円形を呈し、深さは50㎝を測る。壁面は急で、底面は平坦である。

出土遺物（Fig.21-1）

1は土師質のすり鉢である。スリ目の単位は4条。

SK3136（Fig.21）

調査区の南側に位置する。東西を撹乱に切られており、長さ60cm程のみが残る。断面「V」字形を呈し、深さは10～20cmを測る。内部からは完形の同安窯系青磁椀が出土した。

調査時の所見からは、この遺構は撹乱である可能性が高く、出土した青磁椀は他遺構からの混入品と考えている。

出土遺物（Fig.21－2）

2はⅠ-1b類の同安窯系青磁椀である。完形品。

(3) 柵列

直線的な配列をみせる柱穴群は、調査区北側及び調査区中央で確認することができた。これらを「柵列」と判断し、ここでは前者を柵列1、後者を柵列2と呼ぶことにする。柵列1は、1区柵列1・2の北東側延長線上にあることはすでに述べた。これらは一連の柵列と判断できるが、仔細をみれば、複

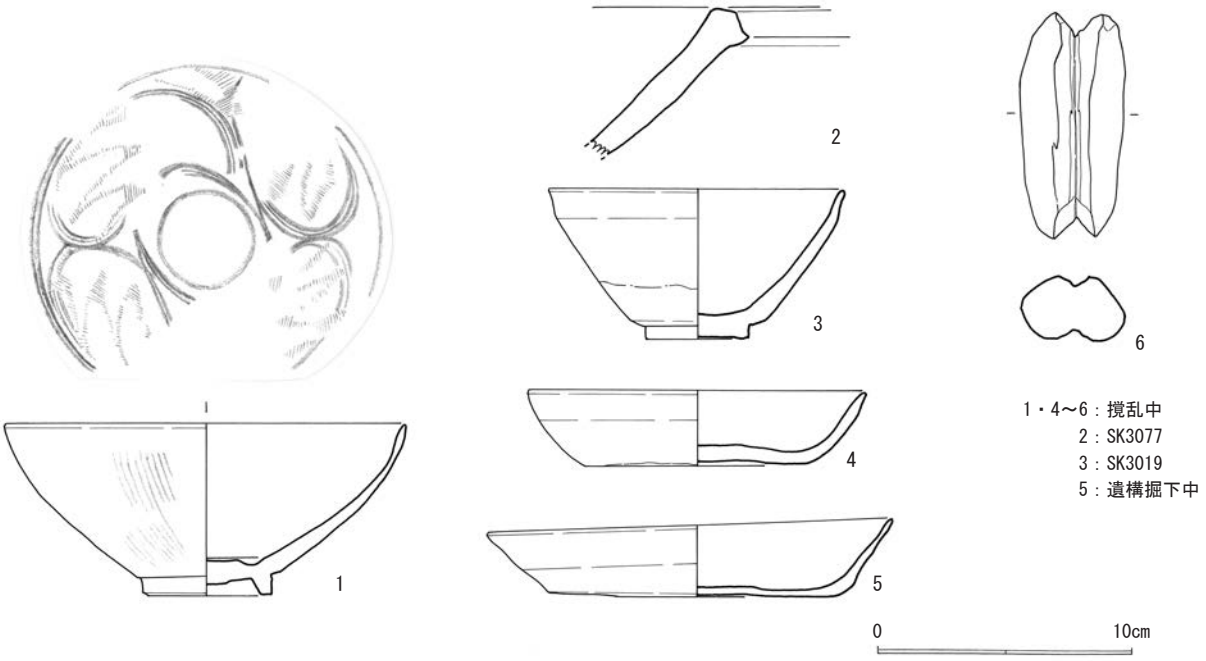


Fig.24　3区出土遺物（2）（S=1/3）

数の柱穴列を見出すことができることには注意する必要がある。柵列２も北東－南西方向に延びるものであるが、その他と同じく、直線的に連なる部分は短く、一部切り合いも見せる。

柵列１（Fig.22）

調査区北側で確認した柱穴列である。いくつかの柱穴が切り合い関係にあり、ここでは３列の柱穴列と仮定し、北西側より１（A-A´断面）、２（B-B´断面）、３（C-C´断面）の枝番を付す。切り合い関係をみれば、１→２→３の構築順となるだろう。１は長さ2.3m程を確認し、N-33°-E方向へ延びる。２は長さ3.1m程、３は長さ1.5m程を確認し、いずれもN-37°-E方向へ延びている。

いずれの柱穴列も柱穴間が不規則で、底面高も一定ではないことは、１区柵列１・２と同じ。

出土遺物

図化に耐えない小片が、わずかに出土するのみである。

柵列２（Fig.22）

調査区中央で確認した柱穴列である。ここでは２列の柱穴列と仮定し、北西側より１（D-D´断面）、２（E-E´断面）の枝番を付す。切り合い関係をみれば、１→２の構築順となるが、１の柱穴内でも切り合い関係にあるものもあり、両者を区別する必然性はさほど高いものではない。

１は長さ2.3m程、２は長さ2.7m程を確認し、いずれもN-37°-E方向へ延びている。いずれの柱穴列も柱穴間が不規則で、底面高も一定ではない。

出土遺物（Fig.22－1・2）

１は土師皿で、SP3074出土。２は瓦器椀で、SP3076出土。

（4）木棺墓（ST）

ST3115（Fig.23）

調査区中央に存在する。墓内には人骨が遺存し、その周囲には棺釘（7～10）が出土したことから、木棺墓であると判断した。遺体は頭位を北東方向にとる右側臥屈肢葬で、顔を北西方向へ向ける。釘の出土位置から木棺の形状や規模を復元することは困難であるが、図示する墓壙掘方は誤認である可能性が高い。

内部からは青磁椀（11）と青磁皿（12）が出土した。11は棺内副葬遺物と考えて良いが、12は棺底から浮いた状態で出土しており、棺蓋等に配置され、落ち込んだものか。

出土遺物

11はⅠ-2a類の龍泉窯系青磁椀、12はⅠ-1c類の龍泉窯系青磁皿である。いずれも完形品。

ST3116（Fig.23）

調査区北側に存在し、SK3004調査時に底面から人骨が出土したことで、存在を確認した。SK3004調査終了後、周辺の精査を行ない、墓壙掘方の一部を確認し、その周囲には棺釘４（2～5）が出土したことから、木棺墓であると判断した。遺構検出中にも原位置不明ながら、棺釘１（6）が出土している。ただ、棺釘の出土状況と、図示する墓壙掘方には、若干のずれが生じている。

また、ST3116北側からは、白磁合子一組（1）が出土している。

出土遺物

１は白磁合子で、身・蓋のセットで出土。外面には型押しによる花弁文等を施す。完形品である。

（4）その他の遺物（Fig.24）

１・４～６は撹乱中、２はSK3077、３はSK3019、６は遺構面掘り下げ中の出土である。１はⅠ-1b類

の同安窯系青磁椀である。2は須恵質の捏ね鉢、3は天目碗、4・5は土師坏である。6は石錘。

第4節　5区の調査

1．調査の概要

5区は第102次調査区の中央部に位置し、調査面積は766.5㎡である（Fig.25）。調査区の多くは第92次2区と重複しており、当該調査の未調査部分の確認と調査実施を目的とする。調査はまず重機による表土剥ぎから着手し、客土(バラス等)や造成土を除去した標高2.3m前後の黄褐色(2.5Y5/3)砂層上に調査面を設定し、発掘を開始した。1・3区と同じく、5区においても調査は1面のみ実施している。

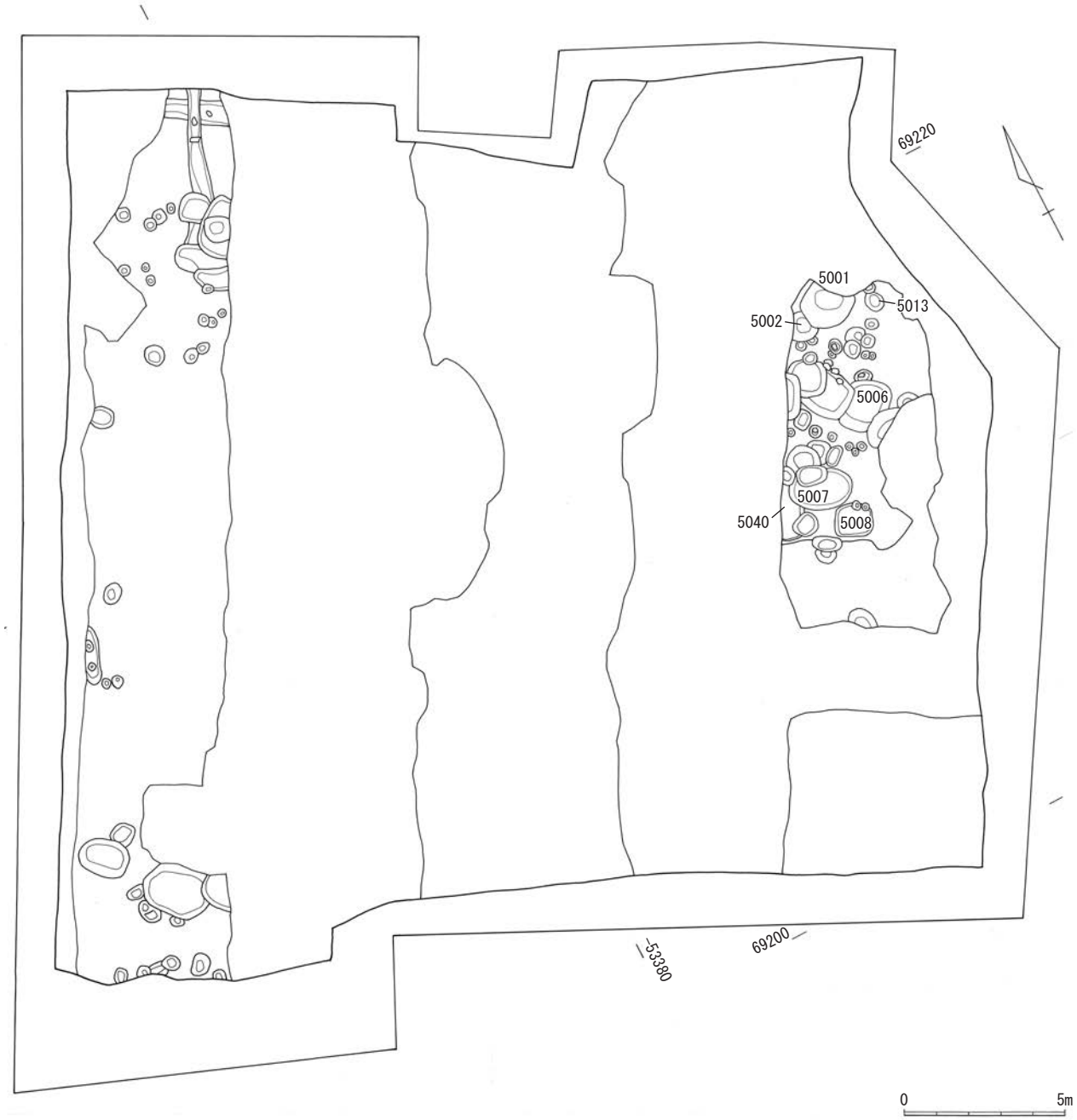


Fig.25　5区遺構配置　(S=1/200)

2. 遺構・遺物

5区の遺構は、大半が第92次調査時に調査が行なわれており、今次調査では、調査区北西側と南西側、及び東側の一部において存在を確認したに過ぎない。検出した遺構には、土坑（SK）、木棺墓（ST）、柱穴（SP）があり、出土した遺物量はコンテナ23箱である。

以下では、(1) 土坑（SK）、(2) 木棺墓（ST）といった遺構の特徴と出土遺物について、それぞれ所見を述べる。

(1) 土坑（SK）

SK5001（Fig.26）

調査区の東側に位置し、北東側を撹乱に切られている。平面は径1.5ｍ程の円形を呈し、深さは70㎝を測る。埋土には、中層を中心として焼土塊や炭化物、粘土塊が大量に混入している。

出土遺物（Fig.28－1～3）

1は青花椀、2は瓦質の火鉢、3は土師皿である。

SK5002（Fig.26）

調査区の東側に位置し、東側をSK5001に切られている。平面は径0.8ｍの円形を呈し、深さは1.1mを測る。埋土は流れ込みではなく、2層に焼土塊や炭化物を多く含んでいる。

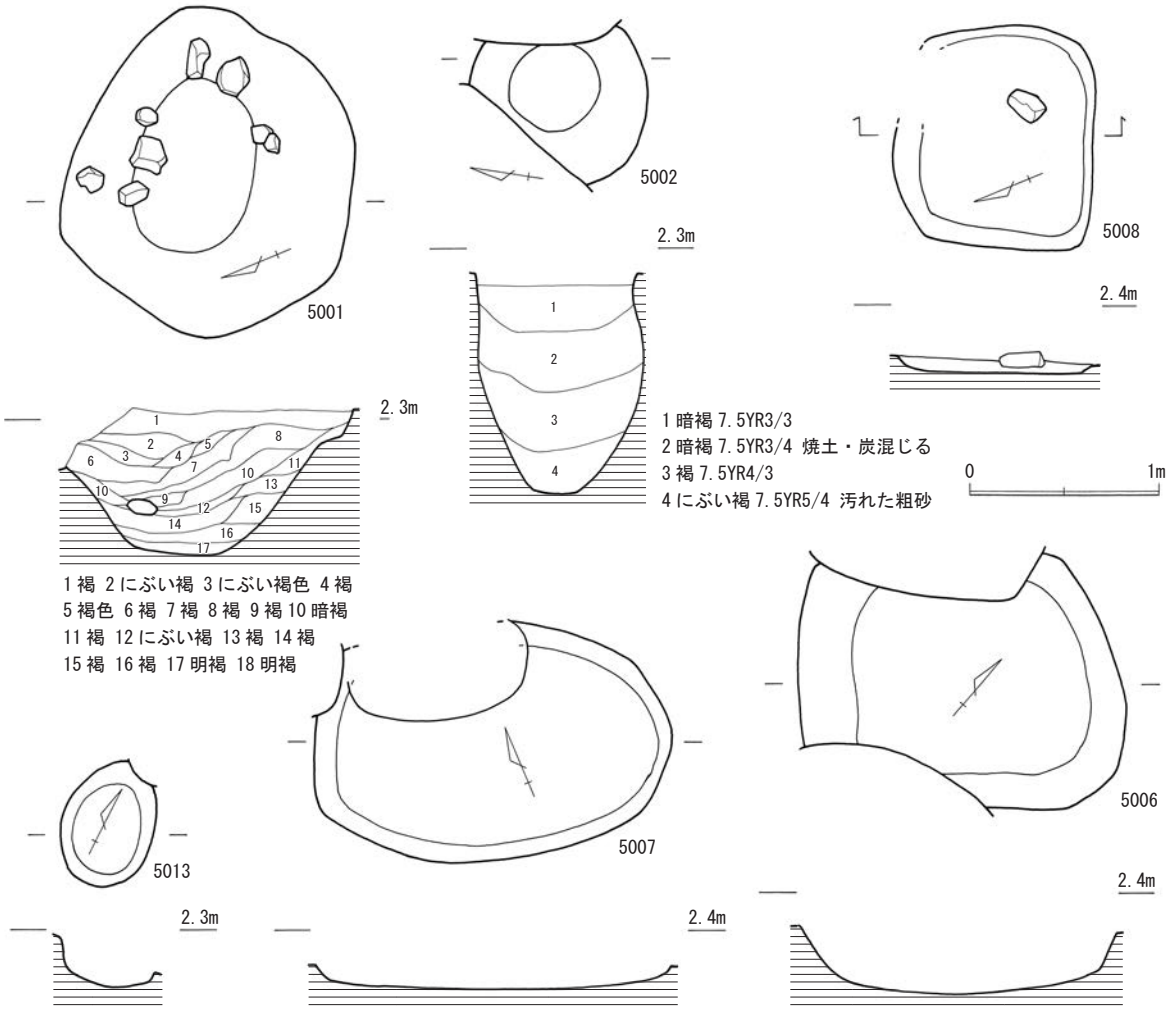


Fig.26　5区SK　(S=1/40)

出土遺物（Fig.28－4～6）

4は土師皿、5・6は石錘である。

SK5006（Fig.26）

調査区東側に位置し、一部を他遺構に切り込まれている。平面は本来1.3～1.4m程の方形を呈していたものだろうか。深さは30cmで、底面は平坦である。

出土遺物

図化に耐えない小片のみが出土している。

SK5007（Fig.26）

調査区東側に位置し、ST5040の一部を切り込んでいる。平面は1.9×1.2mの楕円形を呈し、深さは10cm程度と浅い。底面は平坦である。

出土遺物（Fig.28－11）

11は青花椀である。口縁端部が大きく外反する。

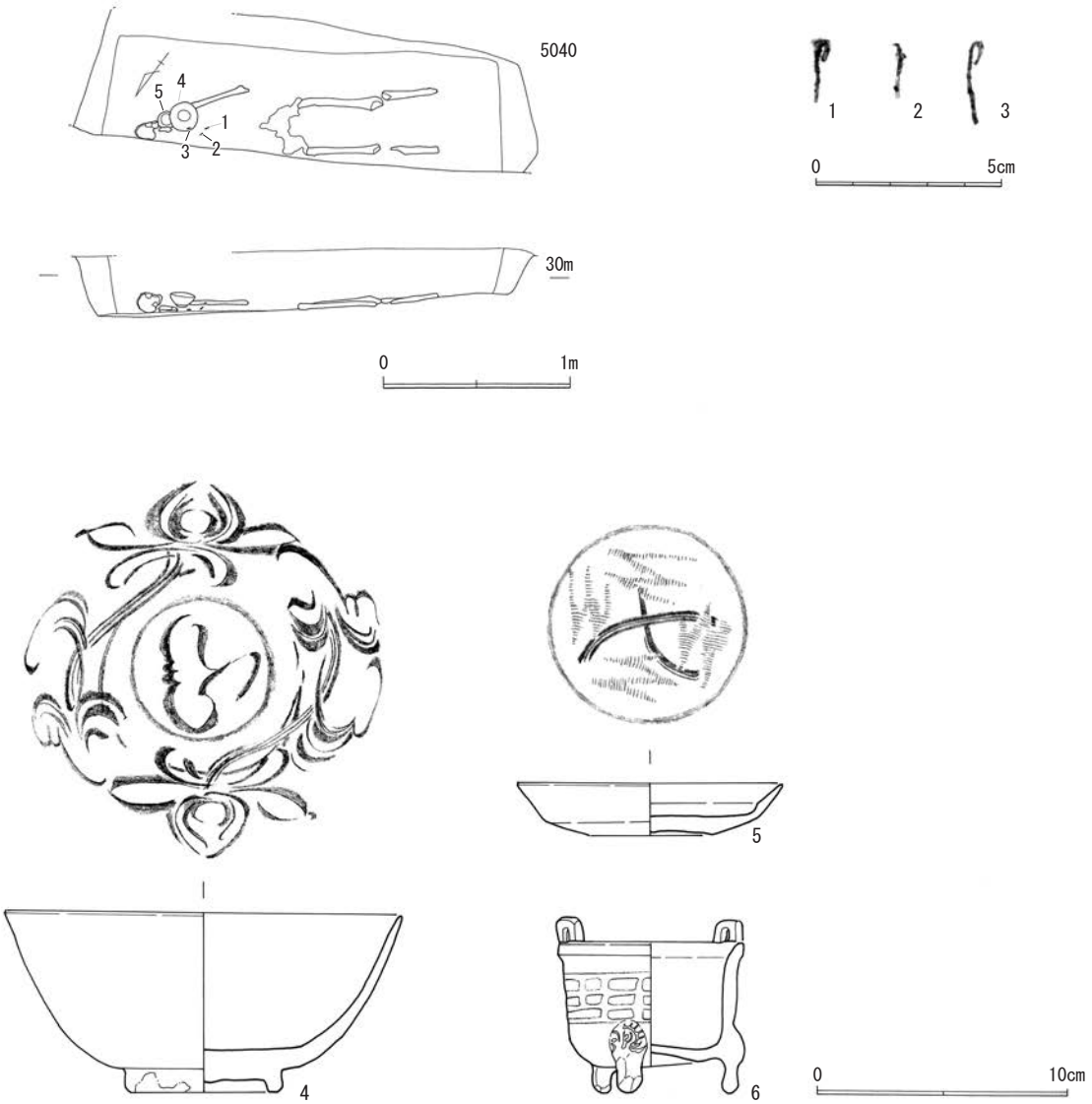


Fig.27　5区ST(S=1/40、1/3、1/2)

SK5008（Fig.26）

調査区東側に位置する。平面は1.2×0.9mの略方形を呈し、深さは10cm程度と浅い。

出土遺物

図化に耐えない小片のみが出土している。

SK5013（Fig.26）

調査区東側に位置し、上部を撹乱により削平されている。西側近くにはSK5001が存在する。平面は0.4～0.5mの円形を呈し、深さは30cmを測る。埋土はSK5001に類似しており、焼土塊や炭化物、粘土ブロックを多く含む。

出土遺物

図化に耐えない小片のみが出土している。

(2) 木棺墓（ST）

ST5040（Fig.27）

調査区東側に位置し、西側は撹乱により失われ、上面はSK5007等、多くの遺構に切り込まれている。墓壙は長さ2.2m前後、幅は0.6m以上の平面長方形を呈し、底面までの深さは30cmを測る。墓壙内には、状態は悪いが人骨が遺存しており、遺体は頭位を北東方向（N-55°-E）へ向けた、仰臥伸展葬である。墓壙内から棺釘は出土していないが、周辺では木棺墓が数多く確認されており、ここでは木棺墓とみなしておくことにしたい。

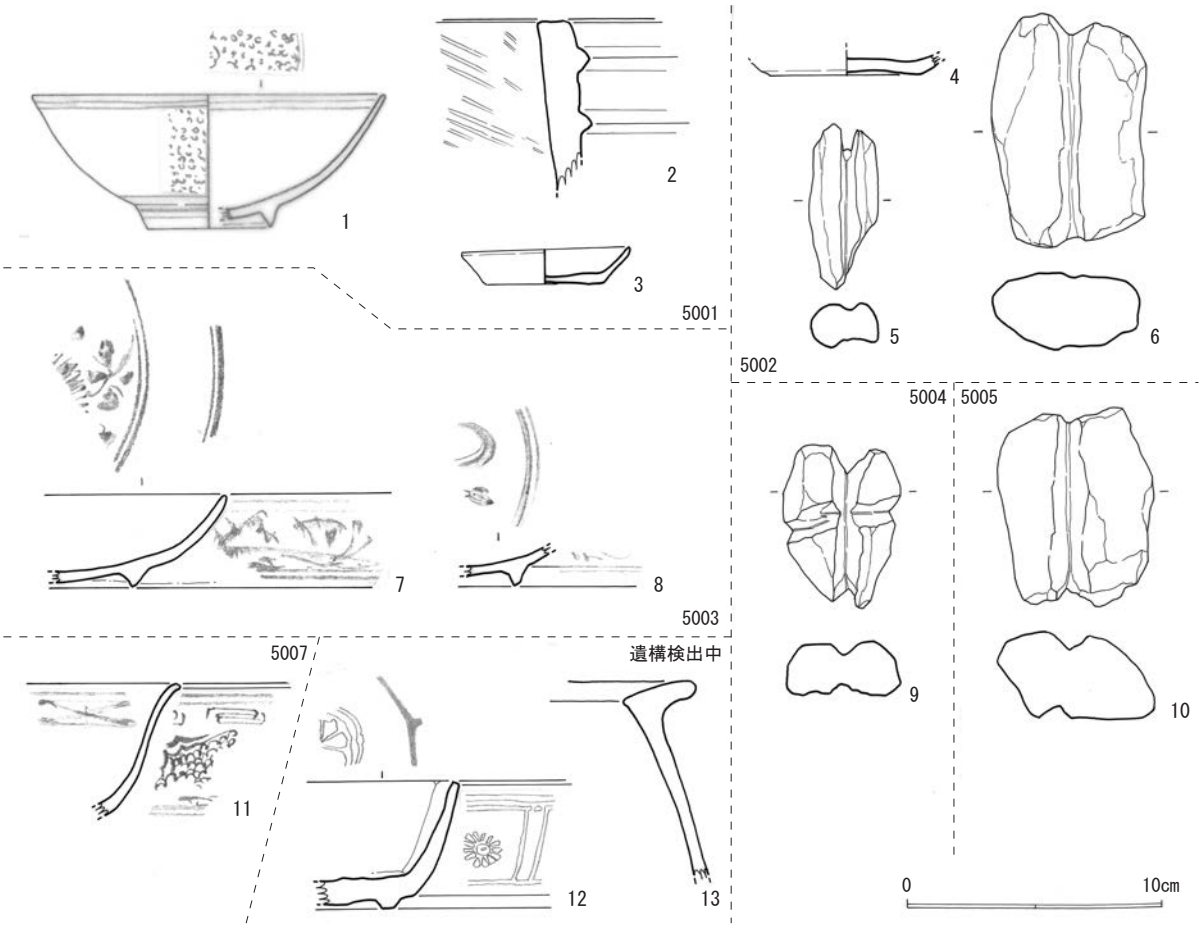


Fig.28　5区出土遺物　(S=1/3)

内部からは青磁椀（4）と青磁皿（5）が出土した。いずれも遺体の胸元当たりに副葬されている。その他、これら遺物と同じく遺体の胸元周辺から、針金状の金属を3点検出している。内2点は先端を折り曲げている。

ところで、ST5040横の撹乱部分から、香炉（6）を採集した。元々はST5040の埋土に当たる撹乱壁に張り付いていたものが転落したのか、撹乱底で発見したものである。正確な出土位置は不明であったが、この香炉の把手部分には、針金状の金属が巻き付けてあった。これは、遺体上で検出した、針金状金属と良く似ており、これが同一のものであれば、この香炉も、他の青磁と同様、遺体の胸元に副葬されていたものと考えることができるだろう。

出土遺物

4はⅠ-2a´類の龍泉窯系青磁椀。5はⅠ-1b類の同安窯系青磁皿。6は青磁の三足香炉。

(3) その他の遺物（Fig.28）

7・8はSK5003出土の青花皿。9はSK5004、10はSK5005出土の石錘。12・13は遺構検出中の出土。12は朝鮮陶器の椀で、内外面に象眼を施す。13は弥生土器の甕。

第5節　まとめ

第102次調査では、調査区を6区分して調査を行なっているが、砂丘上面まで後世の削平を受けており、遺物包含層が残り2面の調査を行なったのは、2・4区のみであった。その他、多くの撹乱を受けており、破壊を免れて、調査を実施できたのは、調査区の半ば程度に過ぎない。そのような悪条件の中でも、いくつかの成果を上げることができたといえる。

今次調査地点は、遺構数や遺物量とも、さほど多いものではない。その中においてもさらに、遺構分布には粗密があり、生活遺構と目されるものが集中する箇所として、根石を持つ柱穴・土坑が集中する2区中央部、1区北側の石積土坑等が存在する1区北側、井戸が集中する3区北側、柵列等を構成する柱穴群が存在する3区周辺、などを挙げることができる。しかし、これら集中箇所をみても、内容はそれぞれ全く異なっており、各所における性格の把握を通じ、当時の集落の有り様について、さらに検討を進める必要があるだろう。

次いで、第102次調査成果の時期的な変遷をまとめる。遺構の出現は12世紀後半に位置付けられる墓域（木棺墓；3区：ST1150・1160、5区：ST5040など）の形成より始まる。それ以前に位置付けられる確実な遺構は無く、遺物をみても、5区で弥生時代中期後半に位置付けられる弥生土器片が出土したのみである。検出した墓は散在しており、集中的な墓群形成をしていないが、攪乱により失われた墓が少なからずあることは、本文中で触れた。

第102次調査で確認した遺構の時期は、16世紀を前後する時期を中心とする。石積土坑（1区：1004）や溝（4区:SD4035），木棺墓群（4区:ST4005～4009)、土坑（1区:SK1002・1005)、柱穴群（2区：礫・根石を有するもの）などといった主だった遺構は当概期に位置付けることができようか。箱崎遺跡の縁辺に当たる当地では、この段階より本格的な集落の展開が行なわれるとみて良い。しかし、先に触れたように、遺構の密度は総じて高いものではなく、中世後半期以降における土地利用のあり方は、今後の調査の進展により、次第に明らかとなるだろう。

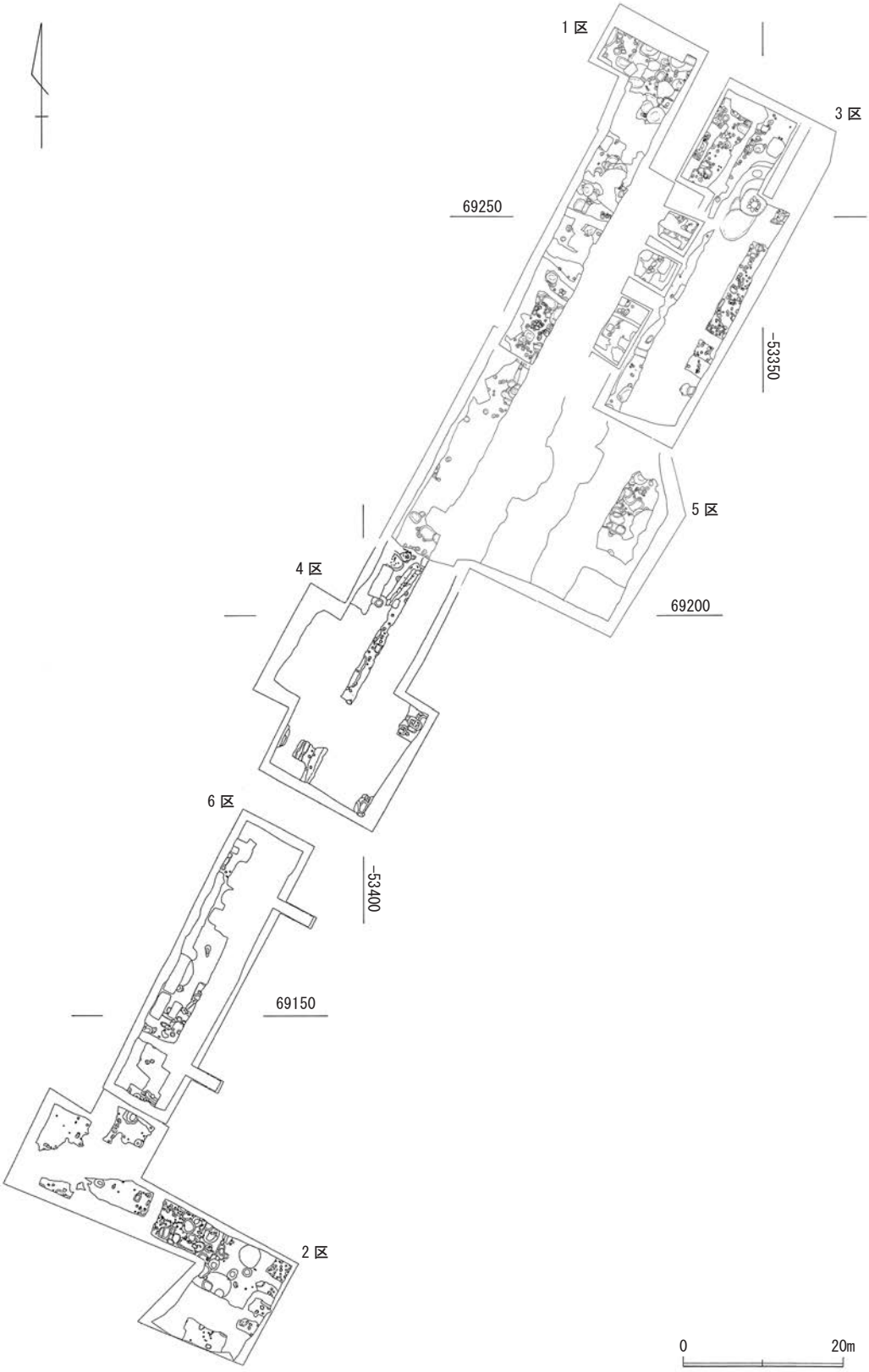


Fig.29　第 102 次調査遺構配置図 (S=1/600)

① 1-1 区全景（北東から）

② 1-1 区全景（東から）

③ 1-1 区 SK001・002・005
（南西から）

① 1-2 区全景（北東から）

② 1-2 区南西側遺構集中区
（南西から）

③ 1-3 区全景（北東から）

①３区全景（北東から）

②３区北側（北から）

③３区南側（北から）

①５区全景（南西から）

②５区東側遺構集中地点
（北東から）

③５区北側遺構集中地点
（西から）

①６区北東側全景
（南西から）

②６区南東側全景
（北東から）

③６区 SE6010（北西から）

①３区柵列１（北東から）

②１区柵列１（北西から）

③１区柵列２（南西から）

①Ⅲ区 SE3001（西から）

②３区 SE3001・002-1・2・3
（北東から）

③３区 SE3001・002-4
（北東から）

① 3 区 ST3115（北西から）

② 3 区 ST3116（東から）

③ 5 区 ST5040（北東から）

① 1-1 区 SK002・005（西から）

② 1-1 区 SK001（南東から）

③ 1-1 区 SK002（南西から）

④ 1-1 区 SK004（北西から）

⑤ 1-1 区 SK025（南東から）

⑥ 1-2 区 SK1104（南東から）

⑦ 1-2 区 SK1151（北西から）

⑧ 1-2 区 SK1155（北西から）

① 3 区 SE3001・002-4（南東から）

② 3 区 SE3003（東から）

③ 3 区 SK3004（南東から）

④ 3 区 SK3136（西から）

⑤ 5 区 SK5001 土層（北西から）

⑥ 5 区 SK5002 土層（北西から）

⑦ 5 区 SK5005・5006 周辺（南東から）

⑧ 5 区 SK5007・5008 周辺（南西から）

① 2 区 SK2001・2002（北西から）

② 2 区 SK2020（北東から）

③ 2 区柱穴群（北西から）

④ 2 区 SE2095 土層（北東から）

⑤ 4 区 SK4001（南西から）

⑥ 4 区 SD4035 土層（北東から）

⑦ 4 区 SK4006 上面掘り込み（東から）

⑧ 4 区 SK4008 土層（北西から）

①④ Fig. 23-11

②⑤ Fig. 27-4

③⑥ Fig. 21-2

⑦⑩ Fig. 24-1

⑧⑪ Fig. 23-12

⑨⑫ Fig. 27-5

⑬ Fig. 15-1

⑭ Fig. 27-1

⑮ Fig. 27-6

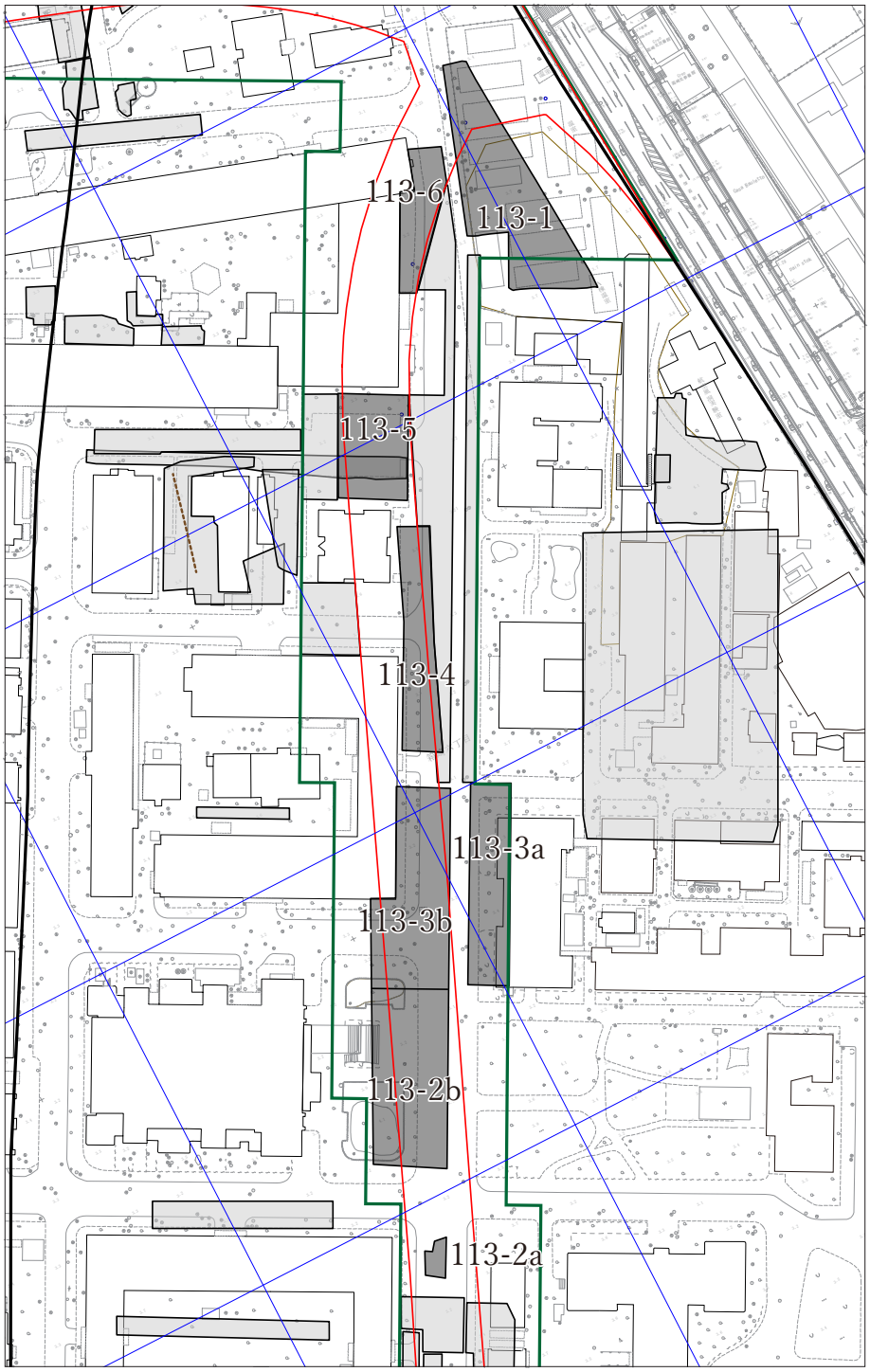


Fig. 30　箱崎遺跡第 113 次調査位置図 (S=1/2,000)

第 3 章　第 113 次調査の記録

第 1 節　調査の概要

第 113 次調査地は九州大学旧箱崎キャンパスのほぼ中央、敷地内を南北に貫くように位置する。各調査区は既設埋設管や保存樹木、施設解体車両の通路等によって複数に分かれ、連続していない。調査区は着手順に 1 から順に番号を付した。

遺構は各調査区によって前後するが、標高 2 m前後の黄色砂丘砂上で検出した。遺構の種別は、溝・井戸・土壙・木棺墓・池状遺構・柱穴・ピットである。井戸は瓦組みの井側を有し、幕末～近代のものと推測される。木棺墓は出土遺物から 12 世紀後半頃のものと推測され、中国産陶磁器とともに湖州鏡・刀子が出土している。なお、攪乱坑から湖州鏡やほぼ完形の青磁碗が出土していることから平安時代末から鎌倉時代初めには調査地周辺に屋敷地が展開していたと推測される。池状遺構は中世後半から近世にかけてのものと推測され、落ち際には板碑片を含む多量の礫が散乱していた。

第 2 節　1 区の調査

1. 調査の概要

1 区は 113 次調査地の北端部に位置する。遺構面は現地表面下 1.5 ～ 1m、標高 1.3m 前後を測る黄白色～黄褐色砂層上である。遺構面は北ほど高く残るが、状態は悪く、直上まで校舎解体時の攪乱が及び、砂層から上の堆積層は残っていない。調査面積は 1,228.8 ㎡を測る。

検出された遺構は幕末～明治期の井戸 1 基のみである（Fig.31 参照）。

2. 遺構と遺物

①井戸（SE）

SE01(Fig.32)

調査区中央部、標高 2.1 ～ 2.2m を測る砂層上で検出した。平面形は不整円形を呈し、最大径 2.35m を測る。断面は遺構検出面上端から 50cm まで緩やかに下るが、それ以下は急に深くなる。標高 0.8m で澄んだ地下水が湧水し、壁面の崩壊が止まらず標高 0.7m 以下の掘削は断念せざるを得なかった。埋土は掘方が炭化物を少量含む暗灰色～暗黄色砂、井筒内が暗灰色極細砂である。井側は掘方の中央部からやや西寄りに位置し、標高 0.85m 付近で上端を検出した。瓦組みの井側で外側に幅 10 ～ 15 ㎝で径 2 ～ 3 ㎝の円礫が詰められている。井側は廃絶時に大きく破壊されており、内径 60cm ほどと推測される。

出土遺物（Fig.33）

遺物は主に井筒の内側から出土した。幕末頃に構築され、明治期に廃絶したものと推測される。

1・2 は焜炉の小片である。1 は口縁部から外面にかけ煤が付着する。外面には扇形のスタンプが捺され、「□（「産」ないし「窯」か）業課御試□（「験」か）　筑前博多□」と読める。3 は七輪目皿の小片。器壁は被熱により橙色を呈する。4 は陶器で急須等の把手ないし脚部。内部は中空につくり両面とも施釉される。5 ～ 8 は染付である。5 は底部の小片で内底面に様式化された花文が 2 重の圏線内に施される。焼成は不良だが呉須の発色は明瞭で暫定的に漳州窯青花磁の可能性を考えておきたい。6 ～ 8 は肥前磁器染付である。6 は小碗で内外両面に機械プリントで花文が施される。7・8 は碗の小片。7 は外面に花弁文が施される。8 は内底面に山水文とみられる文様が機械プリントされる。

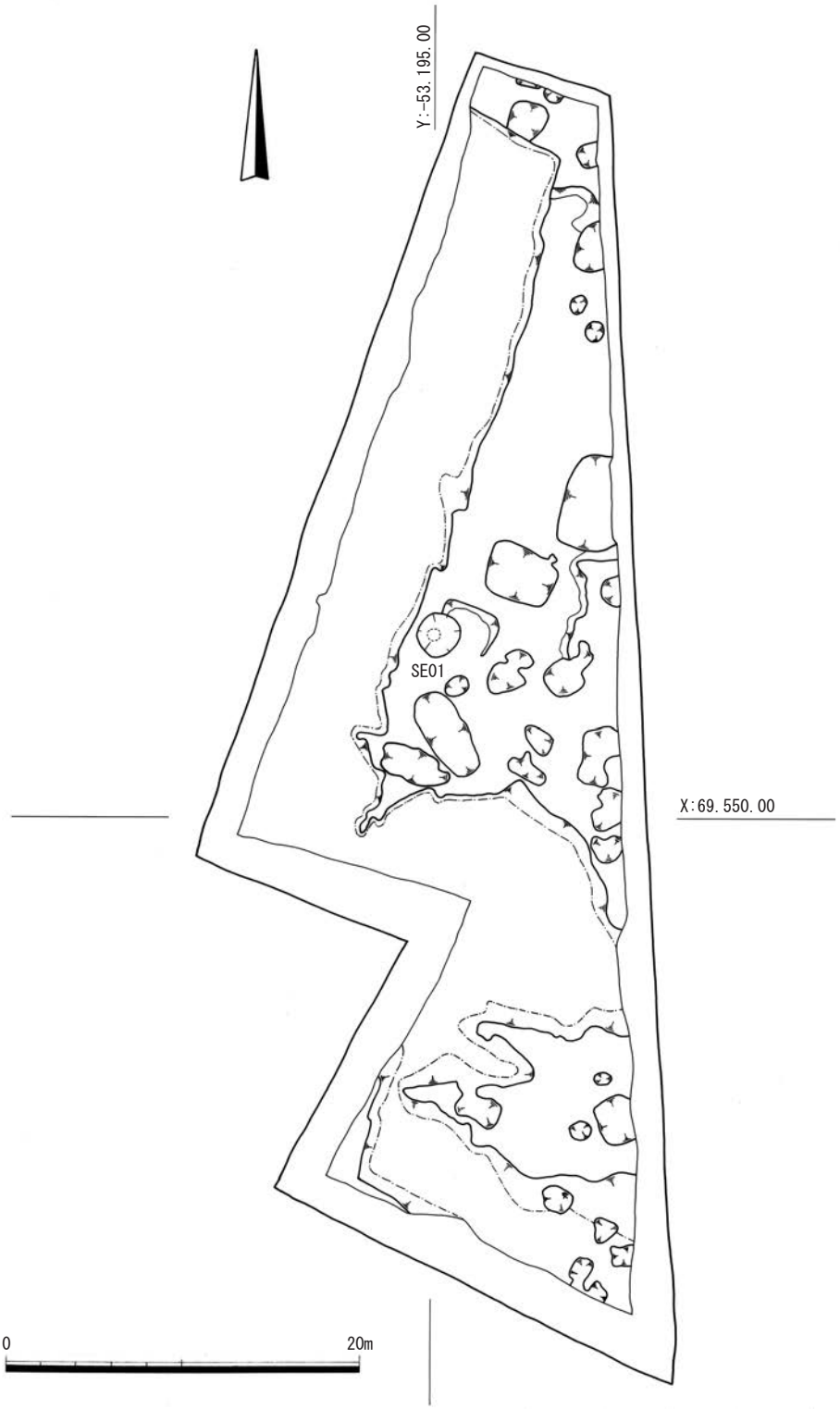


Fig.31　113 次 1 区全体図 (S=1/400)

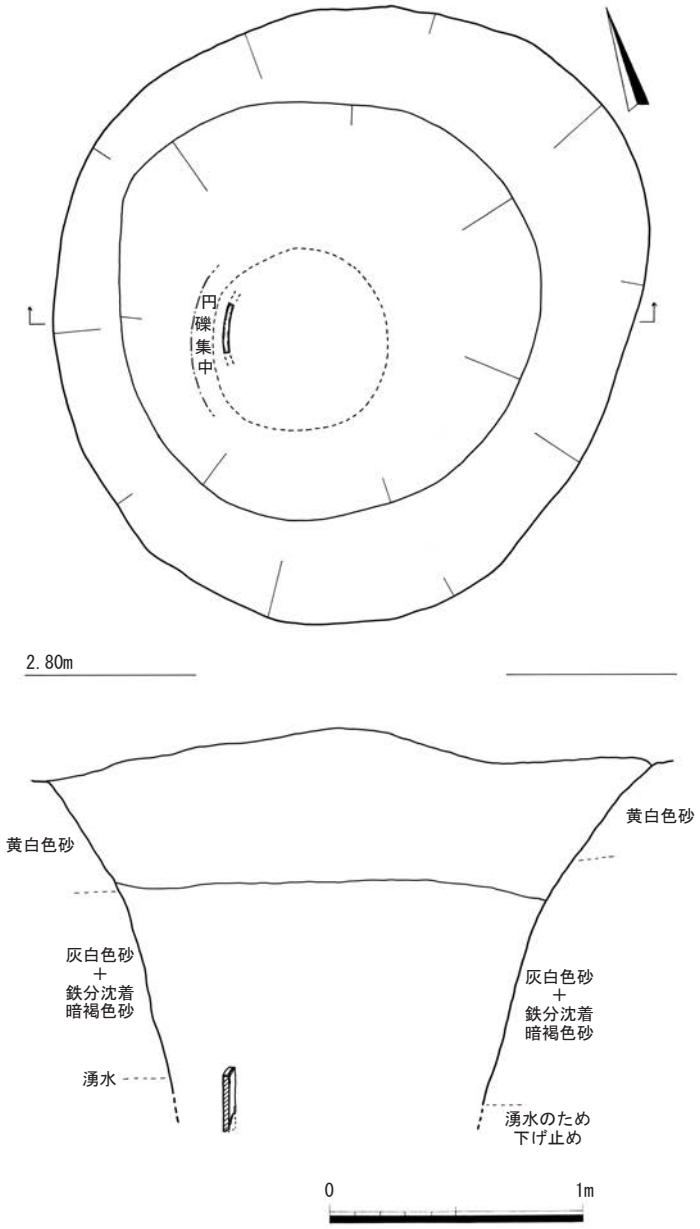


Fig.32　SE01 実測図 (S=1/60)

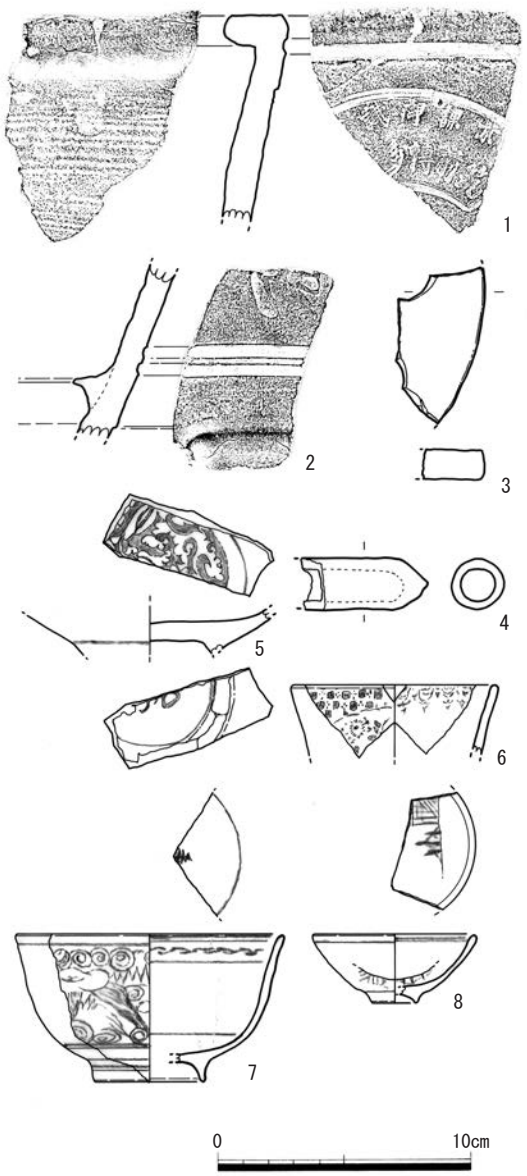


Fig.33　SE01 出土遺物実測図 (S=1/3)

②その他の遺物 (Fig.34)

いずれも遺構検出面から出土した。9 は福建産白磁である。椀の底部の破片で、高台は直線的に立ち上がる。口縁が端反りとなるタイプか。釉色はわずかに緑味を帯びた灰白色を呈する。10 は土錘である。完形で出土した。土師質で器壁はよく整えられる。重量 12.8g を測る。

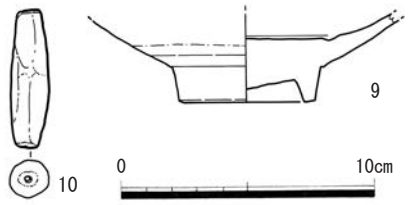


Fig.34　その他の遺物実測図 (S=1/3)

ＰＬ．１

113 次 1 区南半部全景（北より）

113 次 1 区北半部全景（南より）

113 次 1 区 SE01（北より）

第３節　２区の調査

１．調査の概要

九州大学記念講堂跡地の東側に位置し、第102次調査地点の北側にあたる。第113次調査のなかでは、遺構の遺存状況が最も良かった地点である。東西方向に横断する既存の共同溝部分を避けるかたちで調査区を分割し、南側を２a 区、北側を２b 区と呼称した。２b 区は排土処理の関係で南北に二分割し、土砂反転を行った。調査は令和２年 10 月 19 日から着手し、11 月末に調査を終了した。調査面積は約 1,400 ㎡である。

南側の２a 区は狭小な範囲であるが、GL-140 ㎝（標高 1.7 m前後）で砂丘面を検出し、中世の土坑３基を確認した。

北側の２b 区では、最も高い西北端の標高 2.0 m前後の砂丘面で中世の溝・土坑等の遺構を検出した。調査区の広い範囲で撹乱を受けているものの、削平を受けた北半部の標高 1.6 m付近からも中世墓が検出され、土師皿・陶磁器・湖州鏡・鋏といった副葬品が出土した。調査区南東端には池状の落ち込みがあり、多量の礫とともに、土器・陶磁器や板碑が出土した。散乱した礫を取り除くと、西側の落ち際には石組み遺構が確認された。

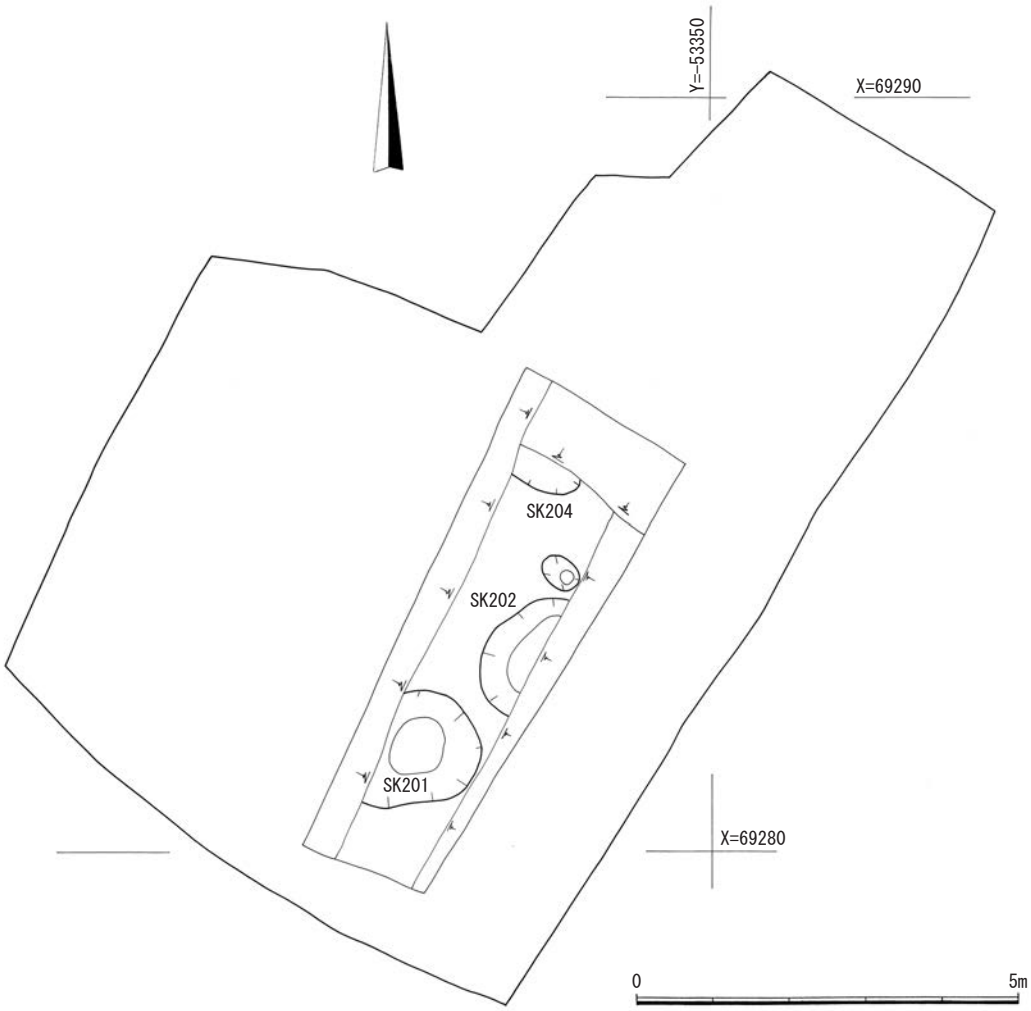


Fig. 35　113 次 2a 区全体図 (S=1/100)

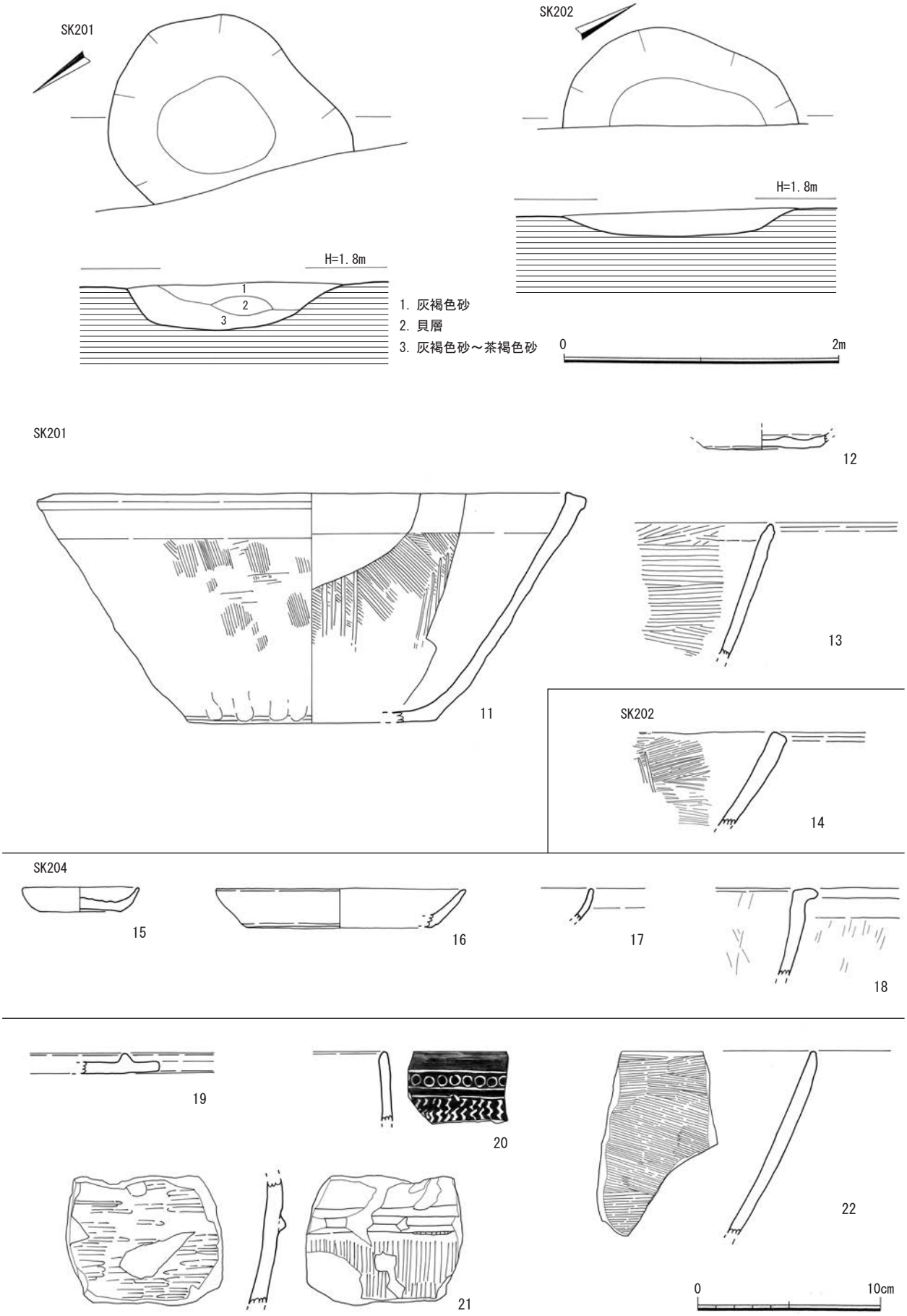


Fig.37　2a 区出土遺物実測図 (S=1/3)

Fig.39 は２b 区の南壁土層図である。調査時の地表面は標高 3.0 m前後で、厚さ 1.0 m～ 1.4 mの盛土が堆積する。西側は標高 2.0 m付近で黄色砂を、東側は標高 1.6 m付近で SX205 とした池状遺構を検出した。

２．２a 区の遺構と遺物

①土坑（SK）

SK201（Fig.36） ２a 区の南端で検出した、直径 1.5 m程度と思われる不整円形の土坑である。西側は撹乱により破壊され、正確な大きさは不明である。深さ約 35 ㎝で、上層は灰褐色砂、下層は灰褐色砂～茶褐色砂で、間に貝層を挟む。土師器や土師質鍋等が出土した。

出土遺物（Fig.37） 11 は土師質の擂鉢で､内面には４本単位の擂り目が施される。復元口径 30.0 ㎝、器高 12.5 ㎝。外面はハケ調整で、底部付近にはユビオサエの痕跡が残る。12 は土師器皿の底部。底部外面には糸切り、内面には回転ナデの痕跡が残る。13 は土師質の鍋の口縁部である。外面にはススが厚く付着し、内面には横方向のハケメが明瞭に残る。

SK202（Fig.36） 調査区中央の東壁沿いで検出した、直径 1.8 m程度の円形土坑である。東側は調査区外に広がる。深さ約 15 ㎝で、底面からの立ち上がりは緩やかである。埋土は灰褐色砂。

出土遺物（Fig.37） 14 は土師質擂鉢の口縁部片である。外面はナデ調整で、内面は横方向のハケ調整の後に縦方向の擂り目を施す。

SK204（Fig.35） 調査区の北西端で検出した土坑である。北側及び西側は撹乱により破壊されているため､遺構の形状や規模は不明である。検出面の標高は約 1.8 m。深さ 20 ㎝以上で､埋土は灰褐色砂。土師器、白磁等が出土した。中世後半頃か。

出土遺物（Fig.37） 15 は土師器皿。復元口径 6.4 ㎝、器高 1.3 ㎝。底部外面は回転糸切りの痕跡が残る。16 は土師器坏の破片。復元口径 13.6 ㎝、器高 2.1 ㎝。17 は白磁皿の口縁部片である。口縁部内外面に施釉される。18 は土師質の鍋。外面はタテハケの後にナデ調整、内面は工具によるナデ調整か。口縁部は直角気味に折れ曲がり、ススが付着している。

②その他の遺物（Fig.37）

19 は土師質の壺の蓋か。天地が逆の可能性もある。20 は高麗青磁の鉢か。直立気味の口縁部で、象嵌による施文。21 は瓦質の火鉢か。22 は土師質の鍋。外面にはススが付着し、内面には横ハケを密に施す。

３．２b 区の遺構と遺物

①溝（SD）

SD208（Fig.40）

２b 区の南西端、標高 2.0 m付近で検出した東西方向の溝である。長さ 12 m以上で、西側は調査区外へ延びる。溝の幅は一律ではなく、場所により 0.5 m～ 1.5 mと異なる。深さは約 50 ㎝で、上層はにぶい黄褐色砂、下層は黒褐色砂である。土師器、白磁、青磁、陶器、土錘、石錘等、比較的多量の遺物が出土した。14 世紀後半から 15 世紀頃の所産か。

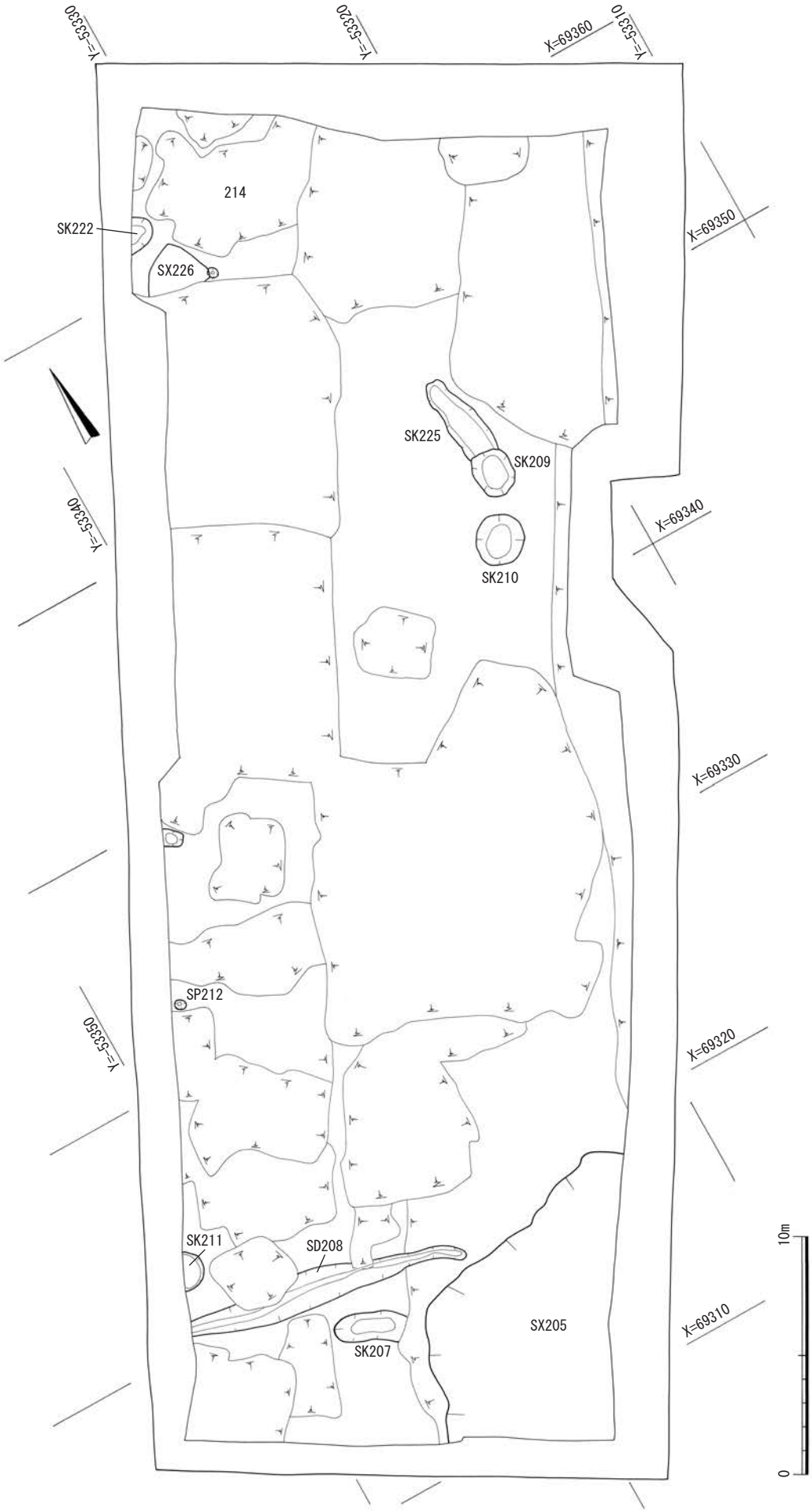
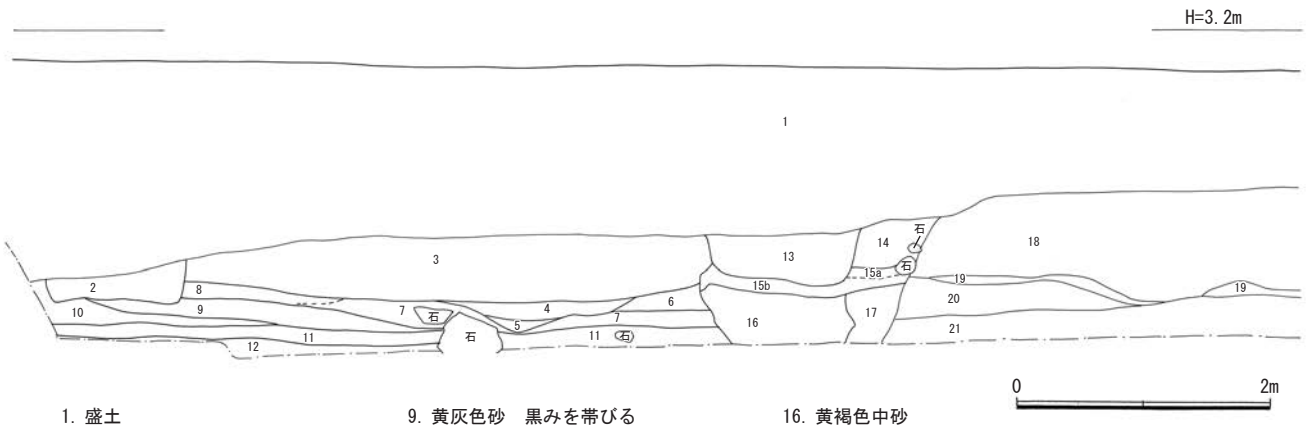


Fig.38　113 次 2b 区全体図 (S=1/100)



1. 盛土
2. 撹乱
3. 暗灰黄色砂質土　均質に締まる
4.3と浅黄色砂の混じり
5. 褐灰色粘質土
6. 茶褐色砂
7. 灰黄色砂　中砂～細砂
8. 灰黄色砂
9. 黄灰色砂　黒みを帯びる
10. 浅黄色砂　中砂～粗砂
11. 黄灰色砂　細砂～中砂　鉄分沈着
12. 明オリーブ灰色細砂
13. 灰黄褐色砂質土
14. にぶい黄褐色砂
15a. 褐色砂と灰色砂の縞状
15b. 灰褐色砂と黄灰色砂の混じり
16. 黄褐色中砂
17. 黄灰色砂
18. 黄色砂丘砂
19. 灰褐色砂　鉄分沈着
20. 浅黄色細砂
21. 黄褐色砂　粗砂と中砂の互層

Fig.39　113次2b区南壁土層図（S=1/60）

出土遺物（Fig.41）

23は土師器皿で、復元口径7.1㎝、器高1.3㎝。底部外面は糸切りで、口縁部内外面は回転ナデを施す。24～27は土師器坏である。いずれも底部切り離しは回転糸切りで、24・26・27には板状圧痕が残る。

28は古墳時代須恵器の坏口縁部片。29は須恵器甕の胴部片で、外面には格子目状のタタキ、内面には同心円状の当て具痕が残る。30は土師質の鍋で、内面にはヨコハケ後にナデを施す。31は土師質の鉢で、口縁部外面にスタンプがみられる。32～34は土師質の擂鉢である。35は瓦質の鍋で、外面にはハケ調整やミガキ調整を施し、ススが付着する。内面は横方向のハケメと指頭の痕跡が残る。

36は白磁の壺あるいは水注の口縁部。37は白磁碗の底部。38は青磁碗の口縁部片で外面に片彫の蓮弁文と櫛文を施す。39は青磁碗底部を打ち欠いた瓦玉である。40は青磁碗で、復元口径14.8㎝。口縁部外面には雷文帯の文様が見られる。41は青磁の皿か。

42～46は土錘。47は石錘で長さ6.5㎝、中央部分には長軸方向に紐かけの凹みがある。

②土坑（SK）

SK207（Fig42）

SD208の南側、標高2.0ｍ付近で検出した土坑である。東側は撹乱に切られるため規模は不明であるが、長軸3.1ｍ以上、短軸1.2ｍ前後の長楕円形を呈する。埋土は黒褐色砂で、深さ30㎝。底面からの立ち上がりは緩やかである。土師器、白磁、瓦片、鉄滓等が出土した。14世紀から15世紀頃の所産か。

出土遺物（Fig43）

48～50は土師器皿で、いずれも底部外面は糸切りで、口縁部内外面は回転ナデを施す。復元口径は48は7.6㎝、49は8.4㎝、50は8.6㎝。51は白磁皿の口縁部片である。

52～54は土師質の鍋の破片で、いずれも直線的に立ち上がった胴部から外湾した口縁となる。外面にはハケの痕跡やユビオサエの跡が残り、ススが付着している。内面には横方向のハケメが明瞭に残る。55は丸瓦の破片である。外面は摩滅しているが、内面には布目痕が見られる。

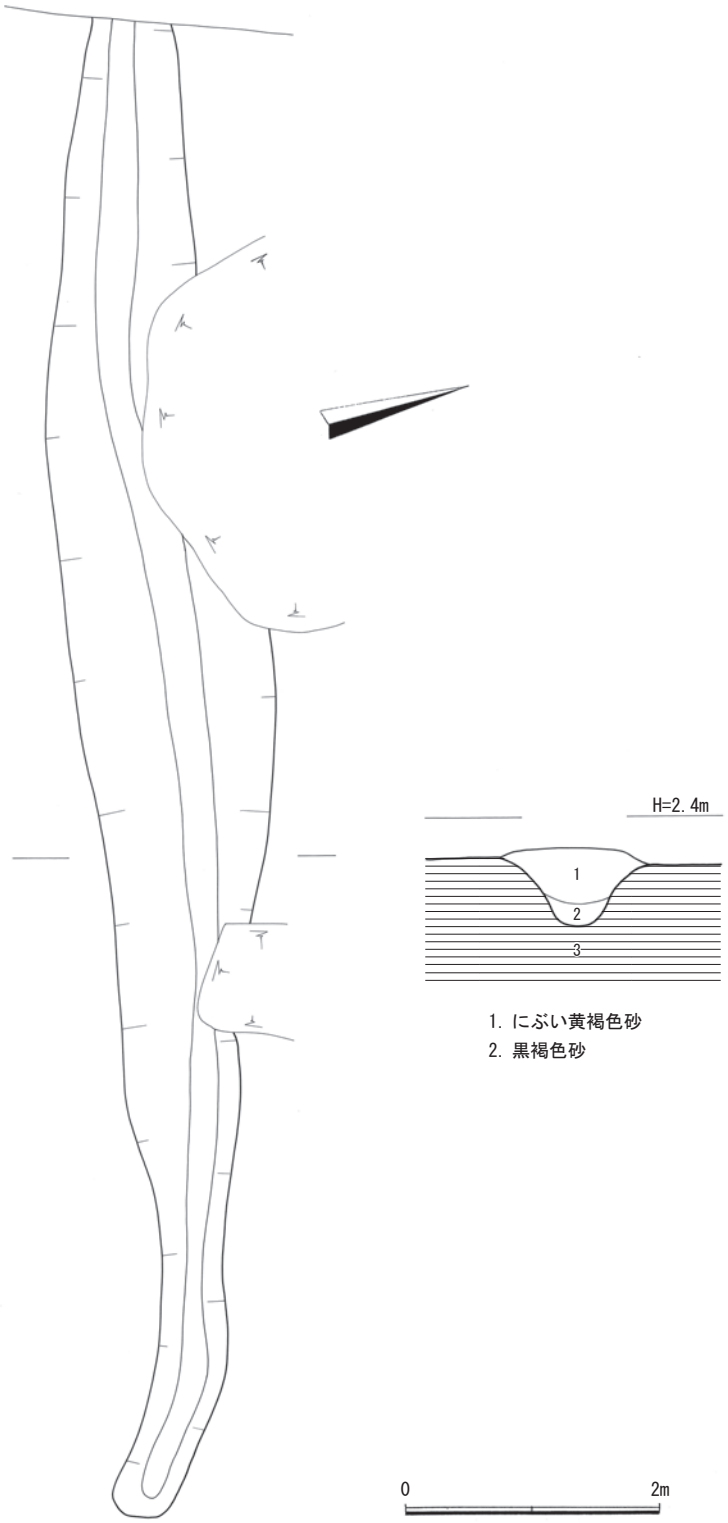


Fig.40　SD208 遺構実測図 (S=1/60)

SK209 (Fig.42)

２b 区の北半中央付近で検出した土坑である。標高 1.6 m付近で検出した。表土剥ぎ直後は遺構として認識できず、黄色砂を掘り下げた際に完形の土師器・白磁皿が出土して遺構の存在に気付いた。長軸 1.8 m、短軸 1.62 mの不整円形で、軸は概ね北方向である。埋土はうすい灰褐色砂、深さ 20 ㎝。

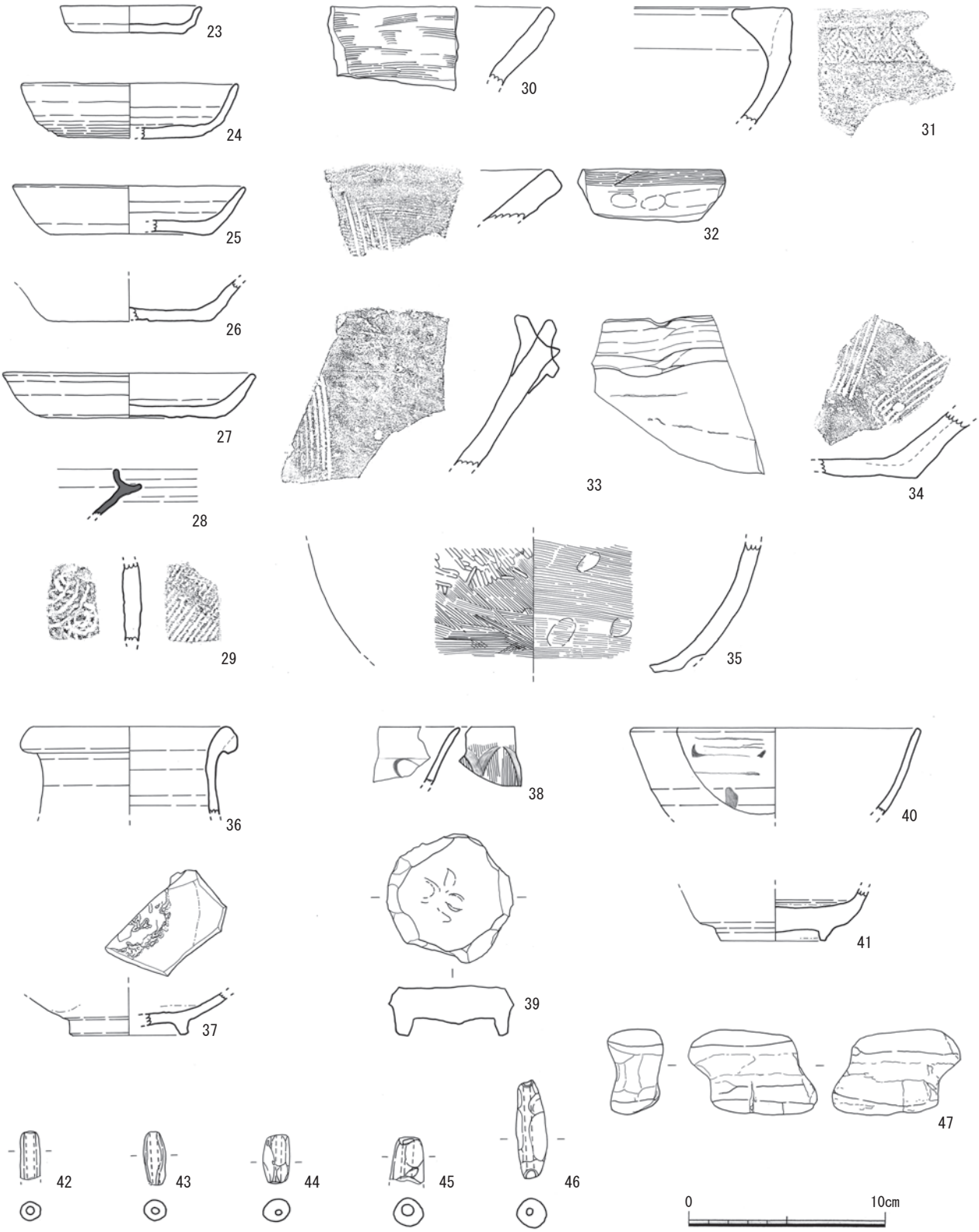


Fig.41　SD208 出土遺物実測図 (S=1/3)

鉄釘が複数出土しており、木棺墓と思われるが、骨はほとんど残っていない。土坑内の北側に遺物が集中することから、北側が頭位と思われる。周囲からは完形の青磁碗、土師皿、湖州鏡、刀子等が出土した。12 世紀後半頃の所産と思われる。

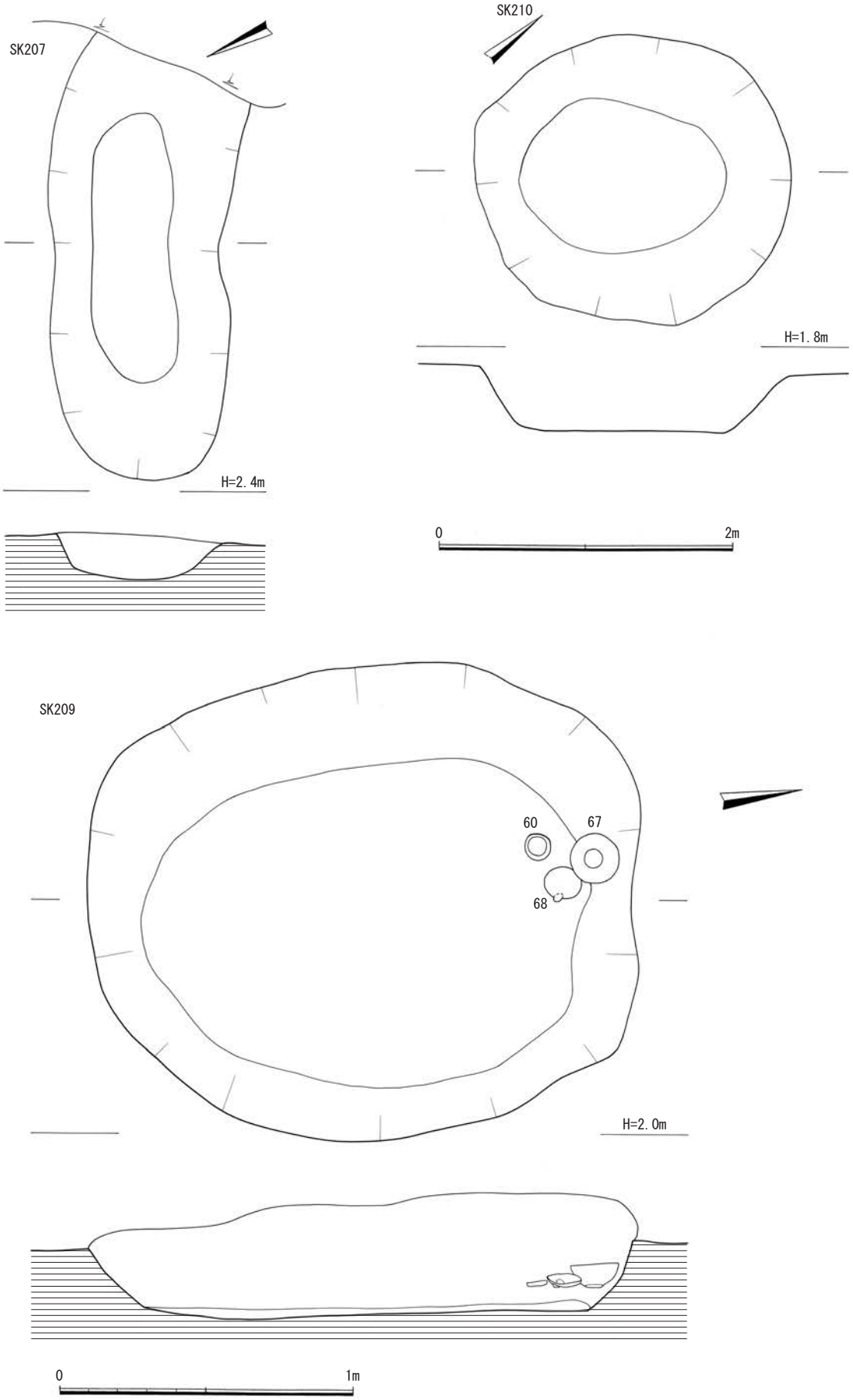


Fig.42　2b 区 SK207・209・210 遺構実測図 (S=1/20・1/60)

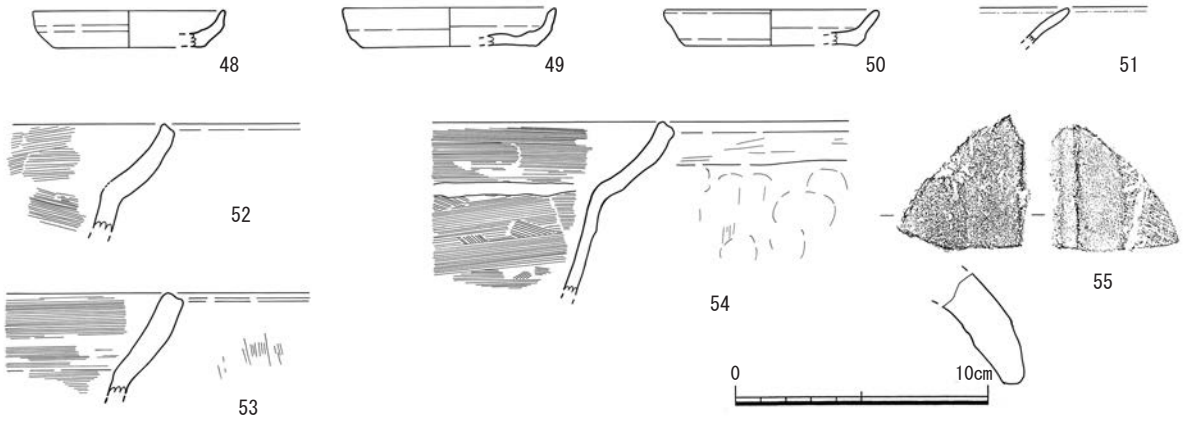


Fig.43　SK207 出土遺物実測図 (S=1/3)

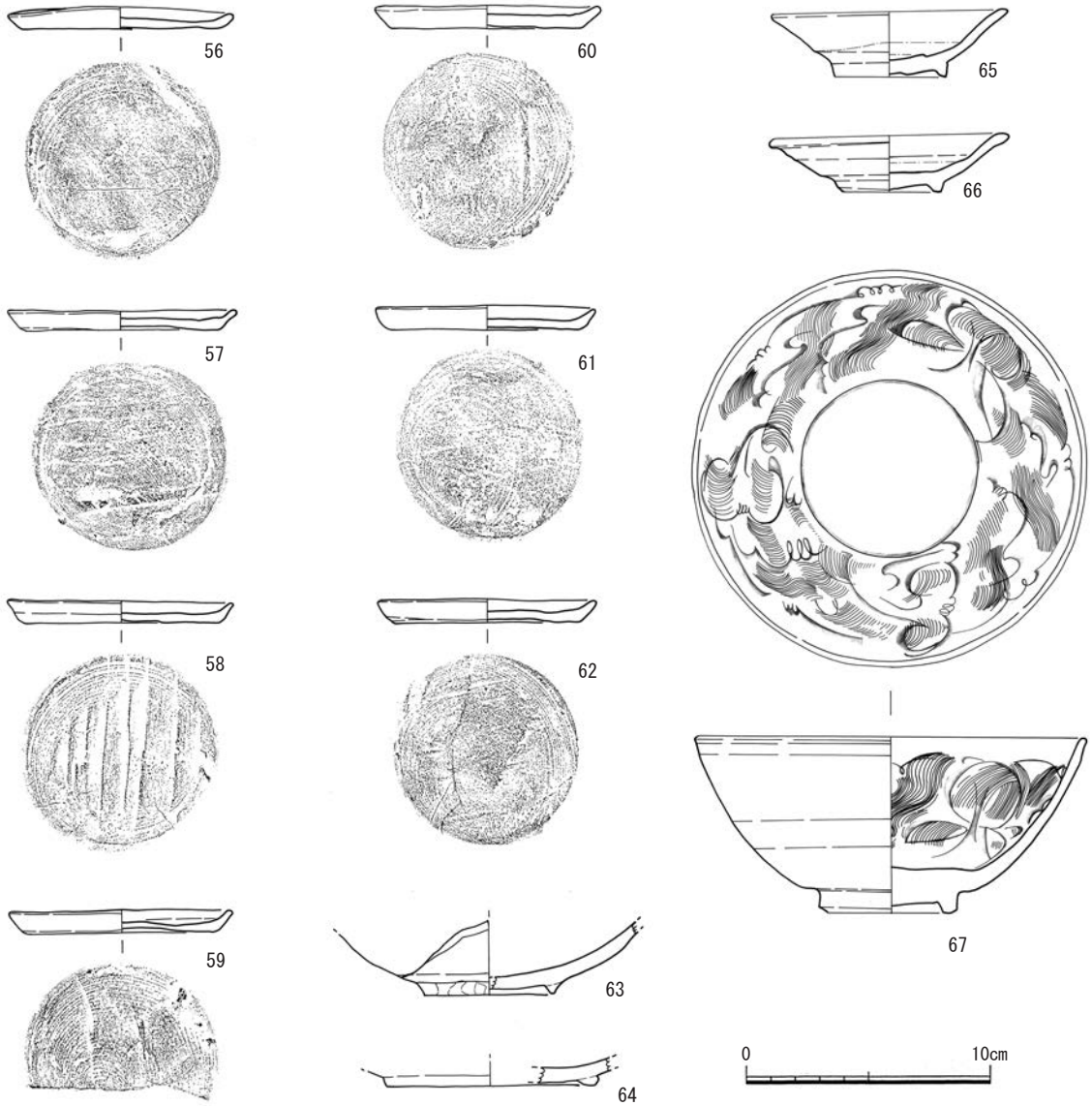


Fig.44　SK209 出土遺物実測図 (S=1/3)

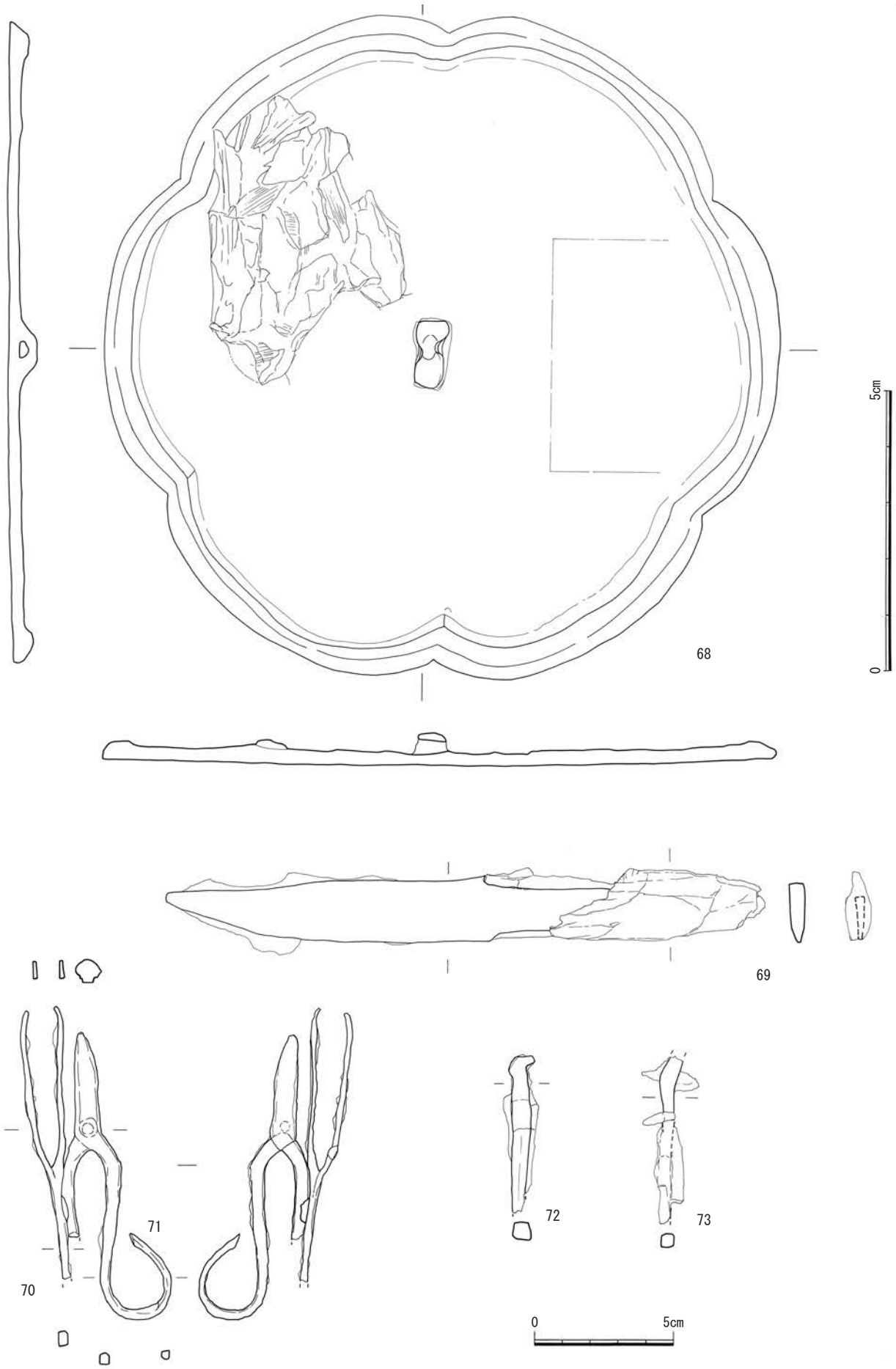


Fig.45　SK209 出土遺物実測図（S=1/1・1/2）

湖州鏡は錆で覆われており、取り上げ後に福岡市埋蔵文化財センターでクリーニング処理を行った。処理の過程で鏡に組織痕が付着していることが判明し、湖州鏡を布に包んで副葬したことが想定された。実体顕微鏡による観察では、この組織痕は平織りの織物のようである。また、湖州鏡の錆落としの際に、鉄製鋏と鑷子状鉄製品が鏡に付着していることが判明した。

また、小片のため図示できないが、灰白色の不明金属製品も出土している。蛍光X線装置による材質分析を行ったところ、銅、錫、鉛、鉄、亜鉛の金属元素が検出されたが、錫と鉛のピークが突出しており、なんらかの錫製品が副葬されていた可能性がある。

出土遺物（Fig.44・45）

56～62は土師皿で、ほとんどが完形品である。いずれも回転糸切りで、板状圧痕が残る。口径は9.0～9.3㎝である。60は湖州鏡そばから出土した。63・64は土師器埦の底部である。全体的に摩滅しており、調整不明瞭である。65・66は検出時に出土した白磁皿で、いずれも完形品である。65は口径9.7㎝、器高2.8㎝、66は口径9.8㎝、器高2.4㎝。ともに口縁部はわずかに外反し、体部下半は露胎している。内面見込み部分の釉を輪状に掻き取っている。

67は出土状況図（第42図）に示した完形の龍泉窯系青磁碗である。湖州鏡（68）、刀子（69）と近接して出土した。口径16.0㎝、器高7.1㎝。底部外面を除く全面にオリーブ灰色釉を施釉している。外面は無文で、内面に片彫文と櫛目文を施す。

68は完形の湖州六花鏡である。直径12.1㎝、鈕高４㎜、縁部厚３㎜で、中央に幅1.3㎝の鈕が付く。縁は玉縁状にやや厚くなる。銘文は認められないが、鈕の横にかすかに直線状の段差が残るようにも見える。先述のように織物、鋏、鑷子状鉄製品が付着した状態で出土しており、布で包まれて副葬されていた可能性がある。

69は鉄製小刀である。湖州鏡の下から出土した。長さ21.6㎝で柄の先端を欠く。身の高さ2.3㎝、厚みは4㎜。柄の部分には木質が遺存している。70は鑷子状鉄製品、71は鉄製鋏で、湖州鏡に付着していた。両者は固着し分離できなかったため、そのままの状態で図化している。70は残存長9.9㎝、基部の断面は長方形。先端部の厚さは２㎜。71はペンチ形の鋏で全長10.3㎝、刃部の長さは3.2㎝で、二枚の刃を鋲で留めている。持ち手の指を入れる部分は比較的整った円形を呈する。

72・73は鉄釘である。72の残存長5.6㎝、73の残存長6.0㎝。土坑内の複数個所から鉄釘が出土したことから、木棺墓と想定している。

SK210（Fig.42）

SK209の南側で検出した、長軸2.2ｍ、短軸2.0ｍ、深さ40㎝の不整円形土坑である。SK209と形状、埋土ともにほぼ同じだが、土師器片、陶磁器片が少量出土したのみで、明確な副葬品は認められなかった。鉄釘は出土していることから、木棺墓であった可能性もある。

出土遺物（Fig.46）

74は土師器皿で、復元底部径7.0㎝。底部は糸切り。75は白磁碗、76は白磁皿の口縁部片。77は青磁碗の底部か。明るい青みがかった釉がかかる。内面見込みに施文している。

SK211

調査区南西壁際で検出した、直径1.6ｍの円形土坑である。

出土遺物（Fig.46）

78は青磁皿の底部片、79は土師質の鍋口縁部である。

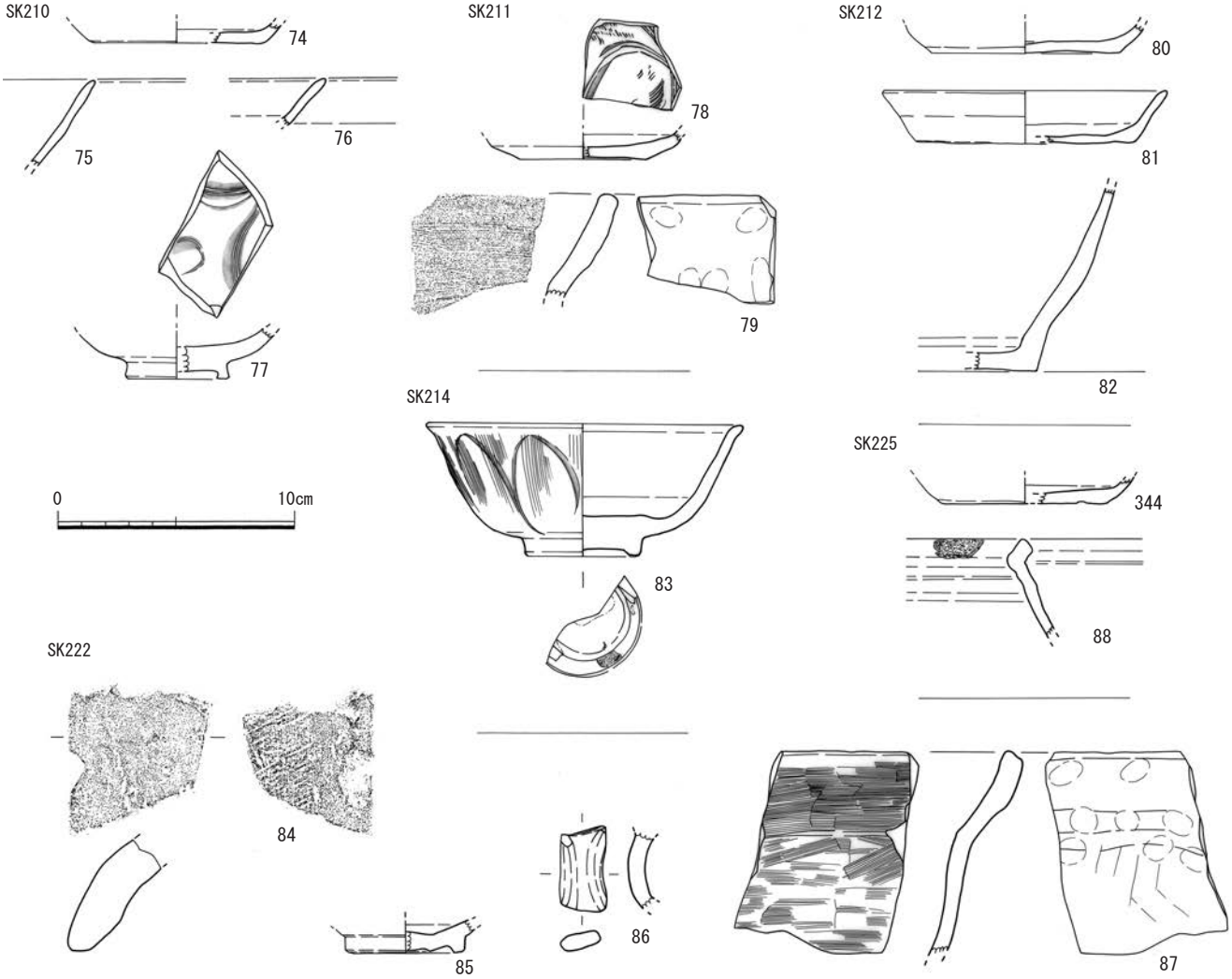


Fig.46　SK207 出土遺物実測図 (S=1/3)

SK212

２b 区南半の西壁付近で検出した小穴である。撹乱を免れた砂丘面上で検出した。

出土遺物（Fig.46）

80 は土師器皿、81 は土師器坏で、いずれも底部外面は回転糸切りで板状圧痕が残る。81 は復元口径 12.0 ㎝、器高 2.2 ㎝。82 は陶器盤の底部片である。

SK214

２b 区北西端にわずかに残った砂丘面上で検出した撹乱坑である。

出土遺物（Fig.46）

83 は龍泉窯系青磁碗で、口径 13.4 ㎝、器高 5.6 ㎝。内面は無文で、外面には蓮弁と縦方向の櫛目文を施す。高台畳付には目跡が残る。

SK222

２b 区北西端の壁際で検出した土坑である。いずれも小片で時期の決定は難しい。

出土遺物（Fig.46）

84 は丸瓦片、85 は白磁小碗の底部片、86 は白磁水注の把手部分か。87 は土師質の鍋で、外面はハケ調整のちナデで、指頭痕が見られる。内面には横方向の細かいハケメが残る。

Fig.47　SX205 遺構実測図 (S=1/40)

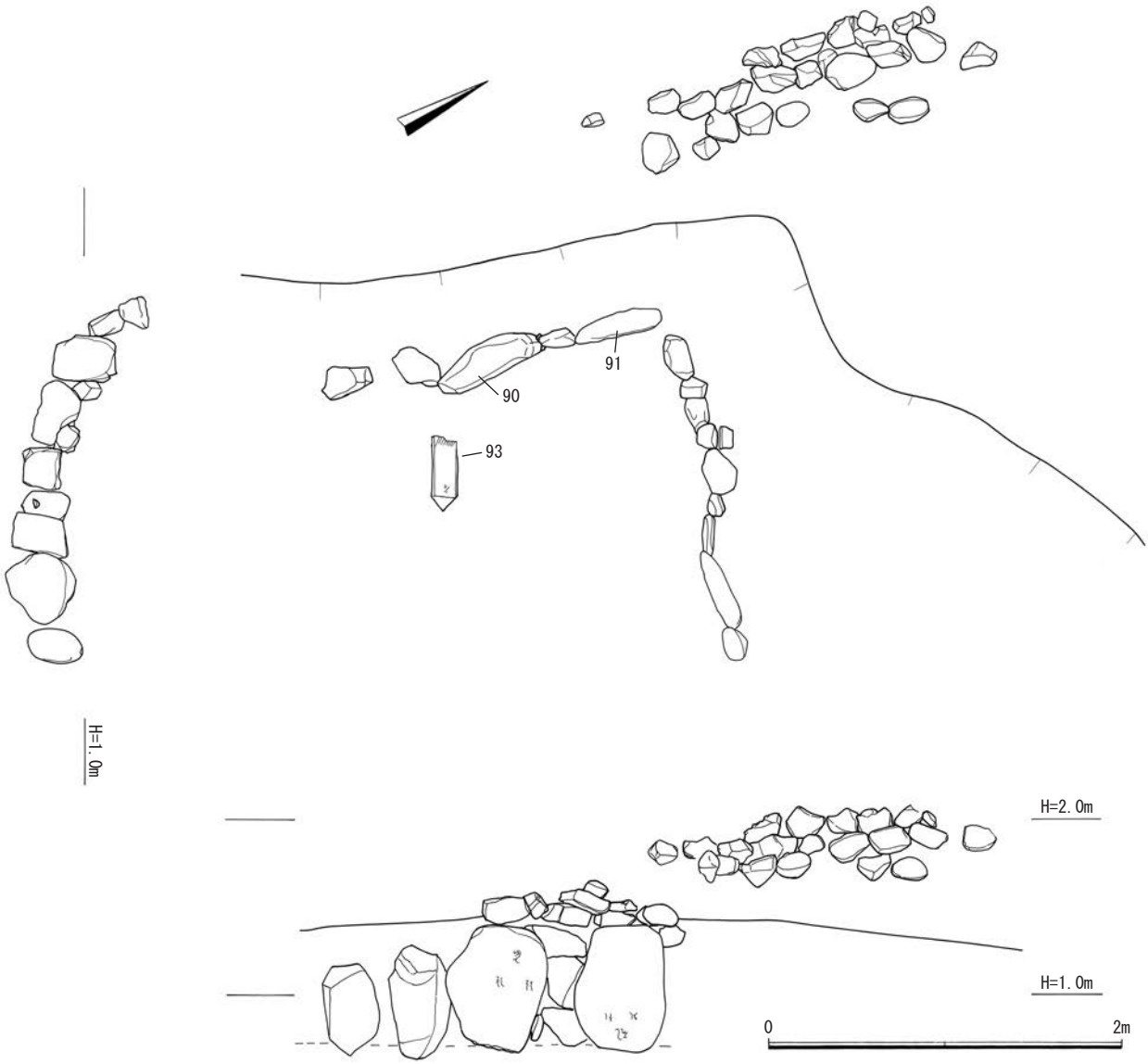


Fig.48　SX205 石積み遺構実測図（S=1/40）

SK225

２b 区北半の中央付近で検出した、SK209 に切られる土坑である平面プランは不明瞭。

出土遺物（Fig.46）

344 は土師器皿で、底部外面は回転糸切り。復元底部径 7.0 ㎝。88 は陶器壺の口縁部片で、口縁端部上面には目跡が残る。

③不明遺構（SX）

SX205（Fig.47・48）

調査区南東角から北へ 12 m、西へ７ｍの範囲で検出した不整形な落ち込みで、池状遺構とした。当初は砂丘面の撹乱と思い掘り下げたが、落ち際から拳大からそれ以上の大きさの礫が多数出土した。掘り下げを進めると標高 0.8 m付近から油混じりの水が湧き出したため、安全上の観点から湧水面以下は掘削していない。

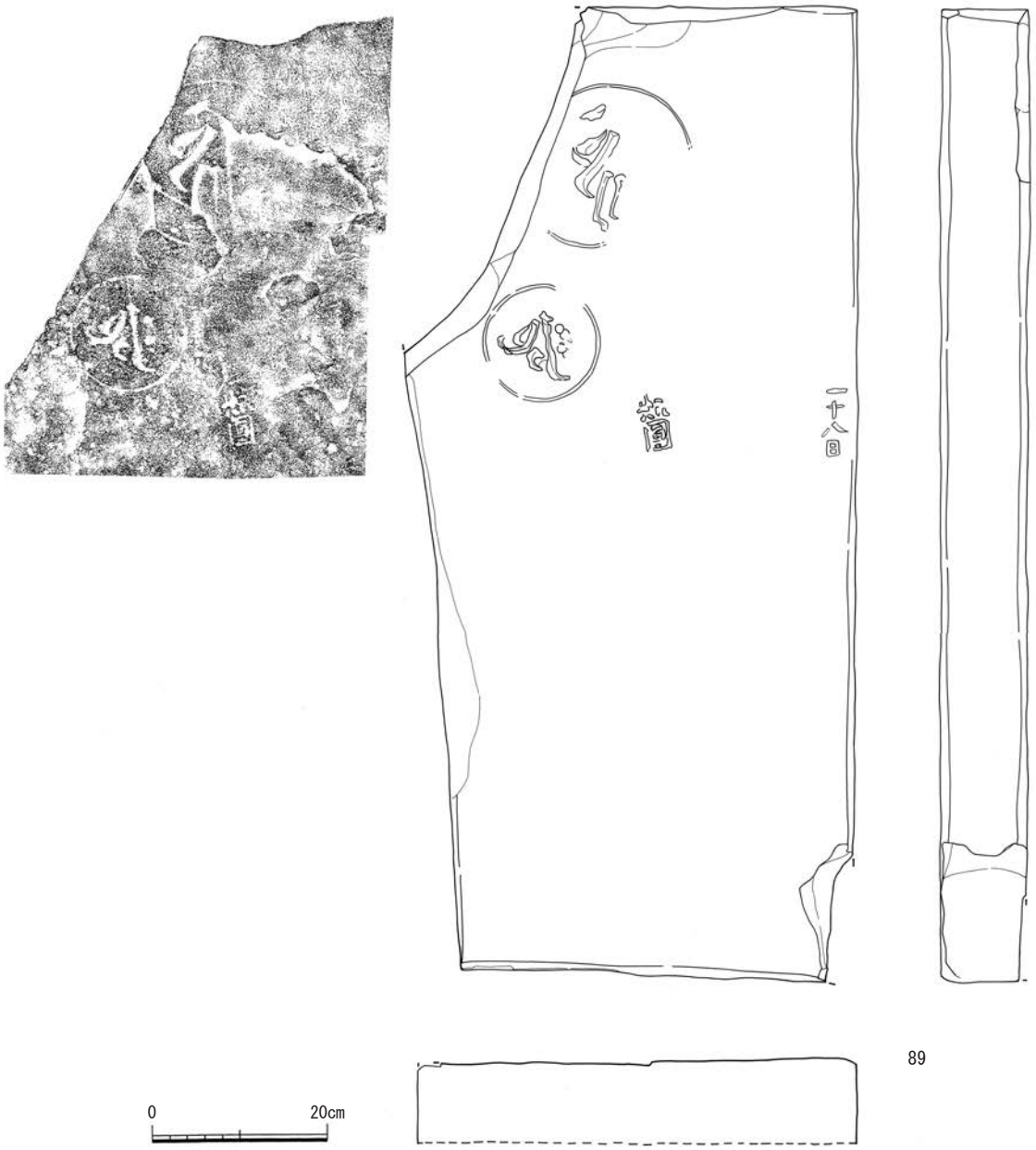


Fig.49　SX205 出土板碑実測図 (S=1/8)

SX205 の土層は Fig.39 に示している。土層図の３～17 が SX205 の埋没土である。標高 1.6 ～ 1.8 m付近の検出面では全体に厚さ 50 ㎝程度の暗灰黄色砂質土が堆積し、その下は黒灰色砂や黄白色砂の細かな堆積となっている。

掘り下げて検出した礫の分布は一様ではなく、北岸は疎らで、西岸は密であった。なかでも西岸の一部に特に集中し、礫のなかには板碑が混じっていた。それらの転礫を取り除くと石室状の石組を検出した。石組は南北方向 2.0 m、東西方向 1.9 mのＬ字形で、西壁は板碑２点の転用を含む大型の石を立て並べて、奥壁状にしている。一方、北壁は西壁に比べて小さく低い石を並べている。石を外しながらさらに掘り下げる必要があったが、この時点で油混じりの水が湧いていたため、やむを得ずここで掘削を中断した。西壁の上部が見え始めた頃は護岸かとも思ったが、全面に広がるわけではなく、異なる機能のものと思われる。この石組の内部では湧水点付近で少量ではあるが赤色顔料が出土した。

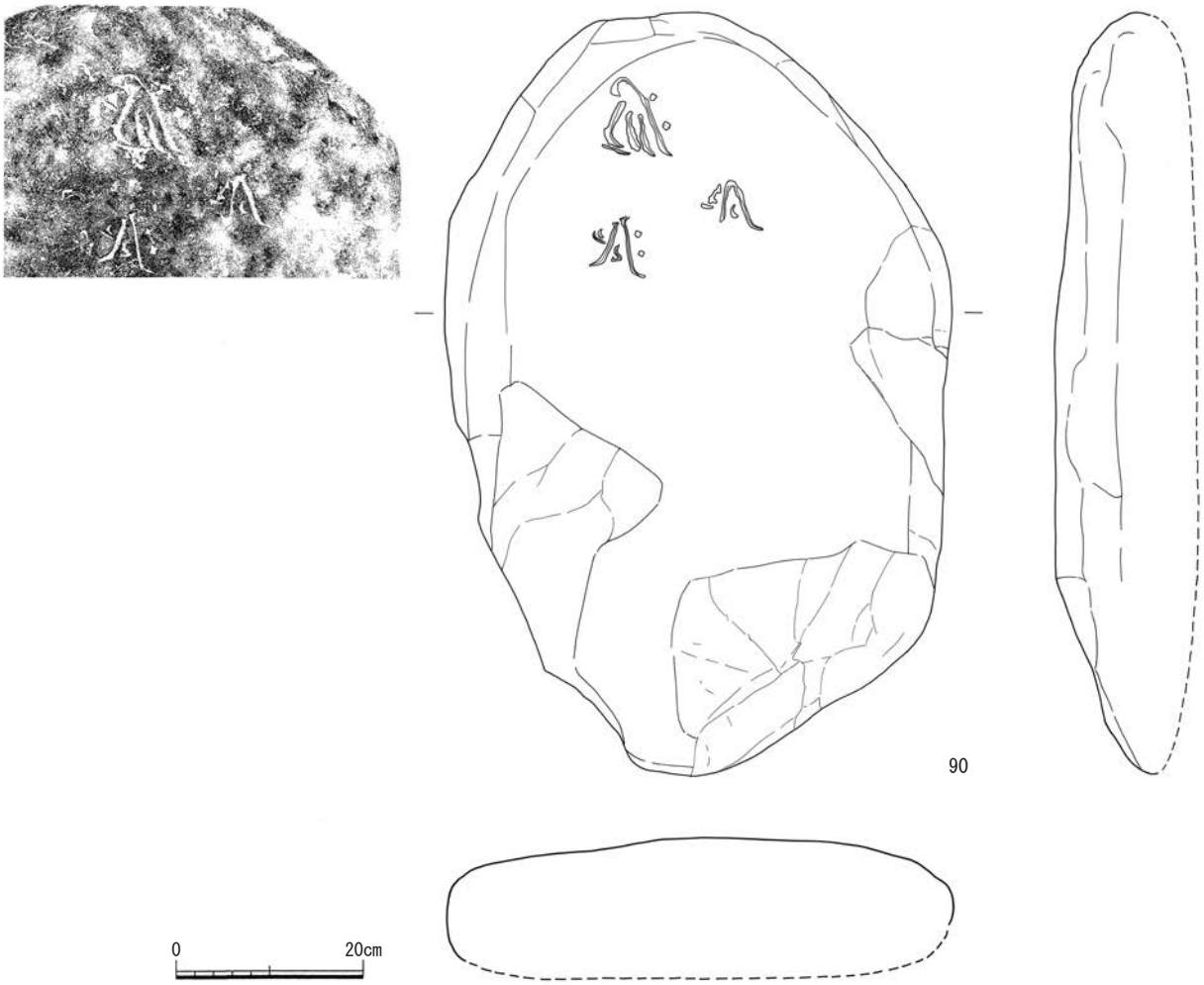


Fig.50　SX205 出土板碑実測図２　(S=1/8)

また、西岸の上段では、20 ㎝程度の礫を２～３段並べたものが約３ｍ検出された。砂の傾斜部分に貼り並べているようにも見える。この貼石状のものは SD208 に切られるが、その延長上にも石が並んでいる箇所が確認できた。

SX205 からは、土師器、陶磁器、土錘、瓦、板碑等、多量の遺物が出土した。15 ～ 16 世紀頃のものであろうか。調査区横の地蔵の森付近には寺院の存在が指摘されており、その関連が窺われる。

出土遺物（Fig.49 ～ 57）

89 ～ 99 は板碑である。89 は西岸の南端付近で裏返った状態で出土した大型長方形の板碑である。残存長 111.6 ㎝、最大幅 51.4 ㎝、最大厚 10.0 ㎝で、上部左を欠く。表面の剥落や摩滅で不明瞭な部分もあるが、阿弥陀三尊を示しており、中尊種子に阿弥陀如来（キリーク）、左下の脇侍種子に勢至菩薩（サク）が彫り込まれている。右下は観音菩薩（サ）と思われるが、剥落しており読み取れない。中央には人名と思われる「照圓」か。右端中央には「十八日」が見える。本来は紀年銘等が刻まれていたと思われるが剥落で不明である。90 は自然石を用いた板碑で、89 と同じく阿弥陀三尊が彫り込まれている。長さ 81.3 ㎝、幅 53.0 ㎝。石組の西壁に立てられていた。91 は花崗岩の自然石を用いた板碑で、阿弥陀三尊が彫り込まれている。上下逆の状態で石組西壁に利用されていた。長さ 75.2 ㎝、幅 51.1 ㎝。92 では梵字は認められないが、板碑の一部と思われる。

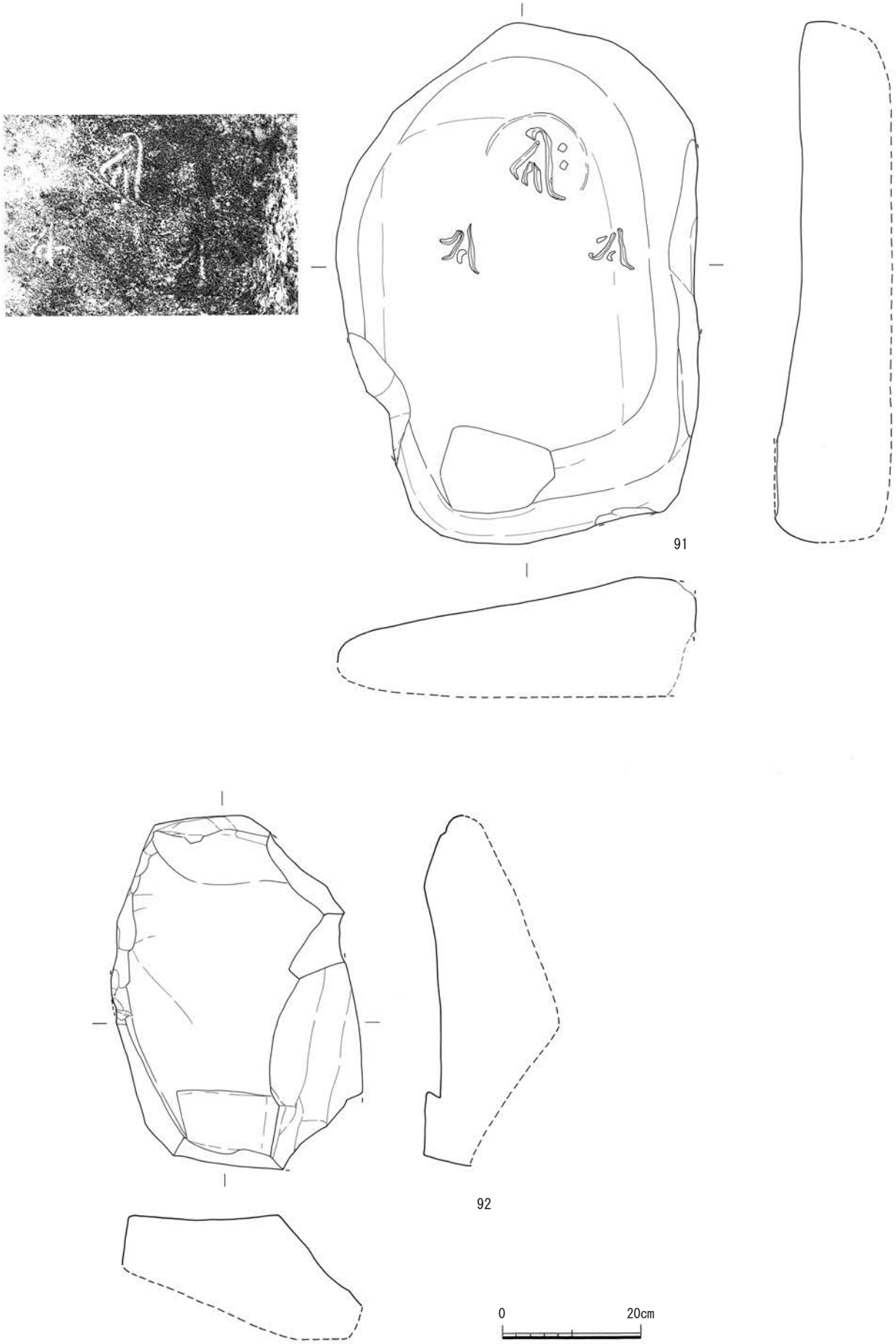
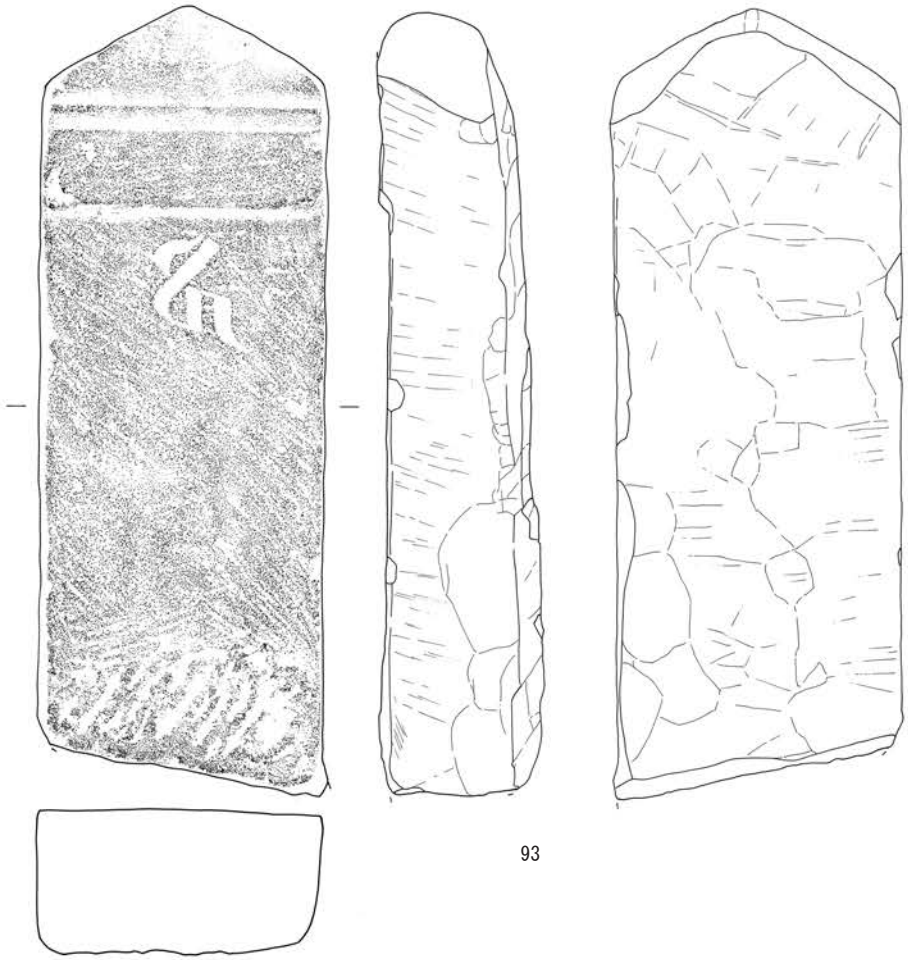


Fig.51　SX205 出土板碑実測図 3　(S=1/8)



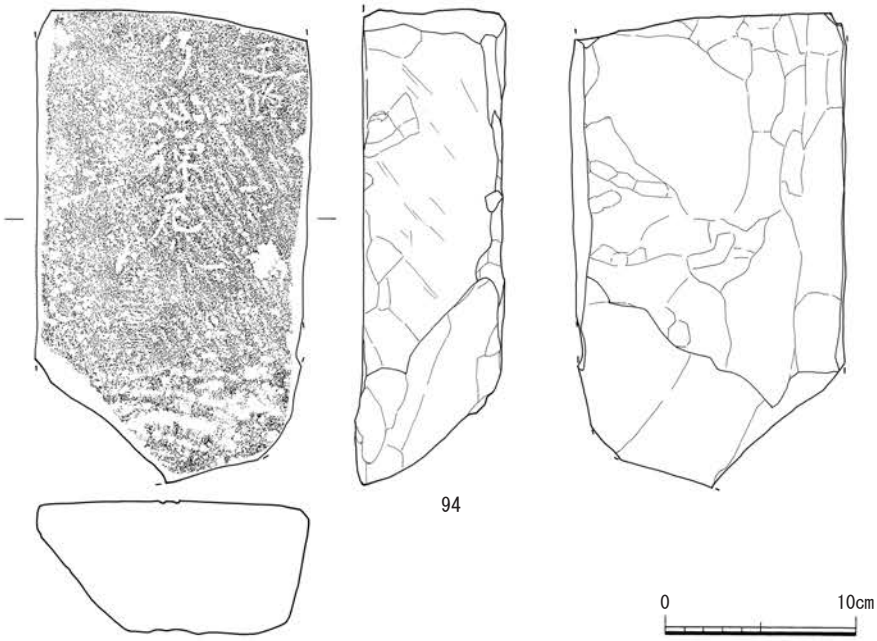


Fig.52　SX205 出土板碑実測図 4　(S=1/8)

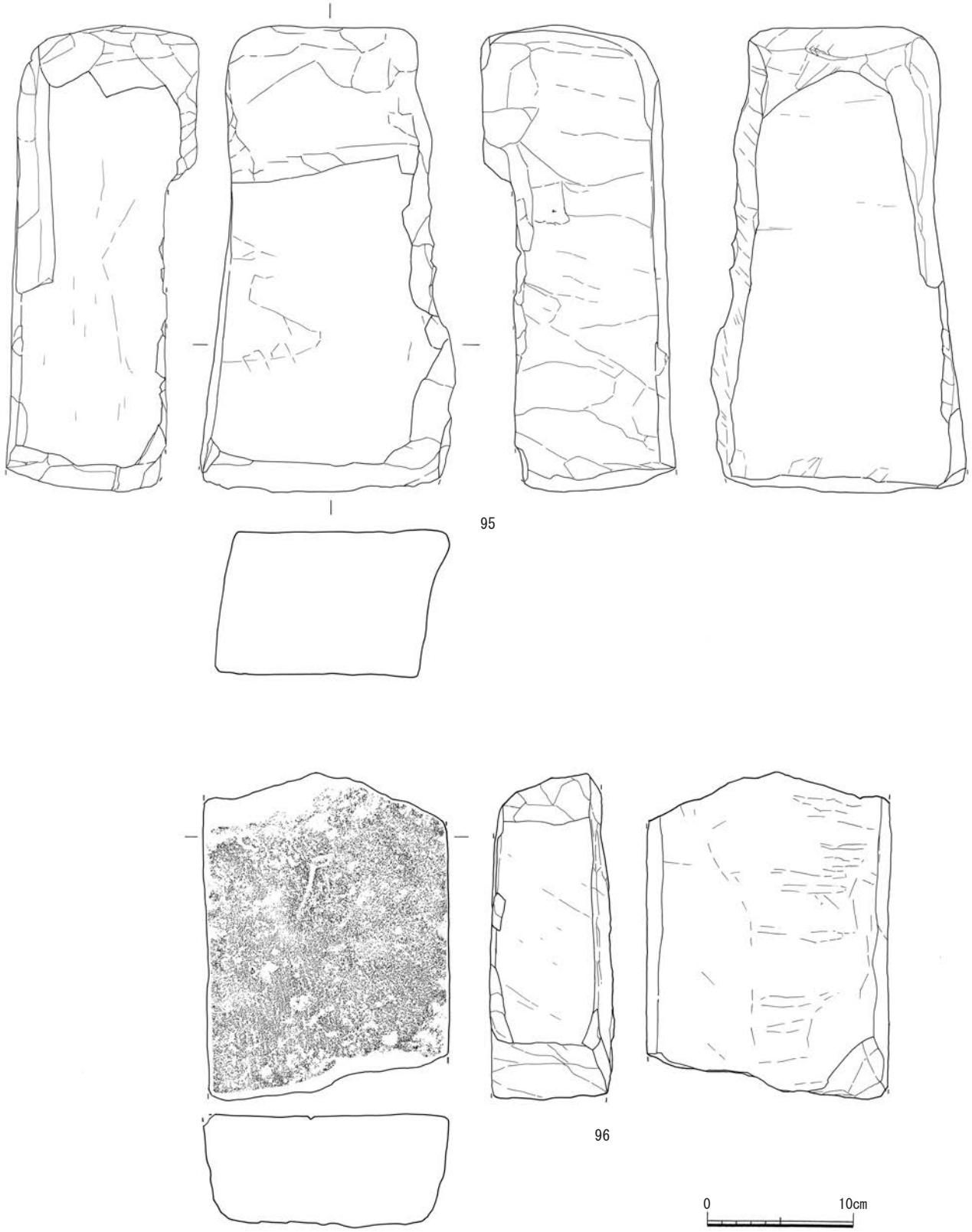


Fig.53　SX205 出土板碑実測図 5　(S=1/8)

93 は石組西壁の前で出土した整形板碑である。山形の上部に二条線を持つ。長さ 41.4 ㎝、幅 15.0 ㎝、厚さ 7.5 ㎝。釈迦如来（バク）が刻まれる。下部は粗い整形の痕跡が残る。

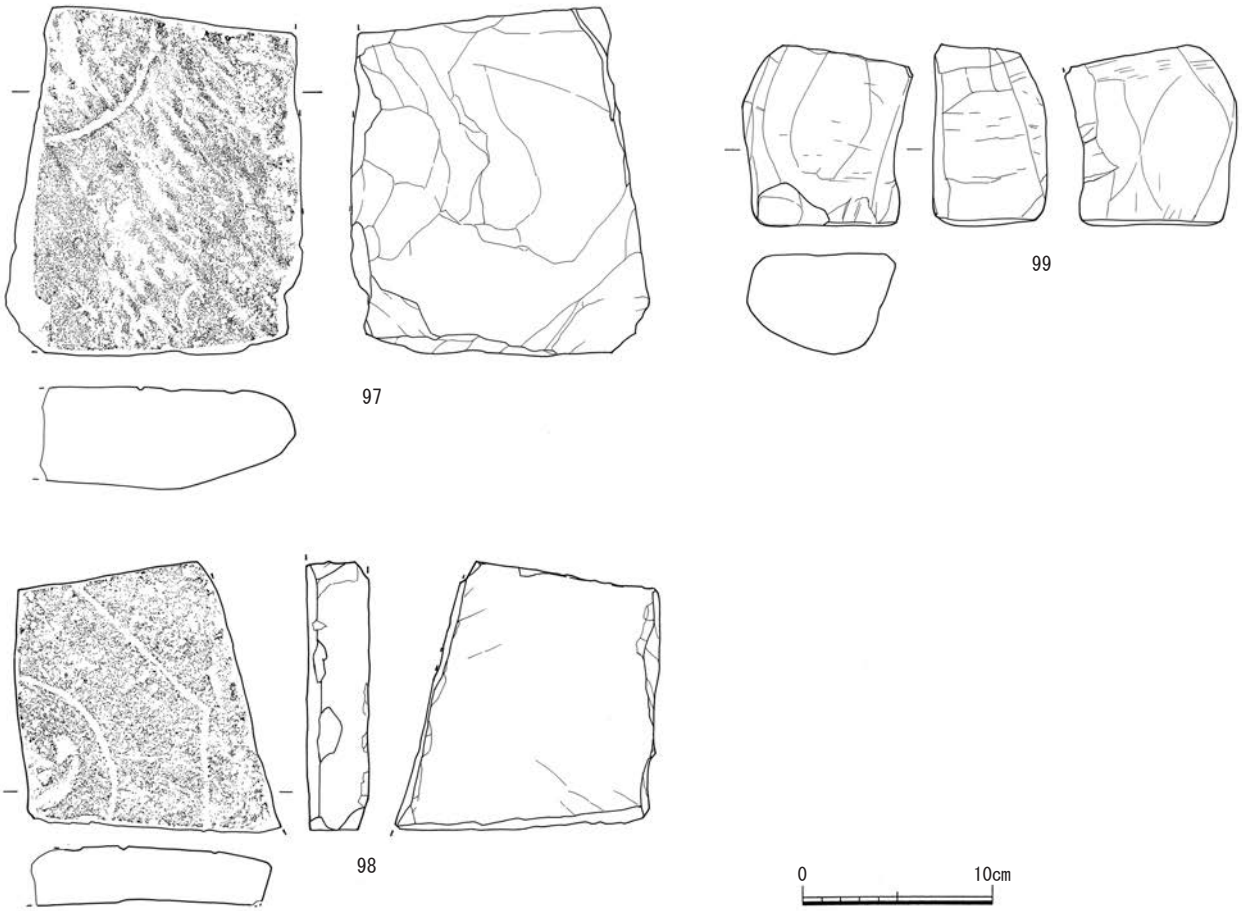


Fig.54　SX205 出土板碑実測図 6　(S=1/8)

94 は西岸の礫集中部から出土した、砂岩製の板碑である。長さ 25.1 ㎝、幅 14.5 ㎝、厚さ 7.3 ㎝。中央に「了心禅尼」の文字、右上の文字は「逆修」か。95 は額部と碑身部であるが、種子は読み取れない。砂岩製で長さ 32.2 ㎝、幅 17.6 ㎝。96 は上下ともに欠損しており、残存長 22.5 ㎝、幅 17.0 ㎝、厚さ 7.6 ㎝。中央に「尼」の文字。97・98 は破片で、円相の一部がかかる。99 は石塔の一部か。

Fig.55 は、西岸掘り下げ時や、礫の検出作業時の出土遺物である。100 ～ 105 は土師器皿で、いずれも底部外面には糸切り痕が残る。100 は復元口径 6.6 ㎝、器高 1.2 ㎝。101 は復元口径 6.8 ㎝、器高 1.4 ㎝。102 は復元口径 7.4 ㎝、器高 1.6 ㎝。106・107 は土師器坏で、ともに底部は糸切り。107 は復元口径 12.2 ㎝、器高 2.1 ㎝。108 は黒色土器椀か。

109・110 は土師質の鍋。いずれも外面にはススが付着し、内面には細かい横ハケを施す。111・112 は土師質の擂鉢。113 は土師質の鍋、114 は瓦質土器の鍋である。

115 は褐釉の朝鮮陶器か。内面見込みと高台畳付に砂目が残る。口径 10.8 ㎝、器高 3.4 ㎝。116 は白磁碗、117・118 は青磁の坏か。119 は陶器の耳壺で、口径 9.4 ㎝。120 は軒平瓦の破片で、三つ巴文が連続する。外面には格子目タタキ、内面には布目痕が残る。

121 ～ 123 は管状の土錘である。124 は石錘で、中央に紐掛けの溝を設けている。残存長 5.7 ㎝、幅 3.7 ㎝。

Fig.56 は、北岸掘り下げ時や、礫の検出作業時の出土遺物である。125 ～ 132 は土師器皿である。いずれも底部糸切り調整で、130 は板状圧痕も残る。125 は復元口径 7.4 ㎝、器高 2.1 ㎝、126 は復元口径 7.2 ㎝、器高 1.2 ㎝。132 は高台付の皿である。

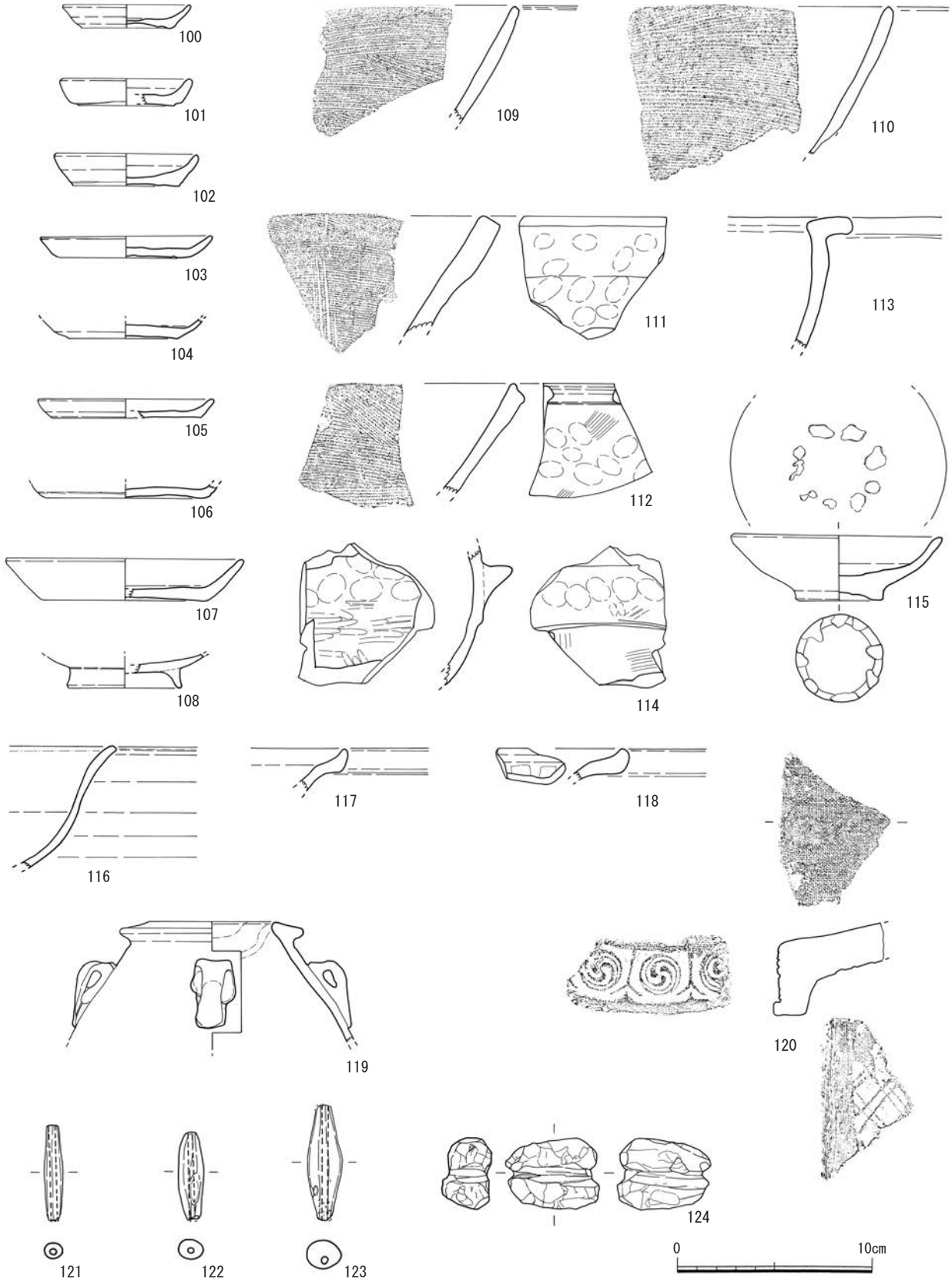


Fig.55　SX205 西岸出土遺物実測図　(S=1/3)

133 ～ 138 は土師器坏である。いずれも底部外面は回転糸切りで、135・136・138 は板状圧痕も見

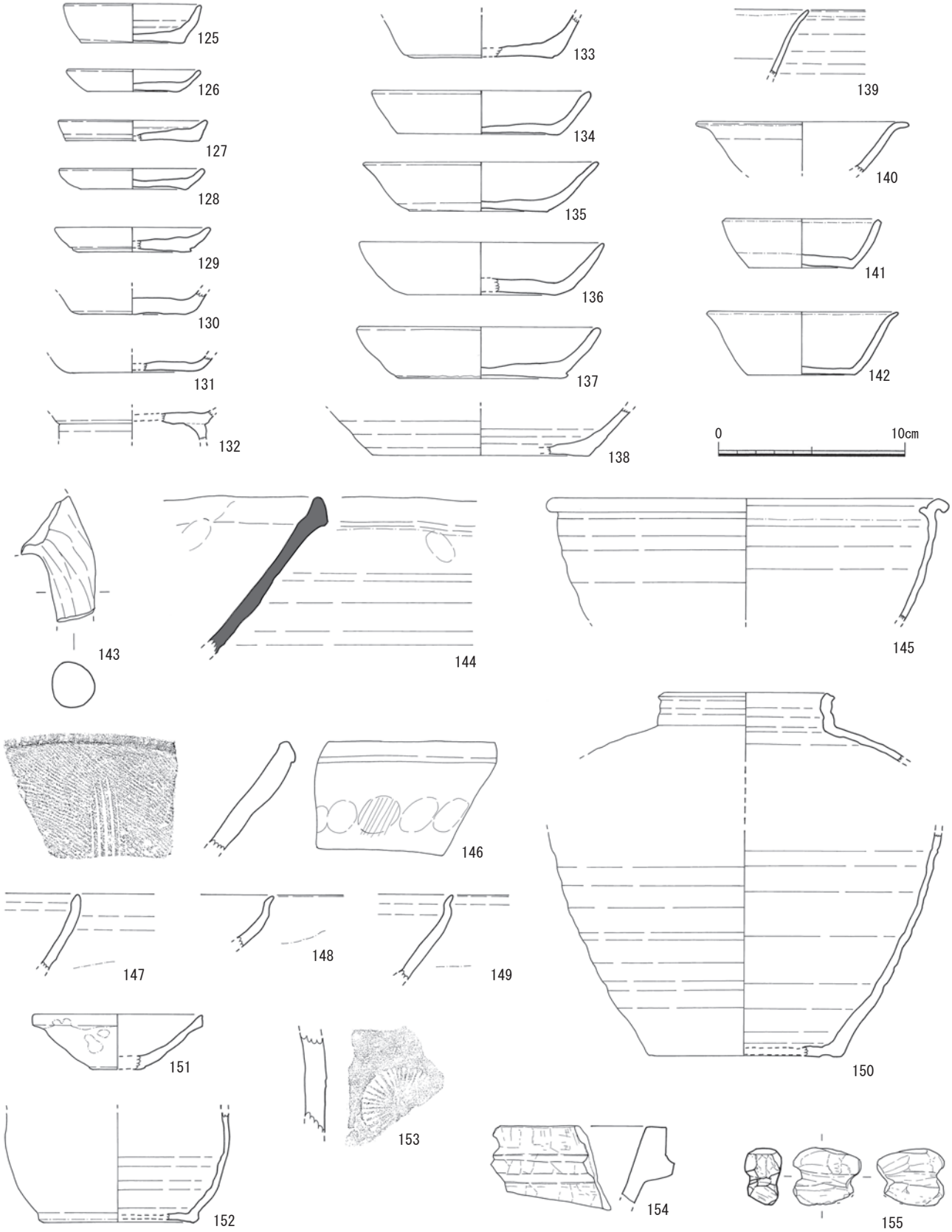


Fig.56　SX205 北岸出土遺物実測図　(S=1/3)

られる。134 は口径 11.8 ㎝、器高 2.3 ㎝、135 は口径 12.6 ㎝、器高 2.7 ㎝。

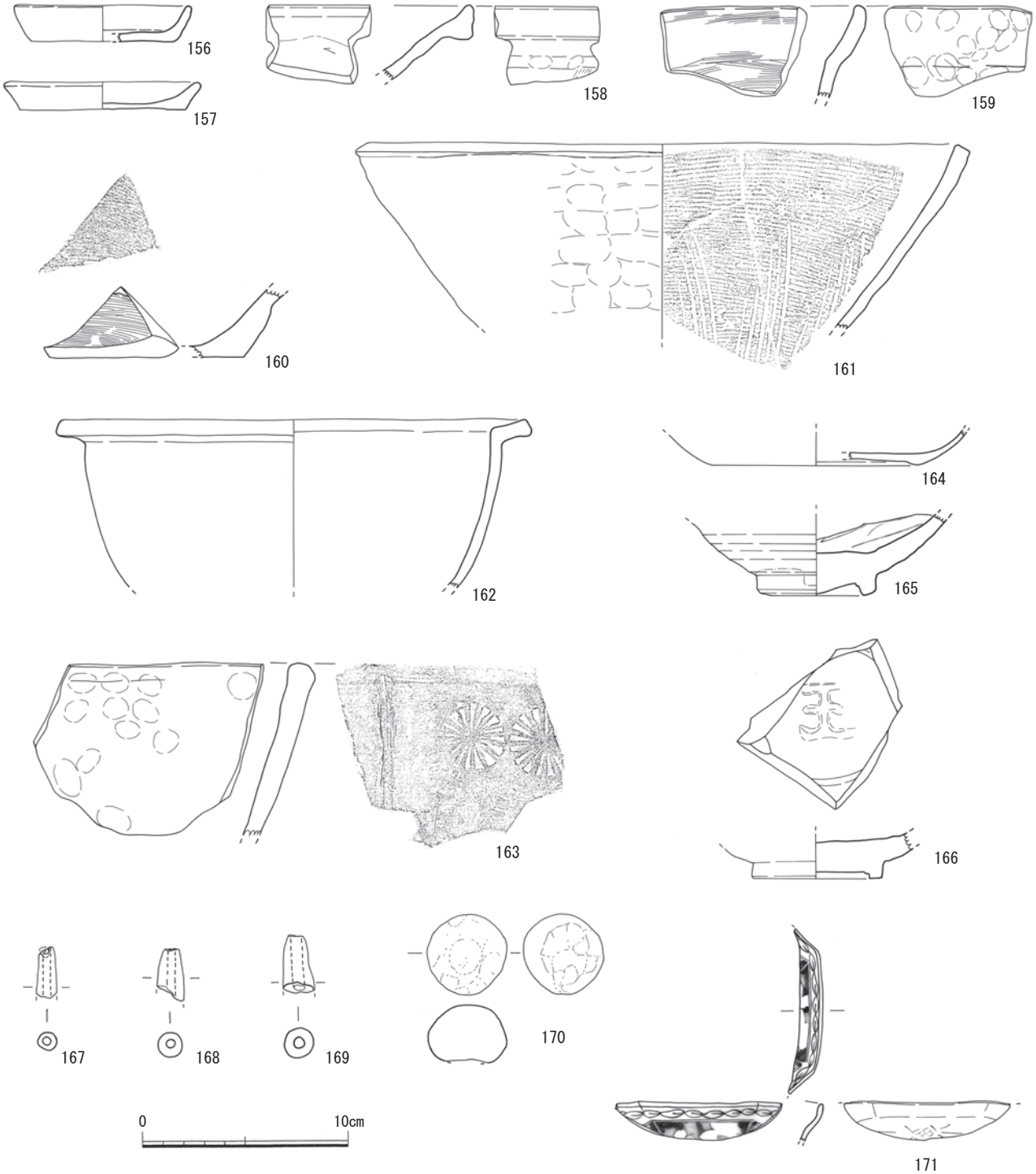


Fig.57　SX205 出土遺物実測図　(S=1/3)

139・140 は白磁碗で、ともに口縁端部が露胎の口禿げである。141・142 は白磁皿で、ともに口禿げの口縁である。141 は体部下半から底部外面は露胎している。復元口径 8.6 ㎝、器高 2.6 ㎝。142 は口縁端部以外は施釉されている。復元口径 10.2 ㎝、器高 3.4 ㎝。143 は足鍋の脚部で、断面は径 2.3 ～ 2.4 ㎝前後の円形。上部にはススが厚く付着する。144 は須恵質の鉢、145 は陶器鉢である。146 は瓦質の擂鉢、147・148 は陶器椀、149 は天目碗である。150 は陶器壺で、体部と口縁部は同一個体と思われるが接合しない。復元口径 9.4 ㎝、復元底部径 10.4 ㎝。

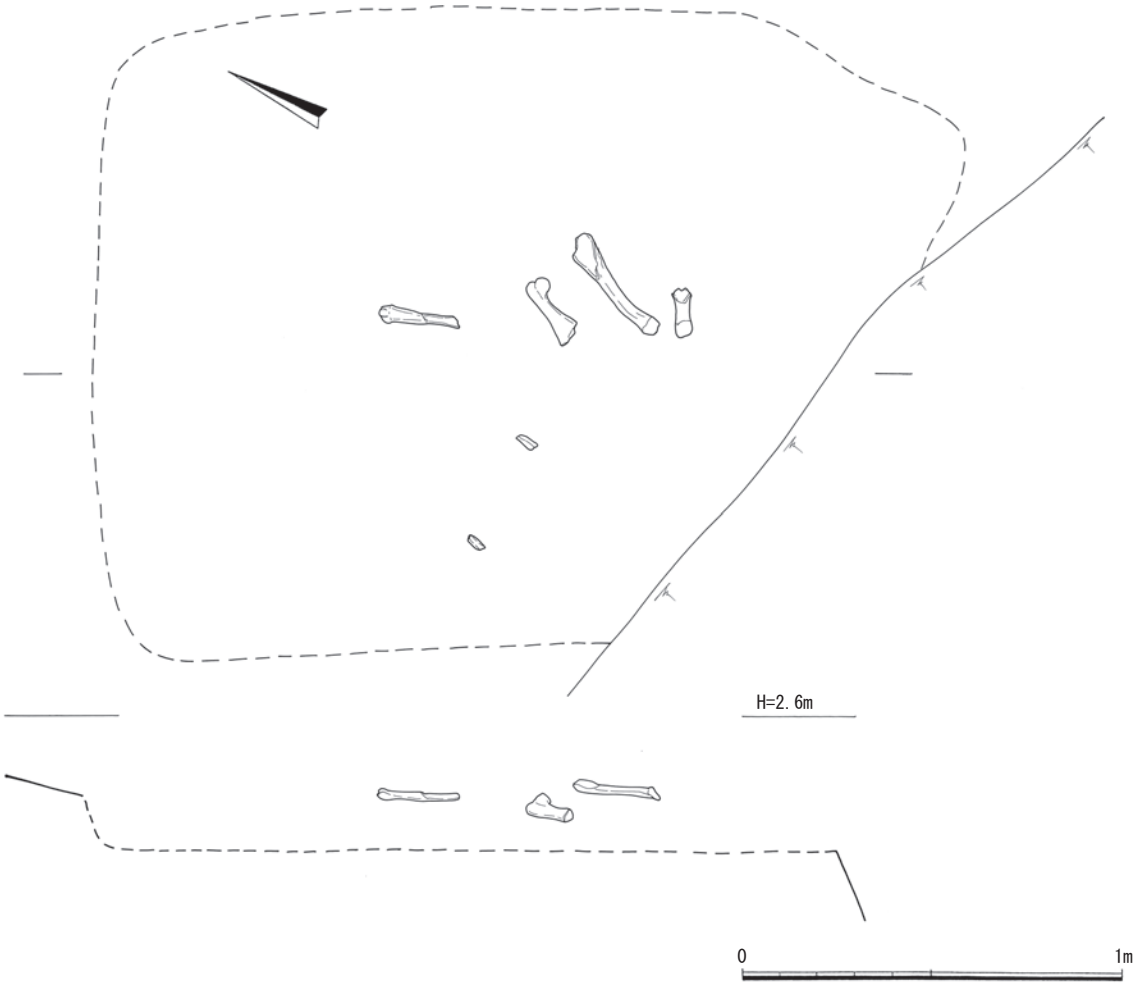


Fig.58　SX226 遺構実測図　(S=1/20)

151 は陶器皿、152 は陶器の壺あるいは鉢か。153 は瓦質の火鉢か。外面に印刻文を施す。

154 は石鍋の口縁端部、155 は滑石製の石錘である。

第 57 図はその他の SX205 出土遺物である。156・157 は土師器皿。156 の復元口径 8.6 ㎝、器高 1.7 ㎝。156 の底部外面は糸切り、157 は摩滅のため調整不明。158 ～ 160 は土師質の鉢、鍋である。161 は土師質の擂鉢で、内面には５本単位の擂り目が見られる。162 は土師質の鍋、163 は瓦質土器の鉢か。外面にはスタンプで文様を施す。

164 は白磁の皿、165 は白磁碗、166 は龍泉窯系青磁碗の底部で、内面見込みに「王」の陽刻が見られる。171 は染付皿の破片か。

167 ～ 169 は管状の土錘。170 は径 3.9 ㎝前後の砂岩製石球である。

SX226 (Fig.58)

２b 区北西端、撹乱を免れた砂丘面で確認した墓である。砂丘砂の掘り下げ時に骨が出土し、そこで初めて遺構の存在に気付いた。遺構埋土と砂丘砂の区別が困難で、遺構の平面形は正確に把握できなかった。検出面の標高は 2.2 m。長軸 2.3 m以上、短軸 1.7 m前後の長方形プランであろうか。人骨の遺存は部分的で、出土遺物もなく時期は不明。周辺と同じく中世の墓と思われる。

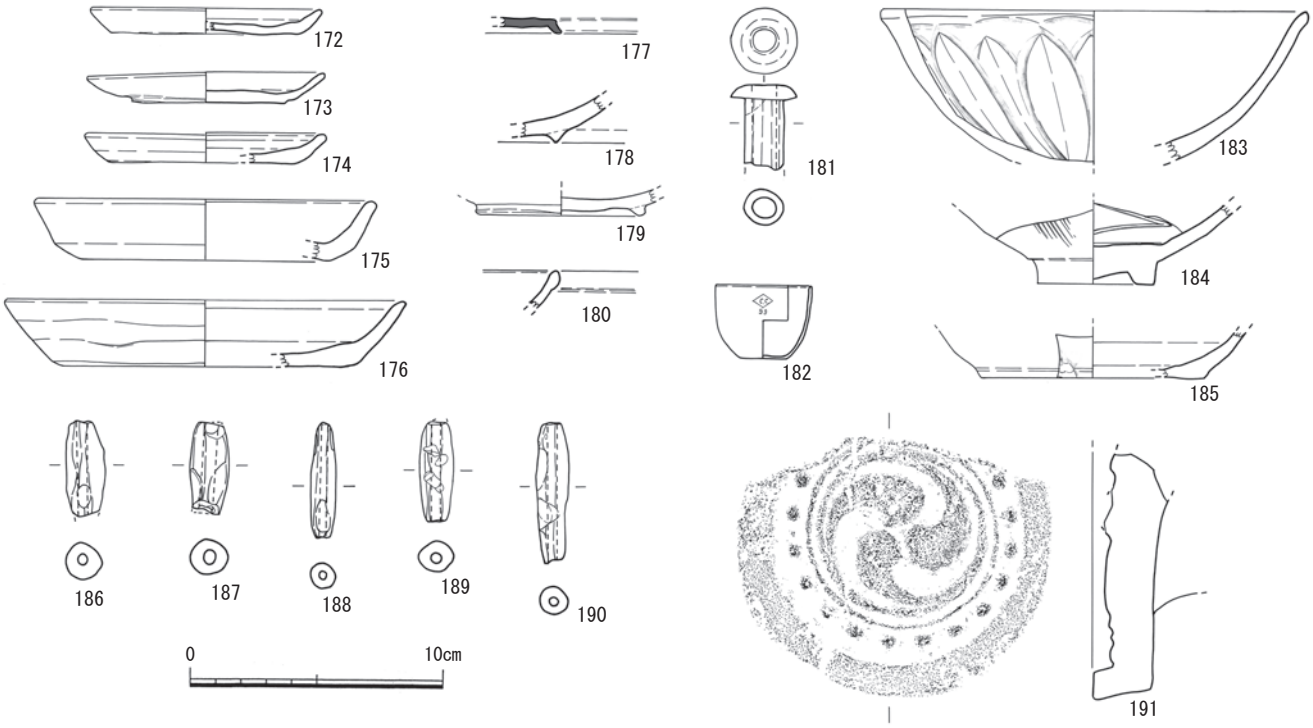


Fig.59　その他の出土遺物実測図　(S=1/3)

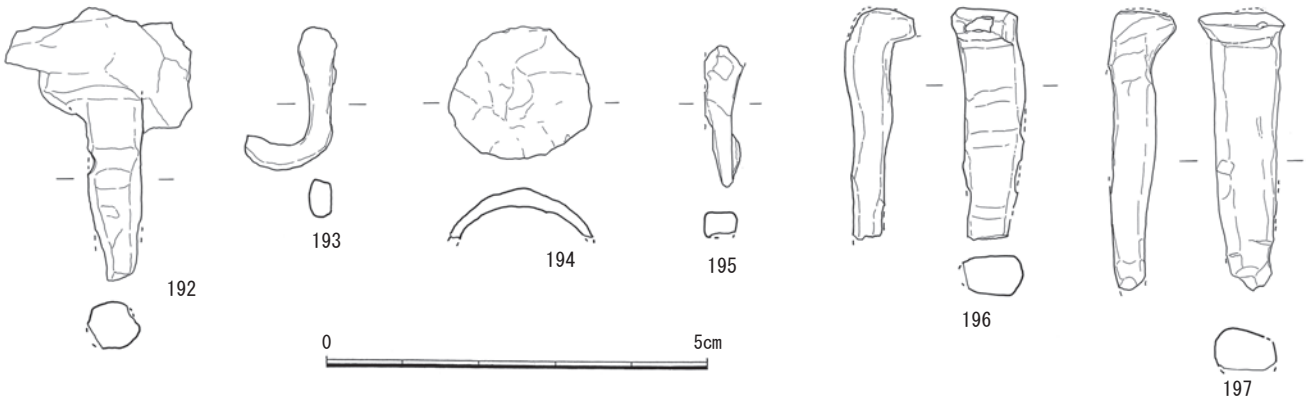


Fig.60　2区出土鉄器実測図　(S=1/1)

④その他の遺物（Fig.59・60）

第59図は2b区の検出時や撹乱、採集等の遺物である。172～174は土師器皿、175・176は土師器坏。177は古代の須恵器の蓋。178・179は瓦器碗の底部片、180は白磁碗の口縁部片である。181は磁器製の栓である。頂部は径2.6㎝、栓部分は径1.5㎝。182は撹乱出土。理化学用磁器の坩堝で、底部外面のみ無釉。大正時代以降のものである。

183は龍泉窯系の鎬蓮弁文の青磁碗である。復元口径16.8㎝。184は青磁碗の底部片、185は陶器壺の底部片。186～190は管状の土錘。191は軒丸瓦で、文様は巴文。

第60図は2b区出土の鉄製品である。192～194はSD208出土。192は太めの鉄釘。194は不明鉄製品。径3.7㎝程度の不整円形で、半球状にカーブする。195・196はSK210出土の鉄釘、197はSX205出土の鉄釘である。

Fig.61　113 次 3 区全体実測図　(S=1/300)

第４節　３区の調査

１．調査の概要

２区の北側に位置する。調査区中央やや東寄りに南北方向の共同溝が存在するため、その部分は調査対象から除外し、共同溝の東側を３a 区、西側を３b 区と呼称した。調査区の大部分が撹乱を受けており、砂丘面が残っている部分は少ない。わずかに残った砂丘部分で遺構を検出した。調査は令和３年 12 月に行い、調査面積は約 2,000 ㎡である。

３a 区では南端と中央付近に砂丘面が残っており、GL-110 ㎝の標高 2.1 m付近で中世の土坑、ピット、墓を検出した。その他の部分は標高 1.0 m～ 0.7 mまで撹乱の影響を受けており、遺構は残っていない。墓に隣接する撹乱坑からは湖州六花鏡が出土した。

３b 区では撹乱が広範囲に渡っている。標高 2.1 m付近の砂丘面が残った部分から墓３基を確認したものの、平面プランは把握できなかった。骨が断片的に残っているが、遺存状況はよくない。いずれも遺構の土の識別が困難で、遺構検出時は認識できなかった。

表土剥ぎの際、完形に近い青磁碗も出土した。付近には比較的多くの中世の墓が存在したと思われる。古代の須恵器片も少量出土した。

２．３a 区の遺構と遺物

①土坑（SK）

SK311（Fig.61）

３a 区南端の砂丘面、標高 2.1 m付近で検出した土坑である。長軸 0.9 m、短軸 0.7 mの不整円形で、深さ 20 ㎝を測る。埋土は黒褐色砂。少量の土師器が出土した。

出土遺物（Fig.62）

198 は土師器坏で、復元口径 16.0 ㎝、器高 3.7 ㎝。底部外面にはヘラ切り痕が残り、口縁部内外面は回転ナデ。底部内面に定方向のナデを施す。

②ピット（SP）

SP301（Fig.61）

３a 区南端の砂丘面で検出したピットである。東側は撹乱に切られているため、規模は不明。土師器、陶磁器、瓦が出土した。

出土遺物（Fig.62）

199 は土師器坏。復元口径 11.4 ㎝、器高 2.5 ㎝。底部外面には糸切り痕が残り、口縁部内外面には回転ヨコナデを施す。200 は白磁小碗の口縁部片。201 は瓦質の風炉か。口縁部外面には１㎝程度の幅で線刻を施している。胎土には微細な金雲母や砂粒を多く含む。202 は平瓦片で、表面の摩滅が著しく、調整不明瞭である。

③その他の遺物（Fig.62・63・64・65）

203 は撹乱 306 から出土した土師器坏である。復元口径 12.8 ㎝、器高 2.3 ㎝。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。

204 は管状の土錘。残存長 3.7 ㎝、幅 1.7 ㎝。

205 は調査区中央の撹乱 307 から出土した素文の湖州六花鏡である。完形品で、直径 14.4 ㎝、鈕高４㎜、縁部厚４㎜で、中央に幅 1.1 ㎝の鈕が付く。縁は玉縁状にやや厚くなる。SK209 出土の湖州鏡とは異なる形状である。撹乱から出土したため状況は判然としないが、木質が付着しているため元々は箱に納められていた可能性もある。

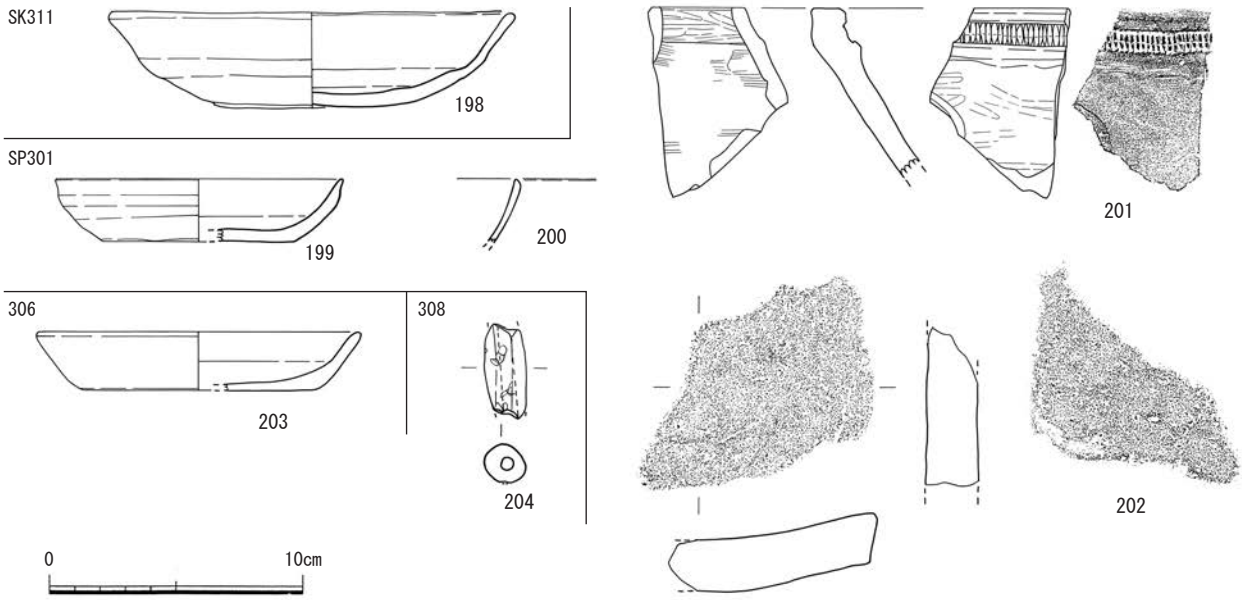


Fig.62　SK311・SP301・SX306 出土遺物実測図　(S=1/3)

湖州鏡 205 が出土した撹乱 307 の西側には砂丘面が残っており、撹乱 307 隣接部分からは人骨(SX310) も確認された。撹乱によって破壊されているが、本来は墓があり、湖州鏡はその副葬品であった可能性が高い。

Fig.64 は砂丘面検出時の出土遺物である。206 は陶器の大甕口縁部で、部分的に灰色の釉がかかる。内外面ともに露胎部分はにぶい赤褐色を呈する。207 は白磁碗で、底部を欠く。復元口径 16.0 ㎝。全面に透明釉を施す。208 は龍泉窯系青磁碗の口縁部片である。外面には蓮弁文を施し、オリーブ灰色の釉をかける。209 は土師器小皿で、復元口径 9.0 ㎝、器高 1.1 ㎝。底部の切り離しは糸切り。210 は土師器坏で、復元底部径 8.8 ㎝。底部外面には回転糸切りと板状圧痕が残る。211 は管状の土錘。212 は厚さ 8.5 ㎝の石製品破片。石臼か。幅 1 ㎝弱の溝が 7 本刻まれている。

Fig.65 は砂丘砂を掘り下げた際に出土した遺物である。213 は白磁碗の口縁部片で、端部が外側に折れる。214 は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、外面には鎬蓮弁を施す。215 は土師器坏の口縁部片。内外面ともに回転ヨコナデを施している。216 は土師器小皿で、口径 9.2 ㎝、器高 1.4 ㎝。口縁部内外面は回転ヨコナデ、底部内面にはナデを施す。底部外面はヘラ切り痕と板状圧痕が残る。217 は土師器坏の底部片。底部の切り離しは回転糸切り。218 は土師器坏で、口径 15.4 ㎝、器高 3.7 ㎝。底部はやや丸みをもつ。底部外面には回転ヘラ切りと板状圧痕の痕跡が残る。内面にはコテ当てが見られる。219 は土師器椀の底部。高台部の復元径は 5.9 ㎝、残存器高 3.0 ㎝。

３．３b 区の遺構と遺物

①不明遺構（SX）

SX321（Fig.66）

３b 区の中央東寄り、幅３m程の帯状に南北方向に砂丘面が残る部分で検出した。検出面の標高は 2.1 m。20 ㎝前後の複数の礫とともに人骨が出土したことから墓と判断したが、西側が撹乱に切られているうえ、砂丘砂と遺構埋土の区別が困難で平面形は把握できていない。付近から土師器、陶磁器が出土しており、13 世紀頃の墓と思われる。

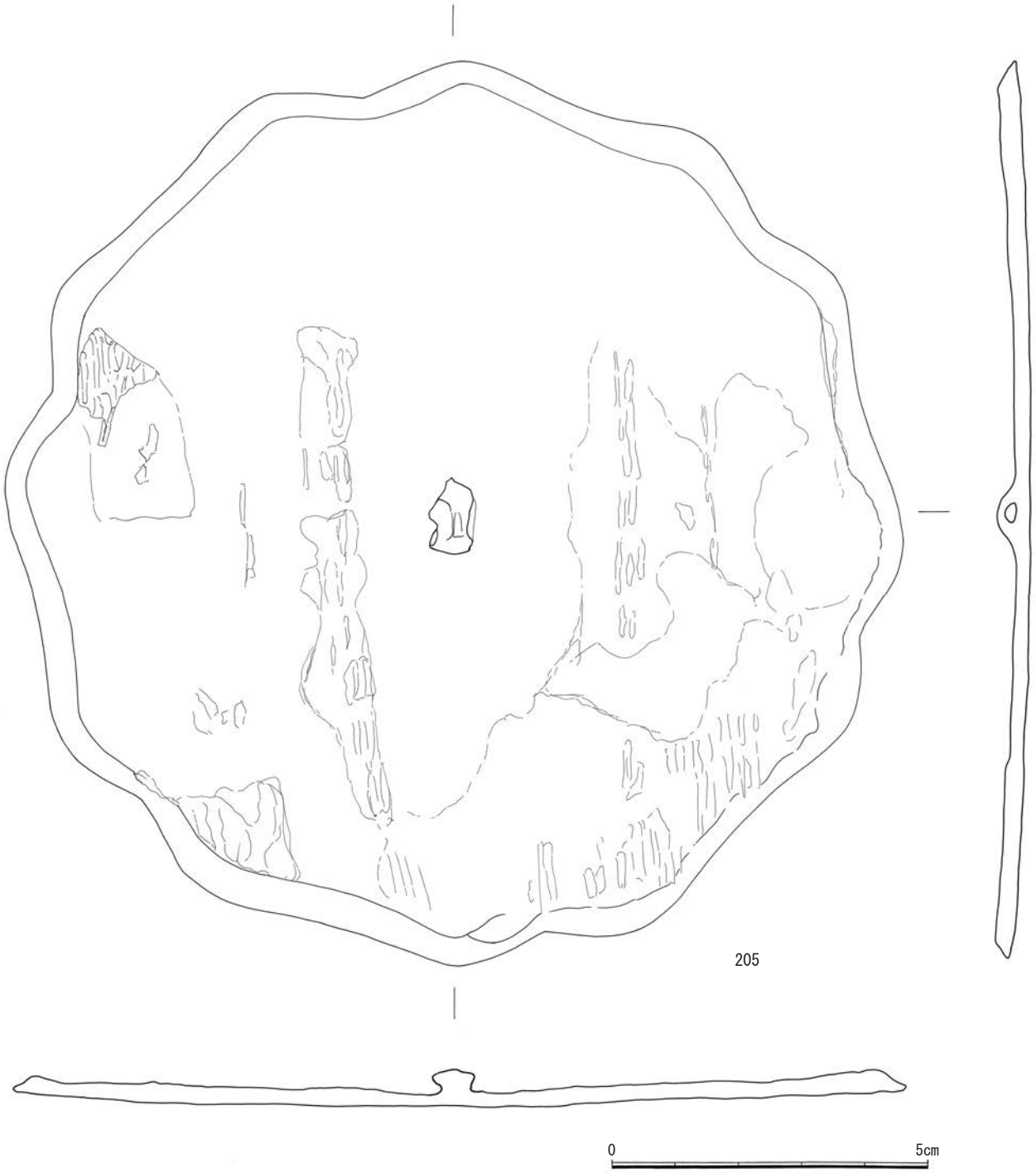


Fig.63　3区撹乱出土銅鏡実測図　(S=1/1)

出土遺物（Fig.67）

220・221は土師器皿で、ともに底部切り離しは回転糸切りである。221には板状圧痕も残る。221は完形で、礫のそばから出土した。口径8.1㎝、器高1.0㎝。222も礫の近くから出土した土師器坏である。復元口径12.6㎝、器高2.6㎝。体部内外面には回転ナデを施し、底部外面には糸切りの痕跡が残る。223は龍泉窯系青磁の小碗口縁部片である。復元口径10.5㎝。外面には鎬蓮弁を施し、灰オリーブ色の釉をかける。

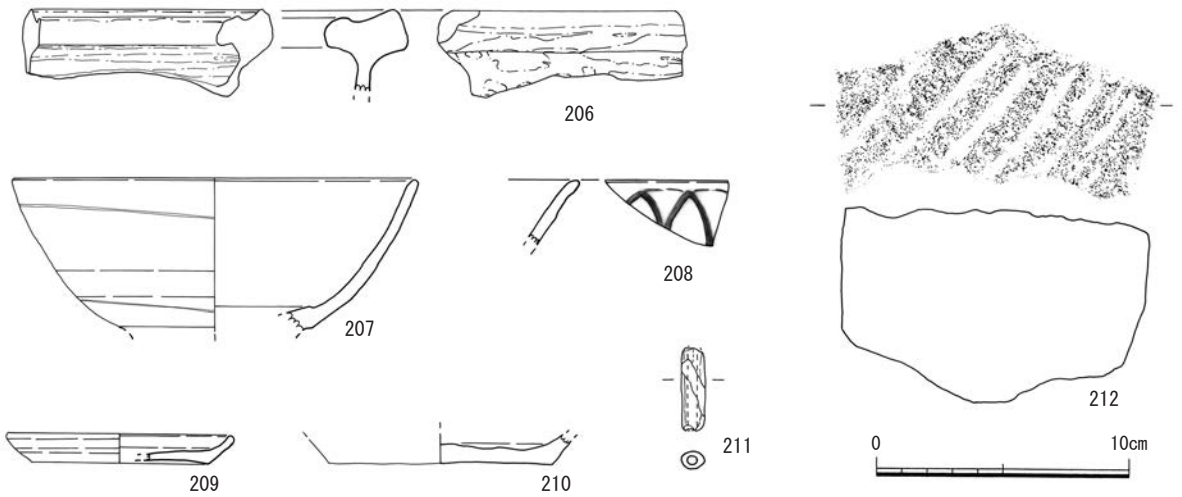


Fig.64　3a 区出土遺物実測図１　(S=1/3)

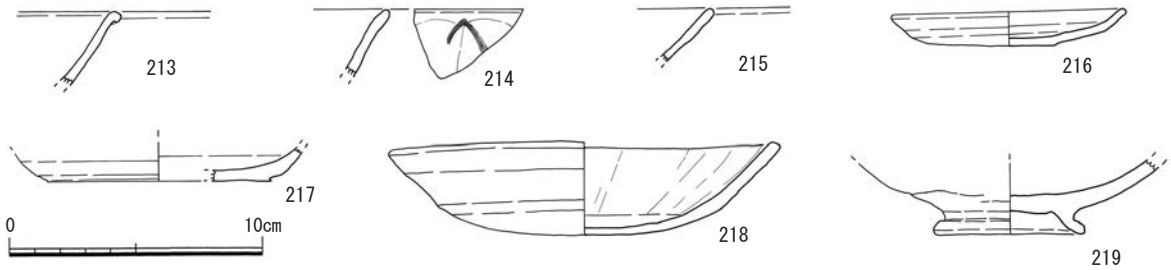


Fig.65　3a 区出土遺物実測図２　(S=1/3)

SX323（Fig.61）

SX321 のすぐ東側で検出した墓である。SX321 のような礫はなく、平面形も把握できず、人骨片のみが出土したため、SX323 として位置だけ記録した。SX321 と同じく埋土が識別できなかったが、鉄釘が出土したため、木棺墓が存在したものと思われる。土器等の遺物が出土していないため、時期の判断はできない。

SX324（Fig.61）

SX321・323 の北５ｍの地点で検出した墓である。標高 2.2 ｍ付近で人骨片を検出した。SX323 と同様、平面形・時期も不明である。鉄釘が出土しており、木棺墓であったと推測される。

②その他の遺物（第 68・69・70 図）

砂丘面検出時や砂丘砂の掘り下げ、撹乱掘削時等に出土した遺物である。224 は土師器皿、225・226 は土師器坏である。224・225 の底部はともに糸切りである。227 は土師器椀の口縁部である。228・229 は土師器椀の底部、230・231 は瓦器碗の底部である。

232 ～ 234 は須恵器坏身の口縁部片、235 は須恵器坏蓋の口縁端部である。236 は須恵器高台付坏で、復元高台部径 7.8 ㎝。237 は須恵質土器の鉢である。

238 ～ 243・245 は白磁碗の口縁部で、器形にバリエーションが見られる。244 は白磁皿の口縁部、246 は白磁碗の底部である。

247 ～ 251 は龍泉窯系青磁碗である。247・248 は外面に蓮弁文を施す。249 は小碗で、復元口径 10.2 ㎝、器高 4.2 ㎝。外面は無文、内面には文様を施す。高台畳付まで施釉し、底部外面のみ露胎である。250 は碗底部で、底部径 6.0 ㎝。内面見込みに花文を施す。251 は表土剥ぎの際に排土から採集した、ほぼ完形の碗である。口径 17.1 ㎝、器高 7.3 ㎝。内面には花文を施し、底部外面を除いて施釉する。

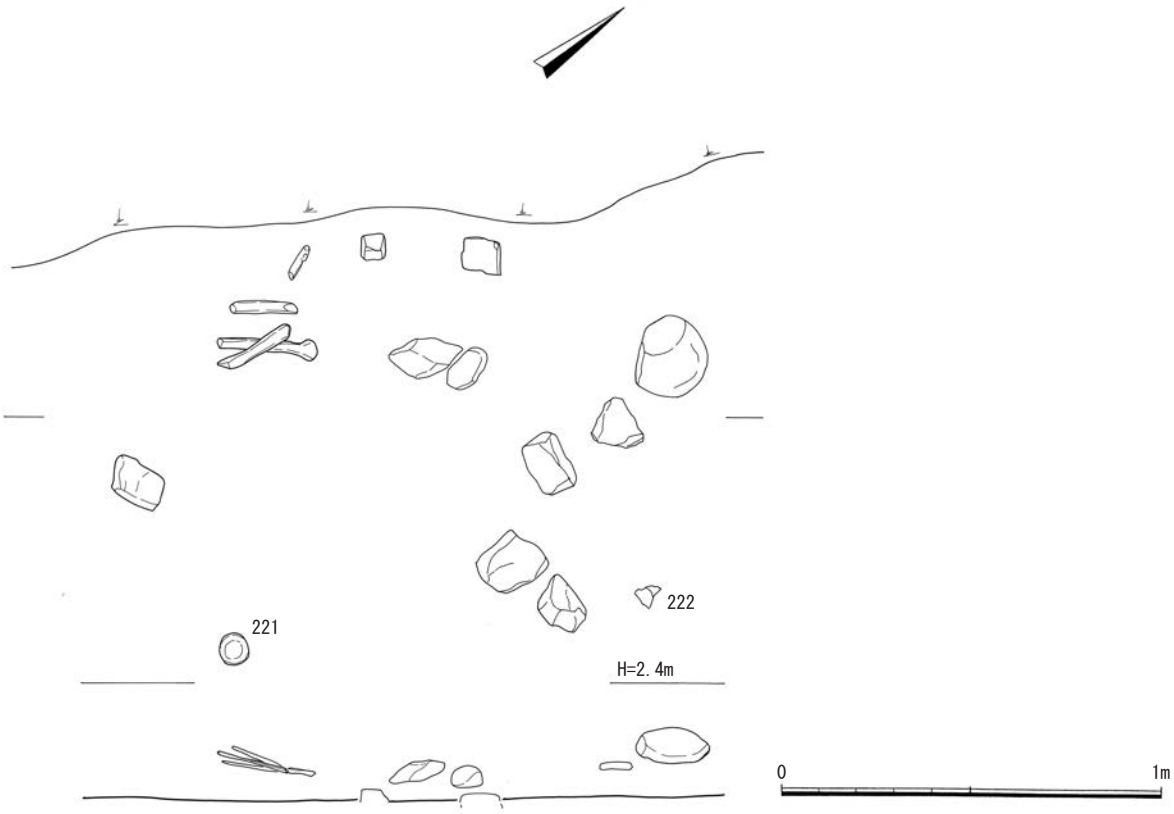


Fig.66　SX321 遺構実測図　(S=1/20)

Fig.67　SX321 出土遺物実測図　(S=1/3)

252 は磁器の小碗で、第 92 次調査の撹乱からも同様の資料が出土している。253・254 は陶器の捏鉢である。255 は青磁碗の底部片、256 は陶器壺の口縁部である。復元口径 9.1 ㎝。257 は七輪のサナか。

Fig.69 は撹乱から出土した瓦である。258 は近代の瓦で、外面には商標のスタンプが見られる。259 は引掛の平瓦か。260 は平瓦、261 は桟瓦で、ともに滑り止めを施す。

Fig.70 は３b 区出土の鉄製品である。262 は砂丘掘り下げ時に出土した。小刀か。残存長 9.8 ㎝、最大幅 2.8 ㎝、厚さ 0.3 ㎝。263 は砂丘掘り下げ時に出土した雁股鏃である。残存長 11.6 ㎝、最大幅 6.5 ㎝、最大厚 0.7 ㎝。先端は二股に分かれ、中央には長さ 2.3 ㎝、幅 0.5 ㎝の孔を設ける。264・265 は SX323 から出土した鉄釘である。264 は断面方形、265 は断面長方形。266 は SX324 出土の鉄釘で断面方形。267 は砂丘掘り下げ時に出土した不明鉄製品である。直径 4.7 ㎝の円形状で、中央には径 0.9 ㎝の孔を穿つ。孔の両横には径 0.7 ㎝程度の鋲を２つ有する。

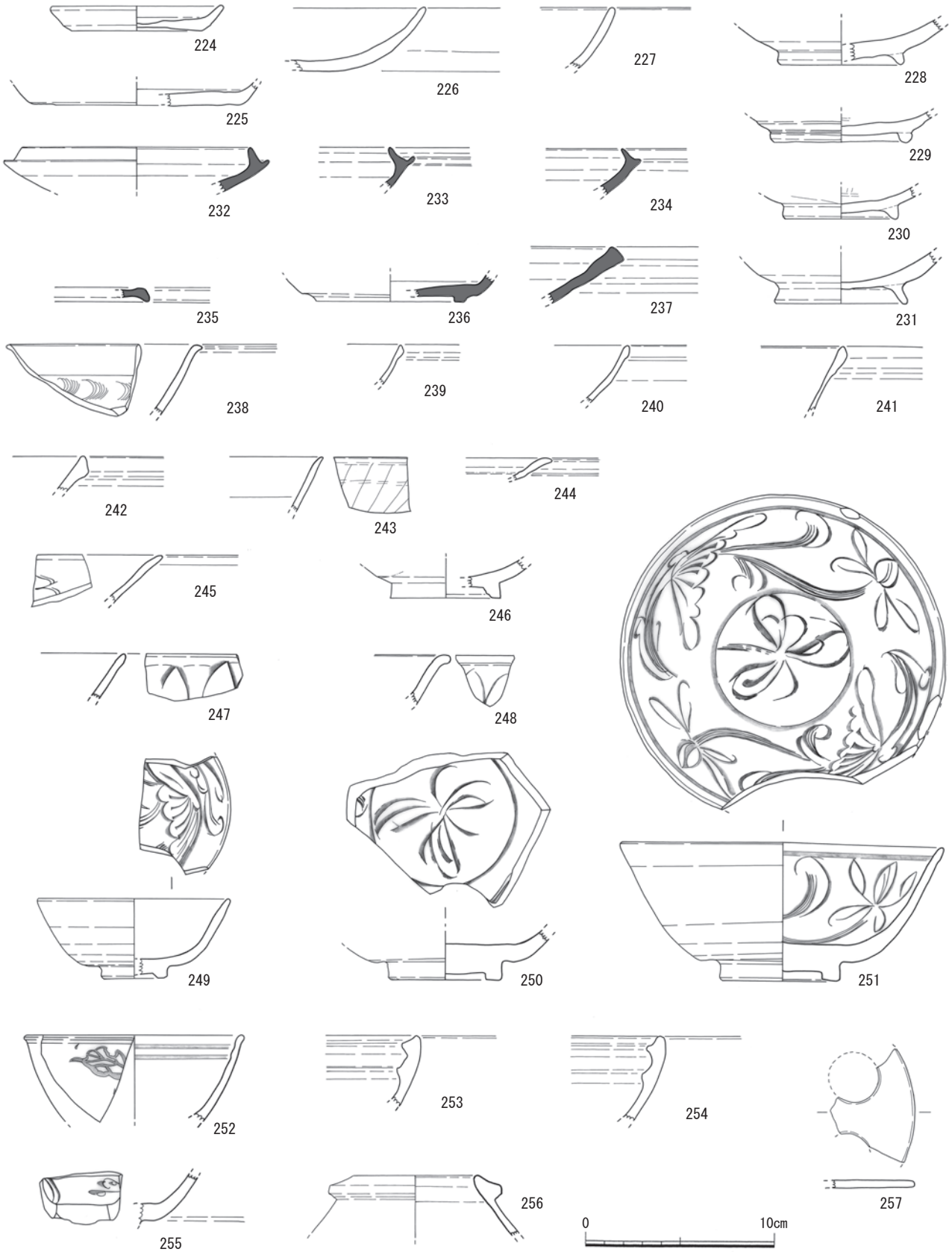


Fig.68　3b 区出土遺物実測図 1　(S=1/3)

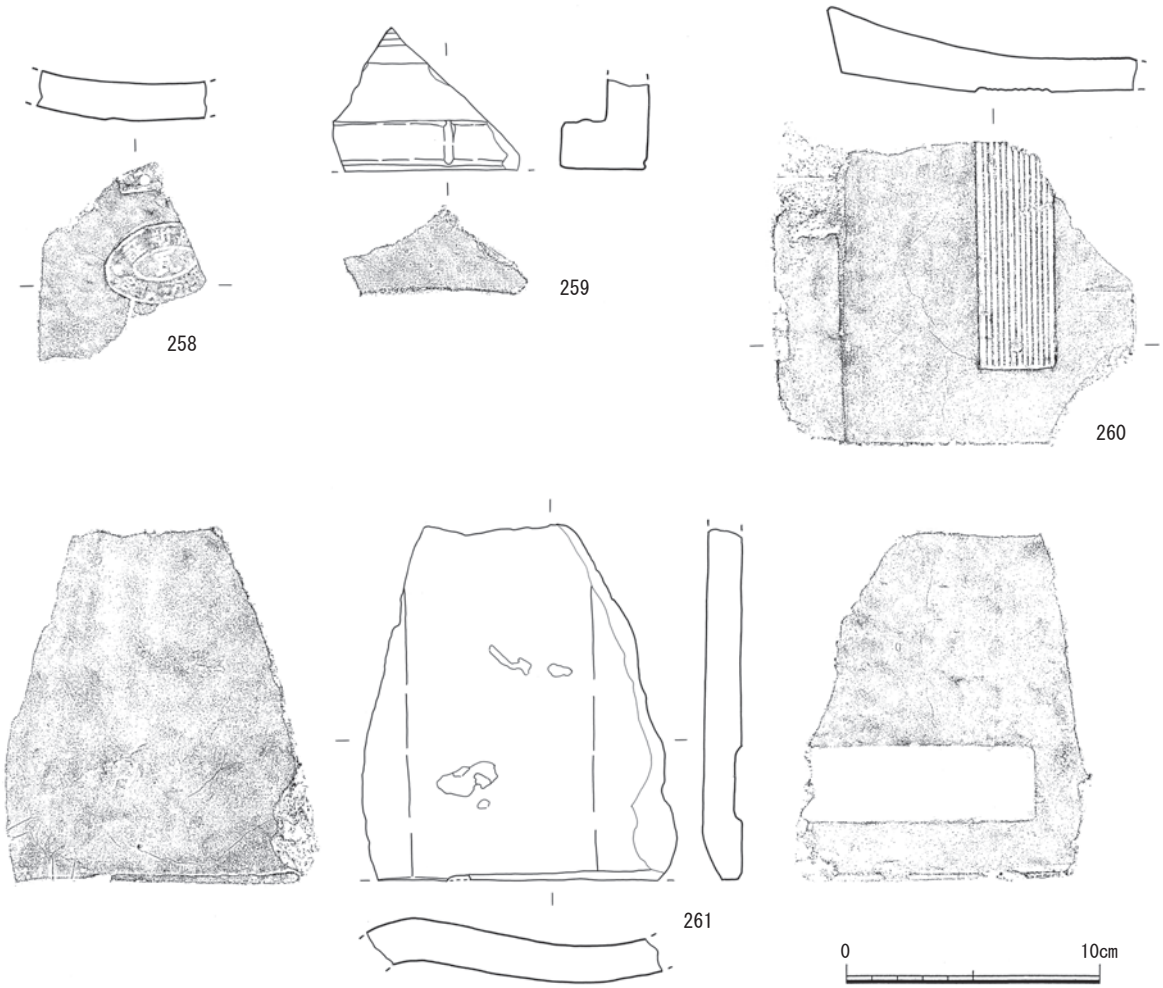


Fig. 69　3b 区出土遺物実測図 2　(S=1/3)

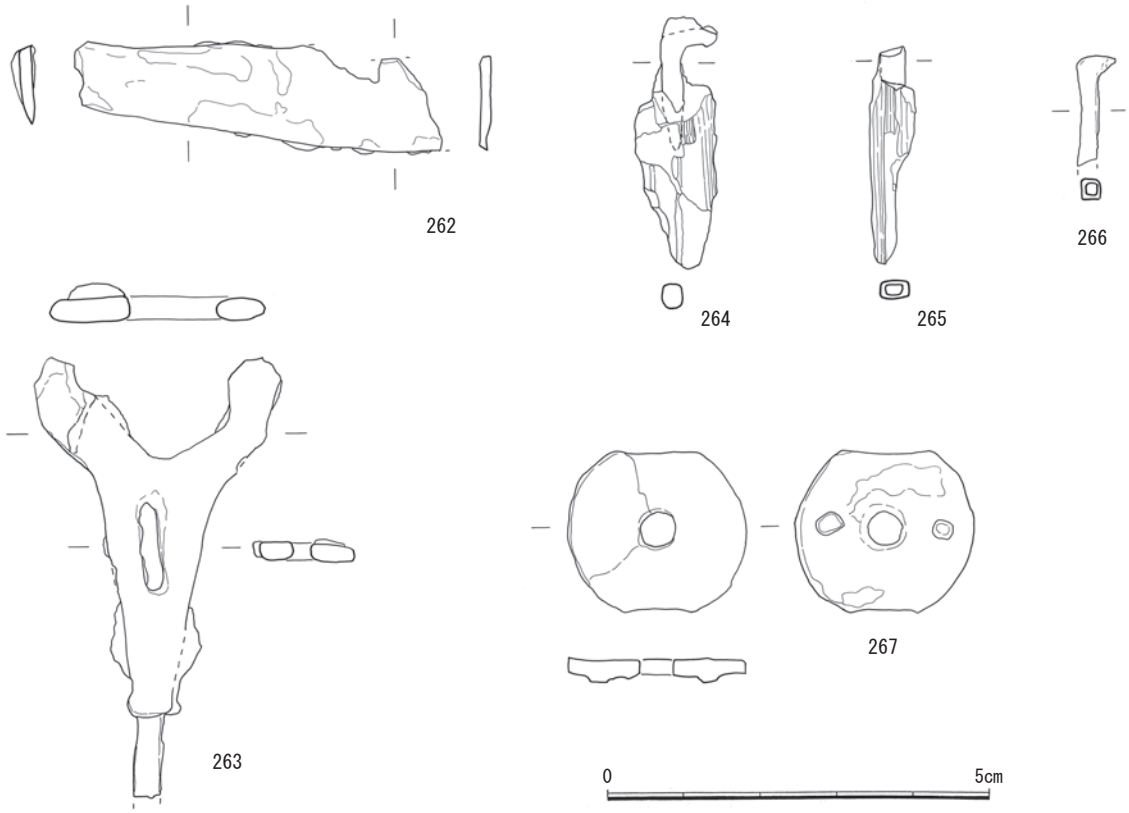


Fig. 70　3b 区出土鉄器実測図　(S=1/1)

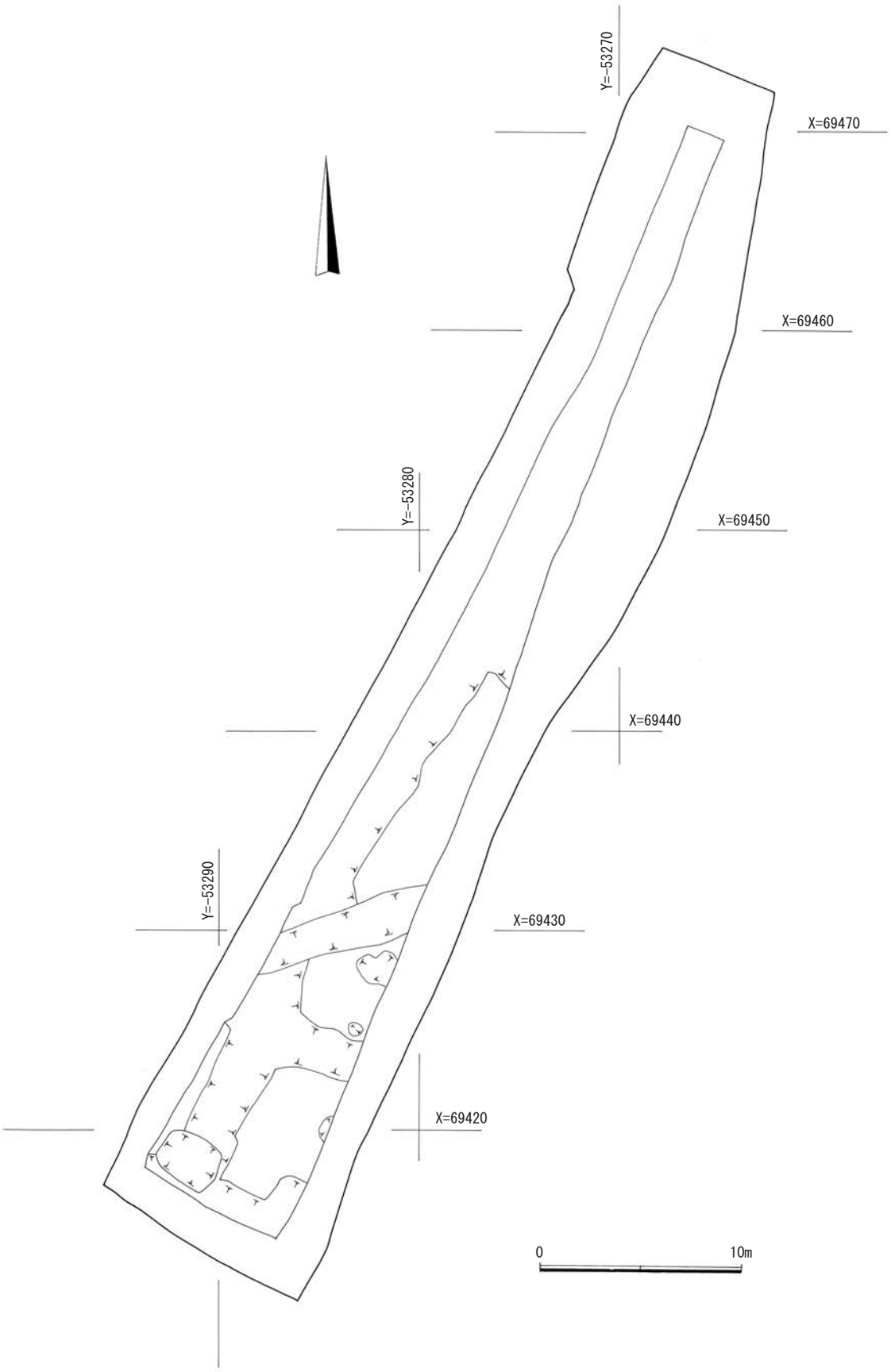


Fig.71　113 次 4 区全体実測図　(S=1/300)

第５節　４区の調査

１．調査の概要

３区の北側に設定した調査区で、南北 64 m、東西 10 m前後の範囲である。４区の調査は令和３年１月に行い、調査面積は約 600 ㎡である。調査時の地表面の標高は 3.2 m。調査区南東部分では、地表から 80 ㎝程で黄色砂が現れるが、ピットがわずかで、遺構はほとんど検出できなかった。他の調査区に比べると砂丘の残りは良さそうに思われたが、遺跡縁辺部であるためか、遺構は広がらない。砂丘の中央で南北方向の溝状遺構を検出して掘り進めたが、これは遺構ではなく二次的な変色（汚染）であることが判明した。調査区の西側半分及び北半分は撹乱により大きく削られており、遺構は残っていない。遺物は土師器、陶磁器が少量出土した。

Fig.72 は４区の東壁南端の土層である。地表から厚さ 80 ㎝の盛土を除去し、標高 2.4 m付近の黄色砂を検出面とした。遺構はほとんど確認できなかったが、全景写真撮影後、重機により黄色砂の断ち割りを行い、土層の検討を行った。その際、下山地質の下山正一氏に土層の成因・堆積について指導を受けた。検出面とした厚さ 60 ㎝程度の黄色砂（２層）の下は、厚さ 20 ㎝程度の粗砂～細砂が平板状に堆積（３層）し、その下は厚さ 40 ～ 50 ㎝の斜交層理（４層）が見られる。３層・４層ともに洪水作用による堆積で、東（宇美川方向）から西（博多湾方向）へ堆積している。４層は広がりながら浸食と堆積を繰り返した強い水流で、３層は層理が平行であることから洪水終盤の掃流による堆積であったと思われる。３層には干潟の蟹類の巣穴化石（生痕化石）が認められることから、３層堆積時は、河口の砂干潟の様相であったことが想定される。

２．遺構と遺物

上述のとおり、４区では遺構がほとんど確認できなかった。遺物は砂丘面検出時、撹乱、砂丘掘り下げ時、撹乱掘削時に少量出土したのみである。

出土遺物（Fig.73）

268 は撹乱から出土した土師器鉢あるいは坏か。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面には横方向のハケメを施す。269 も撹乱出土の青磁碗である。270 は砂丘掘り下げ時に出土した土師器坏である。底部は丸みをもち、底部外面にはヘラ切りの痕跡が残る。271 は管状の土錘である。

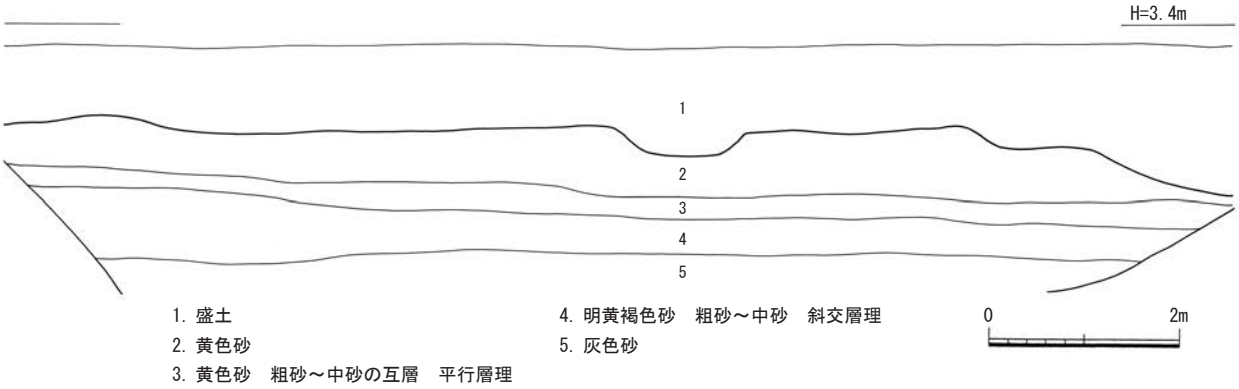


Fig.72　４区東側土層実測図　(S=1/80)

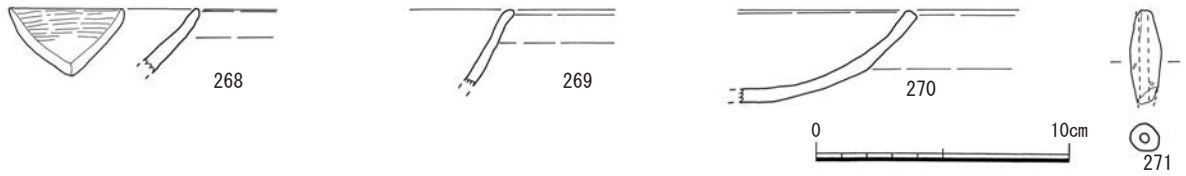


Fig.73　４区出土遺物実測図　(S=1/3)

第６節　５区の調査

１．調査の概要

調査区は４区の北にあり、九州大学埋蔵文化財調査室による調査地点 1601 の一部にかかっている。５区の調査は令和３年２月に行い、調査面積は約 600 ㎡である。撹乱が調査区の半分以上に及ぶが、西側は比較的遺存状況が良く、GL-50 ㎝で黄色砂となる。黄色砂の上面には、遺物を多量に含む褐色砂が約 20 ㎝堆積する。調査区周辺の GL は 3.2 ｍ前後。

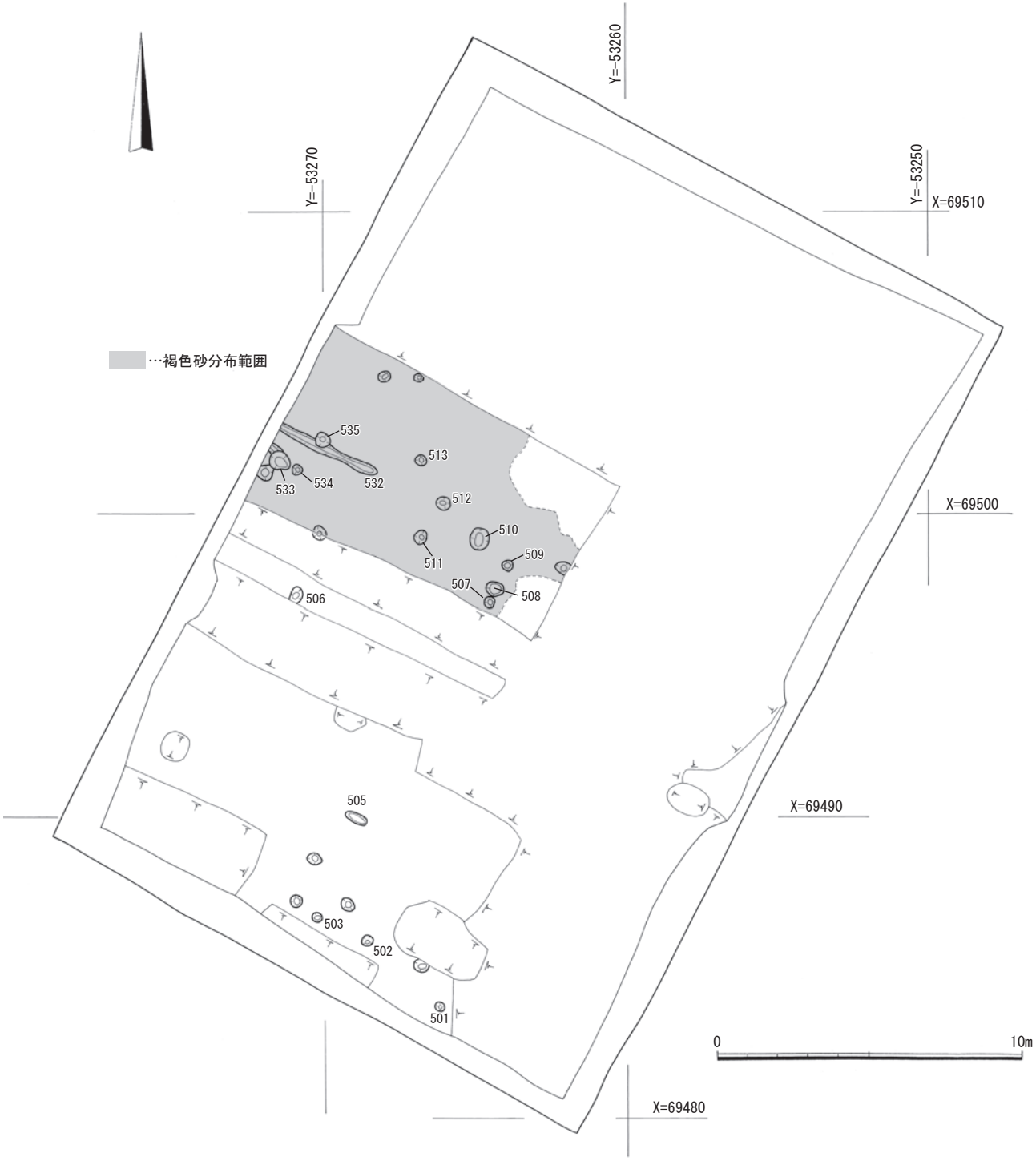


Fig.74　113 次 5 区全体実測図　(S=1/200)

Fig.75は５区西壁の土層図である。厚さ約20㎝の砕石や盛土の下に、遺物包含層である褐色砂が堆積し、標高2.6ｍ付近で黄色砂となる。

検出した遺構は柱穴と溝状遺構である。調査区南西端の黄色砂面と、調査区中央西側の褐色砂及び黄色砂面で検出した。褐色砂は中世の遺物を多量に含み、その上面からピットが掘り込まれているものもある。石積み遺構と溝状遺構を検出した九州大学埋蔵文化財調査室の調査地点1802（５区の西側）では、溝状遺構の上部から、東側にかけて暗褐色から黒褐色の砂が覆っており、今回検出した褐色砂は一連の層の可能性がある。

出土遺物はコンテナ数箱で、大半が遺物包含層である褐色砂からのものである。

２．遺構と遺物

①ピット出土遺物（Fig.76）

272はSP506から出土した土師器皿の口縁部片。

273・278はSP533から出土。273は土師器皿の底部で、外面には糸切り痕が見られる。278は青磁の皿か。

274・279はSP534出土。274は土師器皿の底部で、外面には糸切り痕が残る。279は陶器の蓋。

275～277はSP535から出土した土師器皿と坏で、いずれも底部外面に回転糸切り痕が残る。276は復元口径8.6㎝、器高1.2㎝。

280はSP510から出土した滑石製の石錘。長さ5.1㎝、幅1.8㎝。中央には紐掛けの溝を設ける。

②その他の遺物（Fig.77・78）

281～312は褐色砂掘り下げ時の出土遺物である。281・282は土師器皿で､281の底部外面には板状圧痕が残る。復元口径9.7㎝､器高1.3㎝。282の底部には糸切り痕が見られる。283・284は土師器坏で、ともに底部外面には糸切り痕と板状圧痕が残る。

285は土師質の鍋口縁部で、外面にはユビオサエの跡が、内面には細かいヨコハケが残る。286は瓦質土器の鉢で、内面には斜め方向のハケ調整を施す。287は陶器の壺である。胎土はにぶい赤褐色で、褐色釉を施す。

288・290は青磁皿の口縁部片で、290は外面に蓮弁を描く。289は青磁碗の底部で、底部外面は露胎である。291は高麗青磁で、内外面に象嵌により施文している。

292は瓦質の擂鉢である。復元底部径13.0㎝。全体的に摩滅が著しく調整不明瞭である。

293～312は管状の土錘である。長さ､幅にバリエーションが見られる。

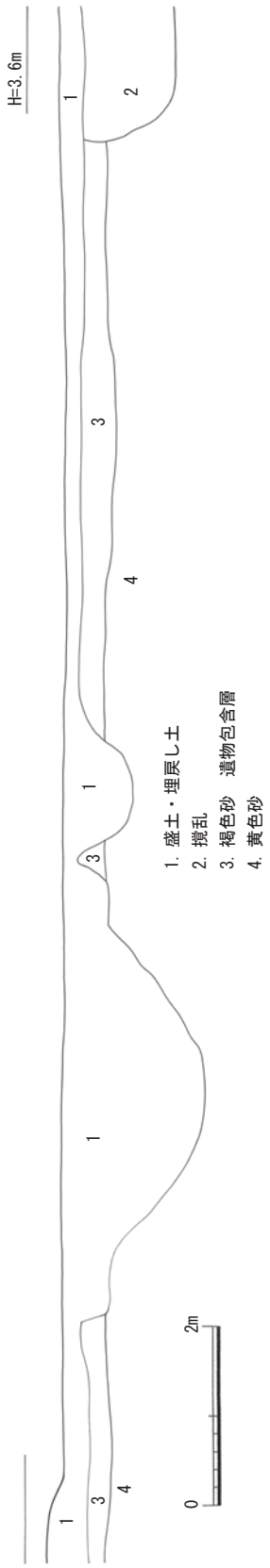


Fig.75　５区東壁土層実測図　(S=1/80)

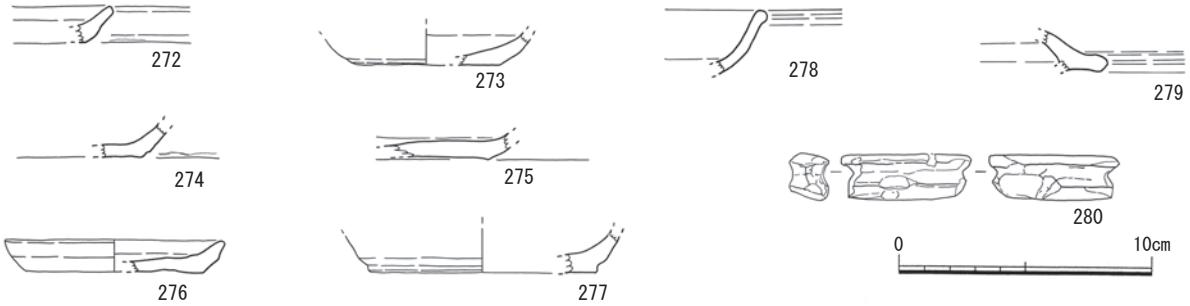


Fig.76　5 区 SP 出土遺物実測図　(S=1/3)

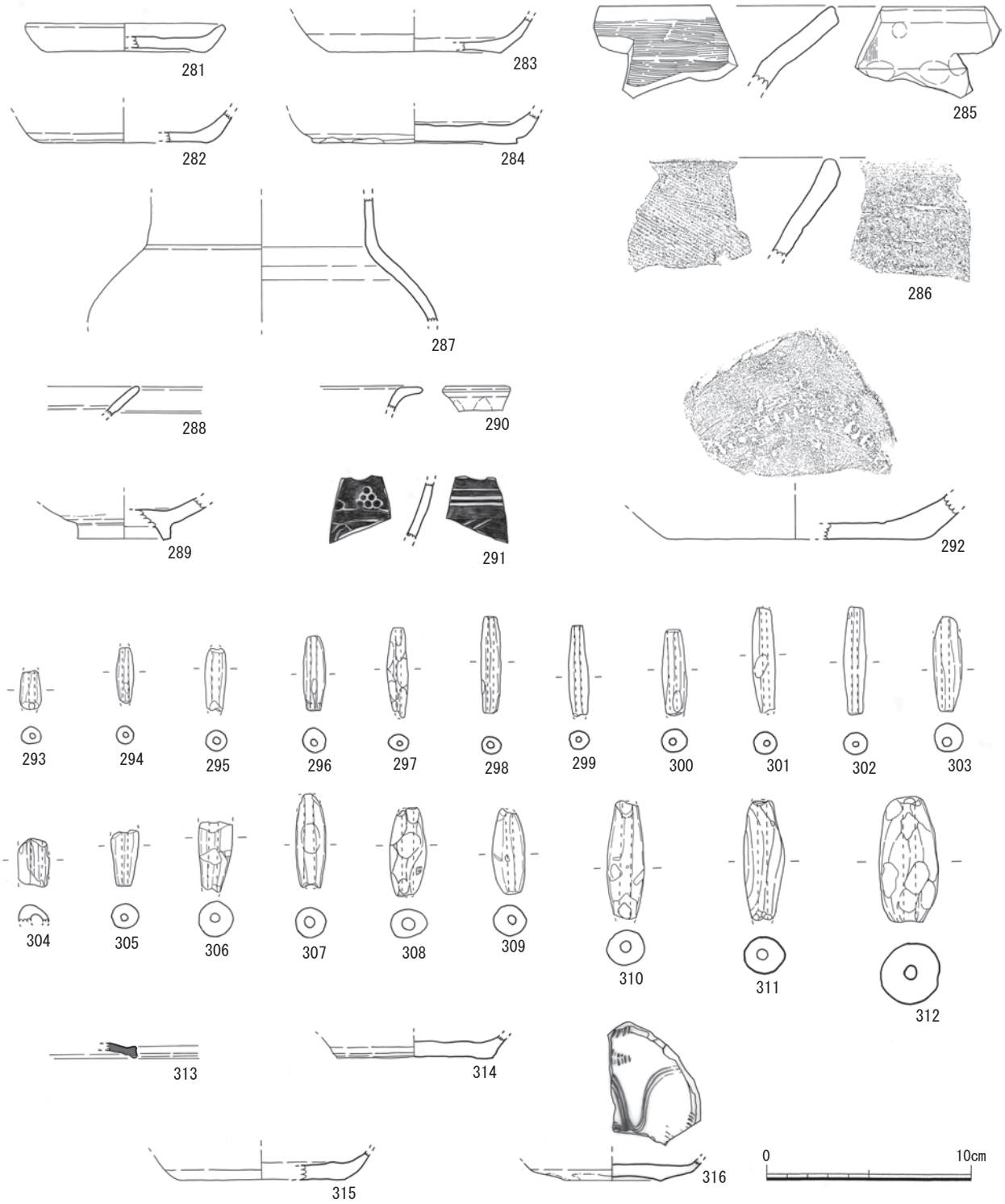


Fig.77　5 区出土遺物実測図　(S=1/3)

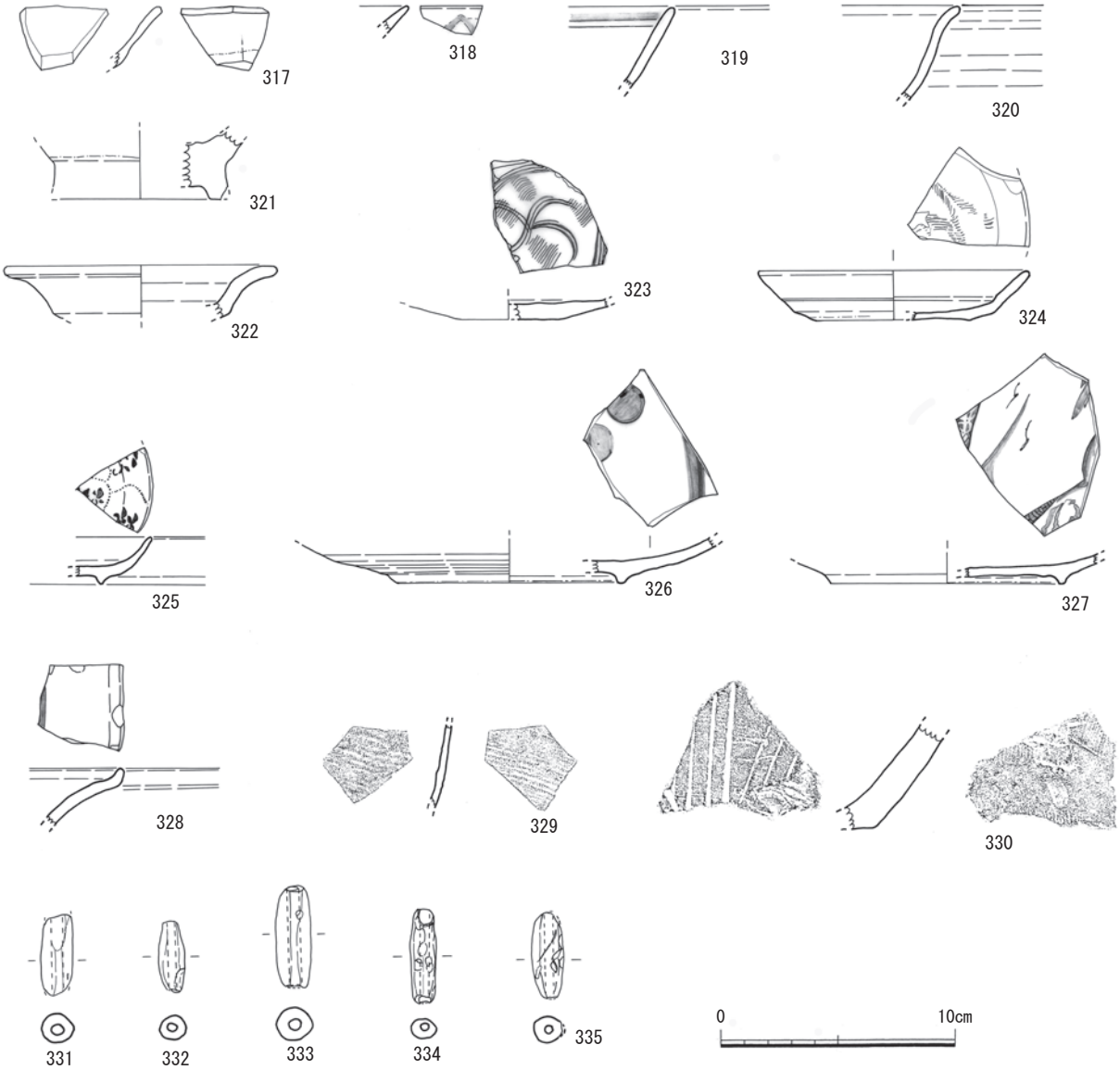


Fig. 78　5 区遺構検出・撹乱出土遺物実測図　(S=1/3)

313 ～ 316 は黄色砂を掘り下げた際の出土遺物である。313 は須恵器の坏蓋の口縁部片。314・315 は土師器皿の底部片で、ともに外面には糸切り痕が残る。316 は同安窯系の青磁皿の底部で、復元底部径 4.7 ㎝。内面見込みには文様を施す。

Fig. 78 は検出時や撹乱掘削時の出土遺物である。317 は白磁皿の口縁部片。318 は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、外面に蓮弁を描く。319・320 は青磁碗の口縁部で、319 は施釉前に口縁部内面に沈線を施す。321 は白磁碗の底部で、322 は青磁皿の口縁部。323 は龍泉窯系の青磁皿か。内面見込みに花文と櫛目を施す。324 は同安窯系青磁の皿で、復元口径 11.6 ㎝。内面見込みに櫛描き文を施す。325 は青花の小皿で、326・327 は染付の皿である。

328 は陶器鉢の口縁部、329 は陶器甕の胴部片である。330 は瓦質の擂鉢で、内面にはハケメと擂り目が見られる。

331 ～ 335 は管状の土錘である。

第７節　６区の調査

１．調査の概要

調査区は５区の北に位置し、長さ約 40 m、幅５～ 10 mの範囲である。６区の調査は令和３年１月に行い、調査面積は約 370 ㎡である。調査区の東半分は撹乱により砂丘面は残っていない。遺構はわずかで、大半が撹乱坑であった。遺物は土師器、陶磁器等が少量出土した。

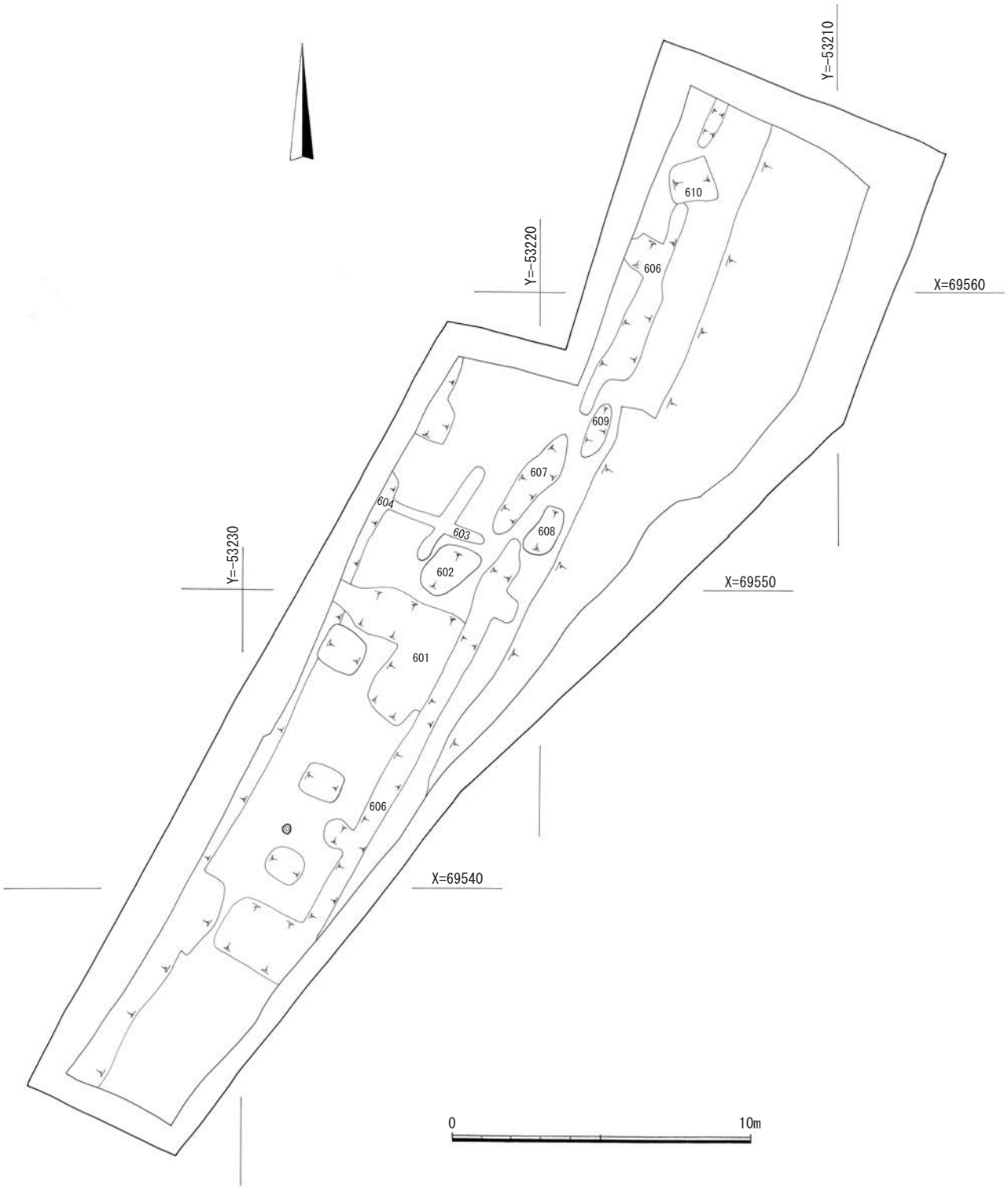


Fig.79　113 次 6 区全体実測図　(S=1/200)

Fig.80は６区西壁の土層図である。調査時の地表面の標高は3.2ｍ前後で、厚さ1.5ｍの盛土･撹乱の下で黄色砂（２層）を検出した。検出面の標高は1.8ｍ付近である。４区と同様、全景写真撮影後に重機により黄色砂の断ち割りを行い、下山正一氏の指導を受けながら土層の堆積状況の確認を行った。２層の下の３層・４層ともに北から南へ向かって低くなり、また、一部直交するトレンチで確認したところ、東から西へ低くなっていた。６区においても、４区と同様に洪水作用による堆積で、東（宇美川方向）から西（博多湾方向）へ堆積している。また、２層の黄色砂は砂丘の基底の可能性もあるが、堆積構造が不明瞭で、明確な浜堤とは判断できないようである。

２．遺構と遺物

上述のとおり、６区では遺構がほとんど確認できなかった。遺物は砂丘面検出時、砂丘掘り下げ時、撹乱掘削時に少量出土したのみである。

出土遺物（Fig.81）

336・339は撹乱602から出土した。336は土師質の鍋の口縁部で、内面には細かい横方向のハケを、外面にはヨコナデを施す。339は土師器坏の破片で、底部外面には糸切り痕と板状圧痕が残る。

337・340は撹乱605から出土した。337は染付の小碗で、復元高台部径2.5㎝。340は土師器坏で、底部外面には糸切り痕が見られる。

338は撹乱607から出土した青磁碗の口縁部片である。口縁端部は外反し、青緑色釉を施す。

341・342は撹乱610から出土。341は土師器皿である。復元底部径8.0㎝、残存器高1.1㎝、口縁部内外面はヨコナデ、底部外面には糸切り痕が残る。342は土錘である。長さ5.7㎝、幅2.3㎝。孔は径1.0㎝。

343は黄色砂掘り下げ時に出土した土錘である。長さ6.2㎝、幅2.9㎝。孔は径0.9㎝。

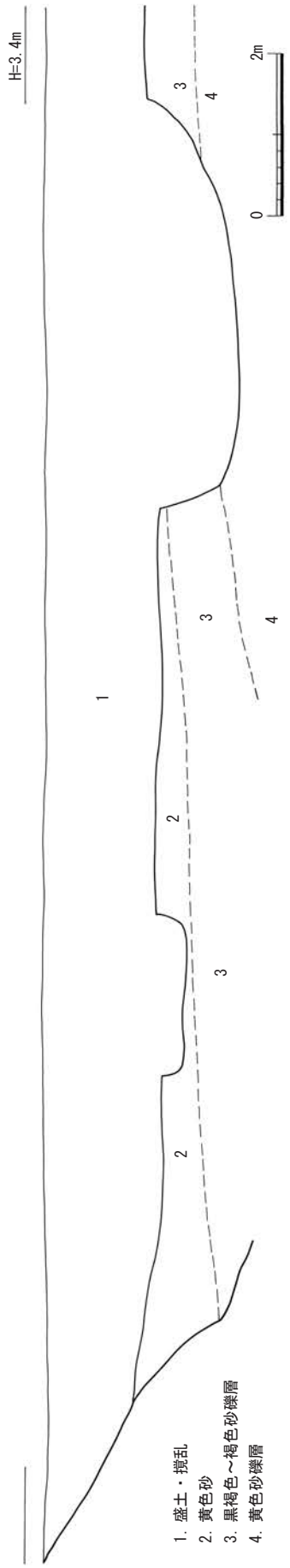


Fig.80　6区西壁土層実測図　(S=1/80)

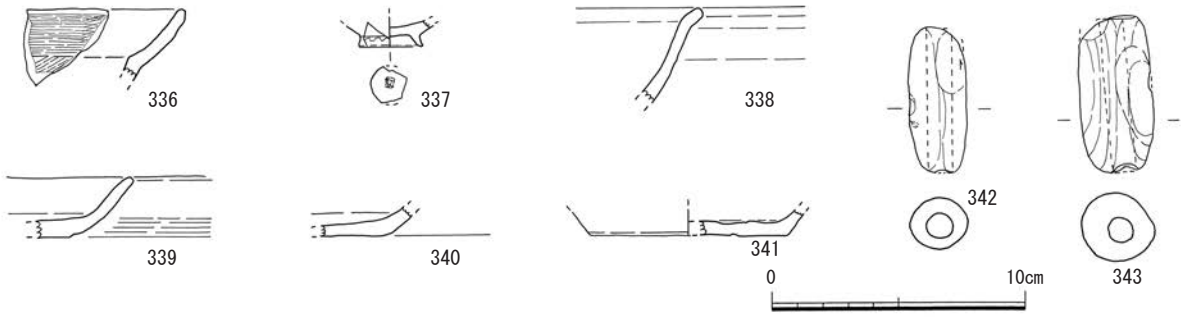


Fig.81　6区出土遺物実測図　(S=1/3)

第８節　まとめ

第113次調査では平安時代から江戸時代の遺構を確認した。6,000㎡以上の調査面積ではあるが、撹乱や削平の影響もあり、検出した遺構は多くはない。本調査の範囲は南北方向に長い形状で、南側は比較的遺構が多く、北へ向かうにつれ遺構が少なくなるという、箱崎遺跡の北側縁辺部の様相を把握することができた。遺物は土師器、須恵器、中国製陶磁器、銅鏡、鉄製品、土錘、石錘、井戸の木枠、板碑など、コンテナケース30箱分が出土した。

今回の調査で特筆すべき遺構として、２b区で検出された中世前半のSK209が挙げられる。木棺墓と思われるSK209からは土師器皿・白磁皿・青磁碗・湖州鏡・刀子・鋏・鑷子が一括して出土し、副葬品の良好なセットが確認された。特に鋏は類例が少なく、博多遺跡群で２例（147次・167次）あるものの、SK209はそれらより古い時期のものと思われ、注目される。３a区の撹乱坑からも湖州鏡が出土した他、３b区の複数個所で人骨片が確認されるなど、付近には多数の墓が存在したものと思われる。

２b区で検出した中世後半から近世頃の所産と思われる池状遺構SX205は、箱崎キャンパス内の「地蔵の森」のすぐ西側に位置する。『筑前國続風土記拾遺』には地蔵松原に「還國寺」の名が見える。また、現在の将軍地蔵尊本堂の顕彰碑には、将軍地蔵菩薩は九州大学工学部構内旧還國寺跡から移された旨が記されている。池状遺構や板碑の出土など、その関連が窺われる。

第 113 次調査区 3 区から南方向（北より）

第 113 次調査 2b 区南半全景（西より）

第 113 次調査 2b 区北半全景（南より）

SK209 遺物出土状況（西より）

SK209 出土遺物

SX205 検出状況（東より）

SX205 石組（東より）

第 113 次調査 3a 区全景（北より）

第 113 次調査 3b 区全景（南より）

第 113 次調査 4 区全景（南より）

第 113 次調査 4 区土層（西より）

第 113 次調査 5 区褐色砂検出状況（北西より）

第 113 次調査 5 区全景（北より）

第 113 次調査 6 区全景（南より）

第 113 次調査 6 区土層（南東より）

2a 区全景（南西より）

2a 区南壁土層
（北より）

SK201 土層（西より）

SK201 完掘状況
（西より）

2b 区南半全景
（北より）

2b 区南壁土層
（北西より）

2b 区北半全景
（北より）

SD208 土層（東より）

SD208 完掘状況
（西より）

SK207 土層（西より）

SK207 完掘状況
（南より）

SK209 遺物出土状況
（西より）

SK209 遺物出土状況
（南西より）

SK209 刀子出土状況
（西より）

SK209 完掘状況
（西より）

SK210 完掘状況
（東より）

SX205 検出状況
（上が東）

SX205 土層（北より）

SX205 石検出状況（北東より）

SX205 石検出状況（東より）

SX205 石検出状況（東より）

SX205 板碑出土状況（西より）

SX205 石組検出状況（東より）

SX205 石組（東より）

SX205 石組検出状況（南東より）

SX205 西岸上段礫（南より）

SX226 検出状況（西より）

3a 区土層（南より）

3a 区全景（南より）

3a 区全景（北より）

3 区全景（南より）

3 区全景（北より）

3b 区全景（北より）

SX321 検出状況
（北より）

4 区全景（北より）

4 区土層（北より）

4 区土層（北西より）

5 区全景（南西より）

5 区褐色砂検出状況
（南西より）

5 区褐色砂断面
（北より）

5 区全景（南より）

5 区と周辺（北より）

5 区土層（東より）

6 区全景（北より）

銅鏡付着物拡大画像（20 倍）

銅鏡付着物拡大画像（40 倍）

89

93

94

205

263

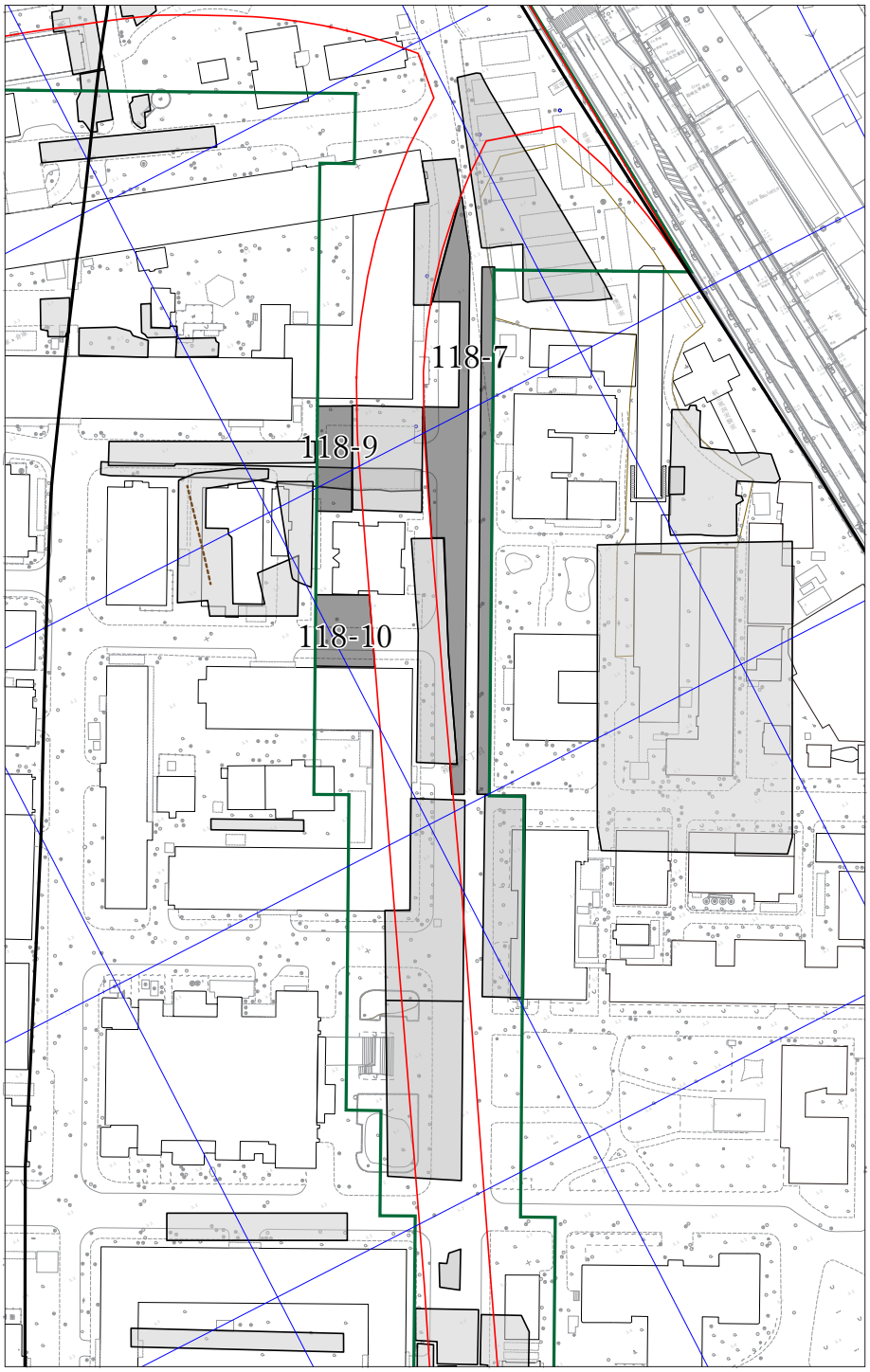


Fig. 82　箱崎遺跡第 118 次調査位置図（S=1/2,000）

第４章　第 118 次調査の記録

第１節　調査概要

（１）発掘調査の方法と経過

第 118 次調査は前年度第 113 次調査地の東西未掘部分を対象に実施した。調査開始時点で場内では都市計画道路共同溝の建設工事等が既に開始されており、対象地には工事業者の場内仮設道路が敷設されていたためこの道路を付け替えながら東→西の順に調査を進めたが、調査区のすぐ脇を 10 ｔダンプや重機が往来するなど、危険と隣り合わせの劣悪な環境下での調査を余儀なくされた。

調査は、まず東側（7･8 区）の表土はぎを 4 月 12（水）に開始し 5 月 26 日（水）に埋め戻し終了した。その後仮設道路の付け替えを待って、西側（9・10 区）の表土はぎを 5 月 28 日（金）に開始し、6 月 30 日に埋め戻し終了した。調査面積は 7･8 区が 1,847.623 ㎡、9 区が 312.046 ㎡、10 区が 266.114 ㎡、合計 2,425.783 ㎡。5 月 12 日（水）に 7・8 区の、6 月 22 日（火）に 9・10 区の全景写真撮影を高所作業車にて行い、調査記録は株式会社 CUBIC の「遺構実測支援システム　遺構くん cubic_ Ｃタイプ 2020」を使用して図化を行い、大学敷地内の計画座標ならびに国土座標上に位置付けた。遺構は検出順に連番号を付し、7 区は 7001 ～、９区は 9001 ～とし（８区・10 区は遺構なし）、頭に遺構の性格を表す記号を付した（SD= 溝、SK= 土坑、SP= ピット等）。

（２）発掘調査の概要　Fig.82･83

着手前の発掘調査地点は旧大学構内の建物が撤去されたあとの造成地であった。うち、東側 7・8 区には対象地を南北に縦断する形で古い共同溝の撤去工事による深い攪乱があるため調査から除外し、攪乱の西側を 7 区、東側を 8 区として分けたが、南側では分けずに掘っている。一方、西側の調査対象地区は建物基礎による攪乱を挟んで北側を９区、南側を 10 区としたが、10 区については削平と破壊が著しく遺構は皆無であった。一方、９区は比較的破壊を免れており、特に南半を中心に包含層が残存するなど遺構がよく残っていた。今次調査で確認した主たる遺構・遺物は主にこの９区において認められたものである。

７区・８区の概要　Fig.82･83、PL.1-1

７・８区は深い攪乱以外にも大学建設時のものと思われる攪乱や削平が著しく、遺構としては７区北端で土坑１基を確認したのみである（SK7010）。遺構は白色細砂（風成砂）上面で検出され、この上層に暗褐色砂質土が残る部分もあるが遺物は認められない。遺構面までの地表からの深さは 0.5 ～ 1.0 ｍを測る。

９区・10 区の概要　Fig.82･83･87･88、PL.2-1･2、3-1

９区の遺構は調査区中央部～南半部に認められた。いずれも白色細砂（風成砂）上面で検出され、残りの良いところではこの上層に遺物包含層である暗褐色砂質土が 10 ～ 30㎝の厚さに堆積していた。検出遺構は溝・土坑・ピットで、覆土は包含層と同じ暗褐色砂質土が主で、まれに黒褐色砂質土の遺構が認められた。地表面から細砂までの深さは 50 ㎝前後である。古代～中世の土師器、須恵器、陶器、中国産陶磁器、土錘の他、近世初期の肥前系陶磁器などが少量含まれており、遺構の時期は中世後半～近世初期のものとみられる。

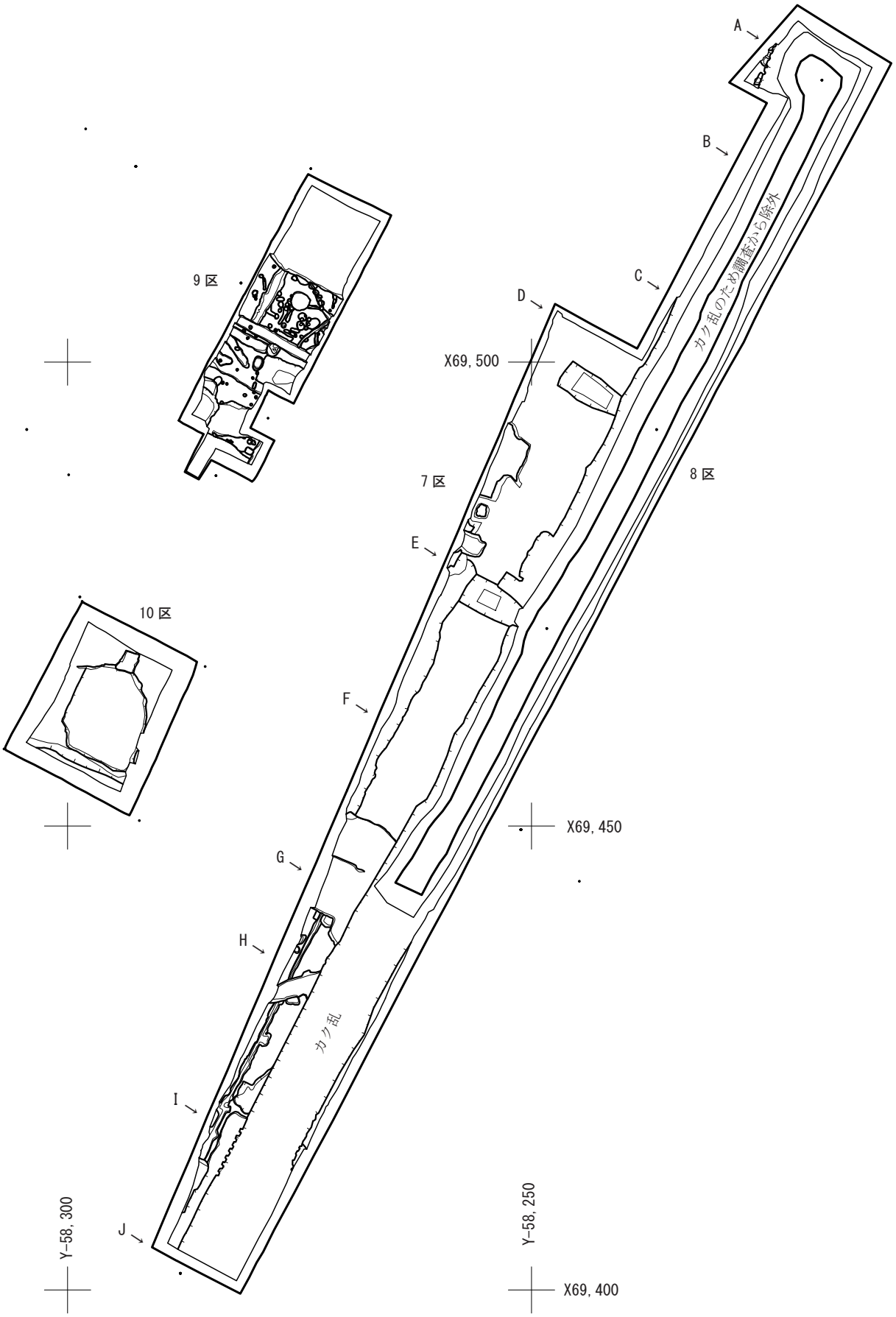


Fig. 83　箱崎遺跡第 118 次調査　7 ～ 10 区遺構配置図 (S=1/600)

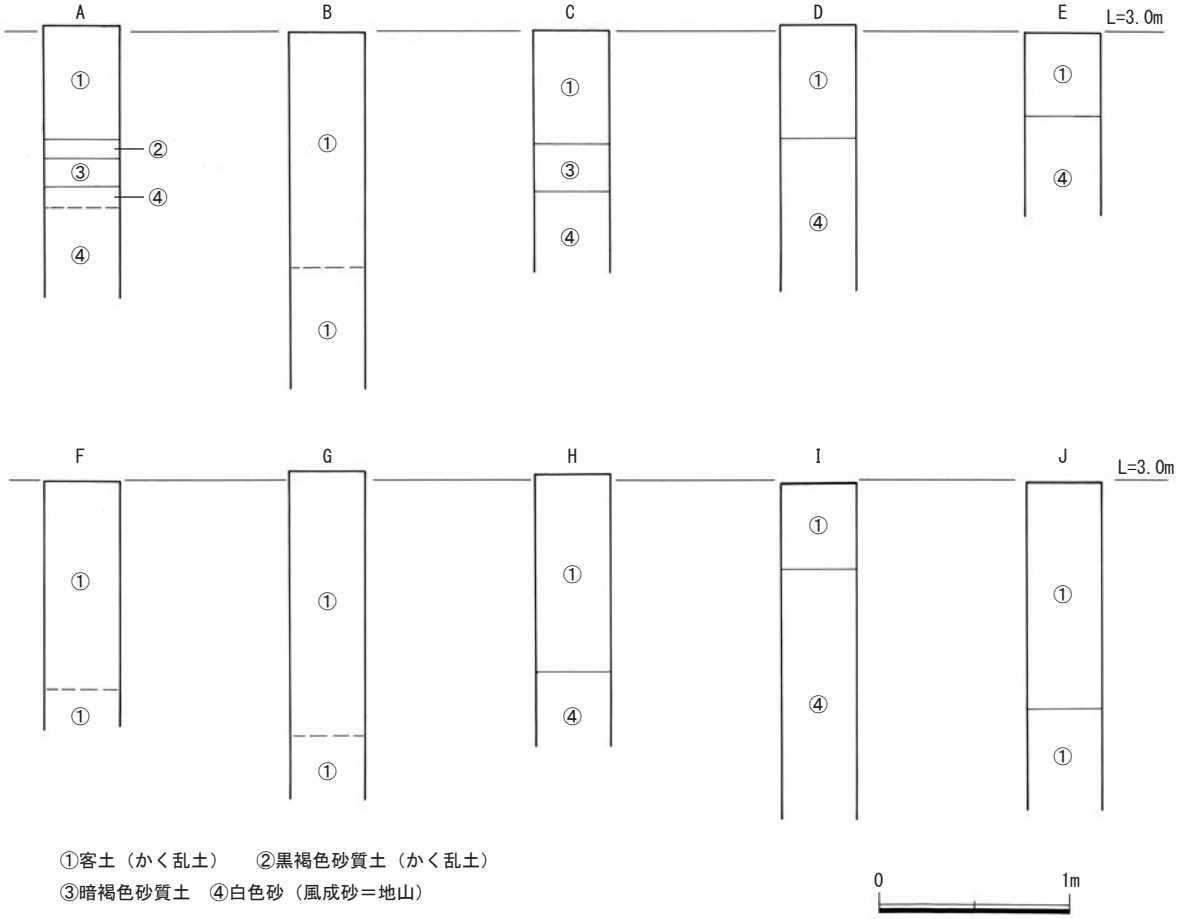


Fig.84　箱崎遺跡第118次調査　7区土層柱状図（S=1/40）

第２節　遺構と遺物

土坑ＳＫ７０１０　Fig.85･86、PL.1-2

７区の北端で検出した。西側は調査区壁にかかり、東側は共同溝撤去による撹乱に大きく切られている。ほんの一部を断片的に確認したのみであり、楕円形プランの土坑の可能性もあるが詳細は不明である。現状で長径1.8ｍ、短径0.8ｍ以上を測る。断面逆台形状を呈し、北側の底面がゆるやかに一段低く下がる。最も深い部分で深さ30㎝が残る。遺構覆土は暗褐色砂質土である。

ＳＫ７０１０出土遺物　Fig.86

中世土師器小片が４点、陶器小片が１点出土した。

１は土師器小皿である。底部糸切り離し。内面ヨコナデ調整で、内底ナデ調整。暗橙色を呈し、胎土精良で砂粒少なく、焼成良好。底径6.6㎝。

溝状遺構ＳＤ９０１０　Fig.89、PL.3-2、4-1

９区中央部東側で検出した溝状遺構である。調査区内で枝状に分岐しており北から順にＡ～Ｅの枝番を振った。枝溝に切り合いは認められなかった。Ａは北西～南東方向に伸び、調査区東壁際で南西に屈曲して伸びるＣに接続する。Ａの北西端は削平消失する。幅20～70㎝、深さ40㎝前後。ＢはＡの途中から分岐して西へ伸び、西端は攪乱坑で切られる。幅20～30㎝、深さ20㎝強。Ｃは上記のようにＡ東端から南西に伸び、南西端は攪乱溝に切られる。幅30～40㎝、深さ30㎝前後。
ＤはＣの途中から東へ分岐し短く調査区東壁まで伸びる。最大幅70㎝、深さ30㎝。ＥはＤのやや南

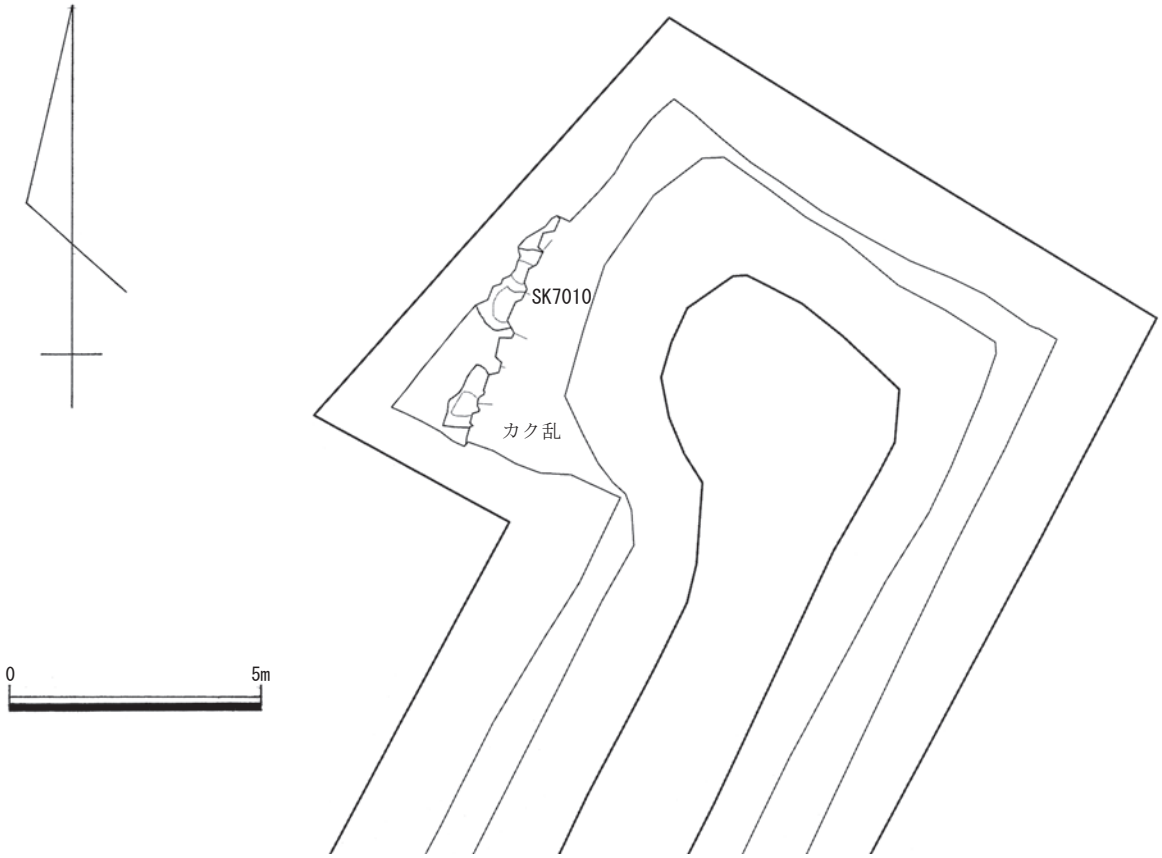


Fig.85　箱崎遺跡第118次調査　SK7010位置図（S=1/150）

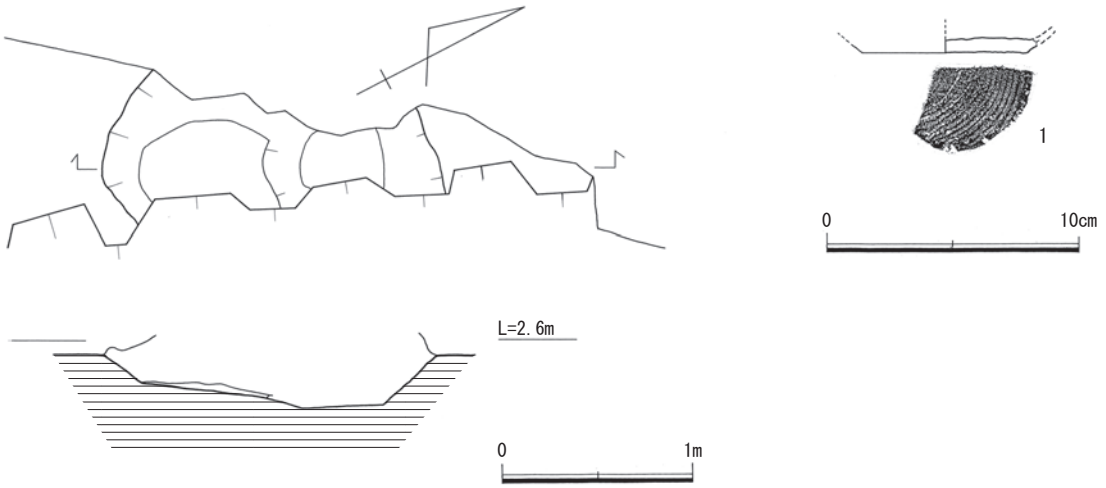


Fig.86　SK7010実測図（S=1/40）・出土遺物実測図（S=1/3）

側でCから分岐し、南へ伸びて調査区外へと消える。南端でSK9020と重複するが切り合いは不明確。幅30～45㎝、深さ25㎝でCより浅く底面に段がある。遺構覆土はe－e′の土層断面図に示した通り暗褐色砂質土の単純層で、各溝の底面に勾配はほとんどなく、水流があったような痕跡もなく、排水溝ではない。

この遺構の上層には20㎝ほどの遺物包含層（暗褐色砂質土）が堆積し、この層が固くしまってい

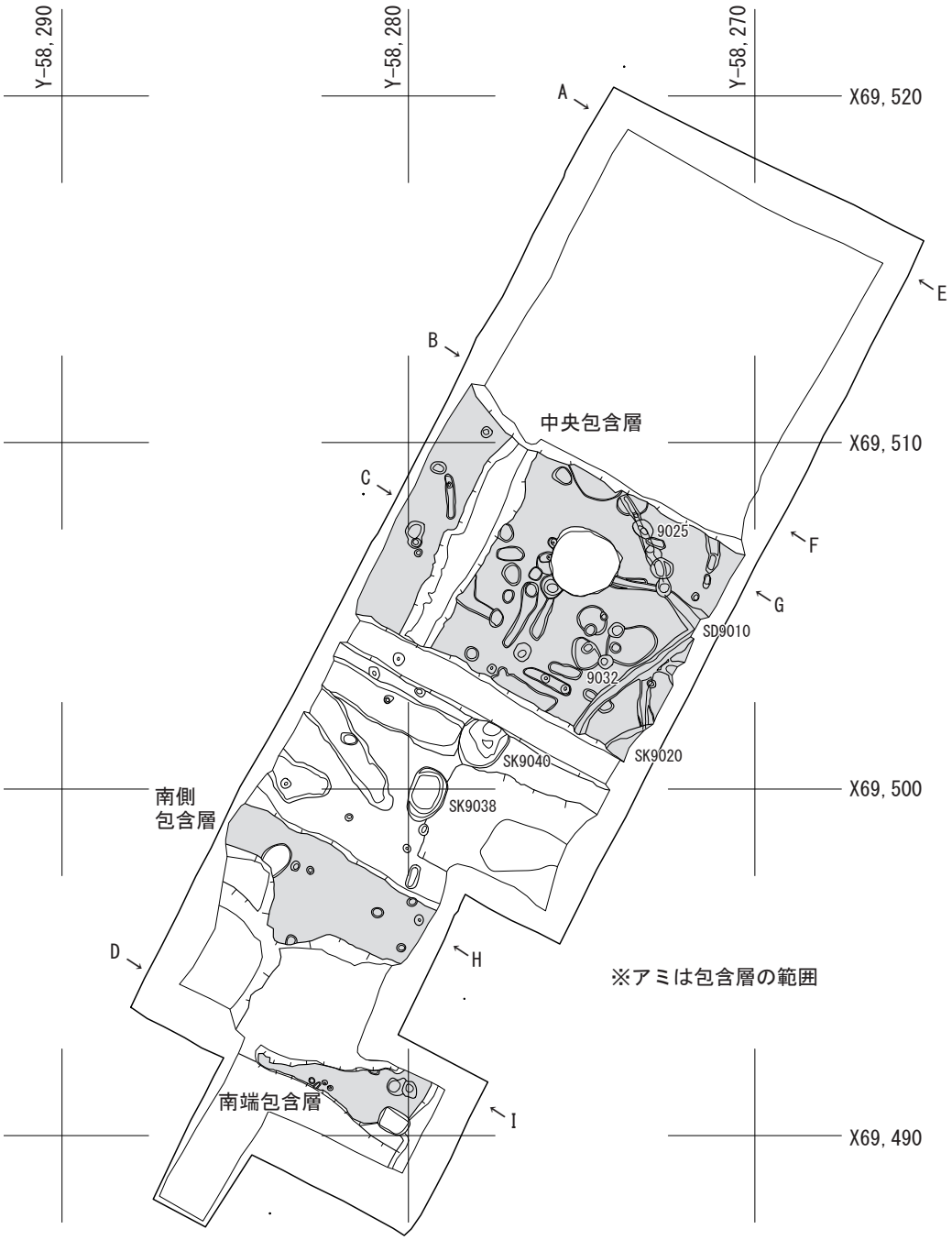


Fig.87　9区遺構配置図（S=1/200）

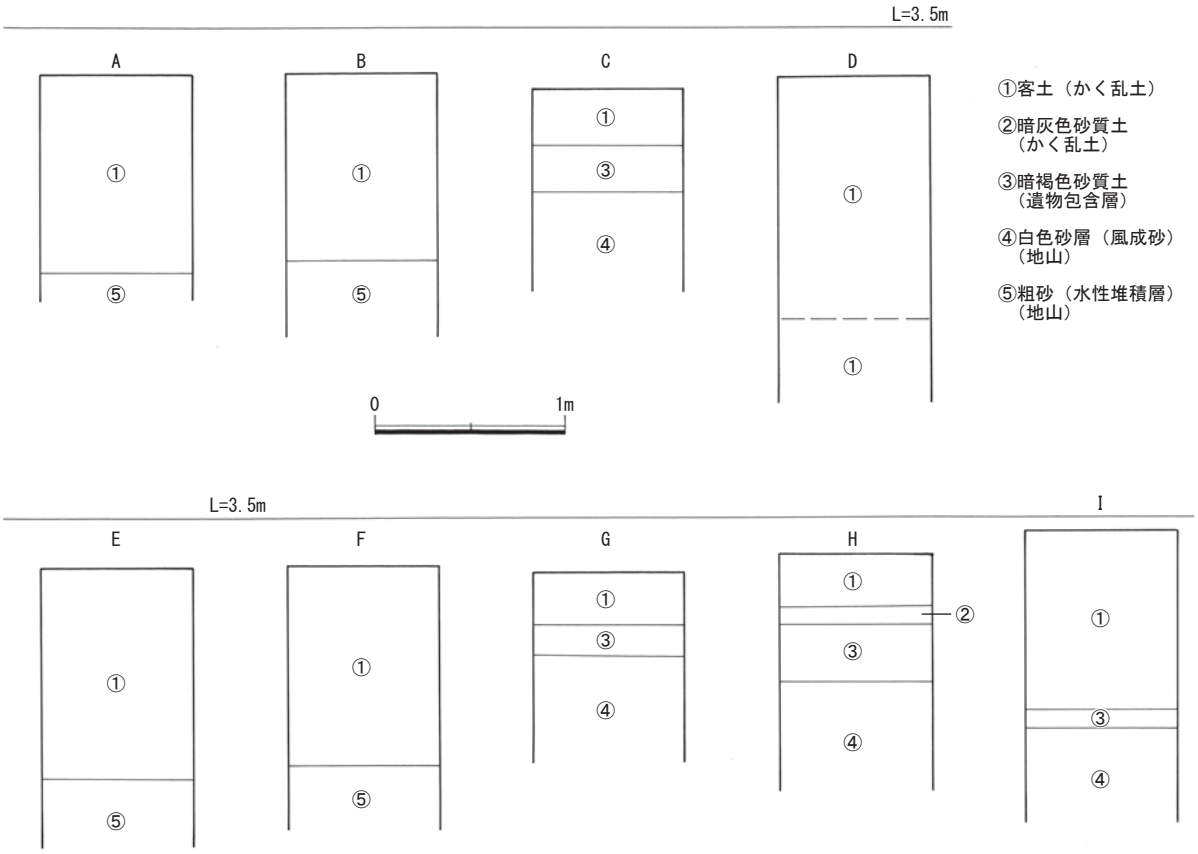


Fig.88　９区土層柱状図（S=1/40）

ることから、柔らかい砂丘層を小動物が掘り進んだ巣穴の可能性も考えられよう。

ＳＤ９０１０出土遺物　Fig.91

土師器（小皿など底部糸切り）、土師質土器（すり鉢、こね鉢）、陶器（すり鉢）、白磁、龍泉窯系青磁、土錘、不明土製品（人形？）、滑石片がコンテナ２箱出土した。いずれも小片である。

２は土師質土器鉢の口縁部小片。外面ナデ調整、内面横ハケ調整で、最後に口縁端部をヨコナデ調整。暗赤褐色を呈し、胎土に細砂粒・雲母粒を含み、焼成やや不良。内面に植物圧痕が残る。３は土師質土器スリ鉢底部小片。外面はハケのちナデ、内面はヨコナデの後スリ目を入れる。淡橙褐色、胎土に径３㎜までの砂粒を多量に含み、焼成良好。４は陶器スリ鉢で唐津焼。口唇を面取りし外面に突帯２条を巡らす。内外ヨコナデ調整で内面にスリ目を入れる。あずき色で、胎土精良、焼成良好堅緻。中世後期の土器が大半を占めるが、近世初頭まで幅を持たせておきたい。

土坑ＳＫ９０２０　Fig.90、PL.4-2

９区中央東壁際で検出した。東半は調査区外へ伸び、南半は攪乱溝に切られる。現状で南北 1.4 m、東西 0.7 mを超え、深さ約 40 ㎝を測る。断面形は逆台形で、遺構覆土は暗褐色砂質土である。

ＳＫ９０２０出土遺物　Fig.91

土師器小片（皿は底部糸切り）４点、青磁小片（皿）１点、土錘１点が出土した。

５は青磁平底皿の小片である。外面回転ヘラ削り。内外に施釉し、外面下半から外底は露胎。釉はガラス質でオリーブ色、胎土精良で多孔質、焼成良好。

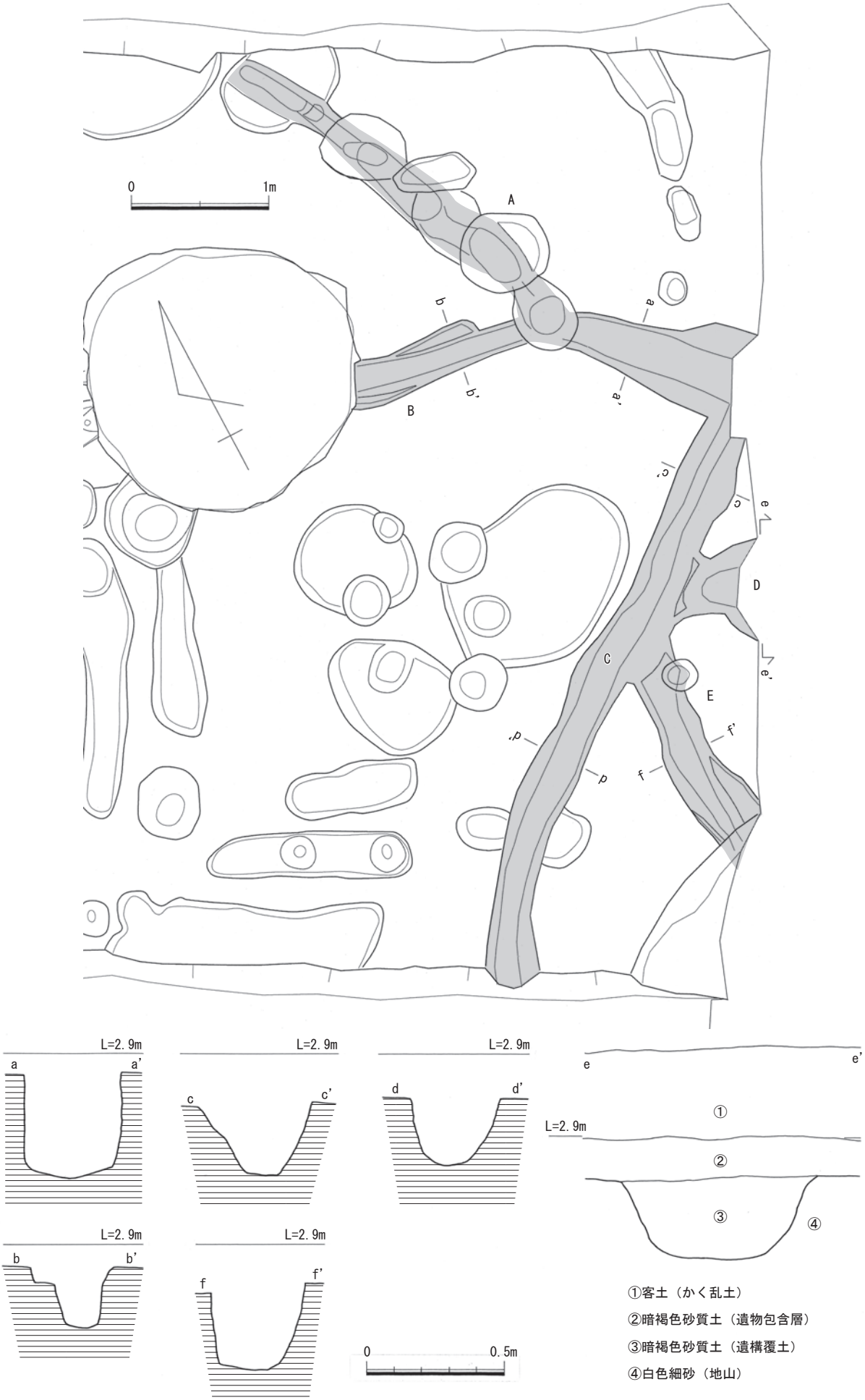


Fig.89　SD9010 実測図（平面図は S=1/40、断面図は S=1/20）

土坑ＳＫ９０３８　Fig.90、PL.4-3

９区中央部のやや南寄りに位置する。南北に長い楕円形プランで、東辺を攪乱坑に切られる。長径1.5ｍ、短径1.0ｍを測り、断面逆台形で、西側以外は段状に落ち、深さ20㎝。遺構覆土は暗褐色砂質土、地山は砂である。

ＳＫ９０３８出土遺物　Fig.91

土師器（皿は底部糸切り）11点、白磁（皿）１点、土錘１点が出土した。

８は土師器坏で口縁を欠く。ヨコナデ調整で、内底ナデ、外底は板目をナデ消す。暗橙褐色で、胎土に砂粒と雲母粒を含み、焼成良好。復元口径14㎝前後。９は白磁腰折れ皿。体内面にヘラ彫りを施す。青みを帯びた白色釉を全釉する。胎土は密で焼成良好。

土坑ＳＫ９０４０　Fig.90

SK9038の北に0.6ｍの間を置いて位置する。略円形プランの土坑で、北・西・南を攪乱に切られ、特に北側は大きく破壊されている。南北長1.4ｍ以上、東西長1.3ｍ。底は浅い皿状に窪み、深さ30㎝。遺構覆土は暗褐色砂質土、地山は砂である。出土遺物は皆無である。

その他の遺構出土遺物　Fig.91

６は口禿白磁の口縁部小片。白色釉を内外に施釉し、口縁端部の釉を掻き取る。胎土は密で焼成良好。小ピットSP9025出土。７は肥前系磁器の紅皿。白色釉をかけ、口縁受け部と体外面下半から外底は露胎。小ピット9032出土。

包含層出土遺物　Fig.92･93

９区の中央部と南半部に残っていた遺物包含層（暗褐色砂質土）からは、土師器（小皿・皿）、土師質土器（鉢）、瓦質土器（鉢）、国産陶器、白磁、青磁、青花、肥前系染付、石錘、土錘、土製人形などがコンテナ６箱出土。中世を主体に一部近世遺物を含み近代遺物も混入して出土している。

10・11は土師器小皿で底部糸切り。10は鈍い橙褐色、胎土精良で雲母粒を多量に含み、焼成良好。復元口径7.2㎝。11は暗褐色、胎土精良で雲母粒を少量含み、焼成良好。復元口径8.9㎝。12は口禿白磁の口縁部小片。全釉で口縁端部を釉ハギ。復元口径9.6㎝。13は白磁皿底部片。断面三角形の低い高台を削り出す。青味を帯びた透明釉を内外面に施釉し高台内露胎。14は白磁碗底部片。高台は高めの削り出しで内底に圏沈線を回す。青味のある白色釉で体外面下半と高台は露胎。15は龍泉窯系青磁碗の底部片で高台は低い削り出し。内底に圏沈線を巡らせ中央に不明瞭な印花文を施す。高台以外にオリーブ色の釉を施す。16は龍泉窯系青磁皿又は小鉢で、見込みに双魚文を貼付するが貼り付けが甘く隙間がある。高台は低い削り出し高台。縁を打ち欠いており玩具に用いたか。全釉。17は明代青花皿。内外面に施文し、呉須はコバルト色、全釉。復元口径10.7㎝。16世紀代。

18～37は土錘である。欠損品が多いが、全形が残るものは長さ5.6～3.0㎝、重さ14.3～3.0ｇの範囲にある。38～41は石錘でいずれも滑石製。38は六角柱状に整形し上下に切り目を入れる。重さ70.2ｇ。39は石鍋の再利用品で図の右面は石鍋の内面側である。主に左面側に切り目を入れる。大きく欠損するが重さ15.8ｇ。40も石鍋再利用品か。薄板状で切り目が全周する。完形品で重さ19.4ｇ。41は方柱状に整形し、縦位に窪みを巡らせるもので、他と異なり切り目はない。一部欠損し、重さ29.1ｇ。42は石製品である。全体に擦れており、裏面は平坦で、正面には不明瞭な窪みがある。敲打具か。

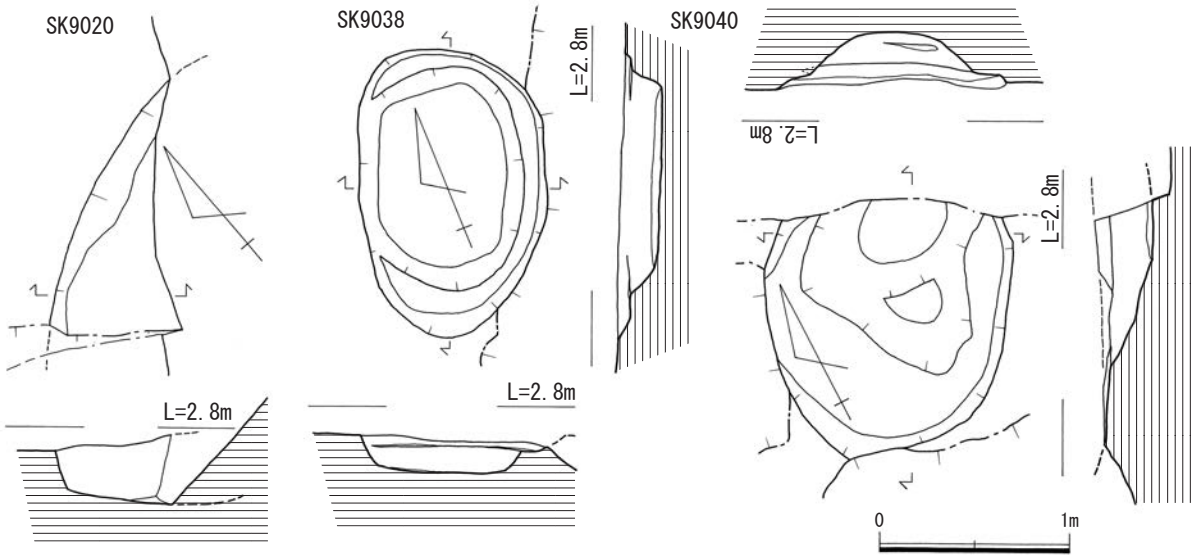


Fig.90　SD9020・SK9038・SK9040 実測図（S=1/40）

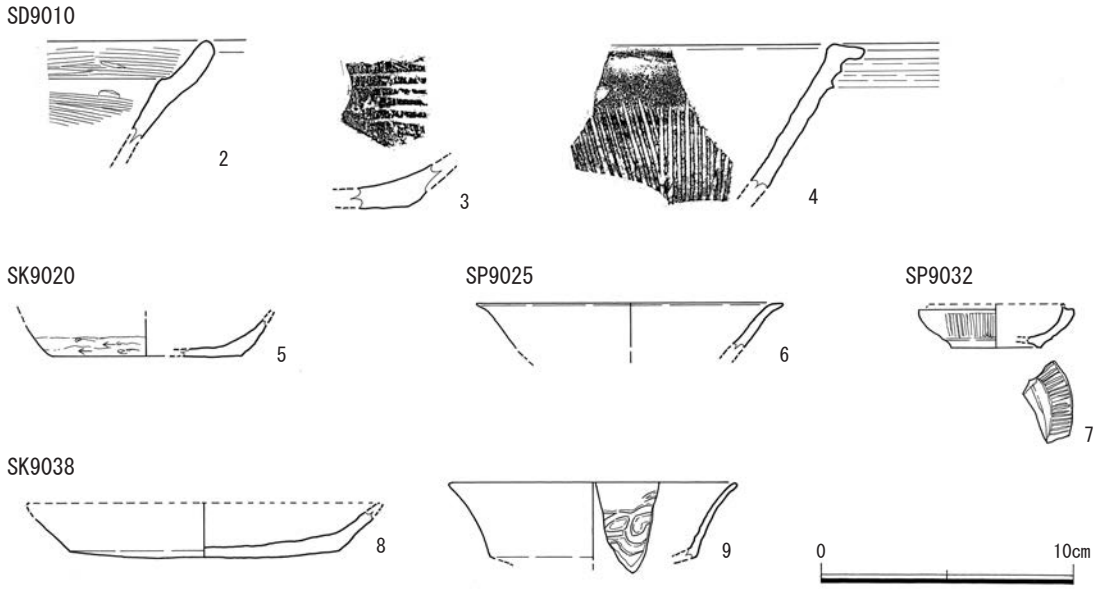


Fig.91　SD9010・SK9038 他出土遺物実測図（S=1/3）

第３節　小結

第 113 次調査４～６区の東隣を７・８区、５区の西隣を９区、４区の西隣を 10 区として調査を行ったが、施設建設や解体による攪乱が著しく、遺構が確認されたのは７区北端のごく一部と、９区の南半部分のみである。検出した遺構は中世～近世前半の溝・土坑・ピットなどで、土錘・石錘の出土が顕著であることから、漁業を主な生業とした集落跡の縁辺部にあたっている可能性が考えられる。当時は調査地のすぐ西側（海側）に元寇防塁の隆々とした高まりが厳然と残っている景観が想定されることから、海風を避けることができる砂浜に営まれた漁村に暮らす人々が、漁網の修理を行いながら細々と日々の営みを行っていた風景が想像されるのかもしれない。

また、SK9038 の土師器や、包含層出土の龍泉窯系青磁、口禿白磁など、一部 13 ～ 14 世紀前後の遺物も出土しており、これらは元寇防塁の造営や修繕・警護に関わった人々の活動痕跡を示すものかもしれない。

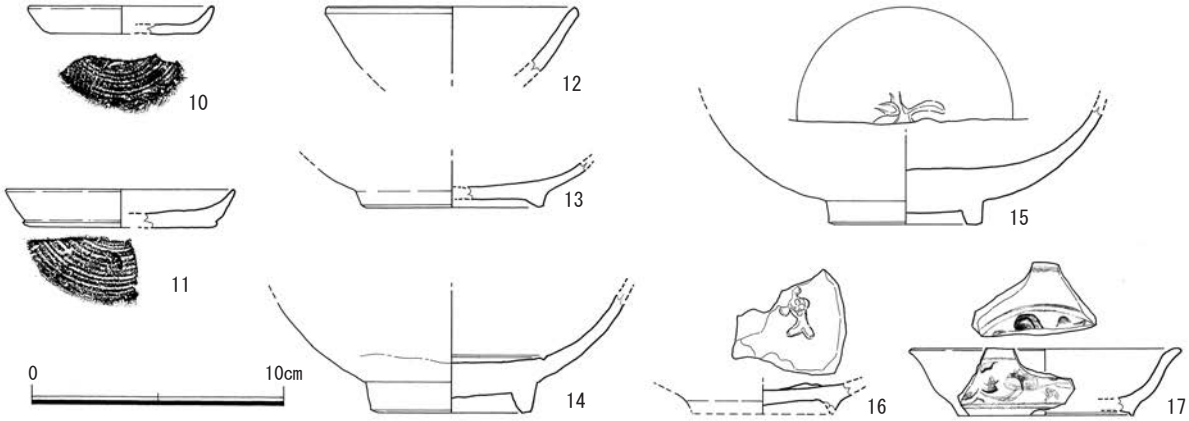


Fig.92　9区遺物包含層出土遺物土器（S=1/3）

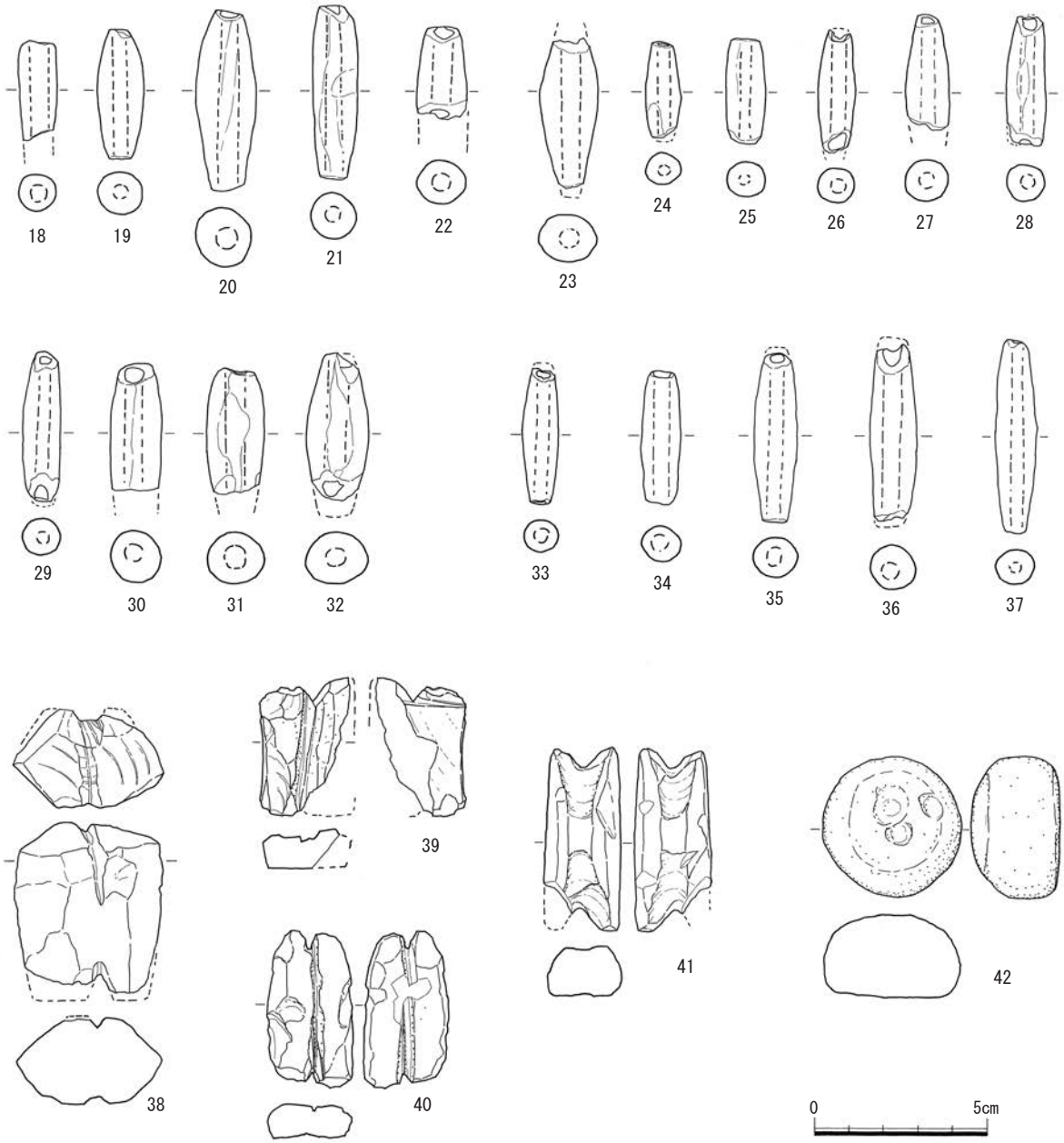


Fig.93　9区遺物包含層出土土製品・石製品（S=1/2）

１．７区・８区全景（南から）

２．７区ＳＫ７０１０（東から）

１．９区・１０区全景（南から）　※左の草むらは史跡地

２．９区全景（北から）

１．１０区全景（北西から）

２．９区 SD9010（北から）

１．９区 SD9010（北東から）

２．９区 SK9020（南東から）

３．９区 SK9038（東から）

第 5 章　小結

本報告をもって、福岡市埋蔵文化財課が受託した九州大学箱崎キャンパス跡地内の埋蔵文化財発掘調査に関わる報告は完了するが、九州大学埋蔵文化財調査室による整理・報告は継続して行われる。福岡市埋蔵文化財課による九州大学箱崎キャンパス跡地内での発掘調査は、平成 30 年 11 月 1 日より着手し、令和 3（2021）年 6 月 30 日に終了した。調査は 92 次（平成 30 年度)･102 次（令和元年度)･108 次（令和 2 年度）・113 次（令和 2 年度）・118 次（令和 3 年度）と 4 次（21 地点）に分割して行われた。これは既存建物解体工事・土壌汚染対策工事・都市計画道路整備工事等の作業範囲や工程と調整の上で、順次引き渡し・調査着手という流れで作業を進めたためである。

九州大学埋蔵文化財調査室による発掘調査は、元寇防塁の確認調査が主として行われた。調査により確認された石積み遺構については、史跡元寇防塁箱崎地区（南地点・北地点）として追加指定され現地保存されている。箱崎地区の元寇防塁の特徴として、海側のみ石積を数段積み上げ背面は砂による盛土構造を採り、その背面に溝状遺構を伴うこと等が九州大学より報告されている。保存範囲以外については、大学施設整備時の造成工事等により石積みは既に失われており、石積み遺構に伴う溝状遺構が断続的に確認されるに留まっている。これらの成果は、元寇防塁の設置位置や延伸方向を示す重要な資料であるが、元寇防塁の本質的な価値補示す「石積み」本体構造については既に失われているため記録保存の措置を行っている。

箱崎遺跡の包蔵地範囲内北側の大半を占める「箱崎キャンパス跡地」は、平成 25（2013）年の包蔵地範囲改訂が行われるまで、遺跡としての取り扱いを行っていなかったため実態が不明確な範囲であった。大学キャンパス北側敷地は昭和 6(1931)年に元寇防塁地蔵松原地区として指定されていたが、キャンパス内での大学施設建物工事等については未確認であったためである。大学移転計画の進展によりキャンパス内で確認調査が進み、遺跡が確認された包蔵地「元寇防塁」推定線以東の範囲については箱崎遺跡の範囲に加えられた。

【調査の成果】

キャンパス内の調査からは箱崎遺跡北側の砂丘地形の変遷や土地利用開始時期等について興味深い成果が得られた。都市計画道路に関わる調査は、キャンパス跡地を南北方向に縦断するトレンチ状の形状となっており、遺構面である砂丘面の標高や遺構面以下で確認される堆積層の連続した観察が可能となった。また、九州大学埋蔵文化財調査室によるジオスライサーによる堆積層調査（第 89 次調査地点、九大調査番号 1802）により、キャンパス跡地の広い範囲に 12 世紀中頃と想定される大規模な氾濫によって形成された堆積層が広がることが確認された。堆積層中には 12 世紀前半までの土器等の遺物が含まれており、箱崎遺跡内南側の遺構が河川により削り取られ再堆積したものであることが想定されている。遺構面の標高は南端部の 92 次から北側に向けて緩やかに落ち、102 次から 118 次地点までほぼ平坦に近い。南北方向ではあまり顕著な差異は見られないが、東西方向では 50 ～ 150cm の比高差がみられる。キャンパス内で行われた調査区の遺構面標高を見てみると、都市計画道路にかかる調査範囲が砂丘列に挟まれた鞍部に相当していることが想定できる（Fig. 94 参照)。その西側（海側）には標高 2.5m 前後の砂丘列頂部が鞍部を挟みつつ南北に延びる。この砂丘列頂部付近に海を望んで元寇防塁が構築されたことがわかる。また、遺構面以下の堆積層観察からは、異なる方向から幾重にも重複して流入して堆積層を形成したことが判明している。砂州先端に位置するキャン

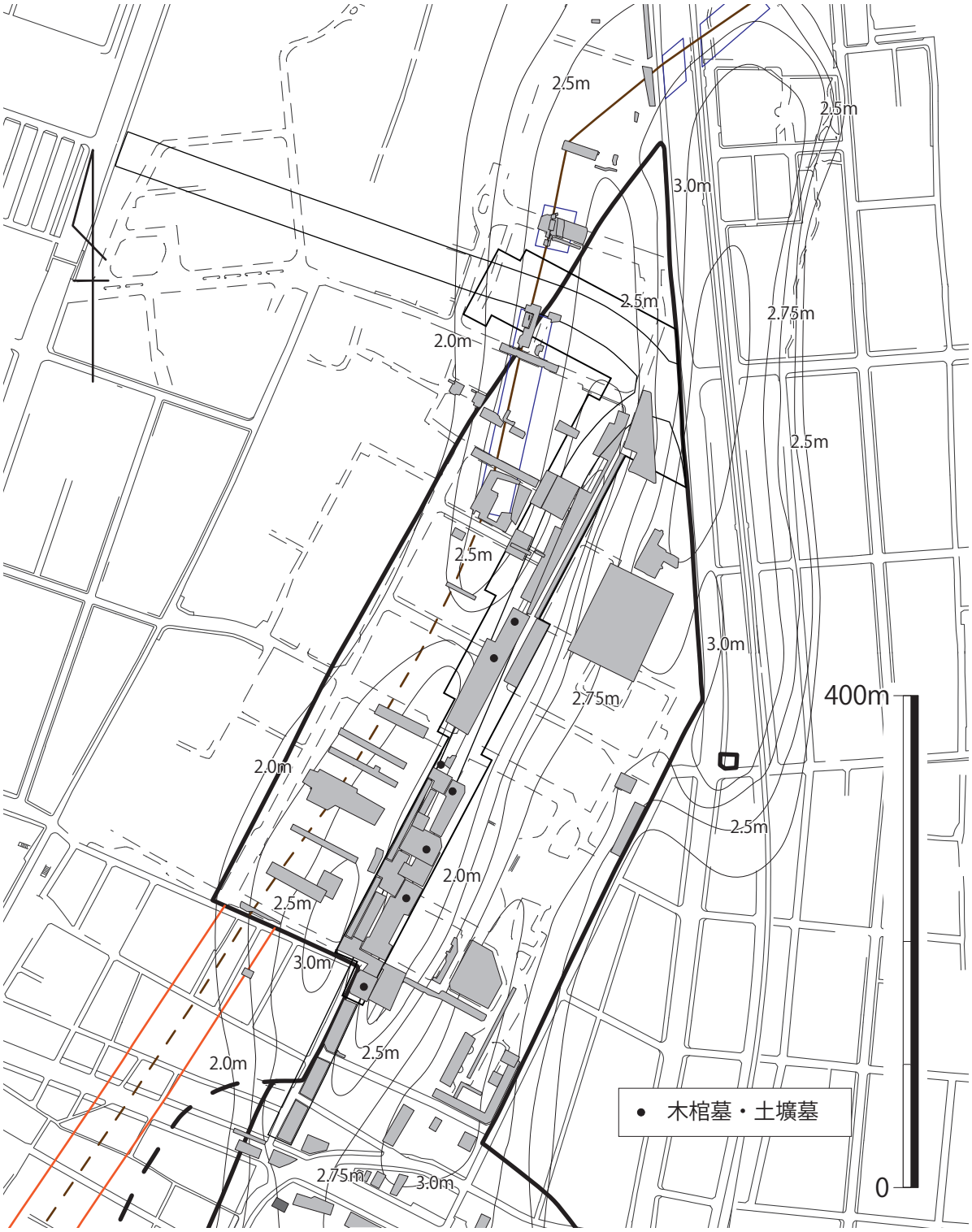


Fig. 94　箱崎キャンパス内調査区　木棺墓・土壙墓位置図（S=1/1,000）

パス跡地は西側の博多湾側からの波濤による流失と堆積を、東側の宇美川をはじめとする複数の河川氾濫による遺構の流失と再堆積を繰り返しつつ北側方向へ延伸したのである。箱崎遺跡東側の不自然な遺構面の消失と遺構の断絶は、これらの河川作用によるものと考えられる。Fig. 3 の昭和初期の地形図から読み取れるように、宇美川が箱崎遺跡に最接近する筥崎宮東側部分が 2m 程度の断崖となっていることも河川氾濫の痕跡と考えられよう。

箱崎遺跡の東側、多々良川河口の湾入した位置には「箱崎津」が整備されたと記録されている。箱

崎津はたびたび文献資料に登場する港湾施設であるが、現在までその位置は確定されていない。前述した12世紀中頃の砂州を延伸させるほどの大氾濫により港湾施設は一旦流失した可能性もあるが、その後も引き続き文献に記載されており、位置を変えて再整備された可能性もある。今後の調査でその位置や構造が明らかとなることに期待したい。

【箱崎キャンパス跡地内での遺構の初現】

今回報告を行う第102・113・118次調査での遺構の確実な初現は12世紀代の木棺墓・土壙墓である。木棺墓は12世紀後半頃に位置づけられ、92次・102次・108次・113次でいずれも単独で検出された(Fig.95参照)。これらの木棺墓からは人骨とともに副葬された青磁碗や白磁皿、湖州鏡等が出土する。また、土壌汚染範囲除染工事中にも木管墓等に副葬されたと考えられる龍泉窯系青磁碗等が出土している。Fig.96に出土遺物を示した。1は同安窯系青磁碗か。高台下部まで施釉するが、畳付は露胎とする。外器面に片切彫りで蓮弁文を施すが鎬はなく、櫛描文を重ねる。高台内に墨書が認められるが判読できない。2は龍泉窯系青磁小碗である。調査で検出された木棺墓は同時期の箱崎遺跡南側でも確認されているが、先述したようにキャンパス跡地のほとんどの範囲が12世紀中頃に出現した新興地であることから、当初は「弔いの場」としての利用が開始されたといえよう。箱崎遺跡から南西側1.5kmの距離にある博多遺跡群においても、河川堆積等により新たに出現した「息浜」砂丘は当初墓域として利用が開始されている。集落からほど近くに出現した新興地がともに墓域として利用されていることは、当時の都市構造や葬法を考えるうえで興味深い。なお、明治44（1911）年に九州大学の前身となる工科大学が設置される以前の地図には、付近は還國寺の寺域であることが記されており、この地が永らく「弔いの場」として利用され続けられたことがわかる。

【元寇防塁背面の土地利用】

13世紀後半の建治2（1276）年、先の「文永の役」からわずか二年後に再襲来に備え「石築地」、元寇防塁が博多湾岸に築造される。キャンパス跡地の元寇防塁もこの時期に築造されるが、箱崎については薩摩の御家人が築造を分担した。防塁築造時期の遺構はほとんど見られず、12世紀代に引き続き集落としての土地利用はあまり活発化していなかったことがわかる。筥崎宮周辺に広がる門前町の集落本体に最も近い92次地点は、集落の拡大に伴いこの時期の遺構も確認できるが遺構密度は薄く集落縁辺の様相となる。文永の役では筥崎宮を含め戦火による被害を受けて、遺跡範囲の西側では個の戦火によるものと考えられる焼土層が確認されているが、弘安の役での箱崎付近での戦闘や戦火による被害は知られていない。

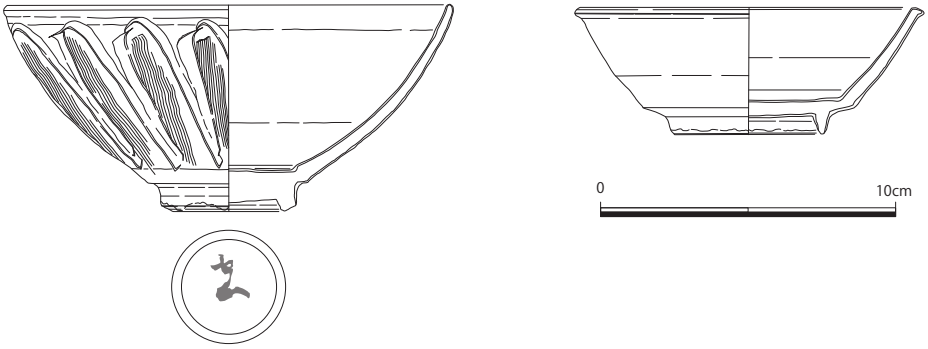


Fig.95　箱崎キャンパス内工事立会時出土遺物実測図（S=1/3）

弘安の役後も再々襲来への警戒から防塁の維持管理は引き続き行われ、鎌倉幕府滅亡後の室町時代初期の応永年間まで異国警護として継続していた。この時期、元寇防塁の前面である西側の海岸線はほとんど移動しておらず、防塁を超えて西側方向へと集落が展開していくことはなかった。海岸線が防塁から遠く離れていくのは、昭和の埋め立て事業によるもので、海岸線に沿う防塁と松原という箱崎地区の景観は500年以上変わらないもの続いていた。防塁背面となる東側についても、砂州先端部は石錘や土錘等の漁労用具が出土する漁村として利用されていたことが、第113・118次調査の調査成果から分かる。第102次から南側については、筥崎宮周辺に営まれる集落本体に近いため、遺構密度が濃くなっていくことが92次・102次調査や九州大学埋蔵文化財調査室実施の99次・109次調査の成果から看取できる。

【箱崎遺跡の地形復元】

箱崎遺跡範囲の北側部分の多くを占める「九大箱崎キャンパス跡地」内については、福岡市による都市計画道路範囲および九州大学埋蔵文化財調査室による発掘調査が行われ、現在も整理報告が進められている。これらの調査・報告により、箱崎キャンパス跡地内の埋蔵文化財の状況確認が大きく進展し、あわせて箱崎遺跡全体の各時期の遺構分布状況の把握や地形復元に有用な情報を得ることができた。Fig.97に本報告で得られた情報を反映した箱崎遺跡での遺構面となる砂丘地形等高線の復元図を示した。これまでの調査・報告においても箱崎遺跡が広がる砂丘地形は、南北方向に延びる数条の細長い砂丘列が集合したものと想定されていた。調査地点毎に東西方向への異なる傾斜が確認されていることは、小規模かつ複雑な起伏を伴う地形であることを示している。

これらの砂丘列は、遺構・遺物の分布状況や砂丘の構成堆積物等の観察から生成年代ごとに大きく四列に分けられることが想定される。Fig.96・97に現段階で想定される砂丘地形復元図を示した。

最も古い砂丘列（砂丘①）は遺跡範囲東側のもので筥崎土地区画整理事業に伴い調査・報告が進められた範囲である。この範囲における遺構の初現は古墳時代前期で、集落・墓域の形成が確認されている。砂丘東側～北川は宇美川により大きく削り取られており、砂丘が北側のどの地点まで延びていたのかは不明であるが、古墳時代前期の土器が出土した米一丸遺跡付近まで延伸していた可能性が考えられる。

この砂丘西側から覆い被さるように次の砂丘（砂丘②）が形成され、両者の境界は現代の筥崎宮東側付近と想定できる。この砂丘②では古代以降の遺構・遺物が確認されることから、形成はそれ以前の古墳時代には始まっていたと考えられる。遺跡範囲南側では重複しなかったためか、調査では窪地状の地形が確認される。次の砂丘（砂丘③）も砂丘②に重複して形成され、重複部分は旧地形図では遺跡範囲中央部で列状の高まりとして確認することができる。箱崎キャンパス跡地で確認された大氾濫によって形成された砂丘地形と同一のものと考えられる。砂丘③は部分的に鞍部や断絶部を挟みながら、砂丘②と並行して形成される。

最も海側（西側）の砂丘（砂丘④）は、砂丘③と鞍部を挟んで形成されたもので、埋蔵文化財包蔵地「元寇防塁」の推定線が頂部付近に想定される。砂丘④の形成年代は判然としないが、元寇防塁築造前にある程度形成が進んでいたと考えられる。箱崎遺跡から南西側1.5kmの地点には、同様に砂丘上に営まれた博多遺跡群が所在する。博多遺跡群も複数の砂丘列（砂丘Ⅰ～Ⅲ）から形成されているが、箱崎遺跡の砂丘列（砂丘①～④）との形成年代等の関連性は部分的にしか捉えられていない。

今後、箱崎遺跡をはじめとする博多湾岸の砂丘上に営まれた遺跡群の詳細検討を行い、砂丘の形成年代と遺跡の動向との関連性を明らかにする必要がある。

Fig.96　箱崎遺跡内砂丘遺構面復元想定図（S=1/4,000）

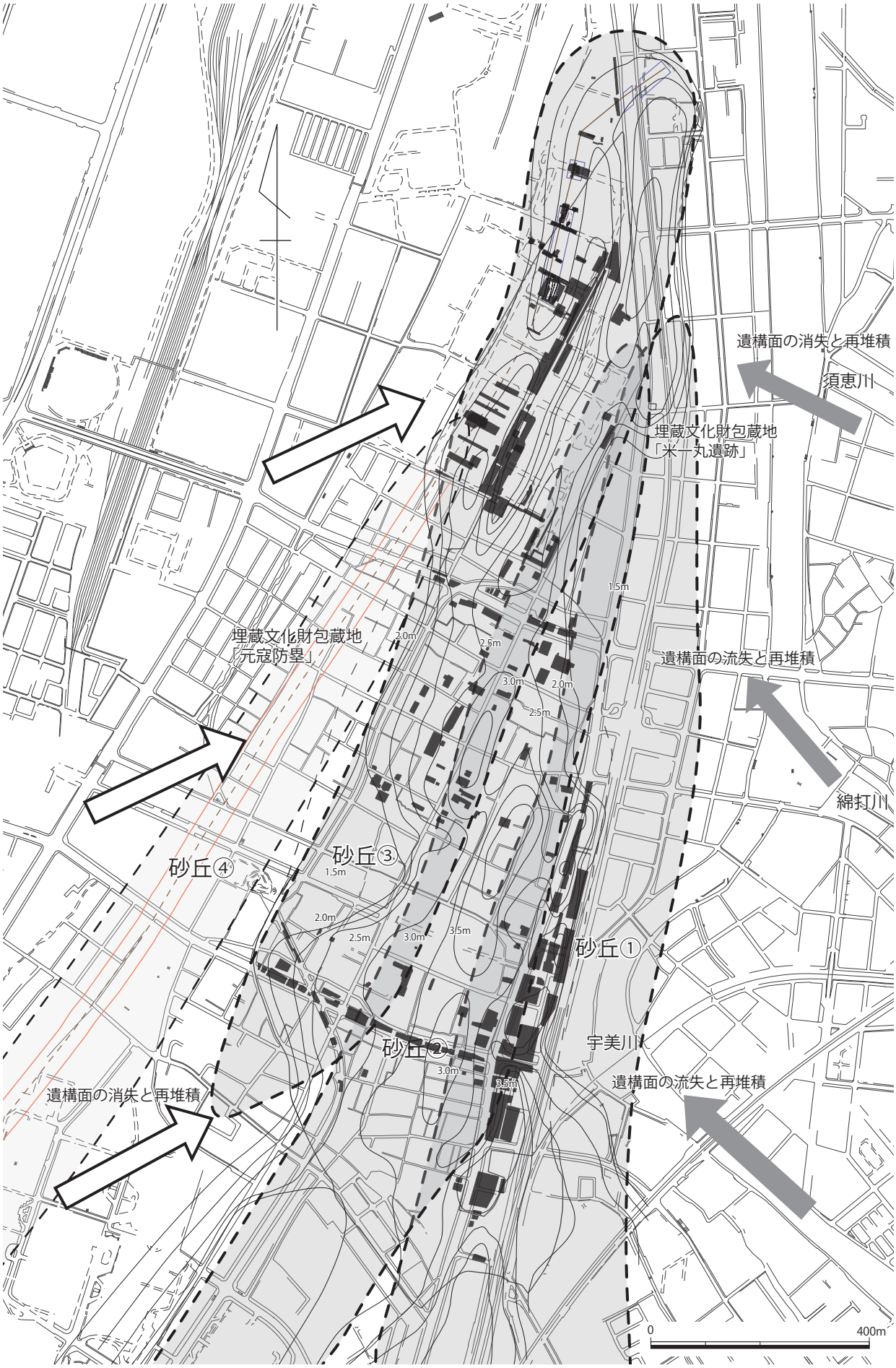


Fig. 97　箱崎遺跡内砂丘遺構面復元想定図（S=1/4,000）

附　史跡元寇防塁に関わる石積み遺構保護工事

この石積みは史跡元寇防塁箱崎地区南地点に接して確認されていた。元寇防塁の石積み列の延長線上に位置しているが、大学建物時のインフラ工事により、防塁構築当初の設置位置にあるものの構築時の原位置を留めていないことが確認されたため、追加史跡指定範囲には含んでいない。しかし、元寇防塁を構成する石積みであることは確実であり、史跡地内で保護された元寇防塁を調査研究する上で重要な資料であることから、検出された位置での現状保存を行うことを土地所有者である九州大学と合意した。作業は協議と準備が整った令和 3 年 9 月 27 日に着手し、同日完了した。

1. 検出位置

確認位置は史跡元寇防塁箱崎地区南地点の史跡指定範囲北側に隣接した位置で、史跡指定範囲端部から 3m 程度の距離を測る。現況は雨水管や汚水管などの埋設管の空隙に大型の石材 2 点とその隙間を充填する小石材 10 数点からなる（Fig. 98 参照）。

2. 検出状況

大型の石材は元寇防塁の基底部に用いられたもので、前面（海側）に平坦面を向けて据えられている。上部には雨水管・汚水管等の埋設管が接して設置されていた。過去のインフラ整備時に小型の重機等で動かれたためか、前面平坦面はそろっていない。また、石材下には鉄製配管が潜り込み、工事により石材が一旦移動されたことがわかる。

3. 保護の方法

石材が確認された位置は、都市計画道路歩道部分にあたる。この位置には新設の水道管や雨水管等の埋設インフラが予定されることから、計画段階から石積みを保護するため迂回して埋設する計画となった。石積みを現状で埋め戻し保存を行った場合、将来の工事等により損壊する恐れがあるため、石積みを円柱状のコンクリート部材により保護することとした。この保護計画については文化庁および奈良文化財研究所との協議に基づいて計画を行った。

保護工事は都市計画道路工事が進み、周辺埋設構築物との位置関係が確定した段階で行うこととし、九州大学調査時には土嚢による養生と埋め戻しを行った。

1．石積み遺構保護作業（東から）

2．石積み遺構埋め戻し保存状況（北から）

4. 作業の実施

令和 3 年 7 月より石積み遺構周辺の埋設インフラ工事が進捗したことを受け、事業者と具体的な作業の打ち合わせを実施した。石積みは大型石材 2 個と小型石材 10 数点より構成されており、これらを一括して保護するため内径 120cm、外径 140cm、高さ 60cm のコンクリート製のリング状構築物を製作し、これを設置することで保護を図ることとした。

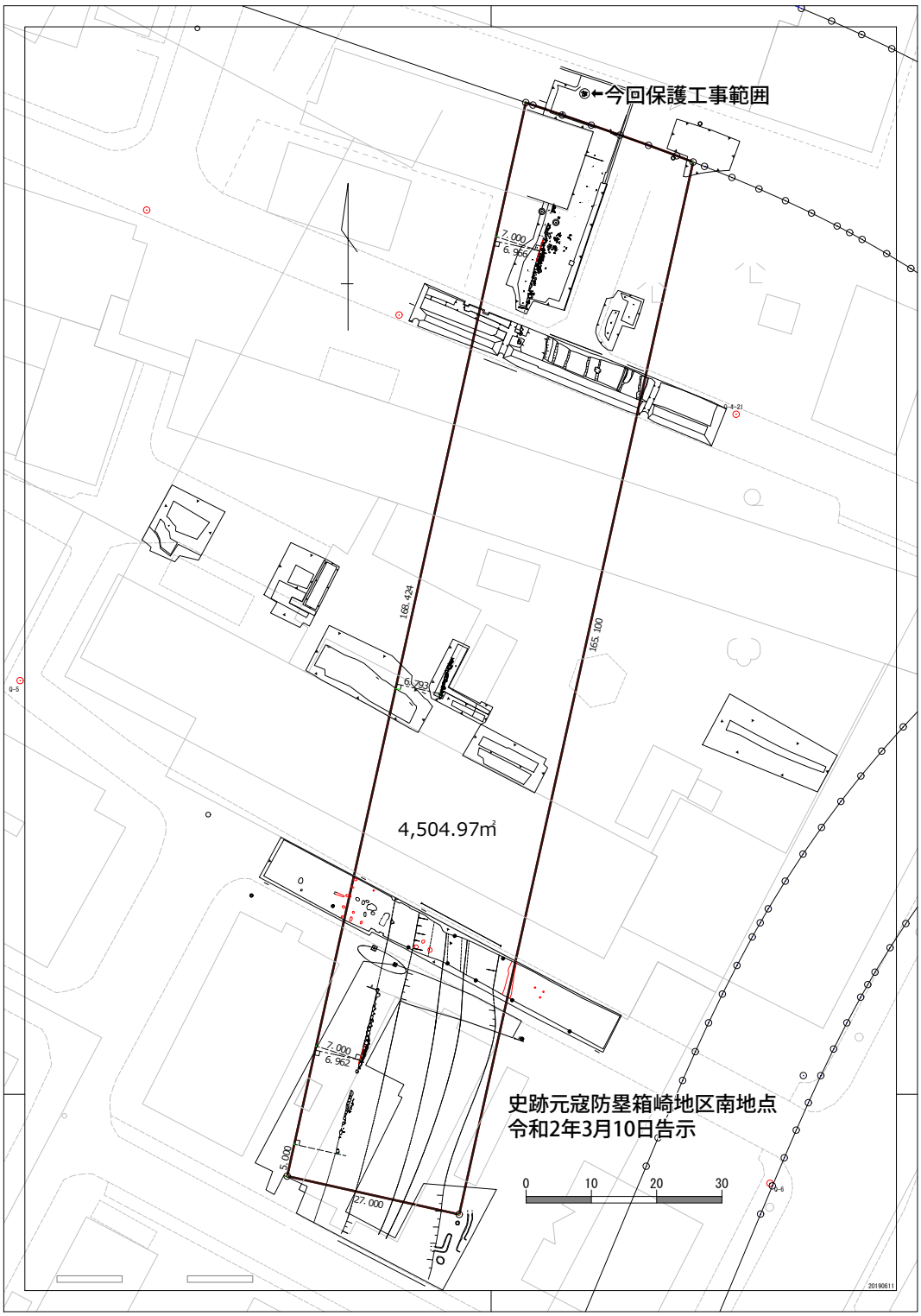


Fig. 98　史跡範囲外　石積み遺構保存範囲位置図（S=1/1,000）

報告書抄録

ふりがな	はこざき
書　　名	箱崎68
副　書　名	第102次・第113次・第118次調査報告
巻　　次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1485集
編 著 者 名	吉武学・藏冨士寛・今井隆博・阿部泰之・本田浩二郎
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒810-8621　福岡市中央区天神１丁目８－１　　TEL　092-711-4667
発行年月日	2023年3月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
はこざきいせき 箱崎遺跡 第102次	ふくおかけんふくおかしひがしく 福岡県福岡市東区 はこざきろくちょうめ 箱崎6丁目10番1号	40131	2639	33° 37′ 29″	130° 25′ 30″	20190819 ～ 20200228	2,712.76	都市計画 道路建設
はこざきいせき 箱崎遺跡 第113次	ふくおかけんふくおかしひがしく 福岡県福岡市東区 はこざきろくちょうめ 箱崎6丁目10番1号	40131	2639	33° 37′ 29″	130° 25′ 30″	20200716 ～ 20210228	6,220	都市計画 道路建設
はこざきいせき 箱崎遺跡 第118次	ふくおかけんふくおかしひがしく 福岡県福岡市東区 はこざきろくちょうめ 箱崎6丁目10番1号	40131	2639	33° 37′ 29″	130° 25′ 30″	20210412 ～ 20210630	2,040.22	都市計画 道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
箱崎遺跡	集落	中世	溝・土坑・井戸	土師器・須恵器・陶磁器・金属器・人骨	

要　　約

本書に所収された発掘調査はすべて九大箱崎キャンパス跡地内で実施されたものである。これらの調査によって従来不明であった箱崎遺跡北端部の様相が明らかになった。

いずれの調査においても既存建物の基礎等によって遺構は大きく破壊されていたものの、鎌倉時代から近代までの遺構・遺物が検出された。遺構は土壙・井戸・木棺墓・溝・鍛冶炉・柱穴等で、第102次調査では土壙墓から全身を判別できる人骨が出土したほか、井戸は井戸側の違いから時期の変遷をたどることができる。第113次調査では、12世紀後半頃の木棺墓や中世後半～江戸時代頃の池状遺構、幕末～明治期の井戸等が検出された。第118次調査では室町時代～江戸時代初期の柱穴状のピット・土壙・溝状遺構が検出されている。各調査とも遺物は中国製陶磁器のほか、土師器・蛸壺・鉄滓・石錘等が出土した。

箱崎68

－第102次・第113次・第118次調査報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1485集

2023年3月23日

発　　行　　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８－１
印　　刷　　株式会社博多印刷
福岡市博多区須崎町8－5